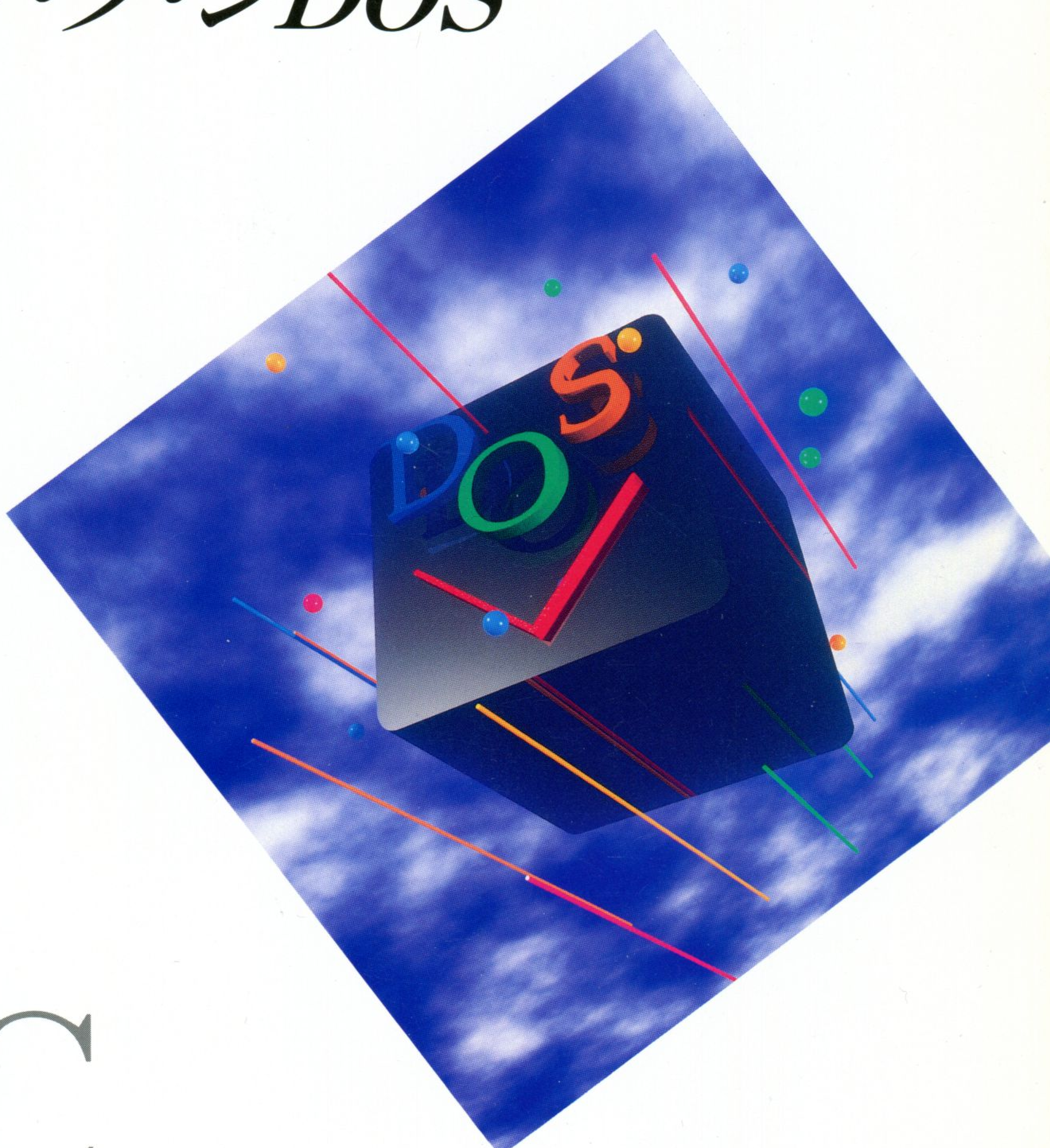
IBM

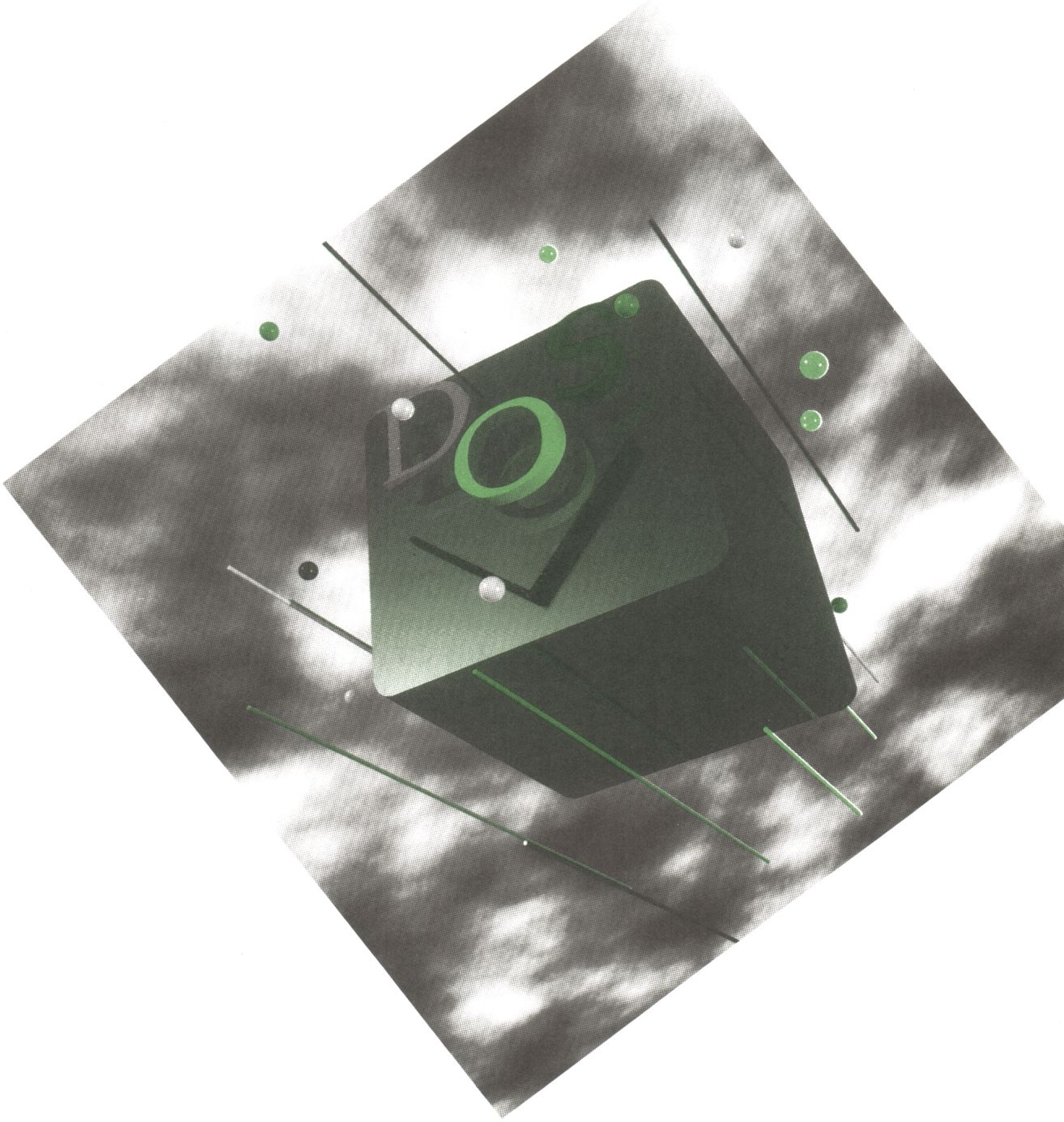
カ・ン・タ・ンDOS



PC DOS J6.3/V

SC88-3074-00

はじめに

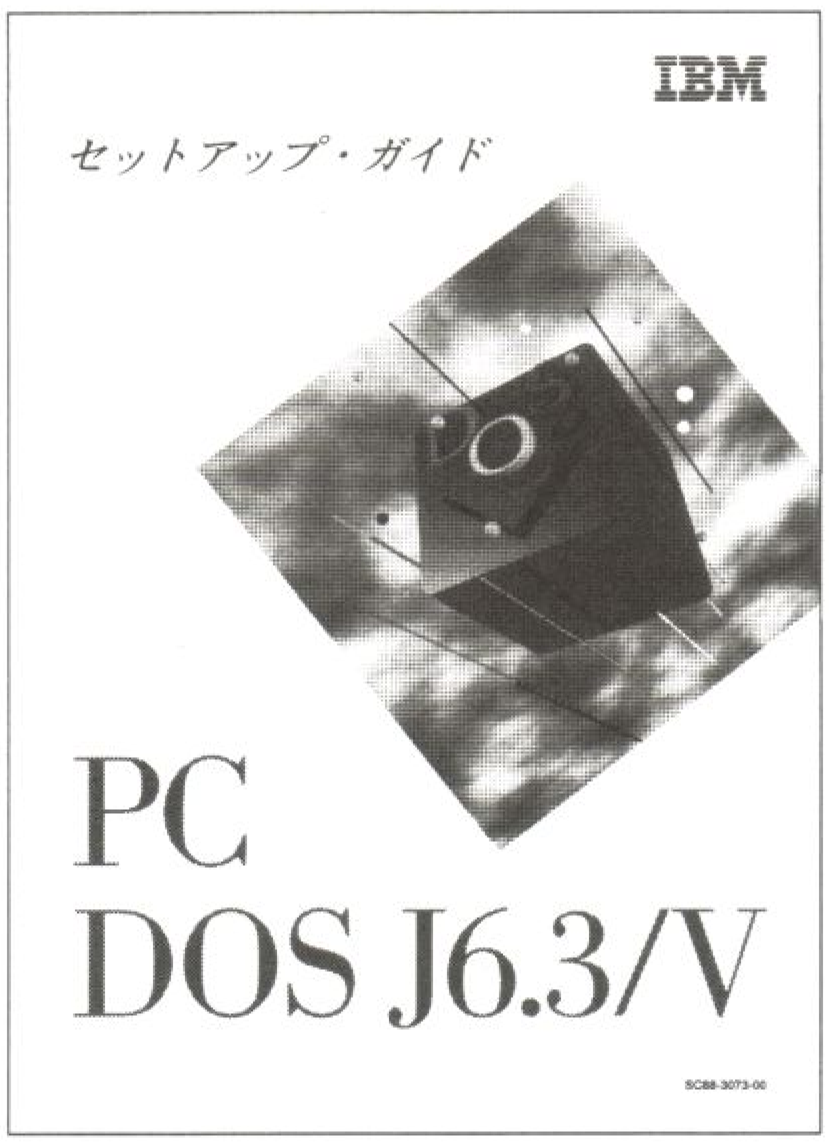


本書は初めてDOS/Vをお使いになる方が、操作を試しながら自然にDOSを理解できることを目的にしています。またDOS/Vをすでにお使いの方には、最新のDOS/Vの機能を、より短時間に理解できように構成しました。個別の問題には、トラブル対処法やQ&Aの章により、広範囲にお答えしています。

本書があなたのDOS/Vの理解に、少しでもお役に立てることを願います。

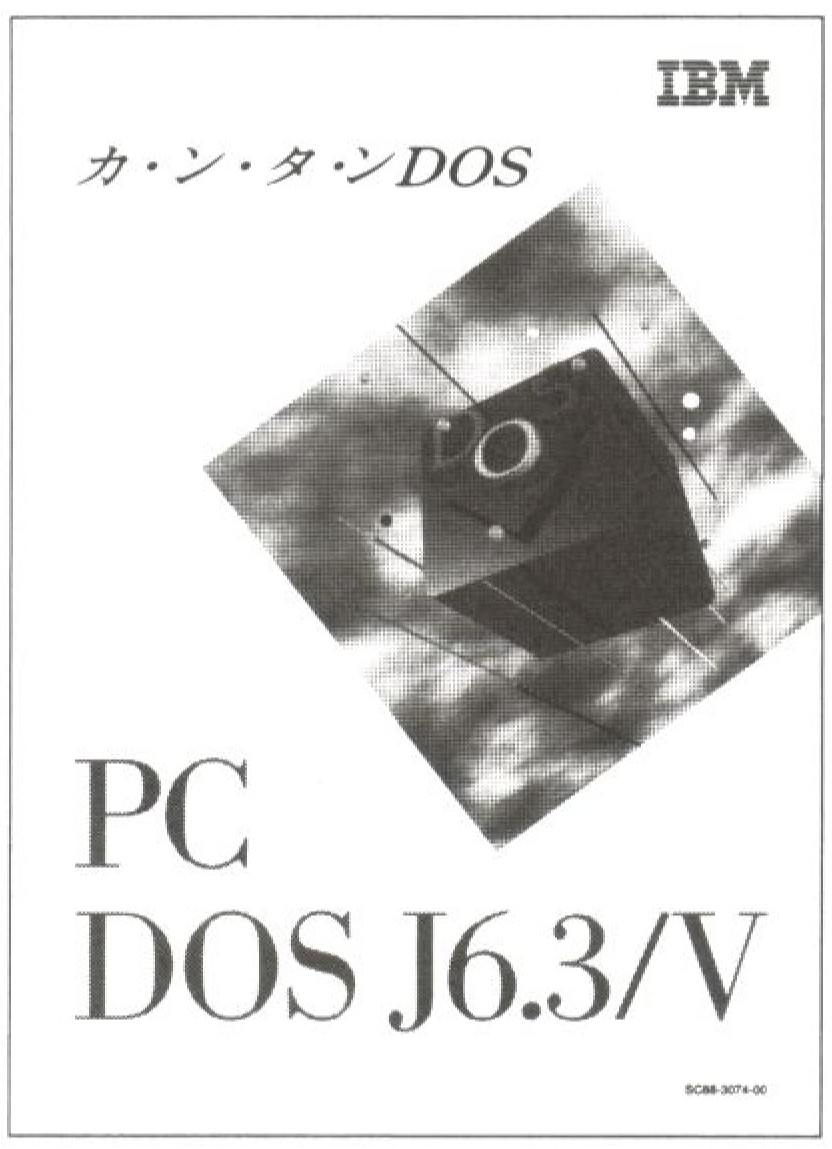
関連マニュアル一覧

PC DOS J6.3/Vに関連するマニュアルの一覧を示します。



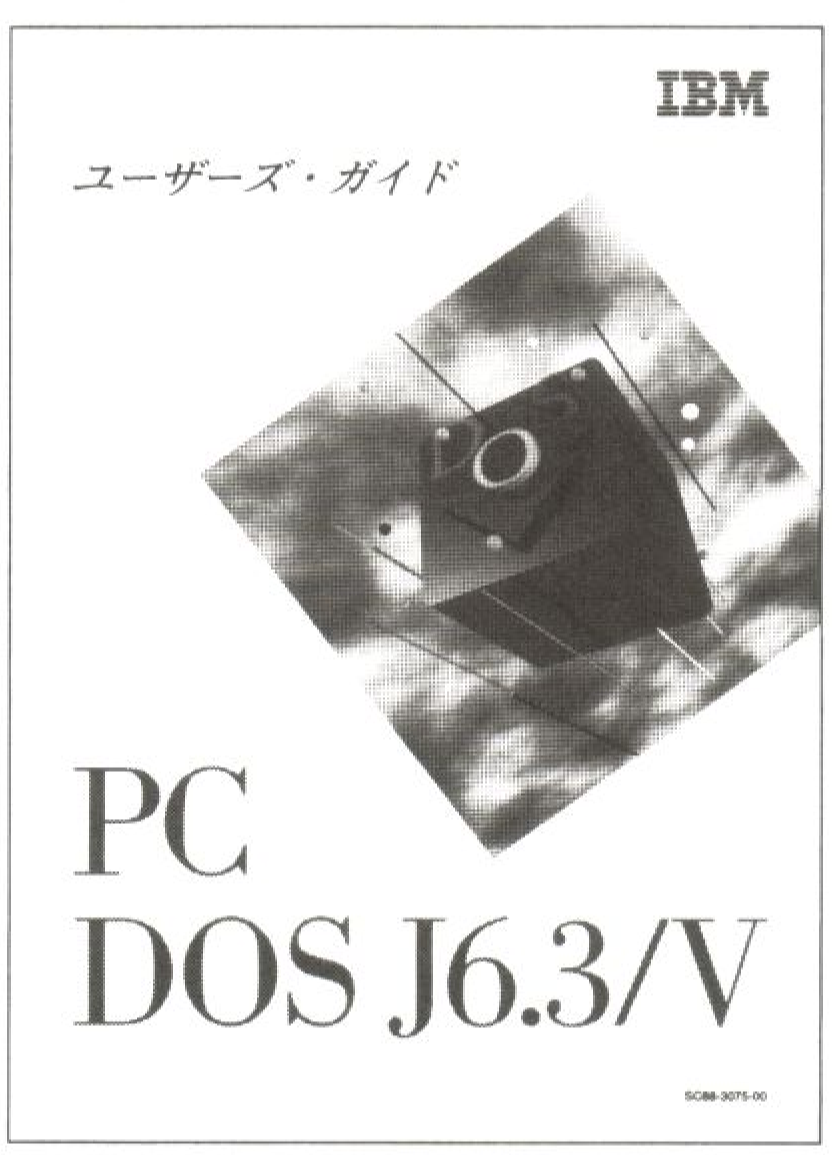
セットアップ・ガイド (SC88–3073)

PC DOS J6.3/Vを導入するときの手順が書かれています。SETUPコマンドの使い方やLANで導入する方法、OS/2に導入する方法などが説明されています。



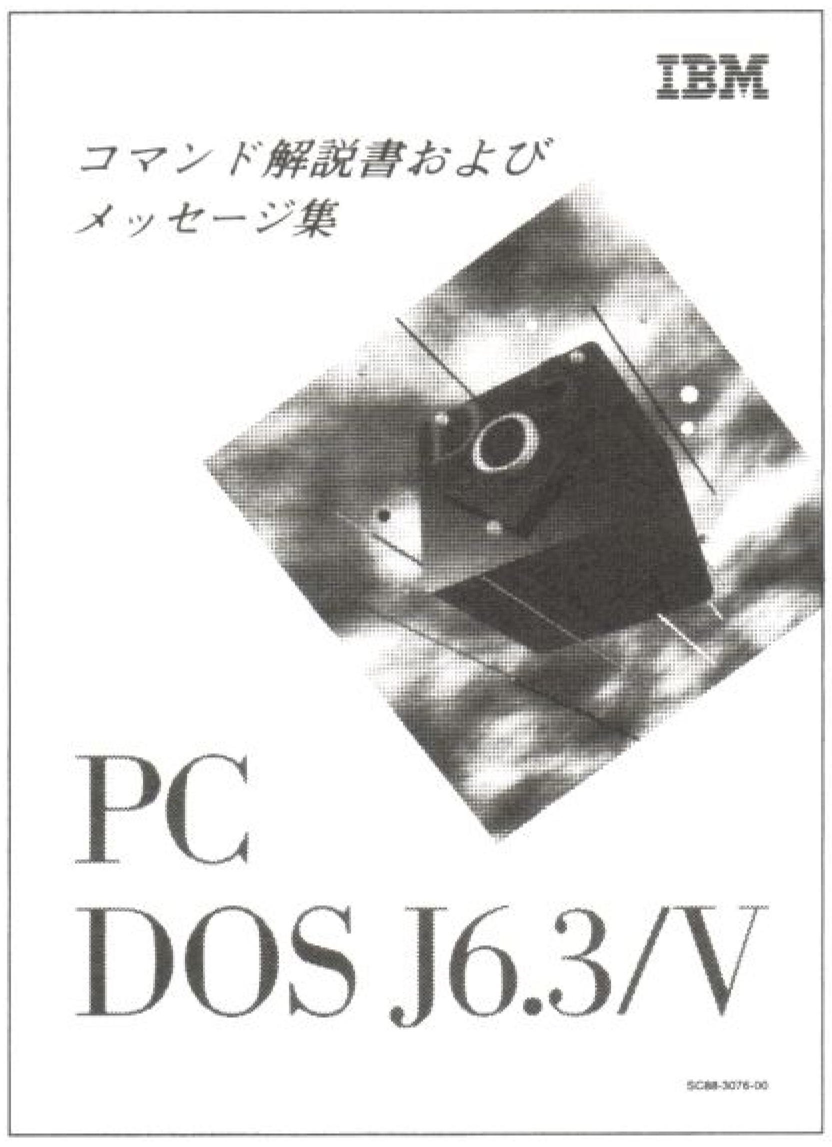
カ・ン・タ・ンDOS (SC88–3074)

本書です。PC DOS J6.3/Vの新機能の概要紹介、DOSの基本知識と操作方法、コマンドとデバイス・ドライバーのクイック・リファレンス、トラブル対処法などの内容です。



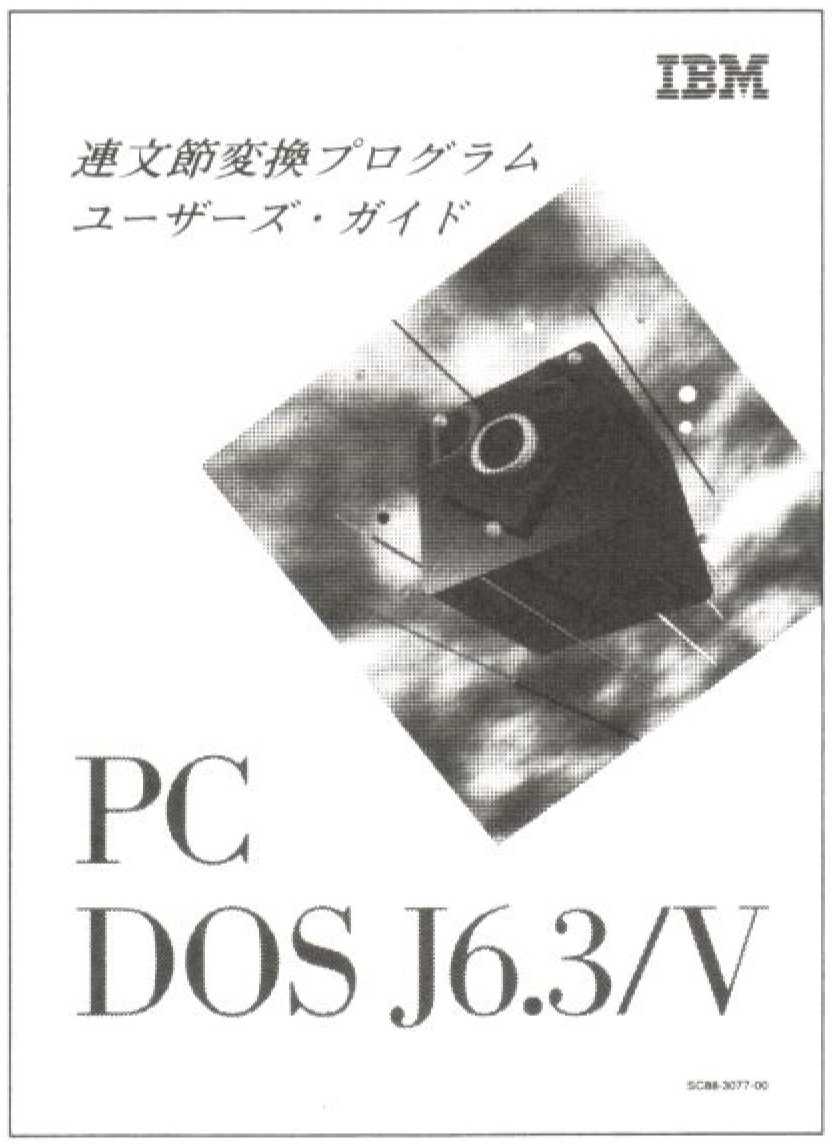
ユーザーズ・ガイド (SC88–3075)

DOSのオプション・ツールの詳細な解説、メモリーや区画などの解説とその設定方法、マルチ・コンフィギュレーションの指定方法など、よりアドバンス・ユーザー向けの情報が含まれています。



コマンド解説書およびメッセージ集 (SC88–3076)

DOSのすべてのコマンドとデバイス・ドライバーの詳しい解説書です。エラー・メッセージなどの説明と対処方法なども解説してあります。



連文節変換プログラム ユーザーズ・ガイド (SC88–3077)

DOSに付属している連文節かな漢字変換プログラム(MKK)の使い方が説明されています。ローマ字入力の方法やカタカナへの変換方法など、手順ごとに解説しています。

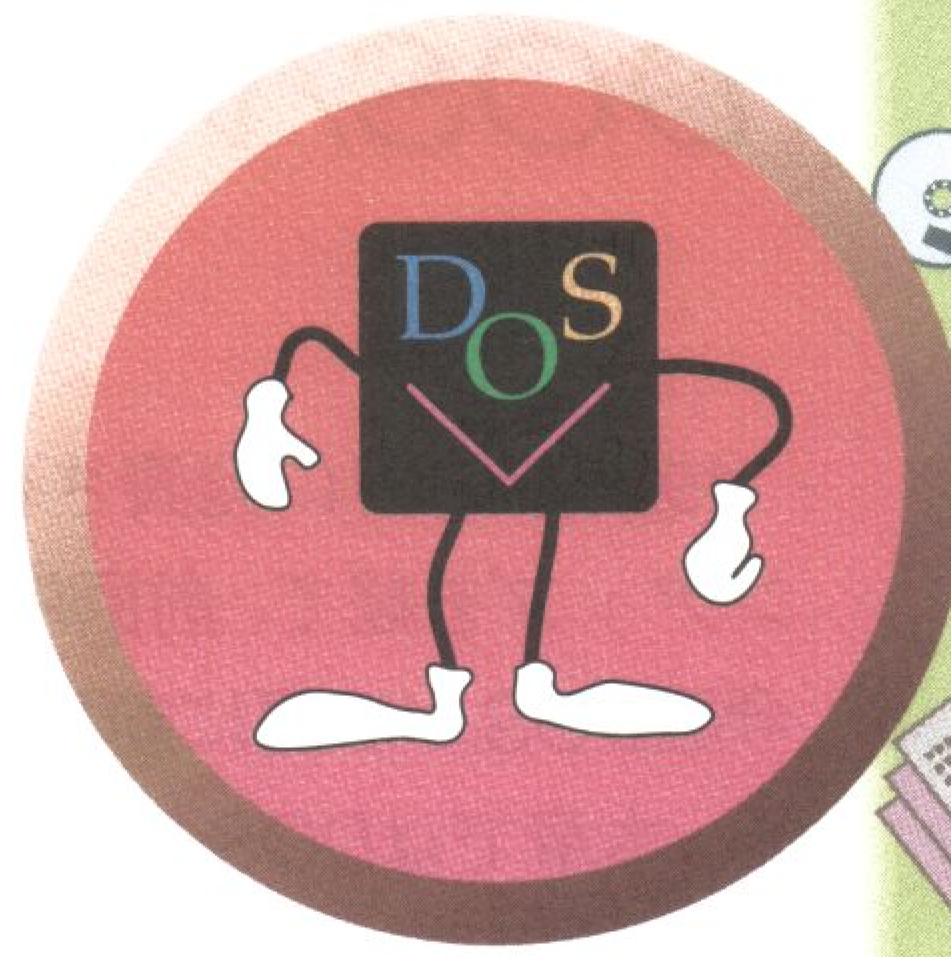
目次

第5章　DOSをコマンドで使う　111

本文中の記号について

本文左側の ●●➤ は内容の要約が示されています。この項目を参照することで飛ばし読みができます。 は次のページに続きの文章があることを示しています。

また、キーボードのキーがたとえば、 Alt + L というように+記号で示されている場合は、 Alt キーを押しながら、 L キーを押すという操作を示しています。



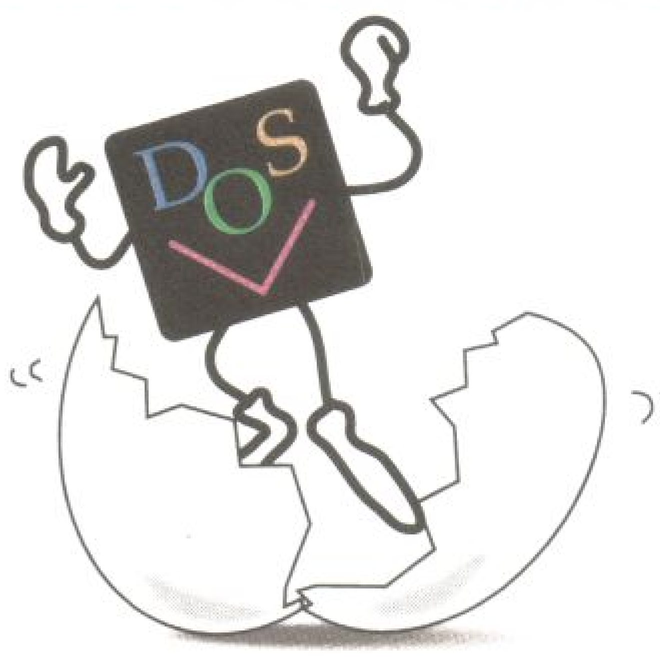
第1章

すべてはDOS/Vから始まった



DOS/Vの本家、IBMのDOS/V

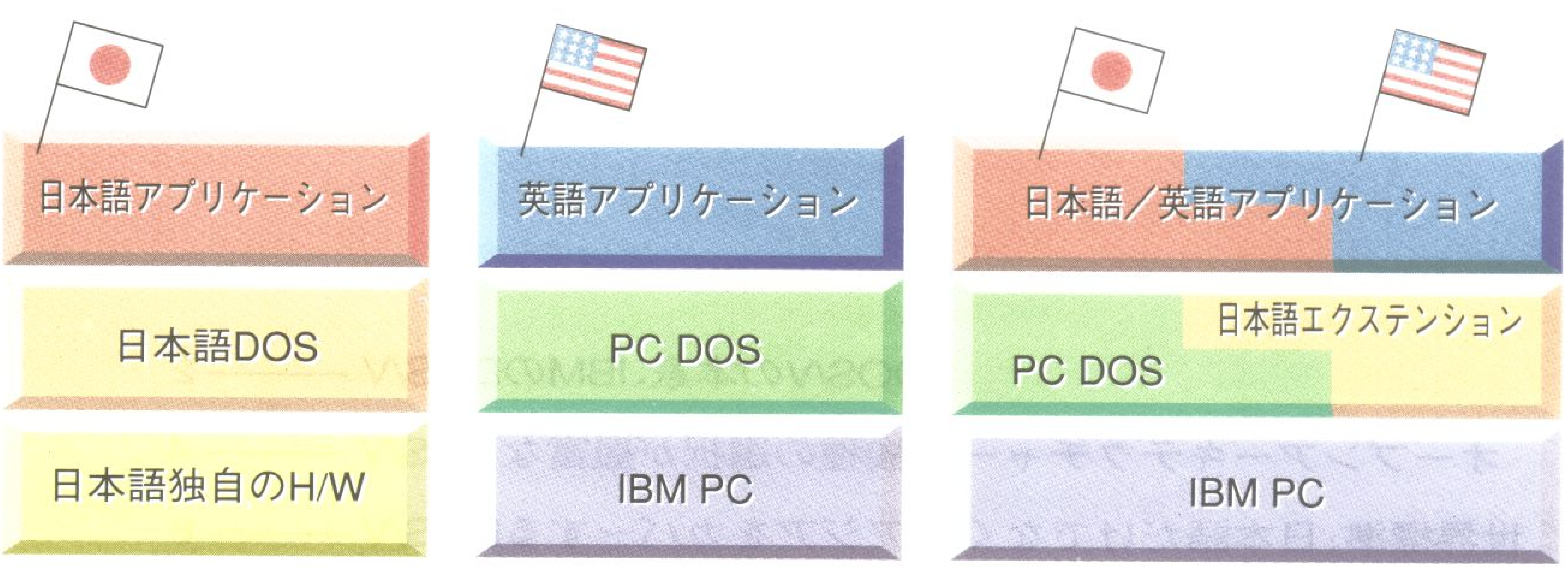
1990年11月に発表されたDOS/V(IBM DOS J4.0/V)は、2度の大幅なバージョンアップを経て、前回PC DOS J6.1/Vとして発表されました。(1993年12月)今回DOS/Vは更に新機能を追加してPC DOS J6.3/Vとして生まれ変わりました。本章ではDOS/Vを理解していただくために、この3年間にDOS/Vがどのように拡張されてきたのかを中心に説明します。



DOS/Vはこうして始まった

1981年、米国IBM社はIBM PCとその上で動作するPC DOSを発表しました。IBM PCは英語圏での使用を前提として開発されたため、日本語入力や表示には、ハードウェアの制限もあり、利用できませんでした。弊社では1983年、マルチステーション5550上で日本語をサポートする日本語DOSを開発しましたが、日本語表示のためには特別なハードウェアを搭載していました。英語圏とは異なるDOSの出発は、弊社以外のPCメーカーも同様でした。

一方、英語圏ではIBM PCを拡張したPC/ATのアーキテクチャー(設計思想)をもつパソコンが現われ、世界市場の8割を占めるようになりました。日本独自のアプローチは日本語表示を高速にするにはプラスでしたが、同時に膨大な数のPC DOSのソフトウェアがそのままで使えないという弊害をもたらしました。こうして日本のPC市場は長い間「鎖国」状態にありました。



従来の日本語DOS　　PC DOS　　DOS/V

そして1990年、弊社はDOS/Vを発表、日本語表示のための特別なハードウェアを必要としない、ソフトウェアだけで日本語処理を可能にするという、今までの日本語DOSとはまったく異なるコンセプトを持っていました。この実現には、ハードウェアが処理速度を目覚ましく高速化した、という背景もあります。

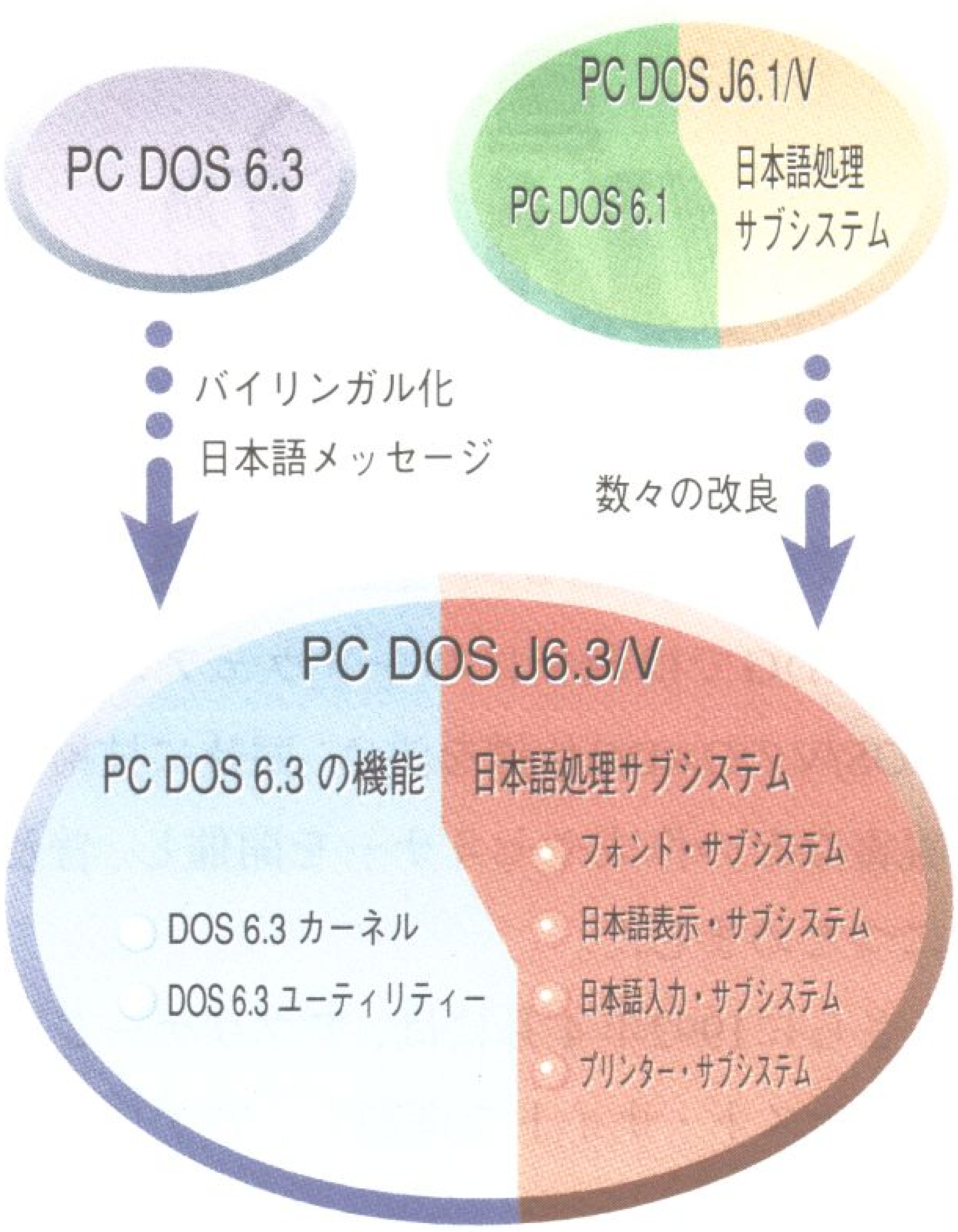
PC DOSの機能やアプリケーション・プログラミング・インターフェース(API)には変更を加えず、PC DOSに日本語処理の機能(日本語エクステンション)を付け加える。PC DOSの Natural Extension(自然拡張)がDOS/Vの基本概念です。ですからこの日本語エクステンションを取り去れば、それはPC DOSそのものになり、PC DOSのアプリケーションは100%の互換性を持って動作することになります。



DOS/Vの構造

DOS/Vは大きく分けて、二つの部分から構成されています(図参照)。一つめは英語版のDOSの機能。PC DOS J6.3/Vは英語版のPC DOS 6.3を基に、日本語と英語のバイリンガル化を図り、日本語モードでは日本語のメッセージを、英語モードでは英語のメッセージを表示します。

もう一つの部分はDOS/Vの心臓部とも言える日本語処理のサブシステム。これはIBM DOS J4.0/V用に開発されたサブシステムを改良して現在に至っています。



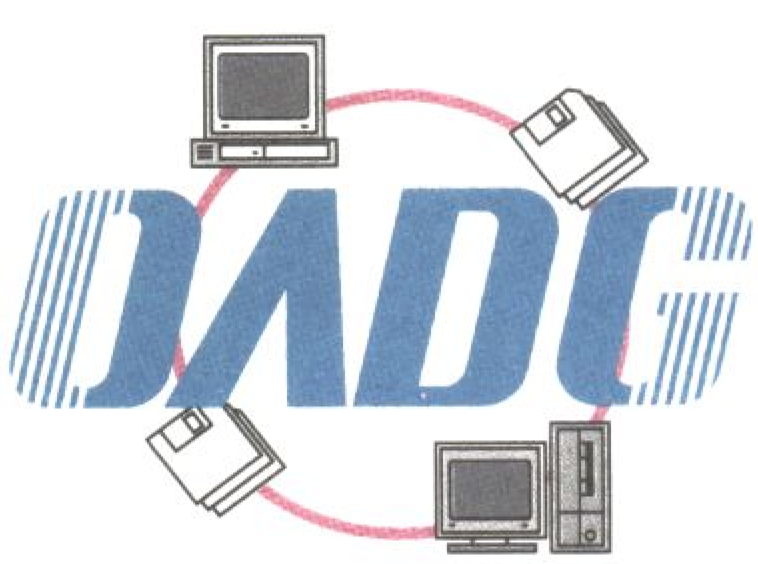
オープンアーキテクチャー、機種の選択が豊富なDOS/V

DOS/Vが発表された2か月後の1990年12月に、IBMはPCオープン・アーキテクチャー推進企業登録制度を発表し、1991年3月、その登録企業から希望する会社13社によってPCオープン・アーキテクチャー協議会(OADG)が発足しました。OADGは世界標準PC/AT仕様に基づくパソコンの普及を目的にした集まりです。



DOS/VとOADGの経緯

DOS/Vは世界標準のオープンな設計思想をもつPCで動作するDOSとして、ますます重要性が増大しています。DOS/Vが発表されて以来、このDOS/Vの人気は高く、OADG(Open Architecture Developers' Group)はこのPCとDOS/Vなどの普及推進をするための機関として設立されました。

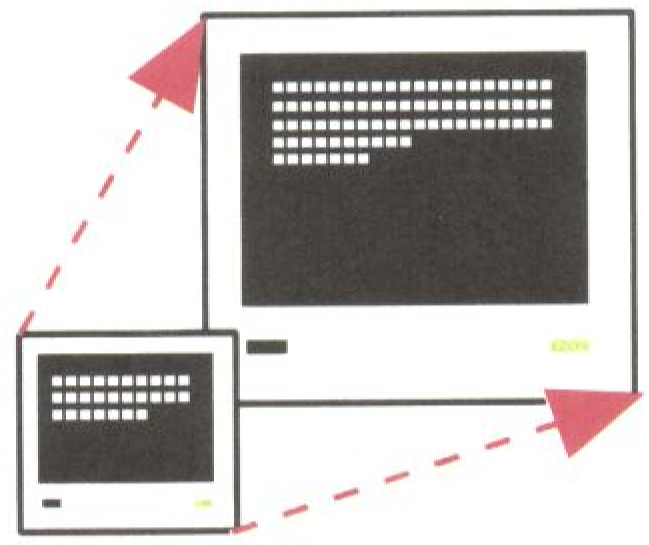


OADGの活動概要

OADGでは最初にハードウェアおよびDOS/VのOADG仕様を決め、同時に技術解説書などの作成やセミナーを開催し、普及につとめました。

さらに1992年4月には、アプリケーション・テスト・サイトを開設し、アプリケーション製品の動作確認施設を整備しました。その間、会員会社は26社と大幅に増えました。また、アプリケーション製品を広く知っていただくために、OADGカタログを発行しています。

1993年10月には、今までPCメーカーだけであったOADG会員に、新たにアプリケーション・プロダクト(AP)会員制度がスタートしました。これにより周辺機器やアプリケーション・ソフトウェア・メーカー200社以上が新たに加わり、より幅広いPC環境の整備が着々と進んでいます。



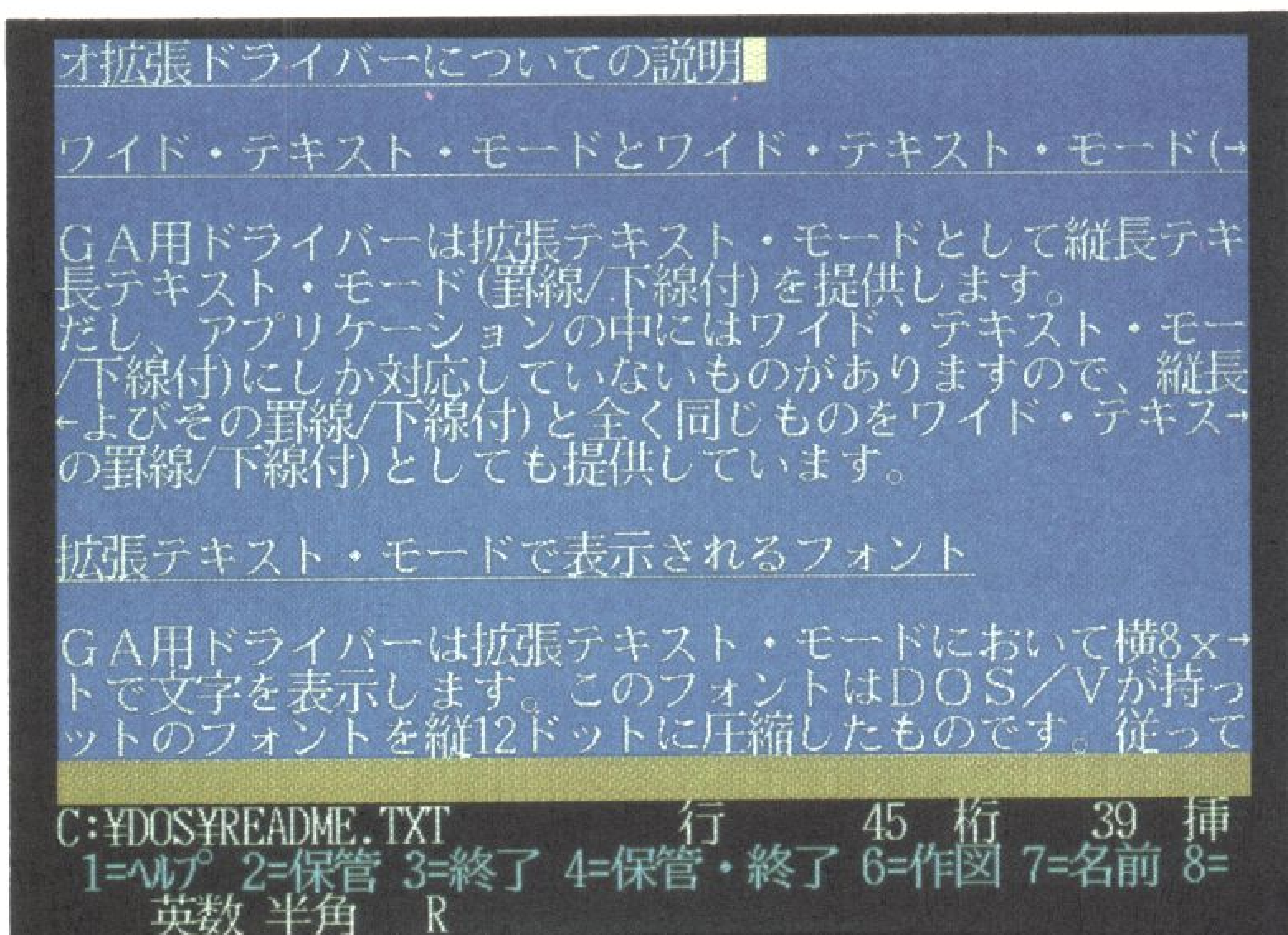
ユーザーの声から生まれたV-Text

V-TextはVariable Textの略称で、自由にフォントの大きさや形が変更できるという特長があります。

DOS/Vはソフトウェアだけで日本語表示ができるため、文字フォントもデータとしてメモリーに読み込んで使います。ですからこのフォントを置き換えれば、簡単にフォントの形や大きさを変更できます。さらに通常横80文字、縦25行しか表示できないノートパソコンの画面でも、フォントの大きさを変更することによって、横106文字、縦40行の表示が可能になるわけです。

このことにいち早く気が付いたパワーユーザーは、DOS/Vの日本語エクステンションを拡張して、V-Textを実現し、パソコン・ネットなどを通じてユーザーに配布しました。V-Textが広がるにつれ、アプリケーションでもV-Textをサポートするものが現われ、事実上の標準になりました。

この機能をDOS/Vの標準として欲しいというユーザーの声の高まりは、DOS/V仕様の拡張ということで実現し、V-Text機能がDOS/Vに標準搭載されることになったのです。



↑ 横52文字で縦20行の表示



横106文字で縦40行の表示 →



世界標準、日本語だけでなくアジアをカバーするDOS/V

DOS/Vはその拡張性の点で、日本語だけでなくアジアの言語をサポートできるように、仕様が考えられています。現在では日本、台湾、韓国、中国と4つの言語のDOS/Vが販売されています。



シングルとダブル・バイト圏のDOS

英語圏の国々は1文字を1バイトで表すので、シングル・バイト圏とも呼びます。それに対比して日本や中国などの漢字のような複雑な文字は2バイトで表すため、これらの国々はダブル・バイト圏と呼びます。DOS/Vはシングル・バイト圏用のPC DOSにダブル・バイトを扱う機能を拡張したものなので、文字入力部分とフォントを変更するだけで、ダブル・バイト圏各国をサポートできるわけです。

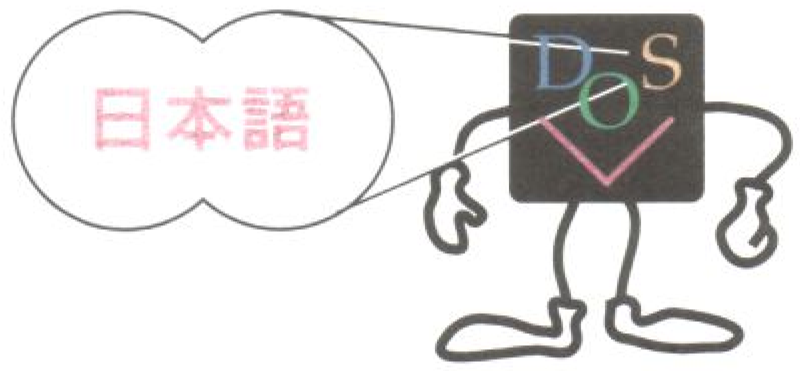


英語のアプリケーションもそのまま動く高度な互換性

DOS/VにはSWITCHというコマンドが用意されています。このコマンドを実行して[Y]キーを押すと、DOS/Vは再始動してPC DOSそのものになります。これを「英語モード」と呼びます。逆に日本語エクステンションが作動して日本語が入力できる状態は、「日本語モード」と呼びます。SWITCH*コマンドは日本語エクステンションを付けたり取ったりするコマンドです。

英語モードは100%英語のPC DOSそのものになるため、PC DOS用の膨大なソフトウェアが何の変更もなしに動作します。これがDOS/Vの高度な互換性の仕組みです。

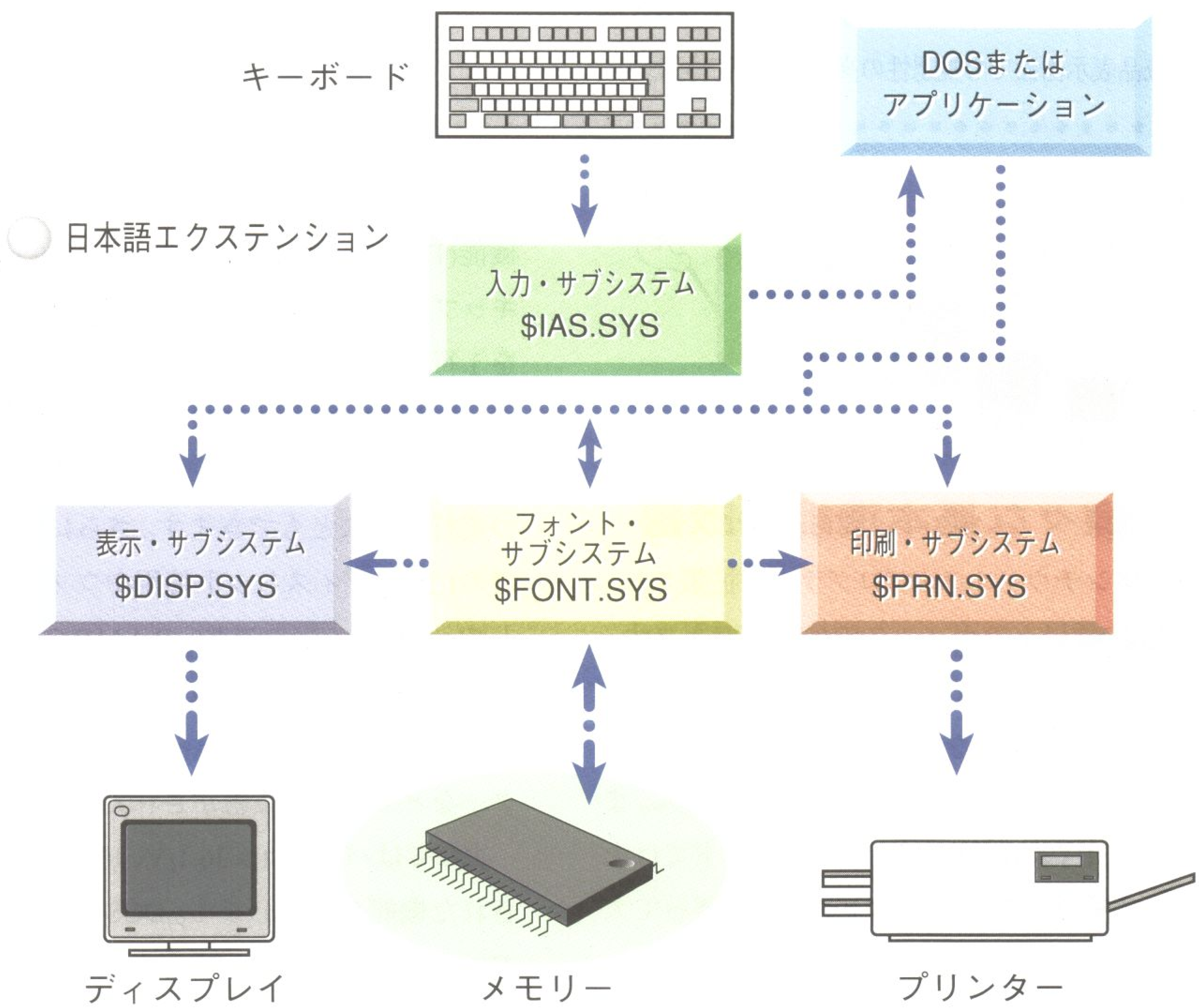
＊SWITCHに似たコマンドにCHEVがあります。このコマンドは日本語エクステンションをメモリーに残したまま「英語環境」（英語モードとは区別して呼ぶ）へ切り換えるため、その分メモリーが多く消費されます。

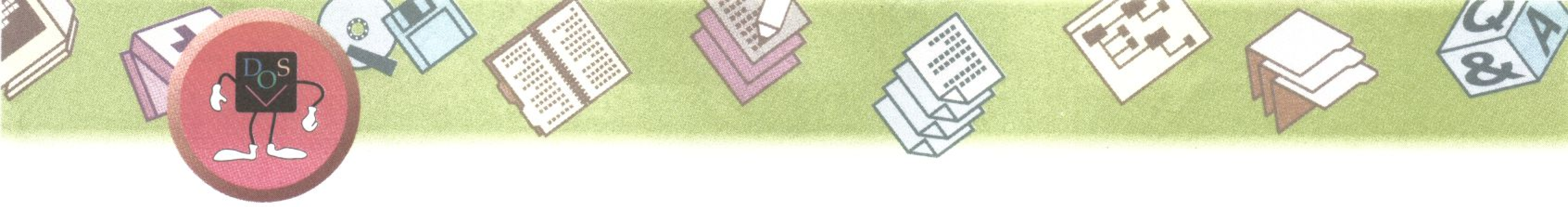


DOS/V日本語表示の仕組み

DOS/Vの日本語エクステンションは4つのモジュール（サブシステム）で、この汎用性を実現しています。「表示($DISP.SYS)」、「フォントの扱い($FONT.SYS)」、「入力($IAS.SYSとかな漢字変換プログラム)」、「印刷($PRN.SYSとプリンター・ドライバー)」です。

DOS/Vを始動すると、漢字のフォントがメモリーに読み込まれます。ユーザーが漢字を入力すると、DOSまたはアプリケーションが入力サブシステムから対応する文字コードを取得し、それを表示サブシステムに送ります。表示サブシステムはフォント・サブシステムに対応するフォントを要求し、フォント・サブシステムがメモリーから、該当するフォント・パターン(文字の形)を取り出します。そして表示サブシステムがこのフォント・パターンをグラフィックス画面に書き込むと、画面に漢字が表示されるわけです。





PC DOS J6.3/Vでさらに機能強化、便利な機能の数々を紹介

PC DOS J6.1/V からJ6.3/Vへのアップグレードによって、数々の使いやすさへの工夫が追加されます。ここではその概要をまとめて説明します。

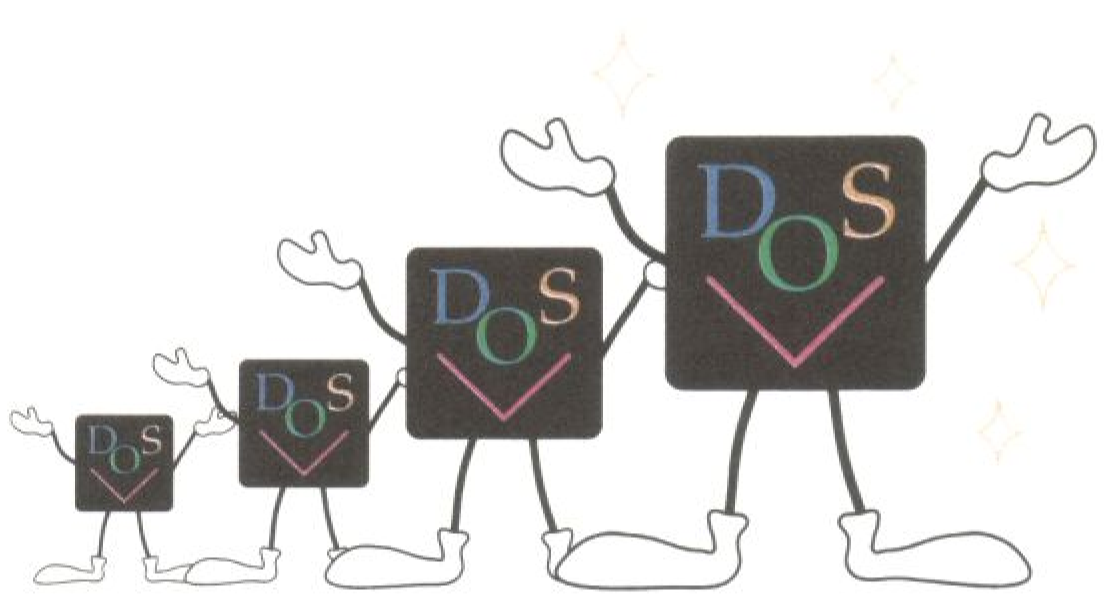
拡大テキスト・モードをサポート

DOS/Vで大きな文字を表示する拡大テキスト・モードが新たにV-Textでサポートされます。これによって、24ドットや32ドット・フォントで日本語が表示できます。このとき画面は、横52文字で縦20行や横40文字で縦15行の大きな文字表示になります。これにより小さなディスプレイや液晶表示画面でも視認性の高い表示ができます。

CD-ROMを標準でサポート

MSCDEX**の追加により、CD-ROMドライブの使用がサポートされます。またSMARTDRVの機能拡張によってCD-ROMのキャッシングもサポートされます。これによって、CD-ROMを高速にアクセスできるようになります。





様々な基本機能の改善

アンチウィルス・プログラムが拡張され、2,000種以上のウィルスの検出ができます。

J6.3/Vからは、DIR、CHKDSK、FORMATコマンドなどで3桁ごとにカンマ(,)が付くので、読み間違うことはありません。またCOPY、XCOPY、MOVEコマンドでは上書き確認プロンプトが表示され、誤って大切なファイルを上書きするのを防止します。

その他にも Ctrl + F8 キーで圧縮機能(DBLSPACE.BINの読み込み)をスキップし、CONFIG.SYSとAUTOEXEC.BATを1行ずつ実行する機能が追加されています。COMMAND.COMに追加された/Yスイッチを使って、バッチ・ファイルを1行ずつ実行することもできます。さらにSETUPでの1.2MBディスケット使用やフォーマットのオプションの追加、RAMBOOST、CPBACKUP、DEFRAG、DISKCOPY、QCONFIG、SETVER、AntiVirus、Eエディターなどで多数の改善がされています。

次章ではバージョンJ6.1/V、J6.3/Vで追加された機能を紹介します。DOSが初めての方は先に3章～5章をお読みください。

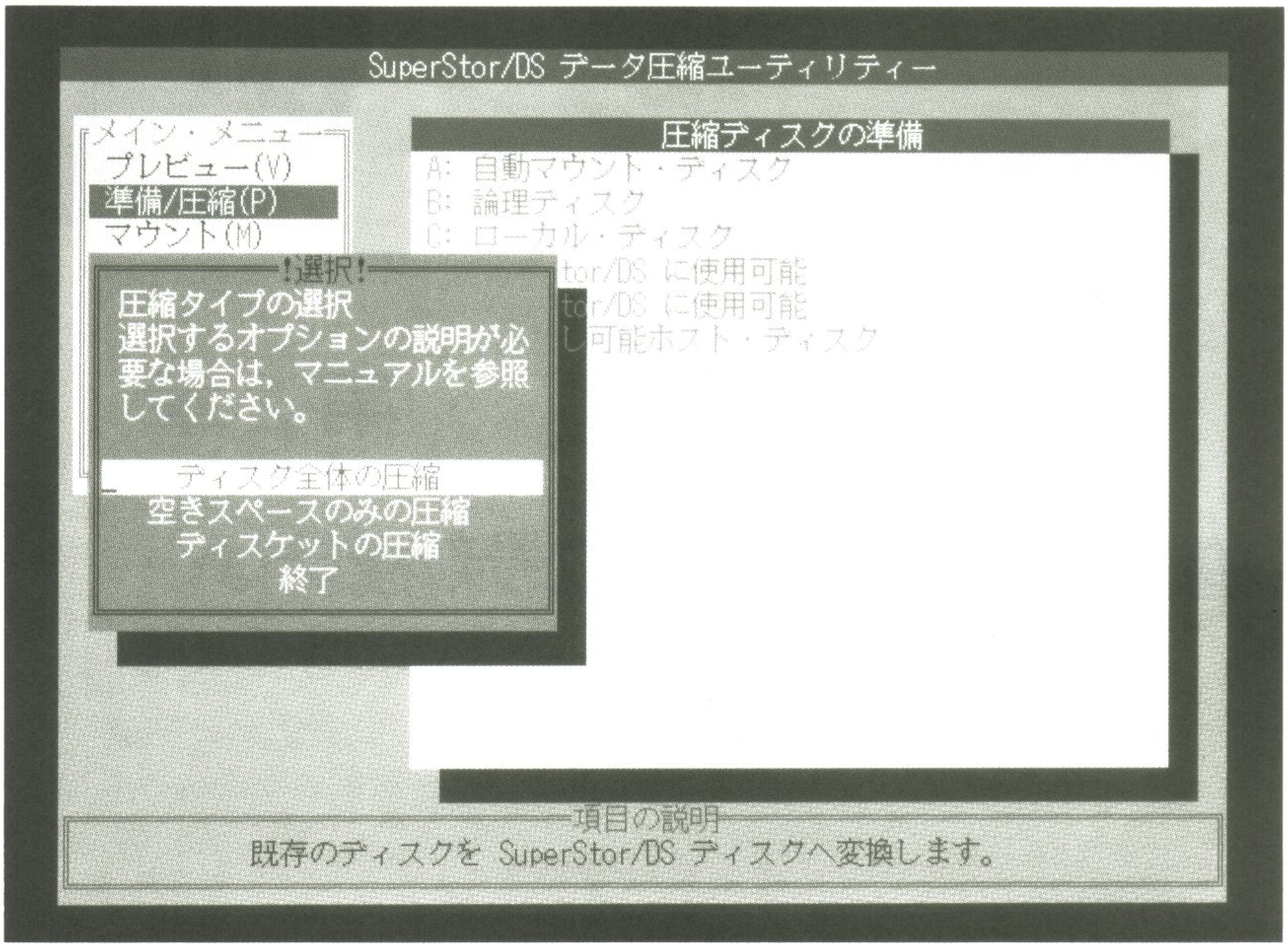
NEW

第2章

進化するDOS/V、その最新機能は…

NEW

ハードディスクが約2倍*に使える ディスク倍増機能

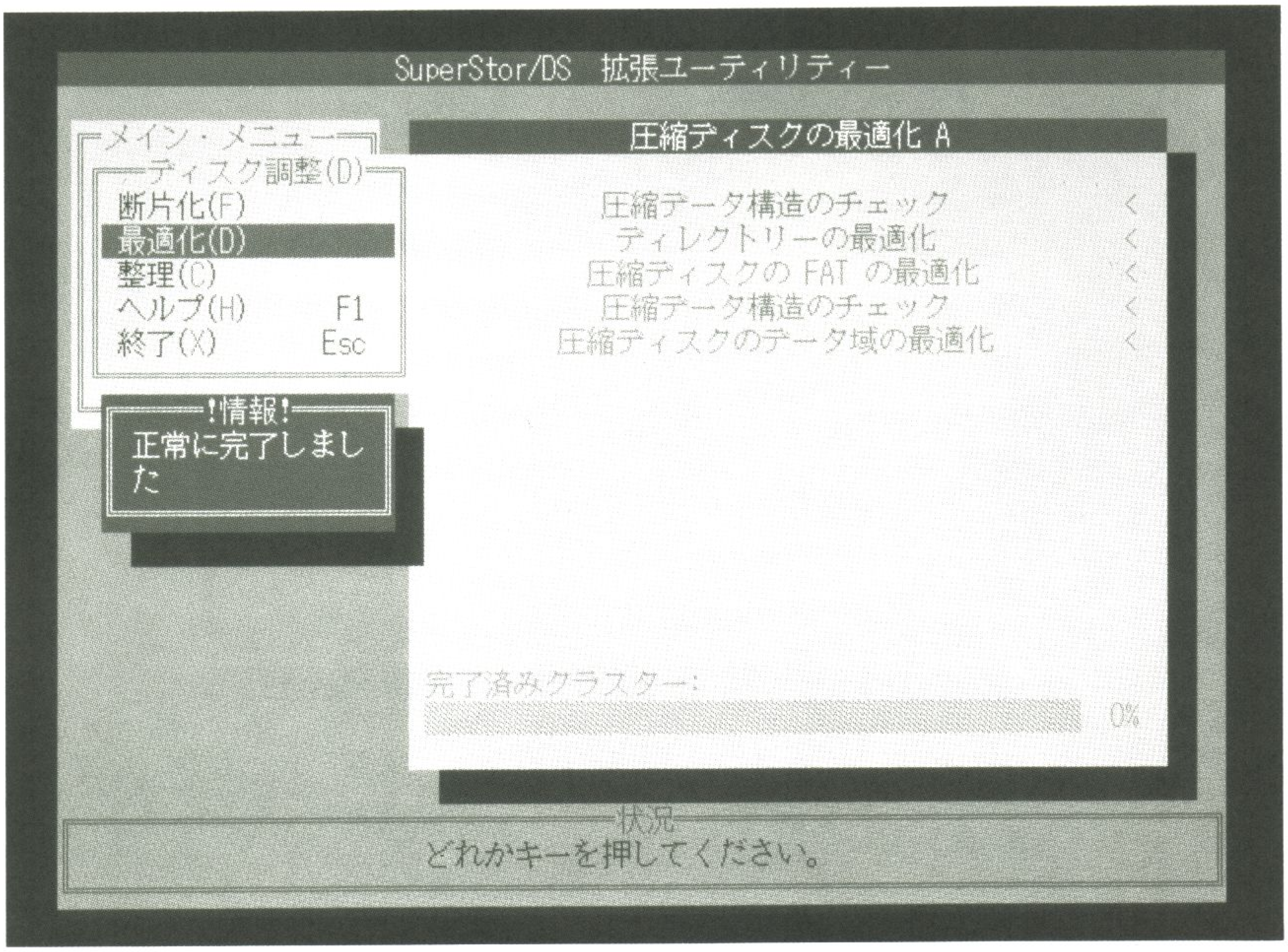


＊ファイルによって圧縮比の平均値が異なります。

アプリケーションが増え、それらで作成したデータが増えてくると、最初はこれで十分と考えていたハードディスクの容量が、足りなくなる場合が多いものです。このようなときには、PC DOS J6.3/Vに標準装備されたSuperStor/DS**ディスク圧縮プログラムを活用して、ハードディスクの容量を増やしてください。ファイルの種類によって多少の増減はありますが、各々のファイルを圧縮して、ハードディスクをあたかも約2倍*の容量に増やしてくれます。

SuperStor/DSをシステムに組み込んでおくと、ユーザーは圧縮や元に戻すという作業に煩わされることなく、いままで使い慣れたDOSコマンドで、コピーや削除などができます。

最初に始動するコマンドはSSTORです。ディスクを圧縮するには、SSTORコマンドで始動した後、「準備/圧縮(P)」を選択します。以降いくつかのパネルが表示されます。よく分からない場合は、その時点で F1 キーを押すとヘルプ情報が表示されます。ハードディスク全体を圧縮する場合は、かなり時間がかかります。またWindows**を



使用する場合はスワップ・ファイル用に非圧縮領域を残しておく必要があります。

SuperStor/DSにはディスクをメインテナンスするためのツールもあります。これによって一度読めなくなったファイルを回復したり、アクセスが遅くなったディスクを最適化したりすることもできます。

このユーティリティーの始動コマンドはSSUTILです。

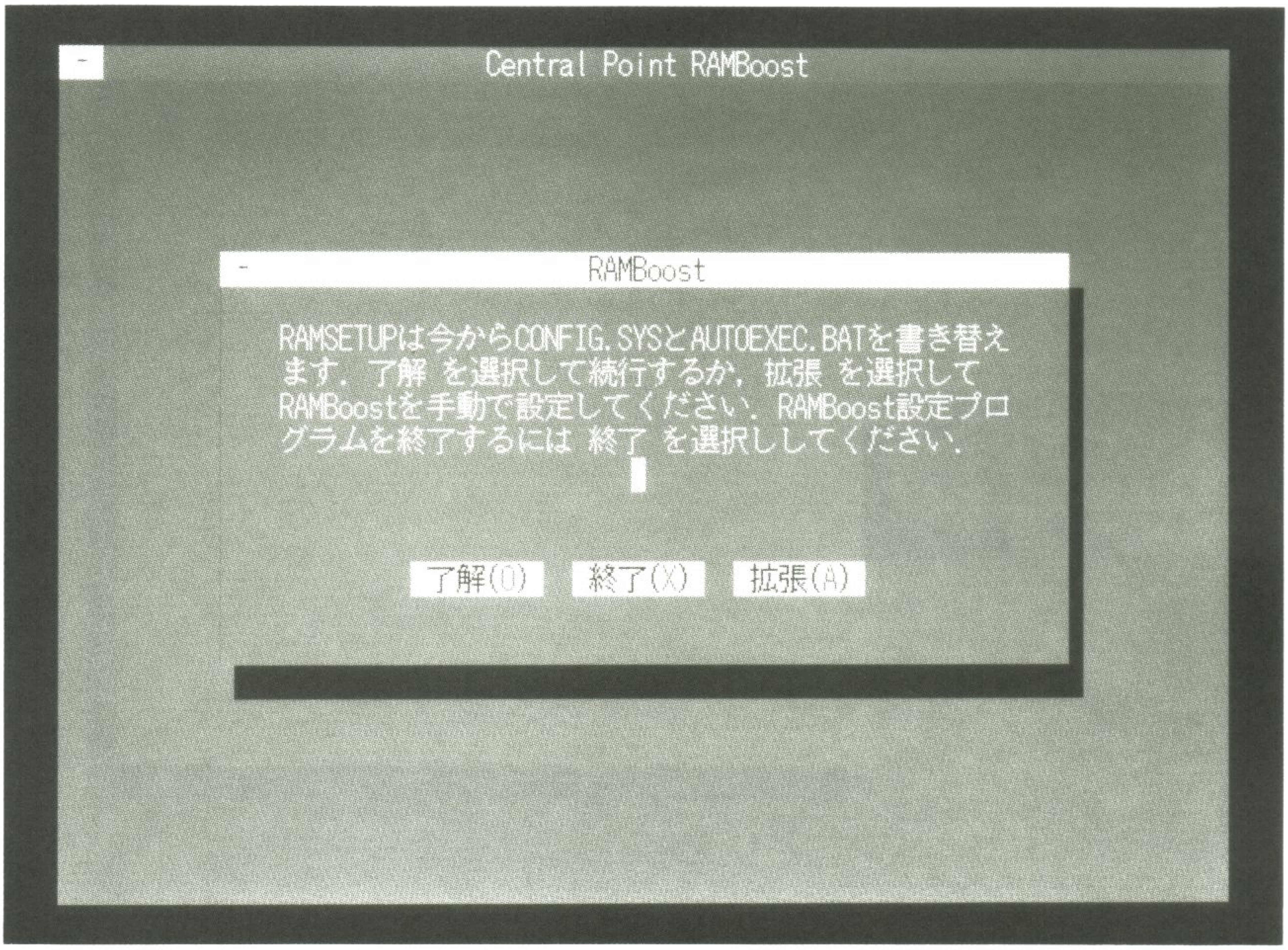
もちろん一度圧縮したハードディスク内のファイルを元に戻すこともできます。

このユーティリティーの始動コマンドはSSUNCOMPです。

SSTORコマンドでディスケットを圧縮するとき、汎用データ交換(UDE)ディスケットにしておくと、SuperStor/DSの導入されていないシステム(たとえばIBM DOS J5.0/V)でも、UDEONコマンドで圧縮ディスクの読み書きができるようになるので、ディスケットも約2倍に使えます。

NEW

メモリーを限界まで確保する メモリー最適化機能

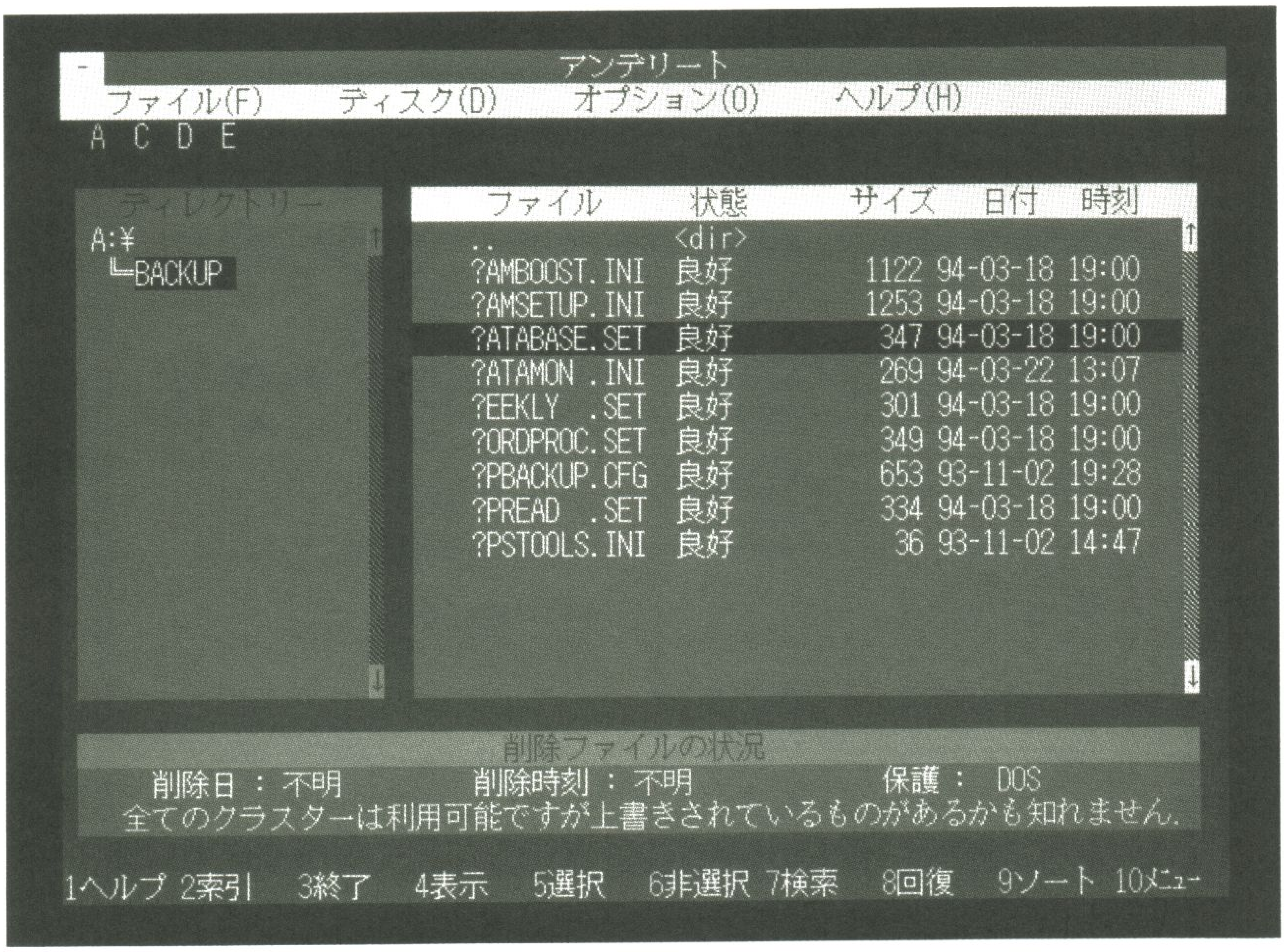


DOSで扱えるメモリーの中で、640KB(キロ・バイト)から1024KB(1MB)までのシステム予約領域にUMBメモリーを割り付けると、640KBまでのアプリケーション・プログラム用のメモリー領域を増大することができます。システム予約領域にUMB(Upper Memory Block)メモリーを割り付ける場合、ハードウェアのシステム構成によって違いがあるため、ユーザーが行うにはかなり高度な知識が必要でした。

新しく追加されたRAMBoostプログラムを使うとメモリーを最適化することができます。RAMBoostはまずUMBメモリーを自動的に学習し(学習（LEARN）モードで始動し)、システムに何か変更が加わると、自動的に学習モードになり、再始動して再度メモリーを最適化します。

通常はRAMSETUPコマンドを始動して「了解(O)」を選択するだけで、自動的にRAMBoostが組み込まれます。

うっかり削除にも対応を強化、ファイル復元機能



DOS J5.0/Vから加わったUNDELETEコマンドがさらに強化されました。フルスクリーンでDOSシェルと同じように、一つ一つのファイルを確認しながら復元することができます。ファイルの状態も完全、良好、やや良、不良、破壊など、その回復可能状況に応じて表示されます。

さらに新しい削除セントリー(Delete Sentry**)という機能が追加され、削除されたファイルは完全な形で復元できます。またディスクの中で、すでに消されているファイルの断片から文字を探したり、断片をつなぎ合わせることもできます。

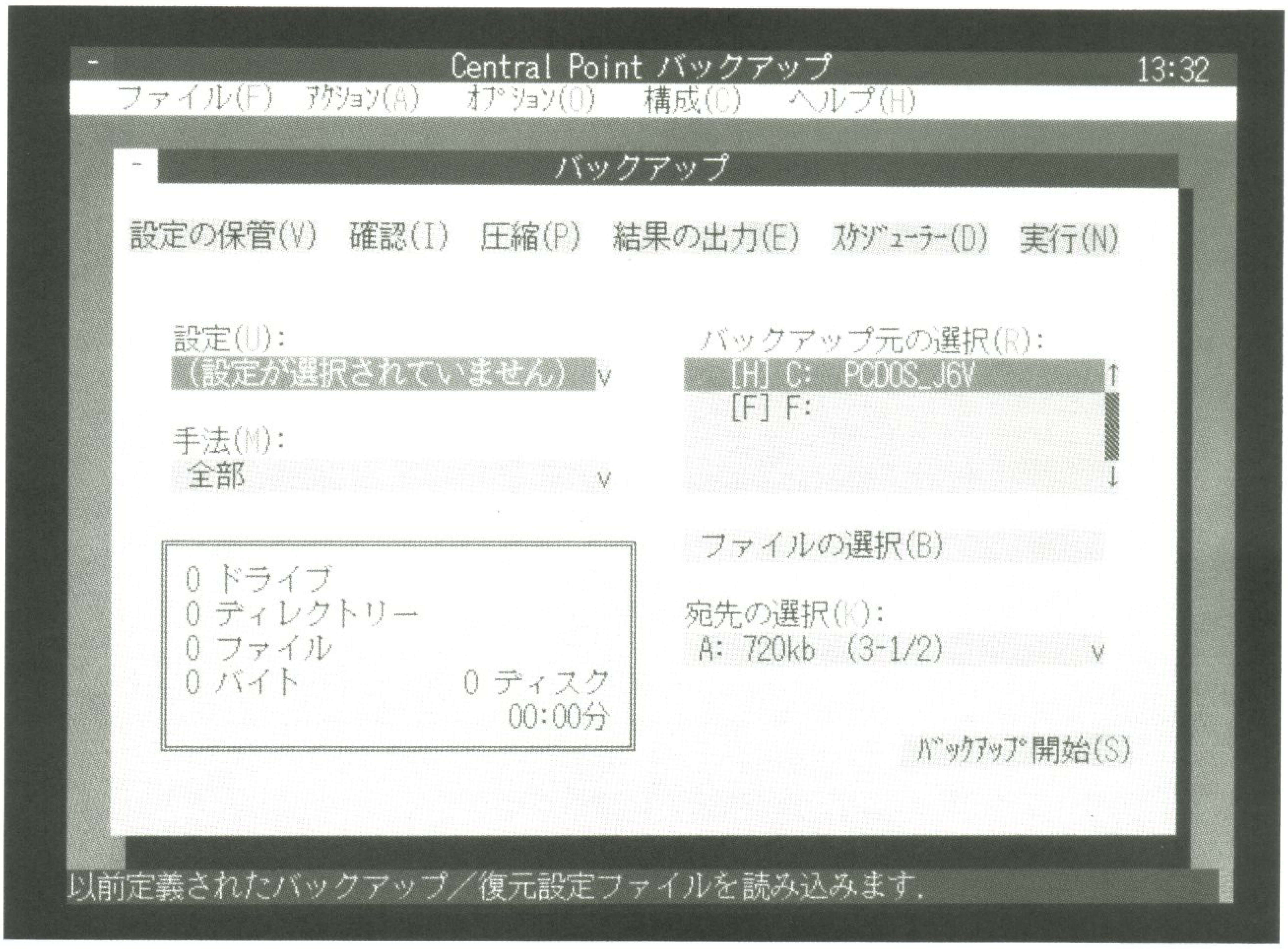
始動コマンドはUNDELETEです。DATAMONコマンドと併せて使うと効果的です。以下のどちらかのコマンドをAUTOEXEC.BATに追加してください。

DATAMON /SENTRY+
DATAMON /TRACKER+

UNDELETEプログラムの使用方法はDOSシェルに似ています。最初にタブ・キーと上下矢印キーで復元したいファイルのあるディレクトリーを指定します。次にタブ・キーでファイル・リストに移動し、復元したいファイルを上下矢印キーで選択します。F8 (回復)キーを押し、消えたファイル名の最初の1文字を入力すると、ファイルが復元されます。

NEW

多彩なファイル保管を支援する、バックアップ機能



大切なデータの入ったハードディスクのバックアップを簡単に行うCentral Point** Backup**プログラムが追加されました。フルスクリーンで個々のファイルに対してバックアップの詳細な指定ができます。

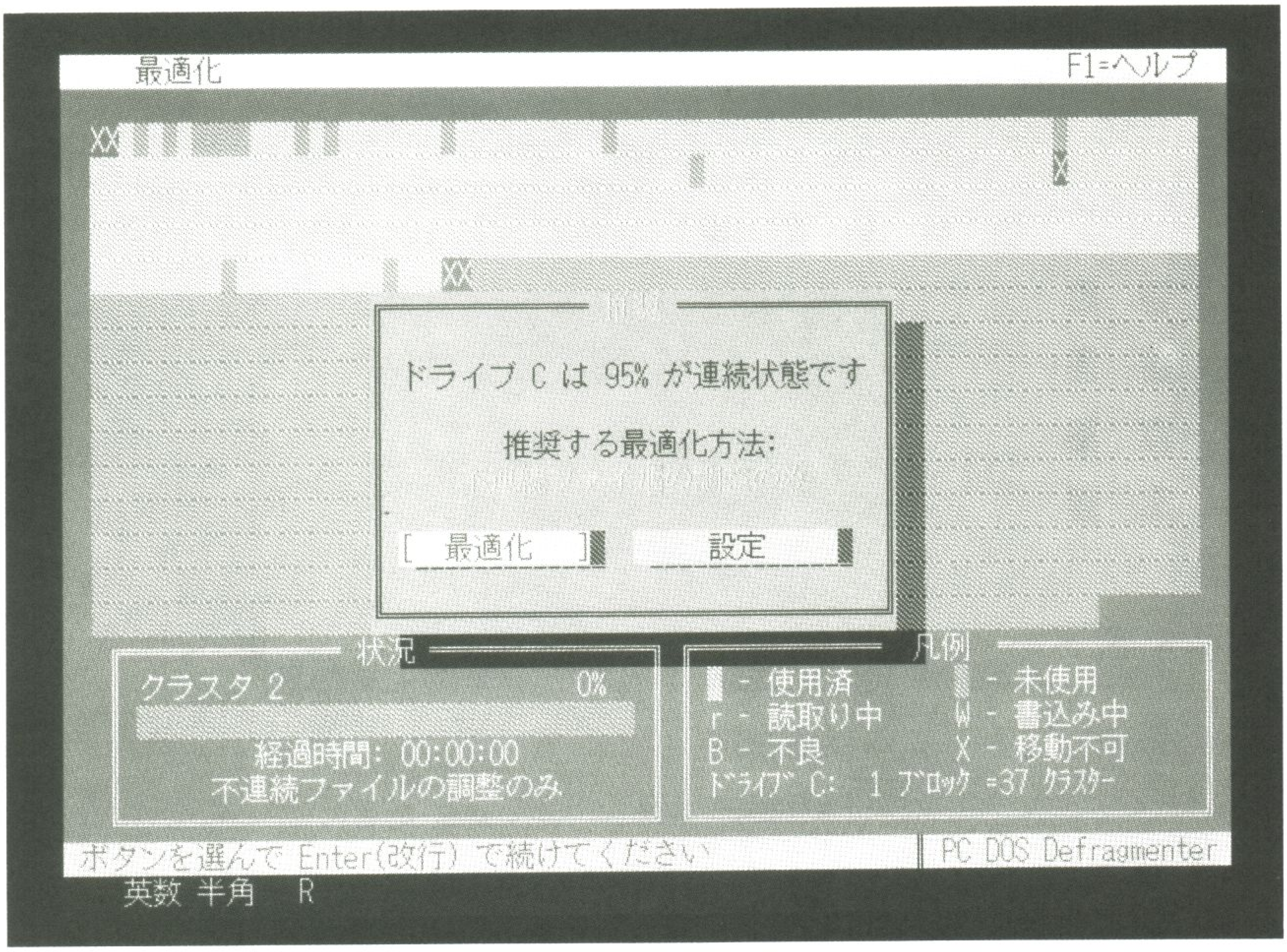
全バックアップ、全コピー・バックアップ、追加バックアップ、分離追加バックアップ、差分バックアップなどの多彩なバックアップ方式をサポートし、テープへのバックアップも完全に自動化できます。

高速度バックアップは、通常のディスク・コピーの数倍の速さです。またファイルを圧縮したり、暗号化しながらバックアップすることも可能です。スケジューラーの機能と組み合わせて使えば、毎日や毎週のバックアップを自動的に行う設定もできます。

始動コマンドはCPBACKUPです。

最初に実行したときは、信頼性テストを実行します。これによって、お使いのハードウェアが高速バックアップに適しているかをチェックします。2回目以降は「バックアップ(B)」、「復元(R)」、「比較(C)」を選択するメインパネルを表示します。各パネル、項目の説明はそれぞれの時点で F1 キーを押すと、詳細なヘルプ情報が表示されます。

ファイルの読み書きを高速化、ディスク最適化機能

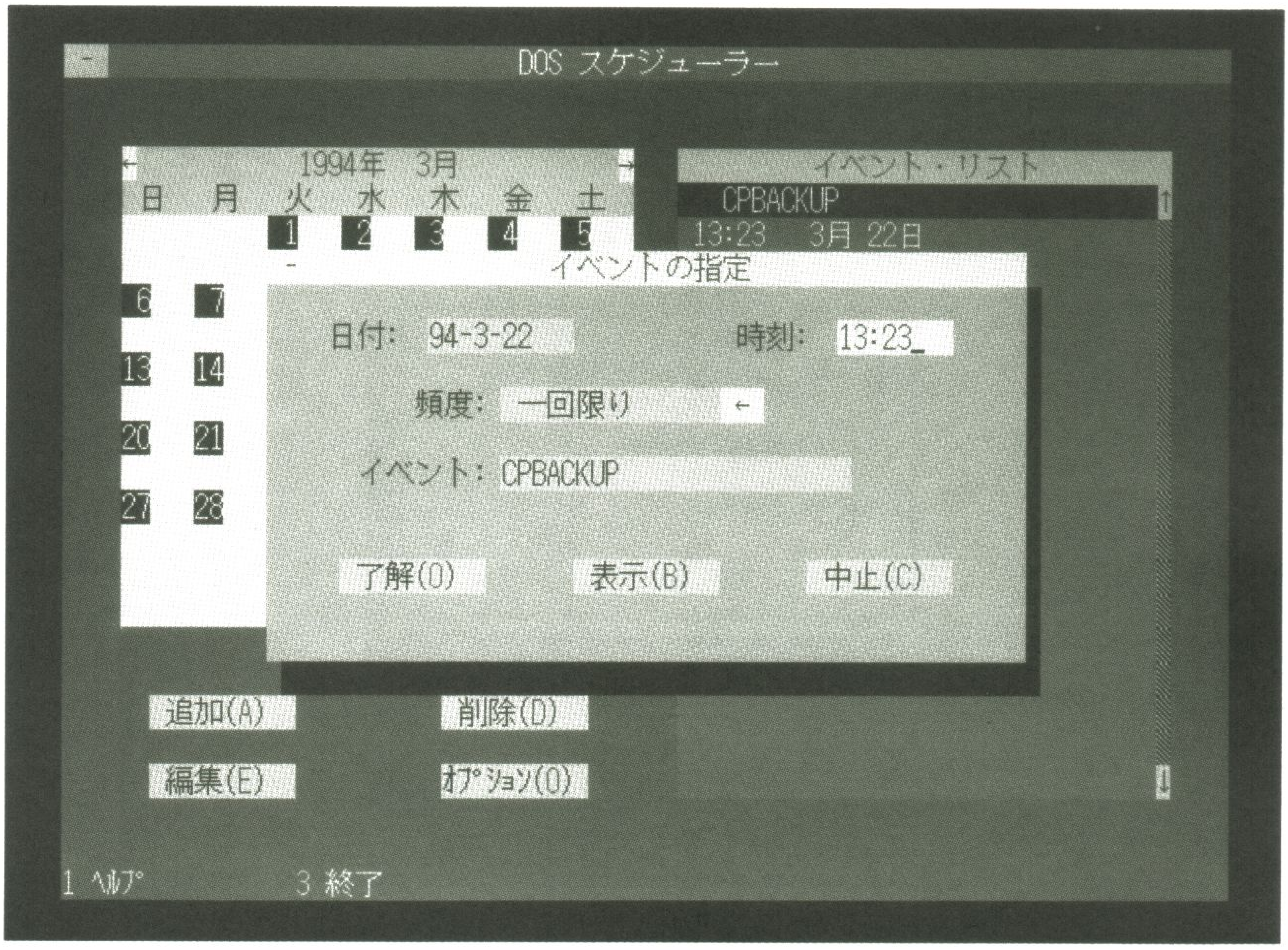


ハードディスクを長い間使用していると、ファイルの作成や削除の繰り返しによって、ディスクの中でファイルが断片化(フラグメンテーション)されます。これはファイルがディスク上の連続した部分になく、飛び飛びに分散して書き込まれている状態です。その分だけ読み出しや書き込みが遅くなります。

新しく追加されたDEFRAGコマンドは、この断片化を解消し、ディスク内で飛び飛びに分散しているファイルをつないで最適化します。これにより、ディスクでのファイルの読み書きを、常に最適な状態に保つことができます。またディスク内のファイルを名前、日付、サイズ順に並べ替え、ディスクに書き込み直すこともできます。

始動コマンドはDEFRAGです。最適化するドライブを選択し、「最適化」を選択してください。断片化された情報が連続状態に書替えられていく様子が、ビジュアルに表示されます。

プログラムの自動実行を可能にする
スケジューラー機能



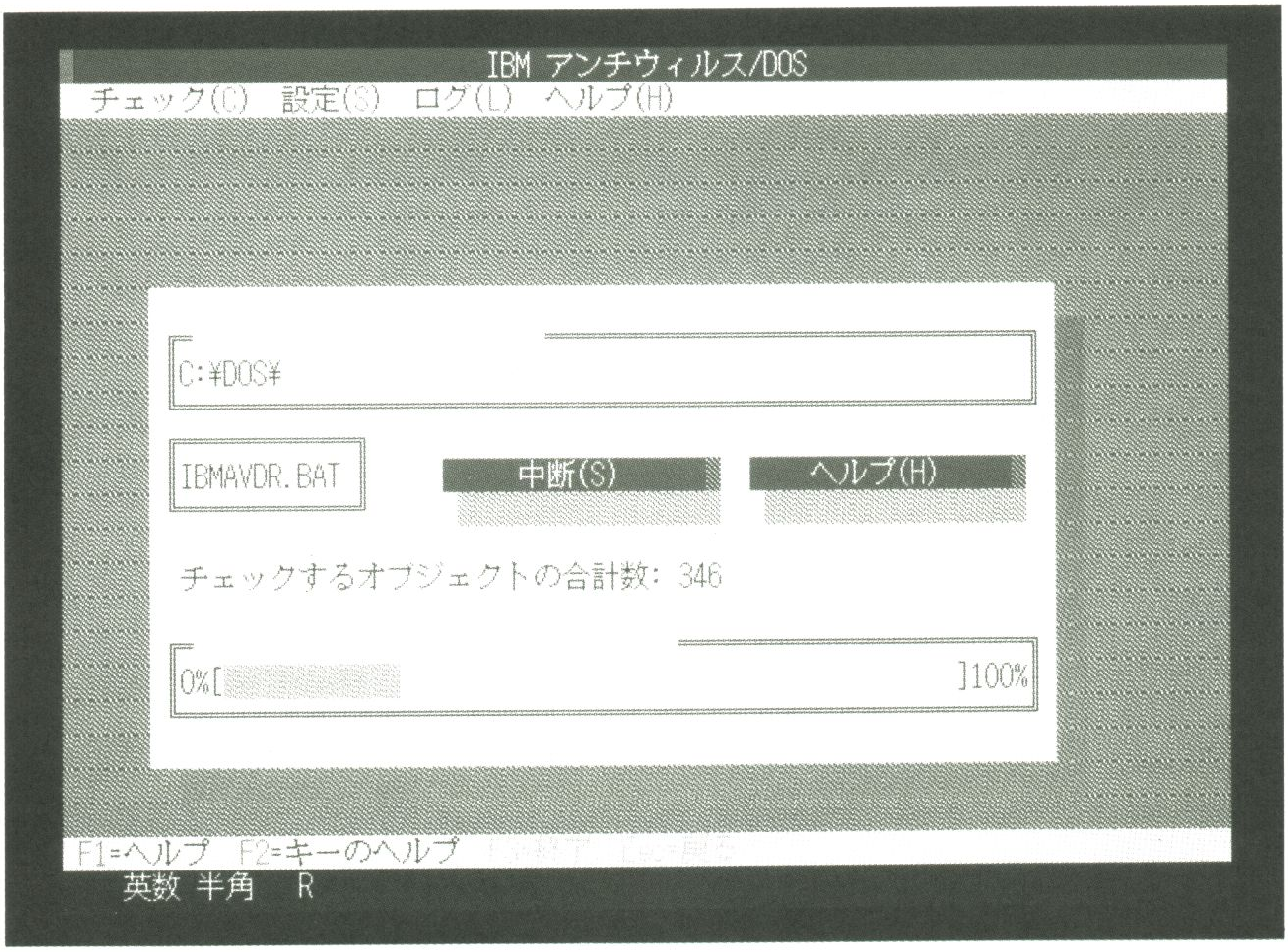
スケジューラーの機能が新しく追加されて、定期的なバックアップや、ある時刻に指定のプログラムを動作させることができます。これを応用すれば、DOSでアプリケーションを実行中でも、ミーティングの時間を知らせてくれます。

スケジューラーは日付や時刻の他にも、毎週、隔週、毎月第n曜日、毎月、平日のみなどの詳細な設定ができます。

CPSCHEDコマンドでスケジューラーをメモリーに常駐させます(コマンド行でCPSCHEDと入力し ↵ Enter (改行)を押すか、あるいはAUTOEXEC.BATに登録し、ブート時に読み込むようにすると便利です。)実際のパネルはSCHEDULEコマンドを実行して表示します。このフルスクリーンの設定パネルでイベント(DOSコマンド)が設定できます。

イベントを設定する日時を選び、「追加(A)」を選択してください。イベントの指定パネルで時刻、頻度、イベントを指定します。

最新ウィルスまで駆逐する ウィルス撃退機能



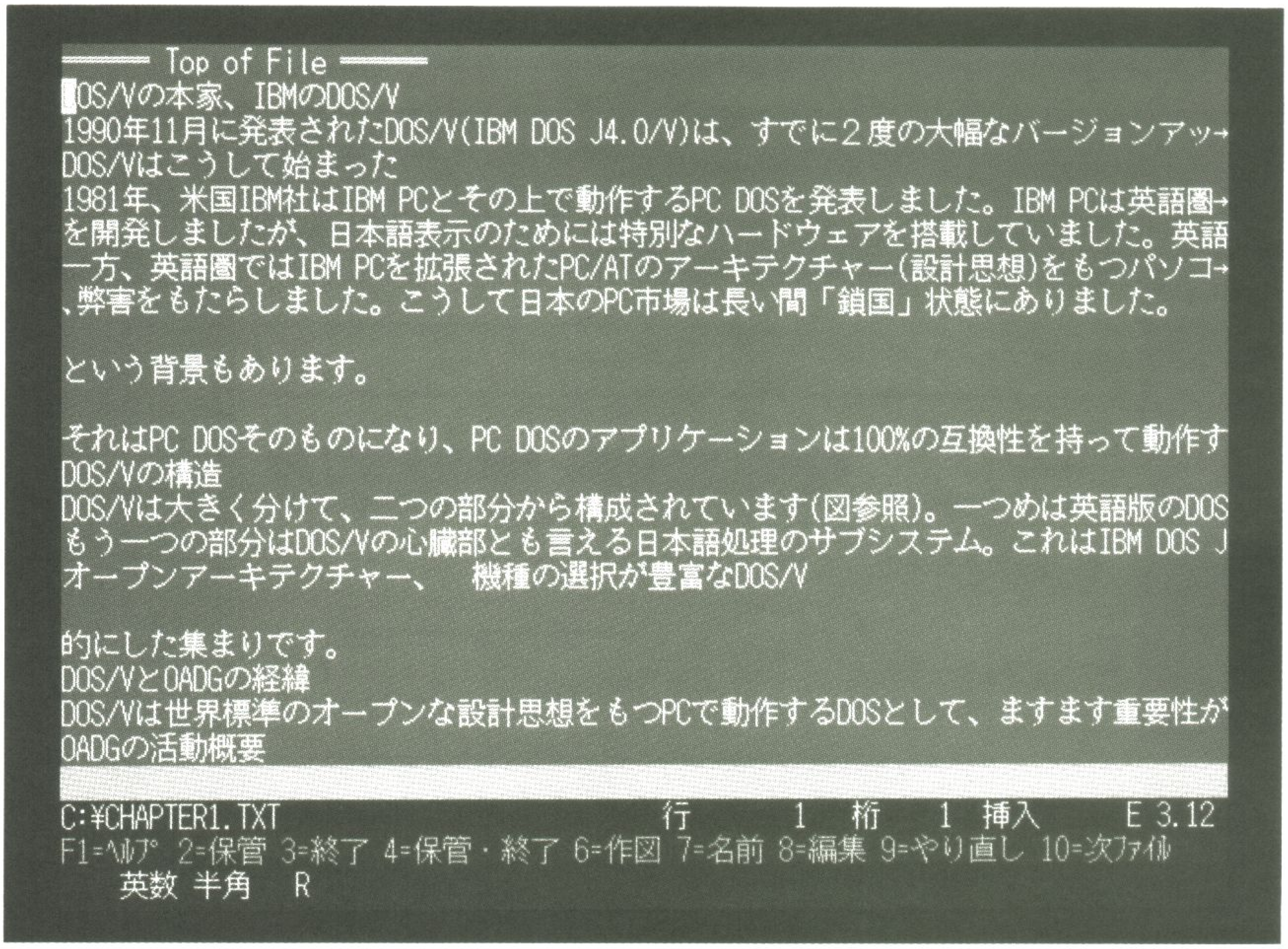
現在のコンピューター環境で避けて通れない大きな問題がコンピューター・ウィルスです。これはオペレーティング・システムの動作を利用して、ハードディスクやディスケット内部で増殖し、ディスク内の大切なデータなどを破壊する悪質なプログラムです。

IBMのアンチウィルス・プログラム(IBM AntiVirus/DOS)は、現在発見されているウィルスのほとんどに対応し、それを除去したり、活動を停止させる機能をもっています。また未確認のウィルスに対しても、ブート部分や感染したファイルの削除で対処できます。

始動のコマンドはIBMAVDです。実行するには ↵ Enter (改行)を押してください。メニューバーの「設定(S)」を選択し、プルダウン・メニューから「自動設定(A)」を選択すると、ウィルスチェックを毎ブート、毎日、毎週、毎月行うなどの指定ができます。またメニューバーより「ログ(L)」を選択して、過去のウィルスチェックの履歴を見ることもできます。

NEW

複数のファイル編集と強力な拡張機能のフルスクリーン・エディター

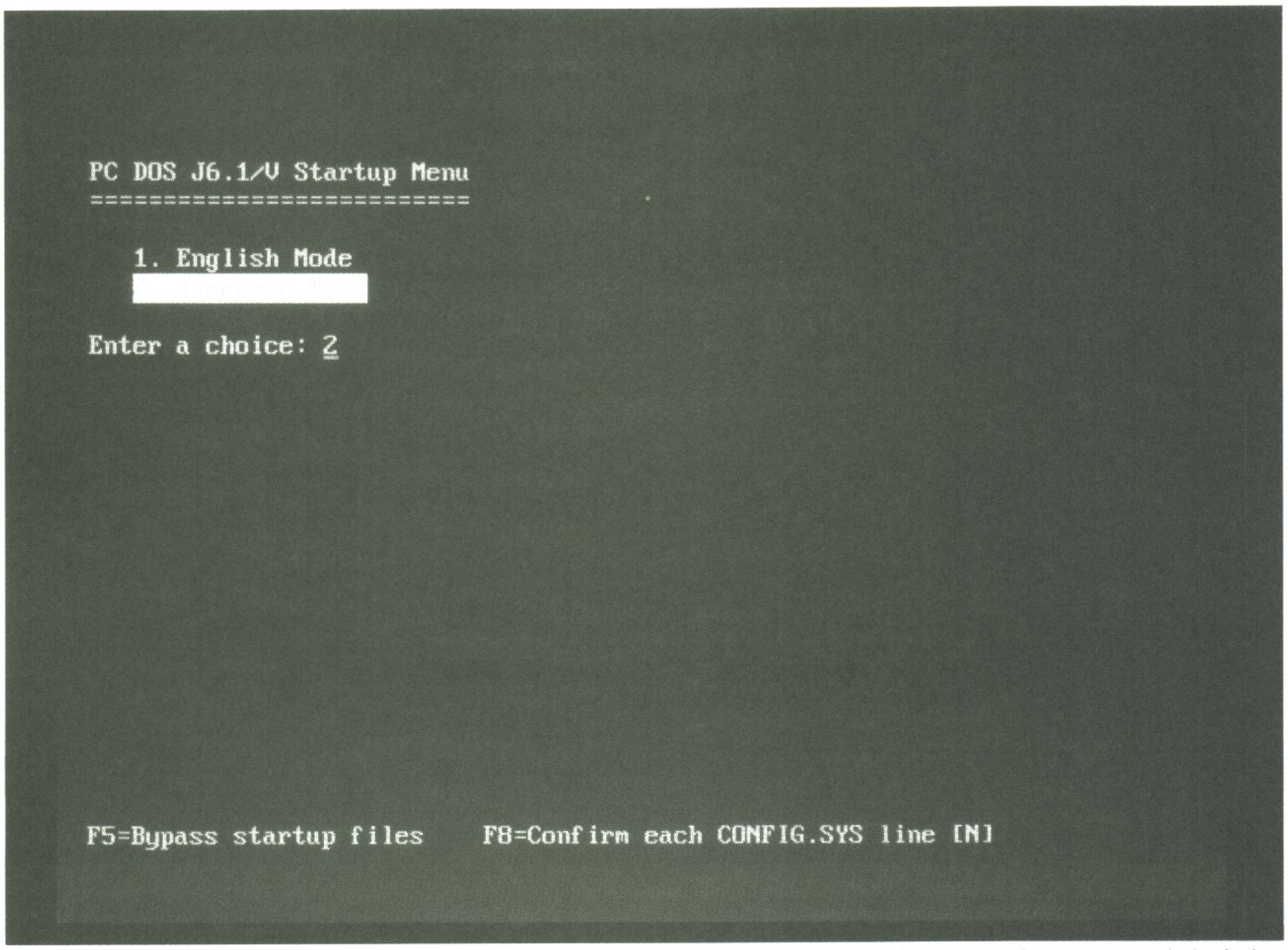


DOSでテキスト・ファイルの編集が必要になったら、Eエディターが便利です。一度に複数のファイルをオープンして、相互にテキストの切り貼りをするなど、高度な編集機能をサポートしています。

ブロック指定した範囲(Alt + B や Alt + L)の複写(Alt + C)や削除(Alt + D)、アンドゥ機能、キーの入力回数で自動的に保存するオートセーブ機能(コマンド行より、AUTOSAVE n)、文字の置き換え(コマンド行より、c/旧字/新字/1 *)と検索(コマンド行より、/検索文字)、テキストで図や表を作成する作図(DRAW)機能、タブやマージン設定、印刷機能(コマンド行よりPRINT)などなど、豊富な機能を搭載しています。また好みに応じて表示形式をカスタマイズすることもできます。

始動コマンドはEです。通常はEのあとに(スペースをおいて)編集するファイル名を指定します。ファイル名にはワイルドカード(?や*)も指定できます。複数のファイル間を切り換えるには F10 を押します。 Ctrl + A でウィンドウを分割表示し、各ウィンドウ間を移動するには Alt + W を押します。Eエディターは第4章で詳しく説明しています。

複数の環境を切り替える、複数CONFIG機能



この画面のサンプル・ファイルは、6章のQ&Aにあります。

旧バージョンまでのDOSでは、CONFIG.SYSファイルに、複数の環境を設定することはできませんでした。多数のアプリケーションを一つのシステム環境で動作させるには、複雑な環境設定で対処しても無理な場合がありました。

PC DOS J6.3/Vでは複数の環境設定を記述し、始動時にメニュー方式で選択できます。これにより、PC DOS J6.3/Vでは、CONFIG.SYSファイルに複数のシステム環境設定を記述できます。これにより、各アプリケーションごとに最適な環境を、DOS始動時にメニュー方式で選択できます。またユーザーがCONFIG.SYSを書き換えてDOSが始動しなくなってしまった場合にも、"Starting PC DOS..."の表示中に F5 を押すことで、CONFIG.SYSとAUTOEXEC.BATファイルの実行をバイパスすることができます。

Ctrl + F8 を押すと、ディスク圧縮用のデバイス・ドライバーの読み込みをスキップしたり、CONFIG.SYSやAUTOEXEC.BATを行単位で実行するので、問題部分の発見も簡単になりました。

NEW

2つのマシンを接続する、インターリンク機能



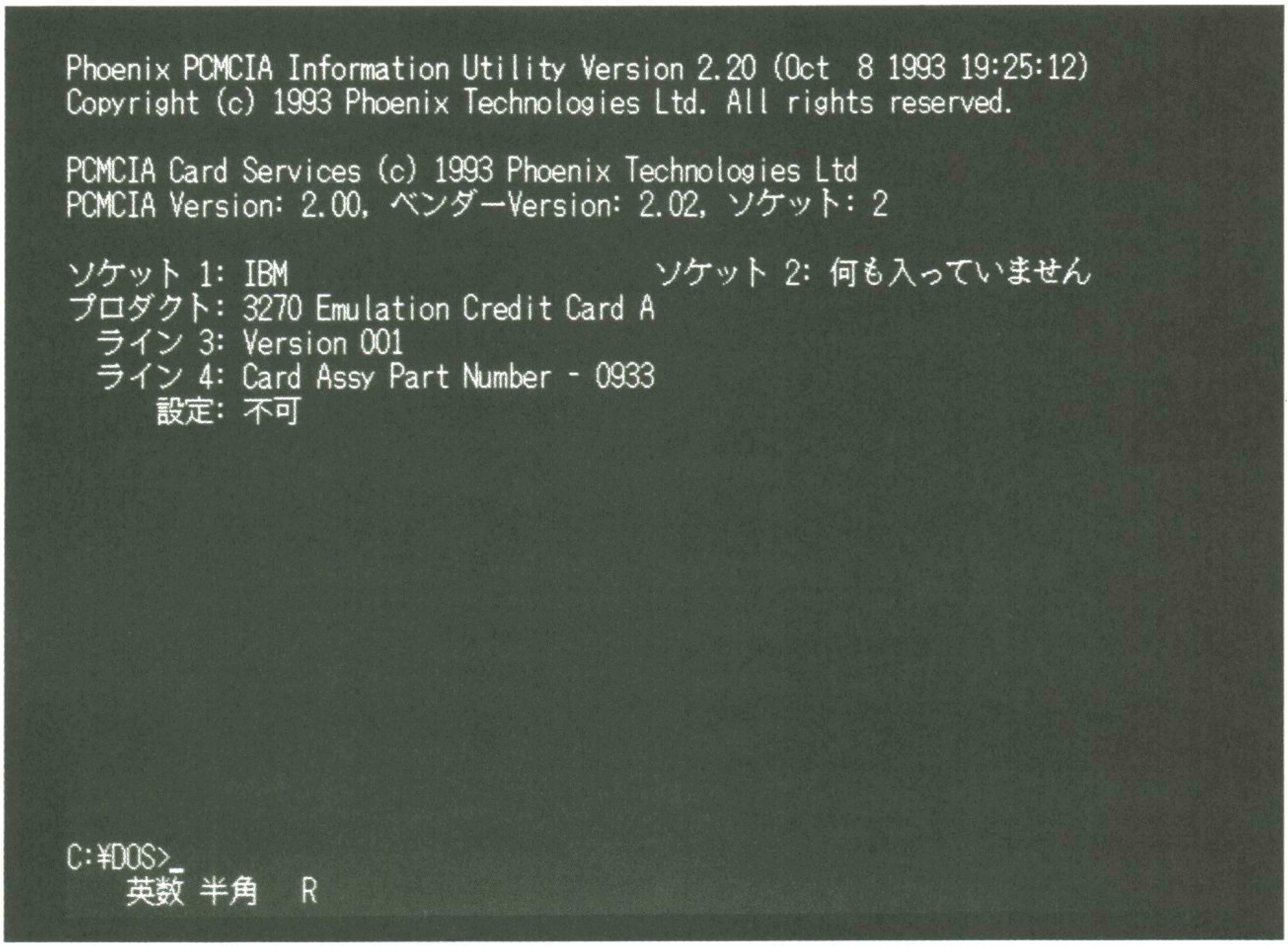
ケーブルの結線図は6章のQ&Aにあります。

2つのコンピューター間でファイルのコピーを行うには、ディスケットを使うのが一般的です。大量のファイルをコピーするときなど、コピー作業を複数回行わなければならないので、大変でした。

INTERLNKコマンドを使うと、2つのコンピューターをシリアル(RS-232C)やパラレル(プリンター)ケーブルで接続し、一方のコンピューターから他方のコンピューターのドライブを、あたかも内蔵ドライブのように操作することができます。

操作する側のコンピューターを"クライアント"、操作される側を"サーバー"と呼びます。ケーブルをつなぎ、サーバー側でコマンド行よりINTERSVRコマンドを、クライアント側ではINTERLNK.EXEをCONFIG.SYSに記述し、INTERLNKコマンドを実行するだけで、簡単にコピーや他の作業が行えます。もちろんDOSシェルを使ってのコピーも可能です。

ノートの機能を拡張する2つの工夫、省電力機能とPCMCIA機能



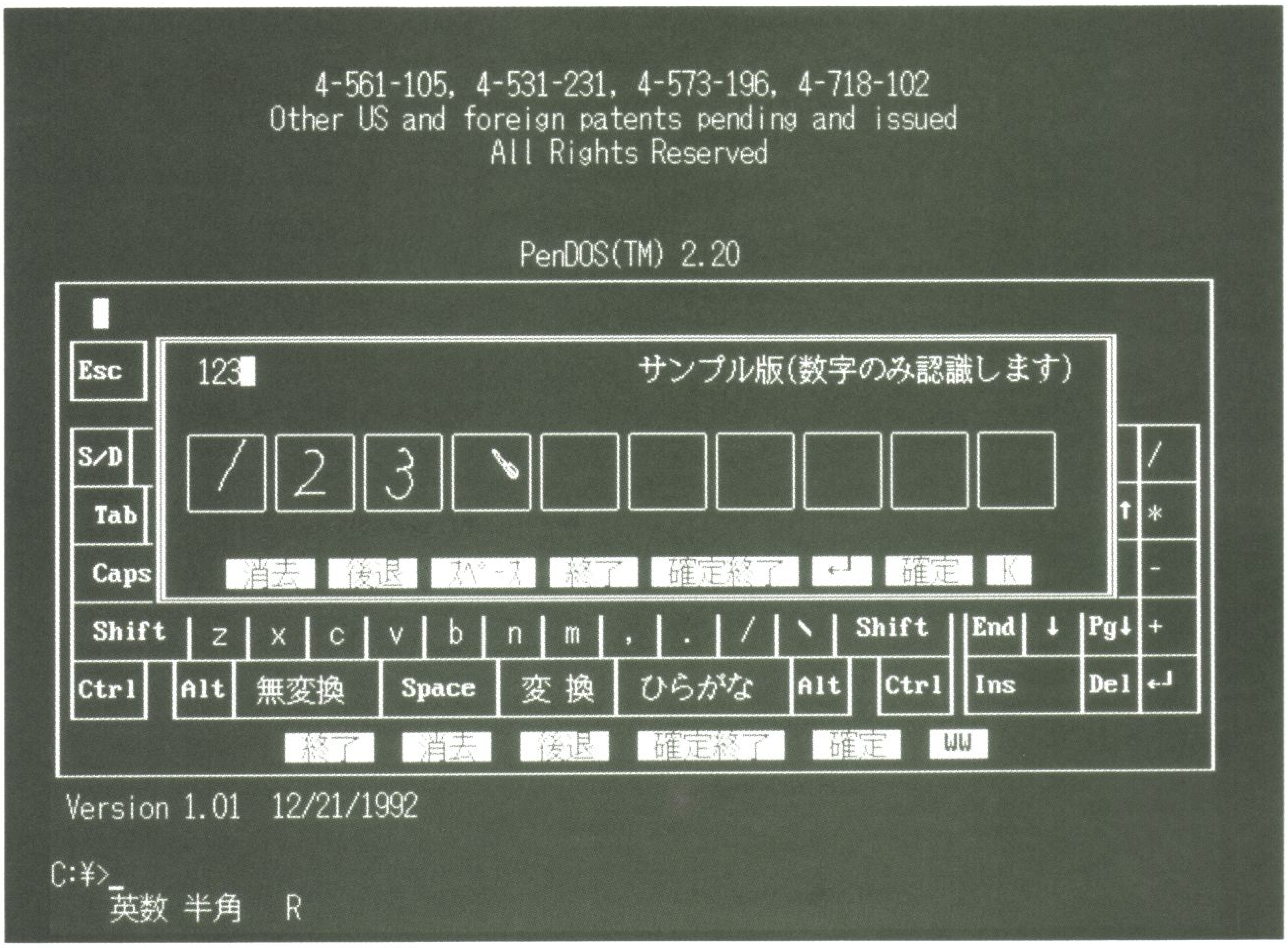
最近はノートブック、ラップトップ、パームトップなどモービル(可搬型)コンピューターのオプション・インターフェースとして、PCMCIA**カードが標準になっています。PC DOS J6.3/Vには、このPCMCIAの仕様に準拠したカードを活用するため、さまざまなプログラムが標準装備されています。

たとえば、SRAMを搭載したPCMCIAカードをディスケット（フロッピーディスク）と同じように使うためのデバイス・ドライバー、ファックスやモデムのPCMCIAカードをシステムに組み込む（利用可能にする）ドライバー、さらにはWindows**から、カードの状態を監視するユーティリティーなどもあります。また、DOSで省電力機能を働かせるPOWERコマンドも追加されました。これによって、モービル・コンピューターでの電池寿命をより長く保つことができます。

DOS J6.3/Vのインストール・プログラム(SETUP.EXE)は、導入先のコンピューターがAPM(高度な省電力機能)をサポートしていると、自動的にCONFIG.SYSファイルにPOWERコマンドの行を追加します。

NEW

ペンでDOSを操作する、PenDOS機能



PC DOS J6.3/Vでは、ペンでDOSを操作できるPenDOS**が使えます。このPenDOSは、タブレット型コンピューターやディジタイザー付きのパソコンでペンを使ってアプリケーションを操作したり、手書き文字を認識させることができます。ただしマウスをペンの代わりに使うこともできるので、その操作性を試してみることができます。

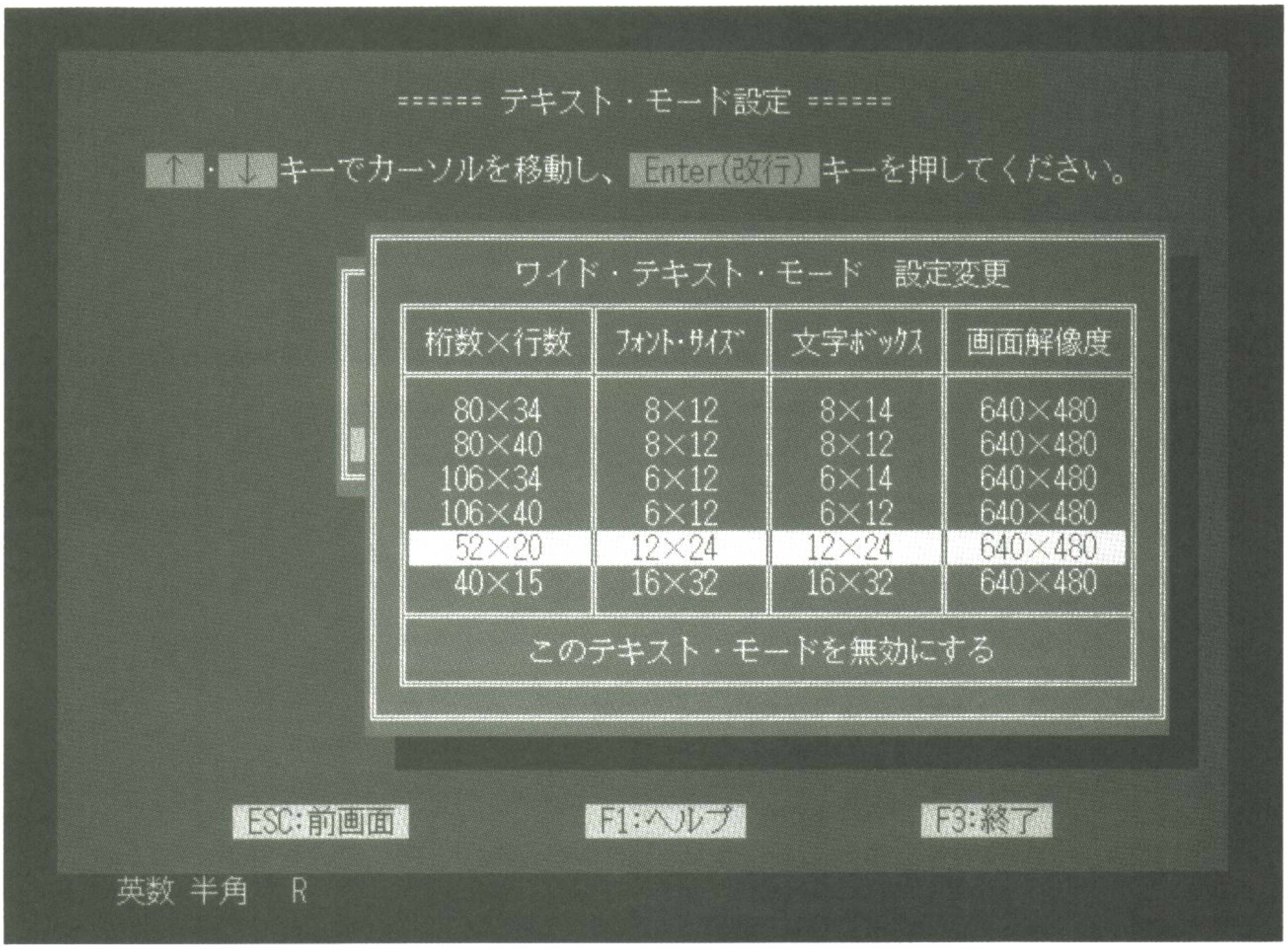
PC DOS J6.3/Vに含まれている手書き文字認識システムはいくつかの半角文字と数字のみ認識できる機能限定版です。

PenDOSには手書き文字を認識するための「ライティング・ウィンドウ」と、画面上でキーボードの代わりをする「PenDOSキーボード」があります。マウスをペンの代わりに使って、その操作性を試してみてください。

始動コマンドはPENDOSです(CONFIG.SYSファイルにデバイス・ドライバーPENDEV.SYSが指定されている必要があります)。PenDOS始動後にマウスの右ボタンを押すと、右上隅にPenDOSのコントロール・メニューが表示されます。マウス・カーソルを[K]や[W]に合わせて左ボタンを押してください。それぞれ「PenDOSキーボード」や「ライティング・ウィンドウ」が表示されます。

進化するDOS/V、その最新機能は…

DOS/V日本語機能の拡張　その1



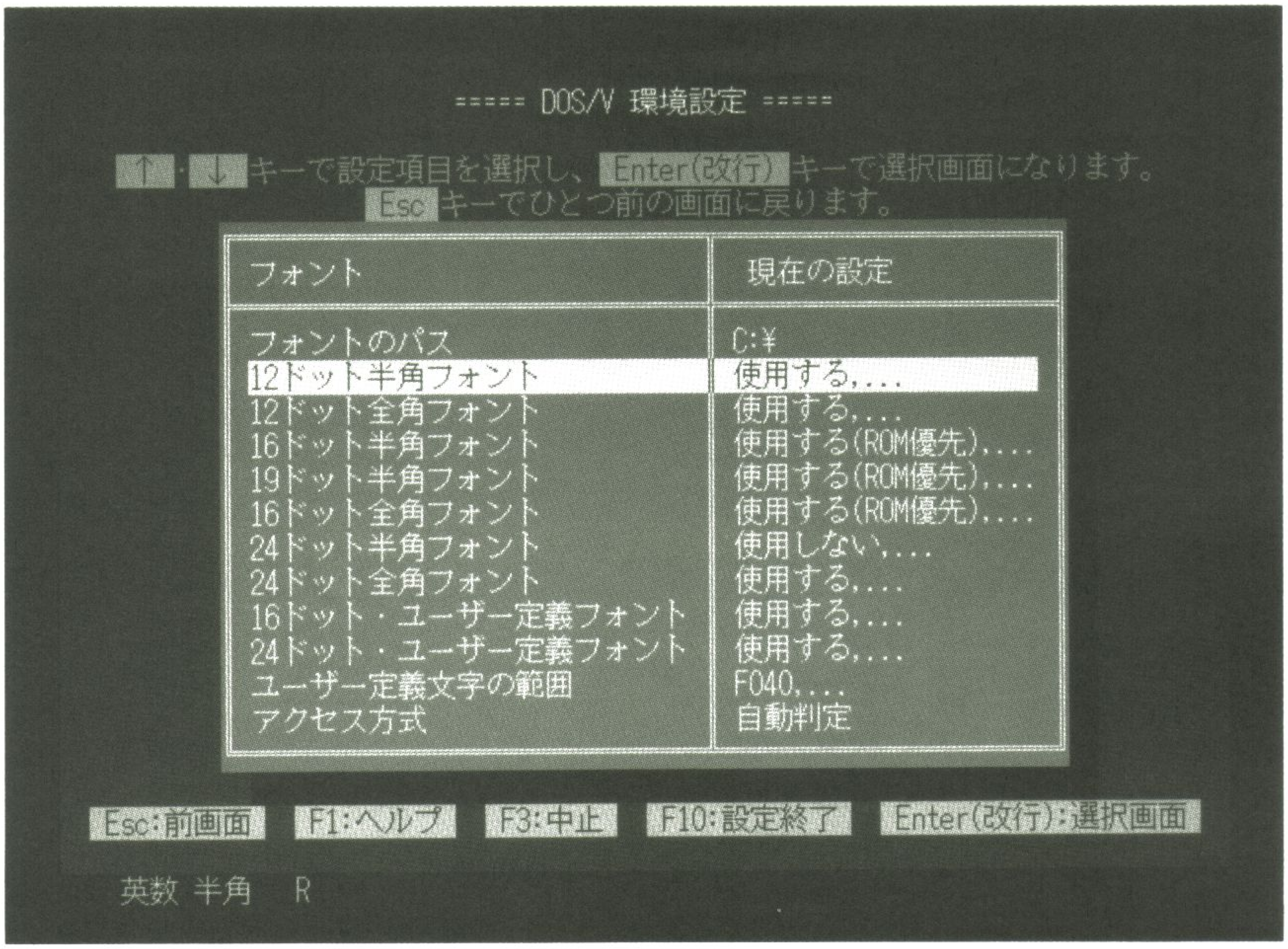
VGAで多数の文字表示、VGA版V-Textの標準装備

PC DOS J6.3/VにはVGA版のV-Textの機能が標準装備されました。これはノートブック型パソコンの多くが使用しているVGA解像度（640×480ドット）で、通常の80文字×25行（16ドット）以外のテキスト・モードで文字を表示できる機能です。最大で106文字×40行の表示ができます。始動はコマンド行からDSPXVGAコマンドを実行し、DSPXコマンドでメニューから選択します。

PC DOS J6.3/Vではさらに拡大テキスト・モード機能が追加されました。拡大テキスト・モードとはVGAで24ドットや32ドット・フォントを用いることにより、より視認性を高めるものです。表示される行数や桁数は横80文字で縦25行より少なくなりますが、超小型のパームトップ型やサブノート・ブック型PCをお使いの方、視力に障害のある方、幼児向けアプリケーションの開発などに威力を発揮します。拡大テキスト・モードはDSPX画面から選択できます。

NEW

DOS/V日本語機能の拡張　　その2



数々の改良が加えられたフォント・サブシステム

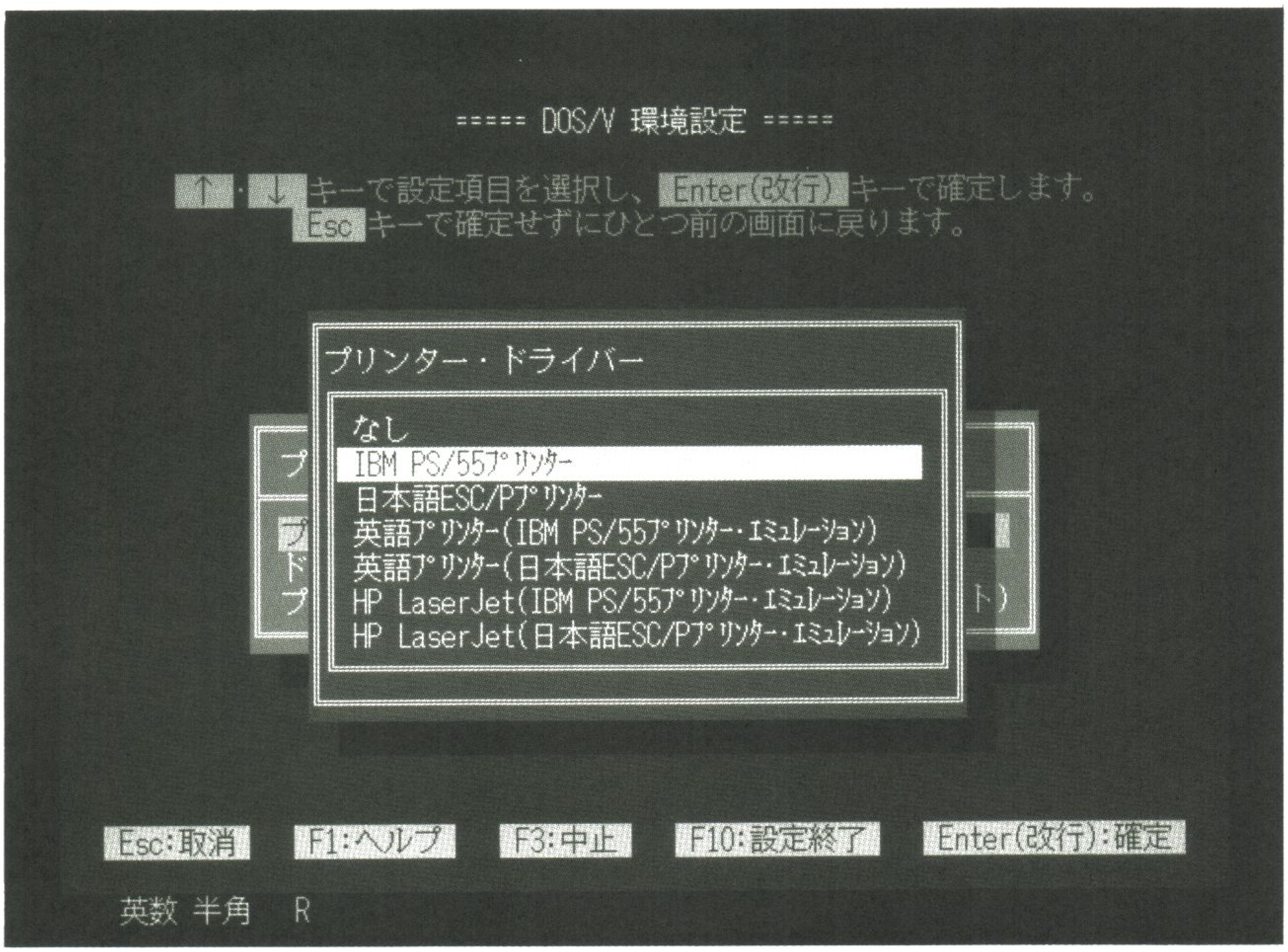
フォント・サブシステム($FONT.SYS)がXMS方式をサポートしました。これによりUMBメモリーに$FONT.SYSを読み込むことができます。また$FONT.SYSは、16MBを超えるメモリーを搭載したシステムもサポートしています。さらにVGA画面でのV-Text表示用に12ドットのフォントも新たに追加されています。

XMS方式を選択するには、SETUPVコマンドを実行し、「フォント」の「アクセス方式」から、「XMS方式」を選択します。12ドット・フォントを使用するには、「フォント」から12ドット・フォントを「使用する」に設定してください。

DOS/V環境を簡単に変更できるユーティリティー

PC DOS J6.3/Vでは、DOS/Vに関する環境設定はDOSV.INIというファイルで一元管理されます。DOSV.INIはSETUPVと呼ばれるカスタマイジング・ユーティリティーを使って設定変更を行います。ヘルプ機能もあるので、画面に従って変更できます。SETUPVコマンドでは読み込むフォントの種類、キーボードの種類、入力方法、プリンターの種類などが選択できます。

DOS/V日本語機能の拡張　　その3



AX**、J3100キーボードも標準サポートする日本語入力支援機能

入力サブシステム($IAS.SYS)が拡張され、すでに多くのユーザーをもつAXやJ3100のキーボードがサポートされました。これらのキーボードが接続されたシステムでもかな漢字変換などのキーボード入力を行うことができます。SETUPVコマンドを実行し、「キーボード」を選択してください。

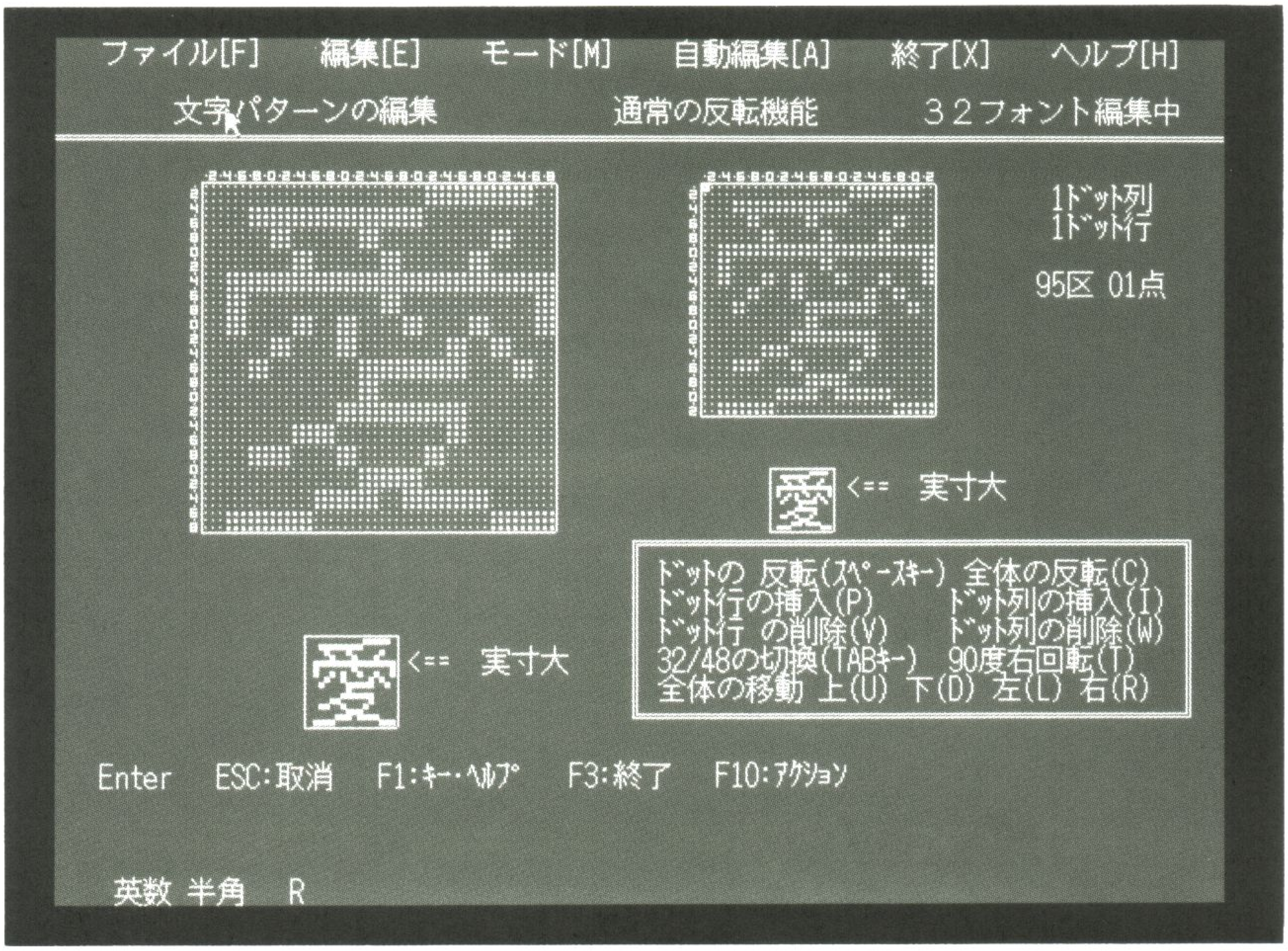
DOS/V始動後でも切り換え可能な新プリンター機能

プリンターを動作させるためのプログラム（プリンター・ドライバー）も拡張されました。従来は、組み込んだプリンター・ドライバーを始動後に切り替えられませんでした。PC DOS J6.3/Vではシステムを再始動することなく、何回でも交換が可能です(ただし、必要なフォントが読み込まれていない場合には再始動が必要です)。

SETUPVコマンドを実行し、「プリンター」を選択してください。サポートされているプリンターは上記の写真に示してあります。また各LPTポートごとにプリンターの指定ができます。

NEW

DOS/V日本語機能の拡張　　その4



32/48ドット・ユーザーフォントのサポート

ユーザーフォント・ユーティリティーが拡張され、32ドット、48ドットのプリンター用にユーザーフォント（外字）が作成できます。これで特殊な文字や会社のロゴを作って、プリンターに印字できます(ただし、IBM PS/55プリンターのみ)。またファイル単位での異なるフォント間の一括変換や、文字パターンのレーザープリンター上のメモリーへの読み込みができるようになりました。

始動コマンドはUSRFNTです。

1.2MBフォーマットのディスケットをサポート

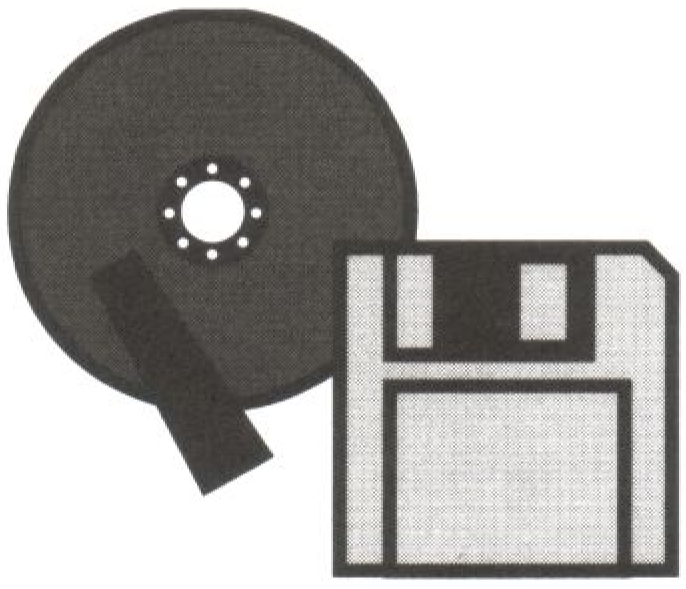
日本固有の3.5インチ、1.2MBフォーマットのディスケットを読み書きするためのデバイス・ドライバー($FDD12.SYS)が標準で提供されます。導入時に1.2MBディスケットの使用を「はい」と選択すると、このデバイス・ドライバーがCONFIG.SYSファイルに設定され、1.2MBのディスケットがAまたはBドライブとしてアクセスできます。1.2MBディスケットをフォーマットするには、専用のFORMAT12コマンドをお使いください。



第3章

DOSを理解するために

ディスク・ドライブとディスケットの使い方



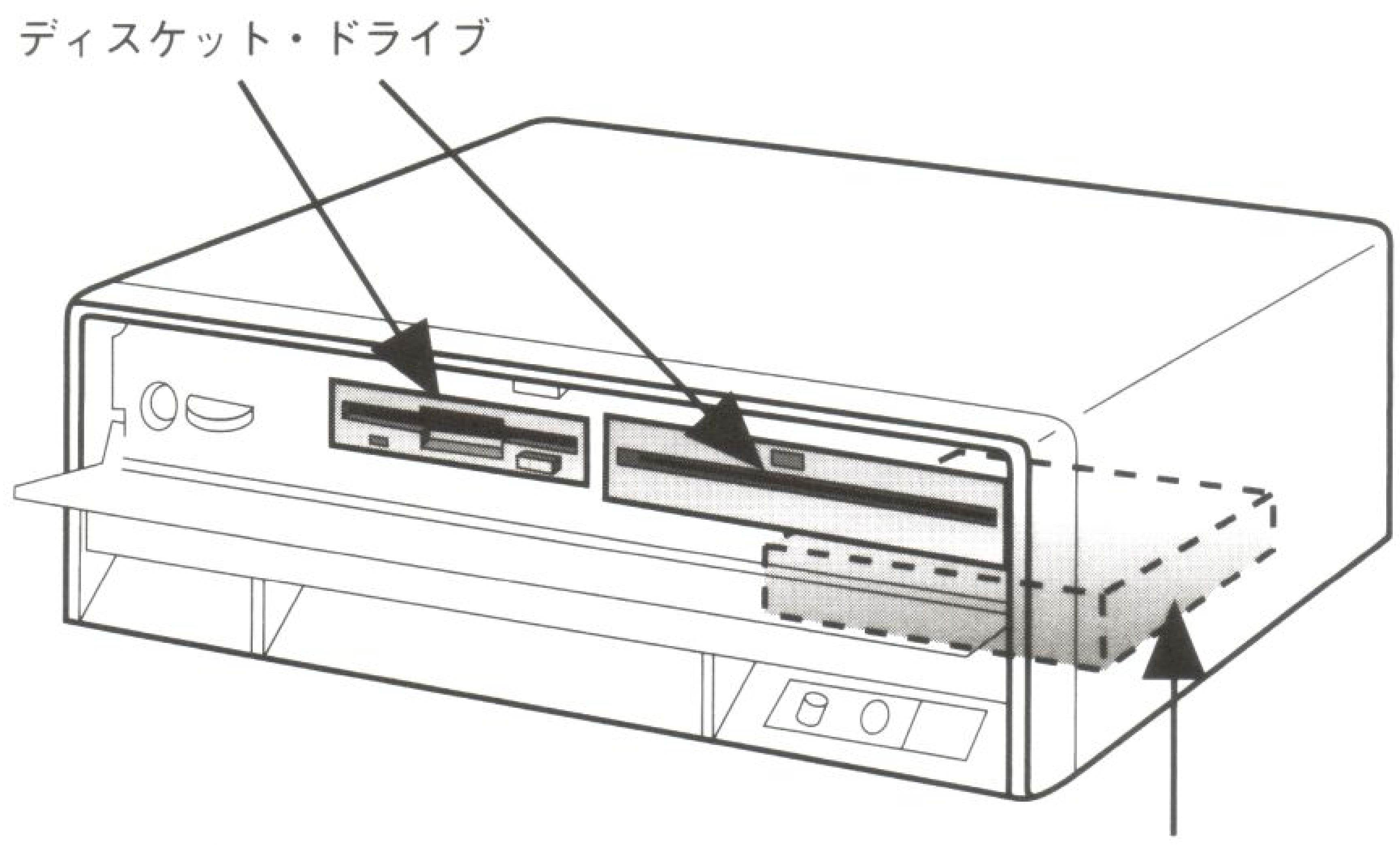
コンピューターには主記憶装置となるメモリーのほかに、補助記憶装置として使われるディスクとディスケットがあります。ここではこれらの主な機能と使い方について説明します。

ディスクとは

ディスクは、プログラムやデータをファイルという形で記録する記憶装置です。ディスクに記憶された情報はメモリーの場合とは異なり、コンピューターの電源を切っても消滅しません。ディスク上の情報は、カセットテープと同じように何度も消去したり、記録したりすることができます。このように、ディスクは正しく扱えば繰り返し何回でも使用することができます。メモリーと同じく、ディスクの容量はバイトという単位で表します。

ハードディスクとディスケットドライブ

ディスク・ドライブは、ディスクに記録された情報をメモリー上に、あるいはメモリーの情報をディスクに移動させて使用します。たとえば、コンピューターはディスクからプログラムの命令を読み取ってメモリーに転送し、処理結果を安全に保管するためにディスクに記録します。ディスク・ドライブには、「ハードディスク・ドライブ」と「ディスケット・ドライブ」の２種類があります。



ハードディスク・ドライブの特長

参考

最近はハードディスクごと取りはずしのできる機種も販売されています。

ハードディスク・ドライブの中には、取り外しのできないディスクが入っています。ハードディスク・ドライブを使用すれば、大量の情報を一箇所に保管することができ、大変便利です。ハードディスク・ドライブはディスケット・ドライブよりもずっと速くシステムに情報を転送したり、システムから情報を読み取ったりすることができます。

通常、ハードディスク・ドライブはCという文字が割り当てられ、ドライブCと呼ばれます。

ディスケット・ドライブの特長

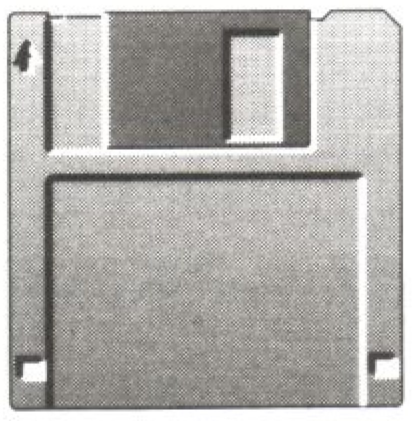
ディスケット・ドライブにはディスケットを入れて使用します。ディスケットはハードディスクに較べて記憶容量は小さくなりますが、気軽に持ち運びができるという利点があります。システムがディスケットに情報を記録したり、ディスケットから情報を読み取ったりしている間、ドライブのランプが点灯します。

各ディスケット・ドライブには、命令や情報の所在をシステムに伝えられるよう、それぞれのドライブに文字が1つ割り当てられます。たとえば、通常はディスケット・ドライブにはAという文字が割り当てられ、ドライブAと呼ばれます。2台目のディスケット・ドライブはBとなります。

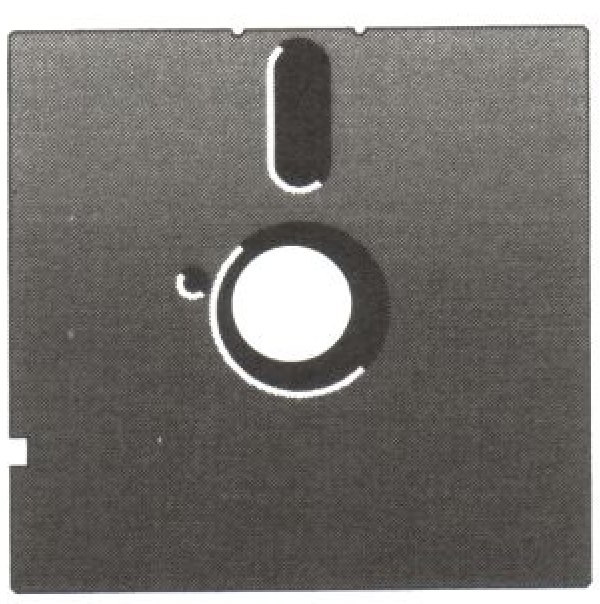
参考

ディスケットはIBMの商品名です。一般的にはフロッピー・ディスク、もしくはフロッピーと呼ばれています。

ディスケットには、5.25インチや3.5インチなどのサイズがあり、同じサイズでもいろいろな密度、容量があります。密度、容量は各ディスケットに表記されています。



3.5インチ



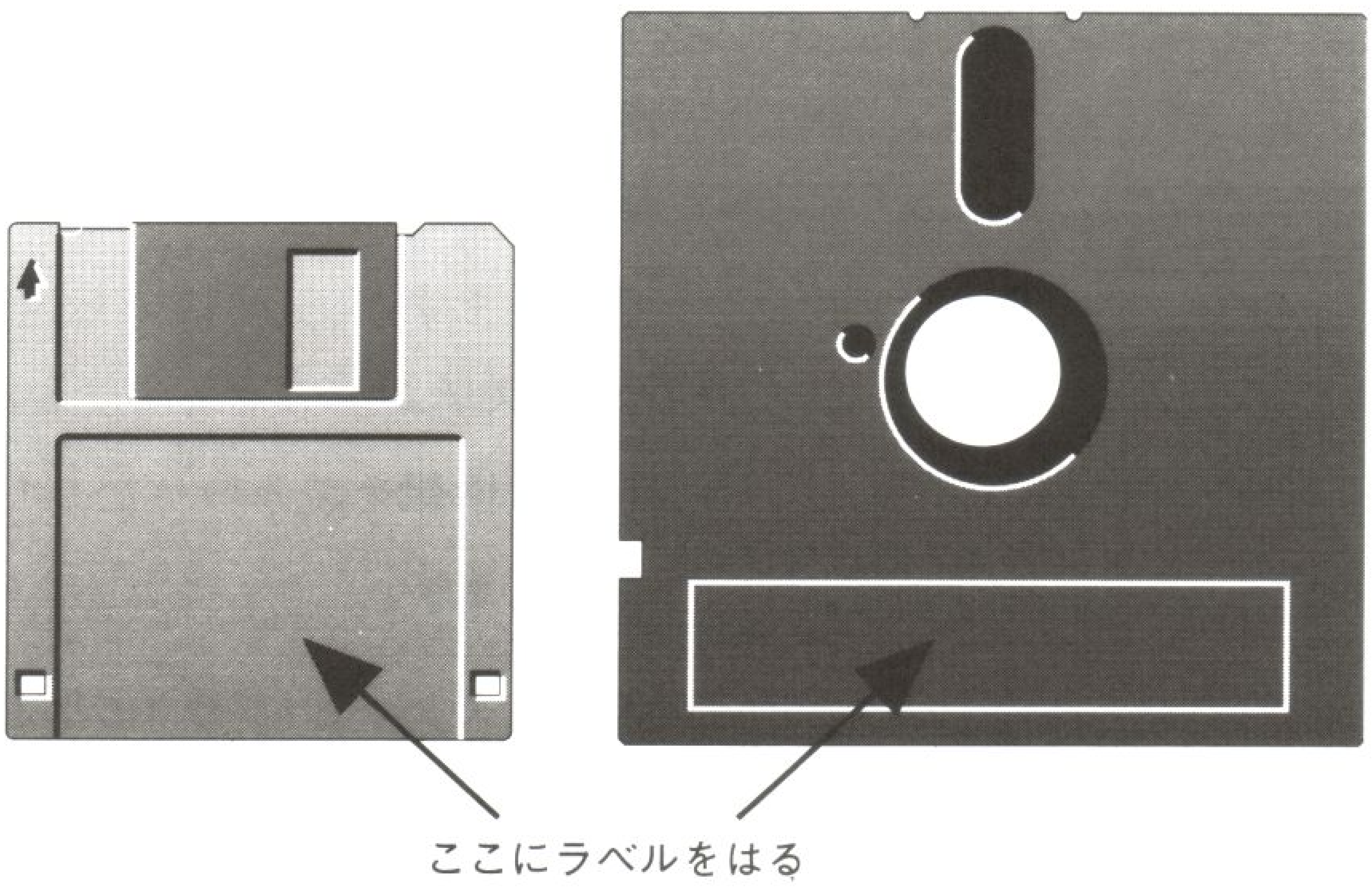
5.25インチ

ディスケットのラベルと取り扱い方法

ディスケット・ラベルの使い方

ディスケットは、ほこりや湿気がある所や、テレビ、スピーカー、ディスプレイなどの磁界が強い所、高温、低温の所を避けて安全に保管してください。それぞれのディスケットには必ずラベルを貼って、ディスケットの内容が一目でわかるようにしておいてください。

5.25インチのディスケットを使用する場合は、ラベルを貼るまえに内容を記入したあと、ディスケットに貼ってください。ラベルを貼ったあとで鉛筆やボールペンを使うとディスケットを傷つけることがあります。



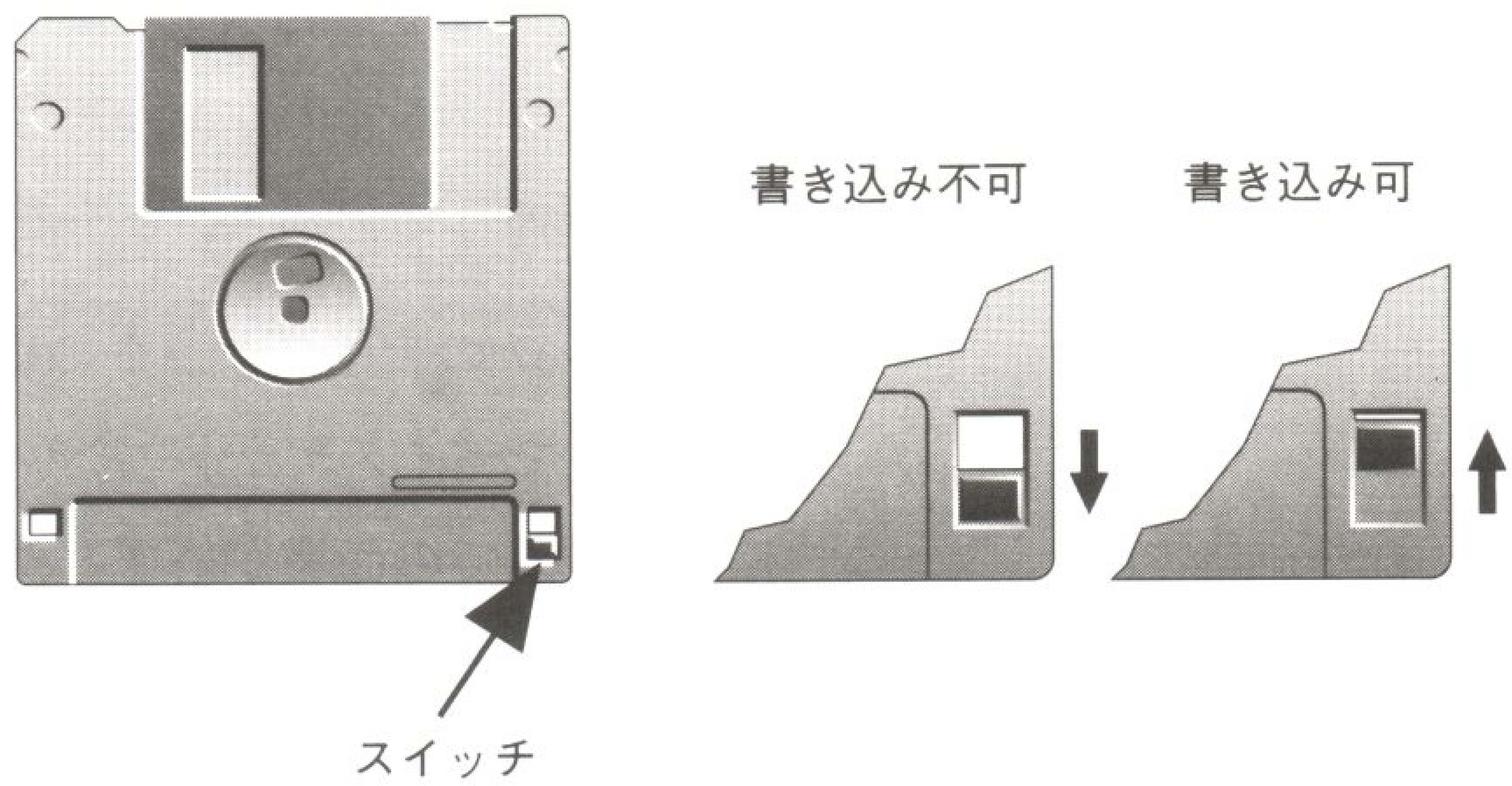
ディスケットの情報の保護

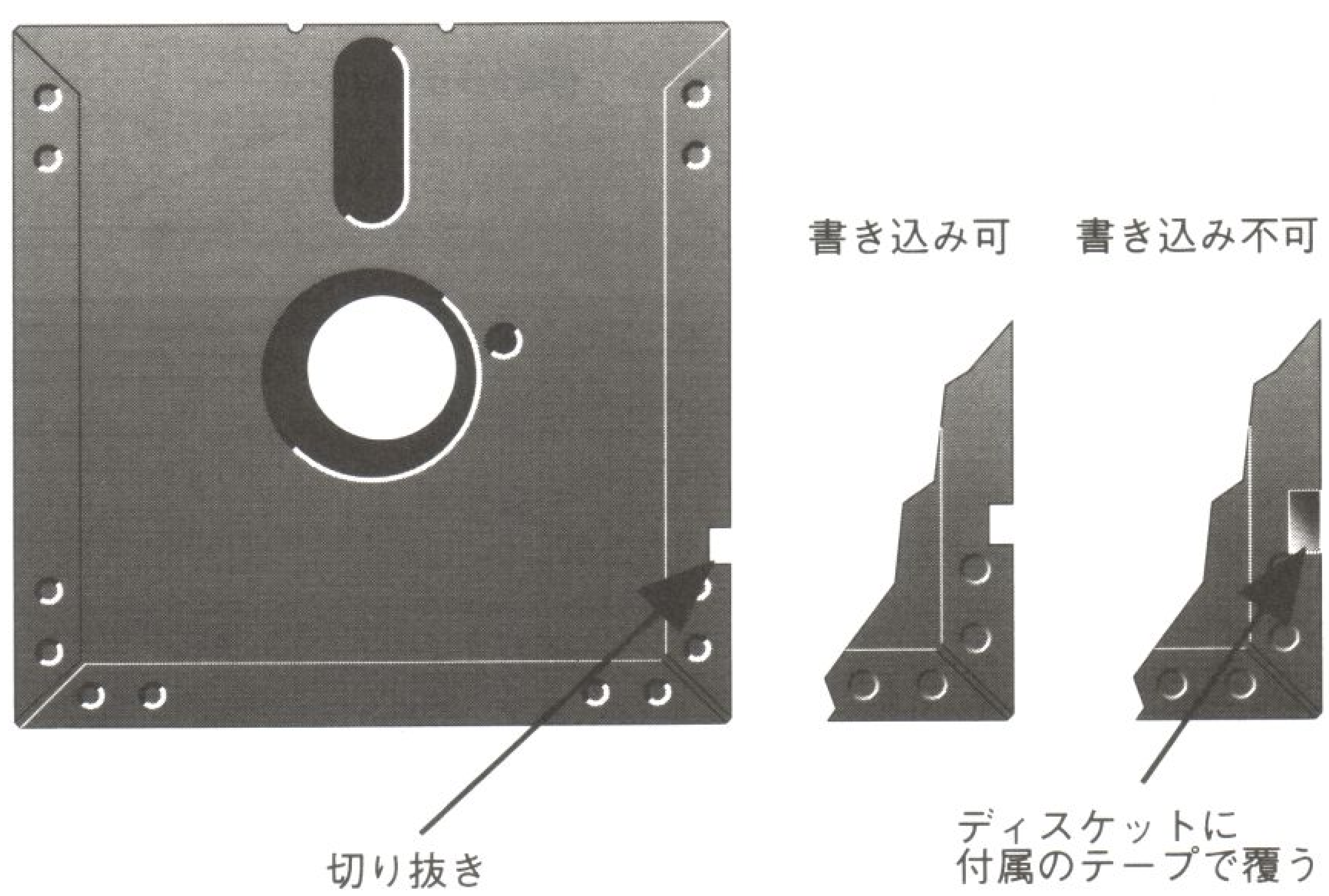
5.25インチのディスケットには情報を保護するための書き込み禁止ノッチがあります。書込禁止タブと呼ばれるテープを書込禁止ノッチに貼り付けることによって、ディスケットに記録された情報は変更できなくなります。3.5インチのディスケットは書き込み禁止スイッチを『書込禁止』の側にスライドさせます。

書き込み禁止ノッチ

書き込みが禁止されたディスケットに情報を記録するには、5.25インチ・ディスケットの場合は書込禁止タブを取り外し、3.5インチ・ディスケットの場合は『書き込み可能』な側にスライドします。そのディスケットでの作業が終わったら、書き込み禁止ノッチを元に戻しておくことをお勧めします。

ソフトウェアのオリジナル・ディスケットのように、ディスケットに書き込み禁止ノッチがない場合は、そのディスケットには情報を書き込むことはできません。

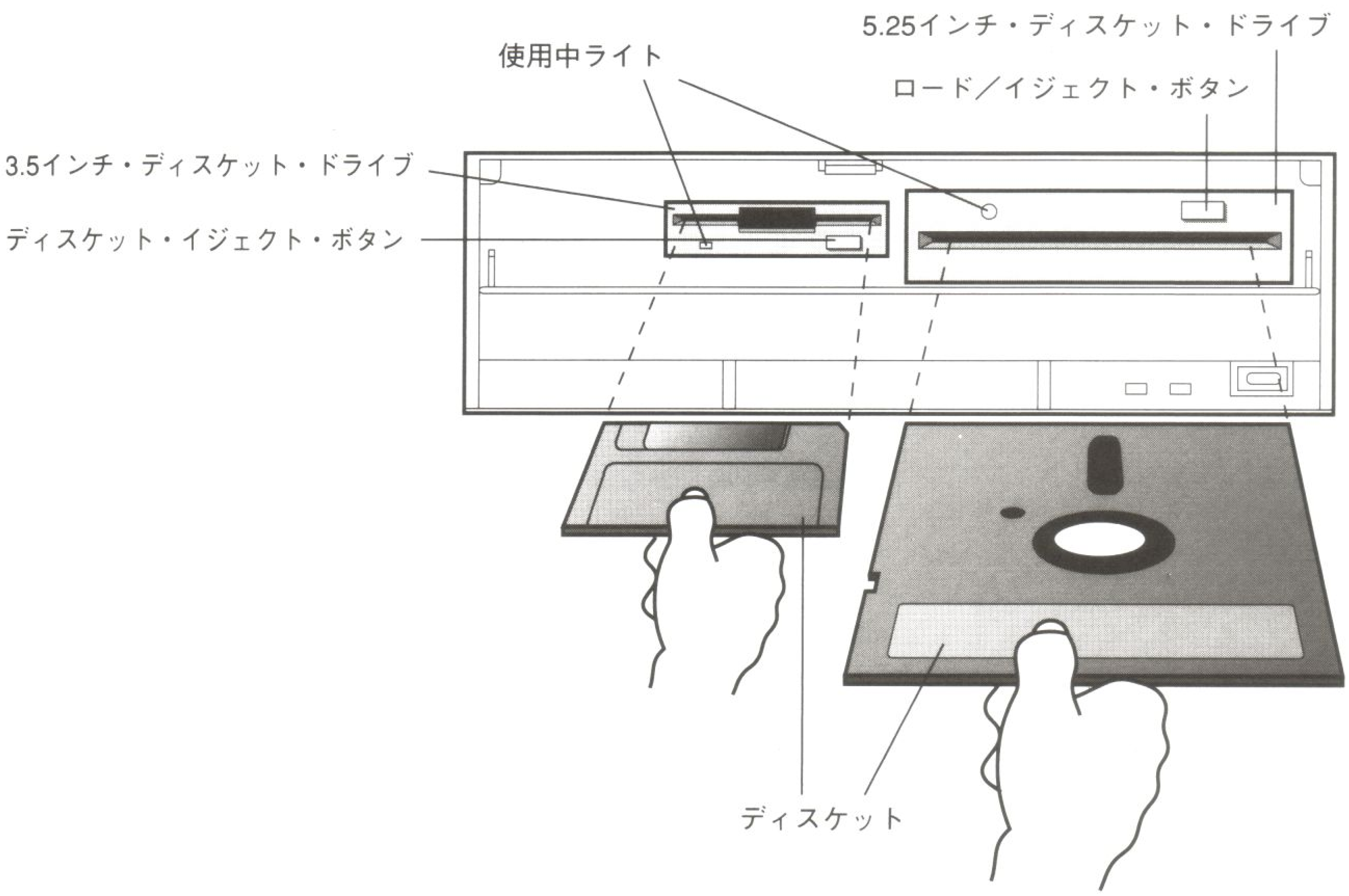




ディスケットの挿入と取り出し方

次の図は、5.25インチと3.5インチのディスケットをディスケット･ドライブに挿入する方法を示したものです。通常、5.25インチのディスケット･ドライブにはボタンが付いていて、ディスケットを挿入したあと、そのボタンを押します。そのディスケットでの作業が終了したら、そのドライブのボタンを再び押してディスケットを取り出します。

3.5インチのディスケットの場合は、カチャッという音が聞こえるまでディスケット･ドライブの中に挿入します。そのディスケットでの作業が終了したら、ドライブの前面にあるボタンを押すとディスケットが飛び出すので、簡単に取り出すことができます。



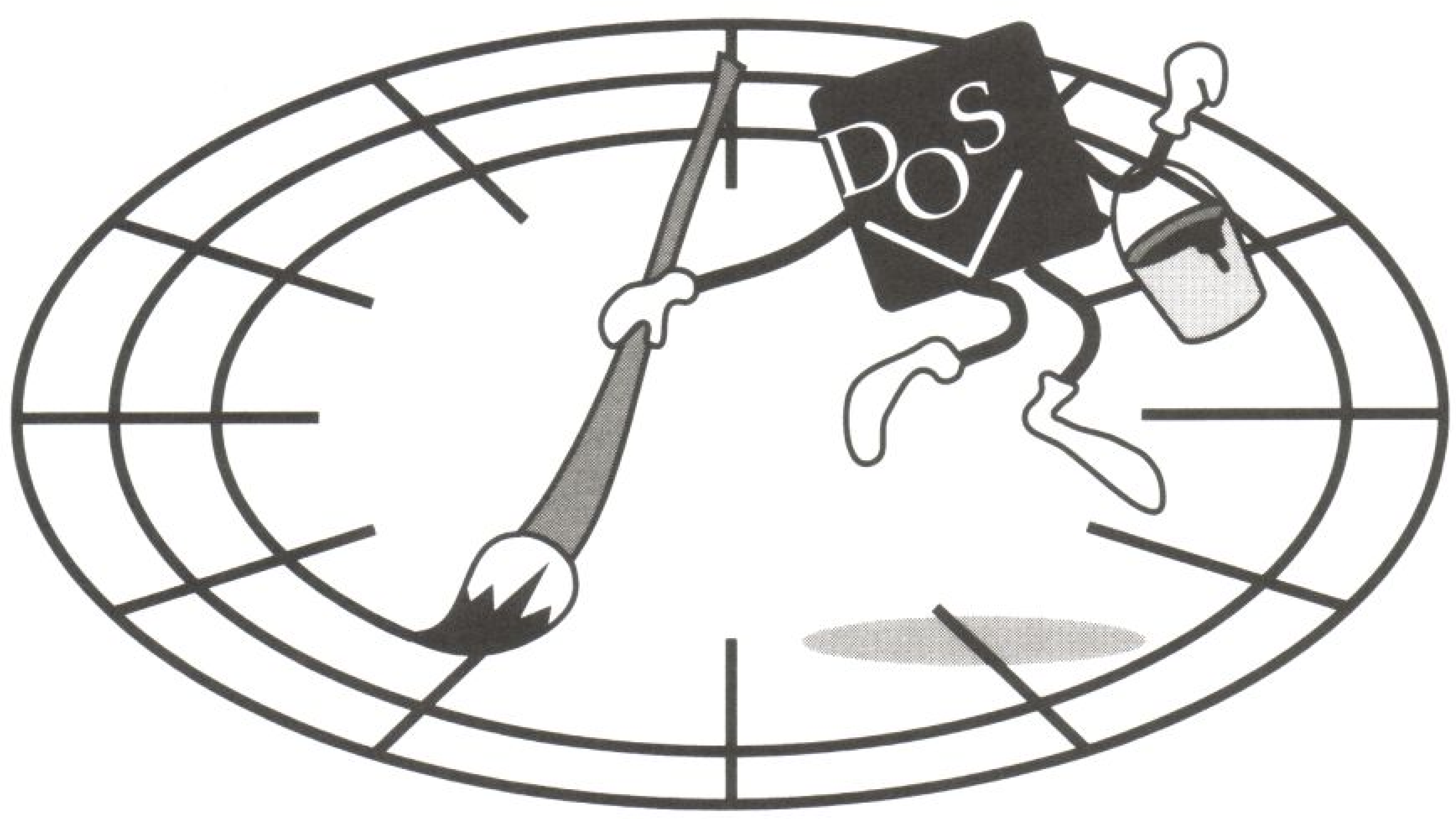
ディスクに情報を記録するための準備

一度も使用したことのない新しいディスク(ハードディスクまたはディスケット)を使用する場合、そこに情報を記録できるようにするための準備をしなければなりません。つまり、プ

ログラムを実行して、ディスクをフォーマット(初期化)し、DOSがディスク上に記録された情報を探して取り出すことができるようにします。ディスクをフォーマットする際には、初期化と同時にディスクの欠陥に対するチェックと回避も行われます。

ディスクのフォーマットの注意

ディスクをフォーマットするときは注意が必要です。ディスクをフォーマットすることは初期化することですから、すでにディスク上に記録されている情報は、すべて消去されてしまいます。DOSでディスクをフォーマットするにはFORMATコマンドを使います。詳しくは5章のFORMATコマンドを参照してください。



ディスクの仕組みについて

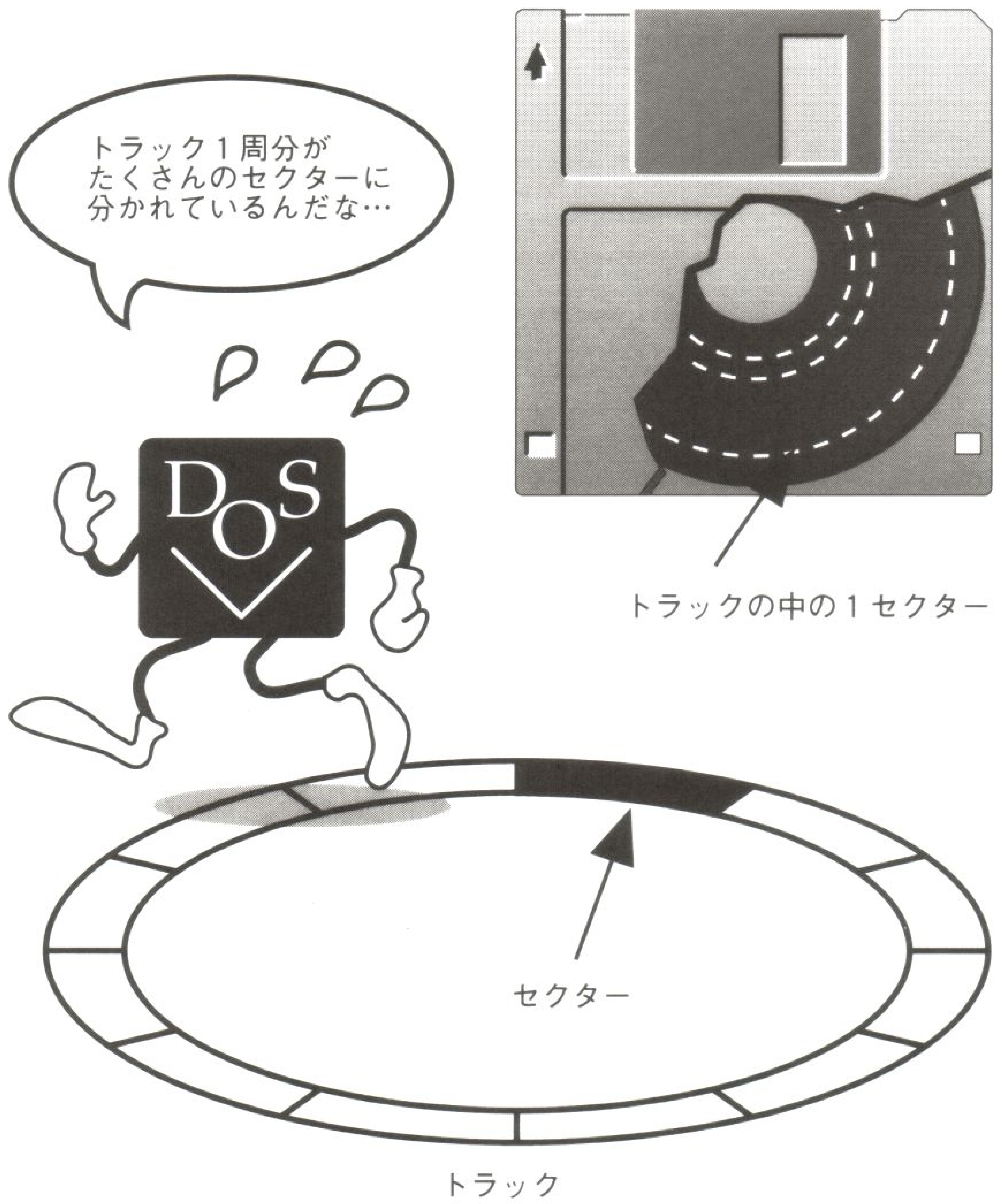
ディスク空間(ディケットやハードディスク)はトラックとセクターという単位に分かれています。これらの管理は複雑ですが、DOSが自動的に行いますから心配はいりません。ただ、ディスク空間についてシステムが出すメッセージを正しく理解するために、概念だけは知っておいてください。

ディスク上で情報を記憶したり検索したりする方法は、レコード・プレーヤーでレコードをかけている場合と似ています。情報はトラックと呼ばれる同心円に沿ってディスク上に記憶されています。ディスク・ドライブの読み取りと書き込みヘッドはレコード・プレーヤーの針に似ていて、ディスクが回

ディスクの仕組みについて

転するたびに1つのトラックから別のトラックへ移動します。DOSはヘッドを移動することによって、ディスク上の情報を記憶したり検索したりすることができます。

1トラックは、セクターという単位に分かれています。セクターはDOSが情報を読み書きする単位です。



ディスクの表面は磁性体で、ここに情報が記録されます。ディスケットの場合、非常に薄い円盤状の磁性体が、保護用のプラスチック・カバーに収納されています。ハードディスクの場合は、密封されたケースに硬い円盤が複数枚重ねて収められています。ハードディスクは、システム本体に組み込まれることから、「固定ディスク」とも呼ばれます。

ディスクの種類

ディスク上の情報は、レコードの溝のように、いくつかのトラックに分割されています。各トラックは同心円状に並んでいて、一定の大きさの情報を記録できます。ハードディスクは、ディスケットよりも面数が多く、各面ごとのトラック数も多いため、より多くの情報を記録することができます。

ディスケットには、物理的なサイズや記録できる情報量によって、いくつかのタイプがあります。DOSで扱うことができる一般的なディスケットと、それらに記録できる情報量の一覧を次に示します。

ディスケットの容量

ディスケットのタイプ	容量
5.25インチ、片面／倍密	160KB
5.25インチ、片面／倍密	180KB
5.25インチ、両面／倍密	320KB
5.25インチ、両面／倍密	360KB
5.25インチ、両面／4倍密	1200KB (1.2MB)
3.5インチ、両面／倍密	720KB
3.5インチ、両面／4倍密	1440KB (1.44MB)
3.5インチ、両面／高密	2880KB (2.88MB)

参考

バイト、キロバイト、メガ・バイト

ファイルのサイズはバイト単位で表されます。1バイトの領域には1文字の半角文字を記録することができます。1キロバイトは1024バイトです。本書では、キロバイトをKBで表しています。

通常、ディスケットには、タイプを表すラベルが付けられています。また、DIRコマンドやCHKDSKコマンドを使って、フォーマットされたディスクの記憶容量を確かめることもできます。これらのコマンドについては、5章を参照してください。

1メガ・バイトは1024KB(約100万バイト)です。本書では、メガ・バイトをMBで表しています。たとえば、約120万バイトの情報を記録できるディスケットがあれば、「このディスケットは1.2MBの容量がある」ということができます。これらの単位には、次のような関係があります。

1.2MB = 1228.8KB = 1,258,291バイト

ディスケット・ドライブの種類

すべてのディスケット・ドライブが、すべてのディスケットに対応しているわけではありません。一般に、ディスケットを特定のドライブで読み書きするときは、ディスケットはそのドライブの容量で、またはそれ以下の容量でフォーマットされていなければなりません。たとえば、1.2MBのディスケットに対応する5.25インチ4倍密ディスク・ドライブがあれば、360KBでフォーマットされたディスケットを読み書きすることができます。反対に、360KBドライブでは、1.2MBディスケットは通常扱うことができません。

特定のドライブにディスケットが対応しているかどうか不明な場合は、ディスケット・ドライブにそのディスケットを挿入して、DIRコマンドを実行してみてください。ドライブがそのディスケットに対応していない場合は、「一般エラーです」というメッセージが表示されます。

用語解説

スイッチ
スイッチはスラッシュ(/)の後に1つ以上の文字あるいは数値を付けたもので、コマンドの用途を変更するために使います。

DOSは、利用しているディスケット・ドライブに合わせて処理を行いますが、いくつかのコマンドでは、ドライブとディスケットの容量が一致しない場合に、スイッチを指定する必要があります。

ソフトウェアを使う

ビデオ・デッキを買ってもビデオ・テープがなければ役に立たないように、コンピューターもハードウェアだけでは動きません。コンピューターを使うには、必ずソフトウェアが必要です。

ソフトウェアとは

「ソフトウェア」とはコンピューター上で働くプログラムやプログラムの実行を制御する手順、またオンライン・ヘルプ情報などの集まりです。プログラムはユーザーがキーボードやマウスを使ってコンピューターに伝えた情報を翻訳し、コンピューターに仕事を実行させる符号化された一連の命令です。

用語解説

オンライン情報
コンピュータ・システム内に記憶されていて、印刷物を入手しなくても表示、使用できる情報。

ソフトウェアというとまず頭に浮かぶのが、ワード・プロセッサー、表計算プログラム、通信プログラム、そしてゲームなどでしょう。これら特定の目的(たとえば表計算)に使うソフト

ウェアのことをアプリケーション・ソフトウェア(略してアプリケーション)といいます。

オペレーティング・システムとは

これに対して、ハードウェアとアプリケーションの仲介役を務めるのが、オペレーティング・システムです。これもソフトウェアの一種ですが、アプリケーションとはその役割が異なります。つまり、オペレーティング・システムはコンピューターを制御したり、ソフトウェアとデータの流れ、入出力、表示を管理します。アプリケーションを実行するには、まずオペレーティング・システムが必要です。

DOSに慣れる

DOSは、オペレーティング・システムとしてコンピューター・システムの各部を行き来する情報の流れを管理します。ユーザーはコマンドを入力したり、選択することによってDOSを使います。DOSには、以下の仕事を実行するためのコマンドが用意されています。

- ファイルとディレクトリーの管理
- ディスクの保守
- ハードウェアの割り当て
- メモリー利用の最適化
- プログラムの実行速度の向上
- DOSのカスタマイズ

DOSの機能を使うには、2つの方法があります。一つはコマンド行にコマンドを直接入力する方法で、もう一つはDOSシェルを使用する方法です。

参考

DOSシェルについては4章にに詳しい解説があります。

DOSのコマンド行を使う

DOSのコマンド行はユーザーがコマンドを入力する行で、「コマンド・プロンプト」でその位置が示されます。コマンド・プロンプトは通常1つのドライブ文字の後に¥記号が続いたもの、または¥記号とディレクトリーの名前が続いたもので、画面上で次のように表されます。

```
A:¥>
C:¥>
C:¥DOS>
```

コマンド・プロンプトのドライブ文字は、現在操作対象としているドライブ(現行ドライブ)名を示しています。DOSは入力されたコマンドを処理するために必要な情報を、通常現行ドライブの中から探します。

ファイルの削除

DOSに処理を実行するよう命令するには、コマンド行にコマンドを入力して、Enter(改行)を押します。たとえば、ファイルを削除するコマンドの場合は、

```
C:¥>del file1.txt
```

のように入力します。

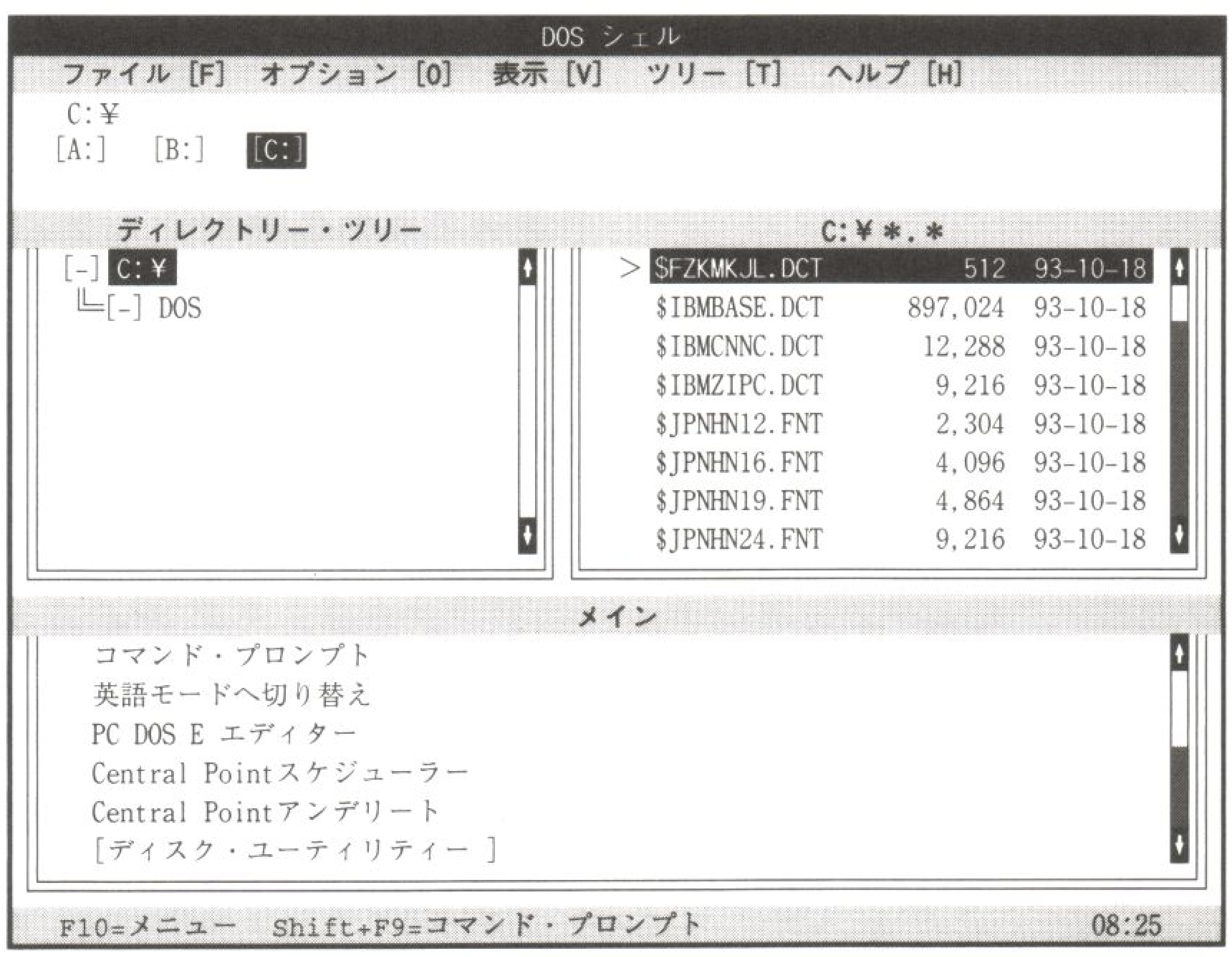
コマンド行とコマンドについて詳しくは、5章を参照してください。

DOSシェルを使う

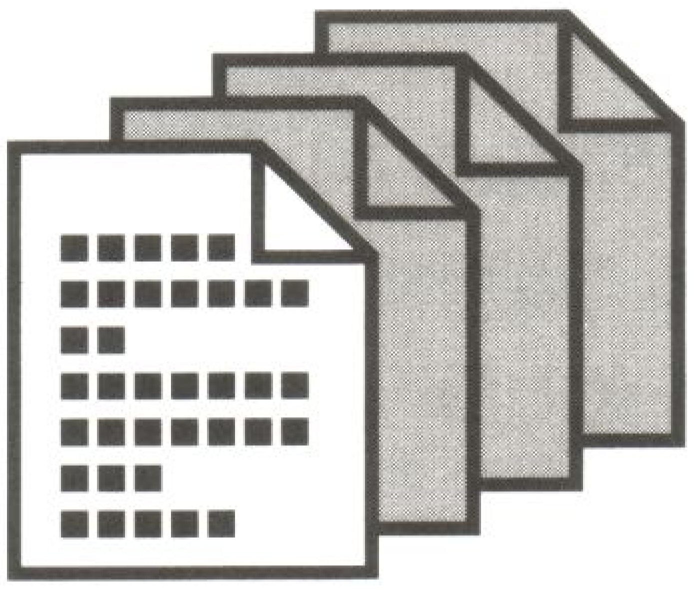
コマンド行からコマンドを入力する方法以外に、DOSシェルを使ってDOSコマンドを実行させることができます。DOSシェルを使えば、いちいちコマンドを覚えている必要がありません。

DOSシェルを始動すると、システムで使用可能なドライブや、ディレクトリーやファイルの一覧が見やすい形で画面に表示されます。実行したい機能は、コマンドを入力するかわりに画面の上段にある「メニュー」から項目を選択します。たとえば、COPYコマンドを入力する代わりに、メニューから『複写』を選択する、という具合です。ただし、DOSシェルでは、DOSのすべてのコマンドが実行できるわけではありません。コマンドによっては、コマンド・プロンプトから直接入力しなければならないものもあります。

DOSシェルの使い方については、4章を参照してください。



ファイルの使い方



ここでは、コンピューターの中でプログラムやデータを扱う最も基本的な単位、「ファイル」について詳しく説明します。

コンピューターは、情報をファイル単位で管理します。システムを始動すると、DOS自身もファイルとしてメモリーに読み込まれ、保管されます。ファイルにはいろいろなタイプがあります。それぞれのファイルは、独自の名前や位置(保管場所)、属性(特徴)を持っています。

ファイル名

すべてのファイルには「ファイル名」が付いています。ファイル名は通常、次のように2つの部分から構成されています。

myfile.ext

ファイルの名前　エクステンション

「ファイルの名前」と「エクステンション」の間は、ピリオド(.)で区切ります。

ファイルの名前

ファイルの名前をつける際には、次のような規則があります。

ファイル名の付け方の規則

- ピリオドの前は最大8バイトの長さです。(半角の英数字なら8文字、漢字やひらがななどの全角文字だけなら4文字が最大。README.TXT、企画案件.DOCなど)
- 半角の記号のうち、以下のものは使えません。
  ”／¥[]:＊<>|+=;、?
- 半角スペースは使えません。
- 次にあげる文字列はファイル名で使えません。
  CLOCK$, CON, AUX, COMn (nが1から4のもの)、LPTn (nが1から3のもの)、NUL, PRN

エクスタンション

ファイルを作成するとき、ファイルを識別するのに役立つエクステンションを付けることができます(付けなくてもかまいません)。エクステンションは3文字以下の文字で付けます。使える文字は、ファイルの名前の場合と同じです。

DOSでは、次のエクステンションは特別な意味を持っています。

EXE、COM	プログラム・ファイル(SETUP.EXE、FORMAT.COMなど)
SYS	マウスや拡張メモリーなどハードウェアに関する情報を含むファイル(デバイス・ドライバー: $PRN.SYS、ANSI.SYSなど)
BAT	DOSが実行するコマンドのリストを記述したファイル(バッチ・プログラム・ファイル: AUTOEXEC.BATなど)

ファイルを生成するほとんどのプログラムは、エクステンションをつけてデータ・ファイルを生成します。プログラムでデータ・ファイルのエクステンションが決められている場合は、指定されたエクステンションを使用することをお勧めします。

用語解説

ファイル
コンピュータの内部では、プログラムやデータなどの個々のまとまりを「ファイル」という単位で呼びます。たとえばワード・プロセッサーで作成した文書は、数十ページにわたっていても、一つのファイルとして扱われます。

ファイルのタイプ

一口にファイルといっても、さまざまな種類のものがあります。ここでは、それぞれの種類のファイルがどのような目的で使われるのかを見てみましょう。

プログラム・ファイル

プログラム・ファイルには、コンピューターが解釈し実行するプログラムが入っています。プログラム・ファイルは、通常EXEまたはCOMというエクステンションになっています。たとえば、DOSエディターは、E.EXEと呼ばれるファイルに保管されています。

データ・ファイル

あるプログラムが、そのプログラムだけにしか使用できないコードを含むファイルを生成することがあります。たとえば、ある表計算ソフトを使って作成したデータ・ファイルは、そのプログラムだけが読める書式で保管されています。

プログラムは、作成するファイルに特定のエクステンションをつけることがあります。



書式なしのテキスト・ファイル

書式のないテキスト・ファイルは、テキスト（文字情報）だけを含んでいます。DOSを含むコンピューター・プログラムのほとんどは、テキストを表記するためシフトJISコードやASCIIコードと呼ばれる体系を使います。このタイプのファイルは、多く

の場合、TXTというエクステンションが付いています。テキスト・ファイルはTYPEコマンドで中の文字を見ることができます。

システム・ファイル

システム・ファイルには、システムを管理、操作するための情報が入っていて、デバイス・ドライバーとも呼ばれます。これらのファイルのエクステンションは、通常SYSです。

バッチ・プログラム・ファイル

バッチ・プログラムとは、一連のDOSのコマンドを含んだ書式なしのテキスト・ファイルです。たとえば、あるプログラムを始動するために、いくつものコマンドを入力しなければならない場合、あらかじめそれらのコマンドを記述したバッチ・プログラムを作っておきます。このバッチ・プログラムを実行すると、中に記述された一連のコマンドが実行されます。

バッチ・プログラムは常にエクステンションがBATです。

ファイルのサイズ、日付、および時刻

DOSはそれぞれのファイルについて、そのサイズ、およびそれが作成あるいは修正された日付と時刻を記録しています。これらの情報を確認するには、DIRコマンドを使います。たとえば、DIRコマンドに対する応答として、DOSは次のようなファイルの一覧情報を表示します。

```
 ドライブ A: のボリューム・ラベルは STARTUP     です
 ボリューム・シリアル番号は 1E51-12FB です
 ディレクトリーは   A:¥

BACKUP   COM     36,880  93-10-30  12:00
DISKCOPY COM     10,396  93-10-30  12:00
FORMAT   COM     22,876  93-10-30  12:00
KEYB     COM     14,727  93-10-30   1:40
        4 個            84879  バイトのファイルがあります
                       112384  バイトが使用可能です
```

ファイルの作成日時

ファイルの名前とエクステンションの次に、ファイルのサイズがバイト単位で表示されます。1バイトは、1つの半角英数

ファイルのサイズ、日付、
および時刻

字を保管するために使用される大きさです。ファイル・サイズは、どのくらいのディスク容量がそのファイルによって占有されるかを示します。

ファイル・サイズの右側には、そのファイルが作成された、または最後に変更された日付と時刻が表示されます。日付と時刻はファイルの内容が変更されたときに限り更新されます。日付と時刻はファイルを複写したり、ファイル名を変更しても更新されません。

参考

DOS J6.3/Vからはサイズの表示時に、3行ごとにカンマ(,)が表示され、より見やすくなりました。

ファイルのサイズや、日付と時刻の情報はファイルを比較するのに役立ちます。たとえば、異なるファイル名の２つのファイルが、同じ内容かどうかを知りたい場合があります。この２つのファイルが同じかどうか決定する１つの方法は、それらのサイズ、日付、および時刻を調べることです。２つのファイルのサイズと日付および時刻が同じであれば、それらの内容が同じ可能性があります。２つのファイルが同じであることを確認するには、FCまたはCOMPコマンドを使用してください。

ファイルをバックアップしている場合は、別のディスクまたはディレクトリーに同じファイル名のファイルが複数存在することがあります。ファイルの日付を比べることによってどのファイルが最も新しいか確認することができます。

ワイルド・カードの使い方

ファイルを指定するときに、半角文字のアスタリスク(＊)または疑問符(？)を使うと、複数のファイルを一度に扱うことができます。これらの文字をワイルドカード(グローバル・ファイル文字)といいます。

参考

ワイルドカードはもともとはトランプのジョーカーなどのオールマイティのカードの意味で、転じて何にでも使える文字のことを意味します。

ワイルドカードには以下の２種類があります。

＊　語全体あるいは一連の文字の代わりとなります。

？　１つの文字の代わりとなります。

複数のファイルを指定するワイルドカードの使用

アスタリスク(＊)

ドライブAのディスケットに、いろいろなDOSのコマンド・ファイルが入っているとします。エクステンションCOMのすべてのファイルを確認するため、次のようにDIRコマンドを使用します。(/Wスイッチを付けると、ファイル名だけが表示されます)。

```
C:¥>dir a:＊.com /w
```

これによって、エクステンションCOMのプログラム・ファイルだけが表示されます。

```
ドライブ A: のボリューム・ラベルは STARTUP      です
ボリューム・シリアル番号は 1E51-12FB です
ディレクトリーは    A:¥

   COMMAND.COM  DISKCOPY.COM FORMAT.COM   KEYB.COM   MODE.COM
   SYS.COM

            6  個            197,439  バイトのファイルがあります
                              77,824   バイトが使用可能です
```

ドライブAのディスク上で、文字Cで始まるファイル名を確認するためには、次のように入力します。

```
C:¥>dir a:c＊.＊ /w
```

これによって、Cで始まる名前のファイルが次のように表示されます。

```
ドライブ A: のボリューム・ラベルは STARTUP      です
ボリューム・シリアル番号は 1E51-12FB です
ディレクトリーは    A:¥

COMMAND.COM   CONFIG.SYS    COUNTRY.SYS
       3  個                 50,459  バイトのファイルがあります
                             77,824   バイトが使用可能です
```

複数のファイルを指定するワイルドカードの使用

ワイルドカード＊を使ってファイルを削除する際には注意が必要です。たとえば、MYTES.TXTとMYSALE.TXTという2つのファイルがある場合、MYTES.TXTだけを削除するつもりで次のように入力すると、両方のファイルが削除されてしまいます。

```
C:¥>del my＊.txt
```

疑問符（？）

名前あるいはエクステンションの一部分、またはすべての文字の代わりとなるワイルドカード＊と異なり、ワイルドカード？は1つの文字の代わりとなります。

たとえば、3文字以下の名前のファイルを表示するには次のように入力してください。

```
C:¥>dir a:???.＊ /w
```

名前やエクステンションにかかわらず、DOSは次のように3文字以下の名前のファイルを表示します。

```
ドライブ A: のボリューム・ラベルは STARTUP     です
ボリューム・シリアル番号は 1E51-12FB です
ディレクトリーは   A:¥

SYS.COM        EGA.CPI        FC.EXE
        3 個                   71,227  バイトのファイルがあります
                               77,824  バイトが使用可能です
```

ワイルドカードでファイル名と一致させる

1つのファイルあるいは一連のファイルを、もう一方のファイルと一致させるために、ワイルドカードを使用することができます。

たとえば、ドライブAのディスケット上にあるエクステンションBATの付いたすべてのファイルを、エクステンション

BAKの付いたファイルに変更するには、次のようにREN(RENAME)コマンドを使います。

```
C:¥>ren a:＊.bat ＊.bak
```

すると、たとえばABC.BATはABC.BAKに、100.BATは100.BAKに変更されます。

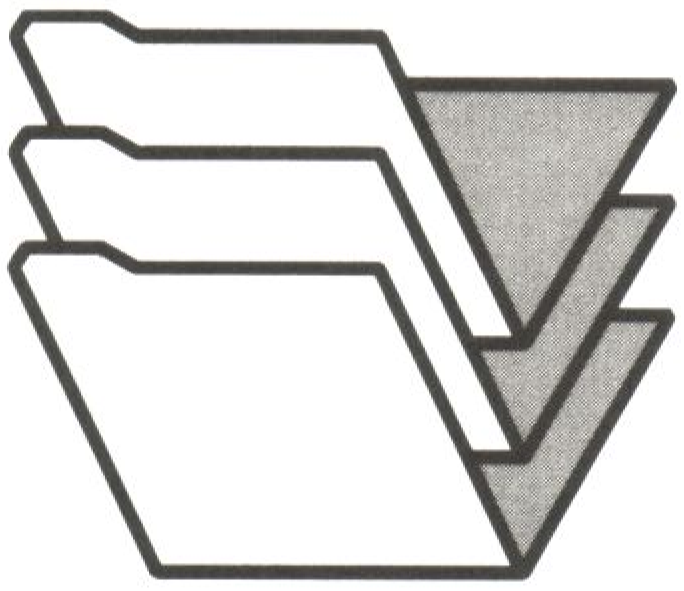
最初と２番目のワイルドカードは、異なる意味があります。つまり、最初のアスタリスク(＊)は、エクステンションがBATのすべてのファイルを見つけだすために使用されます。２番目のアスタリスク(＊)は、それぞれ元のファイル名と同じ名前に変更するのに使われます。

それでは次のコマンドはどのような意味になるでしょうか。

```
C:¥>copy a:f＊.bat b:＊.bak
```

これは、ドライブＡのディスケット上にあるファイルのうち、名前がＦで始まりエクステンションがBATのすべてのファイルを、エクステンションだけをBAKに変更して、ドライブＢのディスケットに複写することを表します。

ディレクトリーの使い方



ディレクトリーは、わたしたちがオフィスのファイル・キャビネットにしまうフォルダーのようなものです。フォルダーは、オフィスにある書類を用途別、種類別に分類、整理するのに役立ちます。ディスクの中のファイルを分類して、「ディレクトリー」ごとになれば、ファイルの管理がずっと楽になります。

ファイル・キャビネットのフォルダーが一杯になってごちゃごちゃしてきたら、それをさらに分類して整理します。同じように、ディレクトリーの内容が多くなりすぎた場合は、さらにそれを「サブディレクトリー」に分けて整理します。

ディレクトリーごとにファイルを整理する

ディスクには、(ディスクの容量やファイルの大きさにもよりますが)数百から数千のファイルを保管することができます。ファイルの数が多ければ多いほど、目的のファイルを見つけることは難しくなります。

目的のファイルを簡単に見つけられるように、また、ファイルを効率的に管理するために、DOSのコマンドを使ってファイルを用途別や種類別に分類して保管することができます。分類したファイルは「ディレクトリー」という登録簿で管理します。

たとえば、

会議の議事録
月次の経費報告書
週間状況報告書

という3種類のファイルがあるとします。このような場合、MD(Make Directory)コマンドを使って、

MEETING
EXPENSE
STATUS

という3つのディレクトリーを作ります。そのあと会議の議事録ファイルをMEETINGディレクトリーに、経費のファイル

をEXPENSEディレクトリーに、状況報告ファイルをSTATUSディレクトリーにそれぞれ保存し管理することができます。

ディレクトリーは登録簿という意味で、ファイルの名前、大きさ、作成日時などの情報を記録しています。たとえば、コマンド行にDIRコマンドを入力すると、現行(カレント)ディレクトリー(その時点で対象となっているディレクトリー)に登録されているファイルとその情報が表示されます。



次の例ではDIR1というディレクトリーの情報を見ています。

```
C:¥DIR1>dir
```

```
ドライブC:にはボリューム・ラベルがありません
ボリューム・シリアル番号は0947-18CBです
ディレクトリーはC:¥DIR1

FILE1           10,386 93-05-30  10:13
FILE2    TXT     1,613 93-07-07  11:27
FILE3    DAT        31 93-12-01  13:15
DIR3        <DIR>      93-10-24  10:10
FILE4            2,288 93-04-30  09:08
.           <DIR>      93-10-10  10:35
..          <DIR>      93-10-10  10:35
     7個      141,312バイトのファイルがあります
           25,094,144 バイトが使用可能です
```

ディレクトリーは必要に応じていくつでも作ることができます。また、たくさんのファイルを整理しやすいように、ディレクトリーは階層構造にすることができます。これが「サブディレクトリー」の考え方です。

ディレクトリーを理解する

ハードディスクを使用する場合、ファイルを整理するためディレクトリーはきわめて重要です。ディスケットだけを使用する場合は、ディスケットを分けて使うことでファイルを整理し、保存することができます。しかし、ハードディスクの場合は、より簡単にファイルを見つけられるようにファイルを種類別に整理する必要があります。このためにディレクトリーがあります。

ディレクトリー・ツリー

それぞれのディスクには、最低1つのディレクトリーがあります。ディスケットやハードディスクをフォーマットすると、必ず1つのディレクトリーが作成されます。これを「ルート・ディレクトリー」と呼びます。すべてのファイルやディレクトリーは、このルート・ディレクトリーの下に作成されます。

参考

厳密に言うと、ルート・ディレクトリー以外は、サブディレクトリーです。しかし、ふつうはこれらすべてをディレクトリーと呼んでいます。この呼び方は2つのディレクトリーの関係を明示するときだけ使います。

ファイルを整理するために、ルート・ディレクトリーの中に複数の「サブディレクトリー」を作ることができます。たとえば、あるサブディレクトリーに表計算のファイルを入れ、別のサブディレクトリーに文書ファイルを入れることができます。

ディレクトリーとサブディレクトリーの関係は、ディレクトリー・ツリーと呼ばれるように、木の枝の構造をしています。これは、TREEコマンドを使って視覚的に確かめることができます。

```
A:¥>tree
```

```
ボリュームDOS6       のディレクトリー・パス・リスト
ボリューム・シリアル番号は373E-17D0です
A:
├──────── TEXT
└──────── DOC
```

サブディレクトリーの中にさらにサブディレクトリーを作ってファイルを整理することができます。たとえば、作図プログラムを仕事、学校、そして個人的なプロジェクトに使用してい

るとしましょう。ファイルを整理して保存するため、作図プログラムが入っているディレクトリー(ART)に３つのサブディレクトリー(WORK、HOME、SCHOOL)を作ると、このディレクトリーの構造は、次のようになります。

```
C:¥>tree
```

```
ボリュームDOS6のディレクトリー・パス・リスト
ボリューム・シリアル番号は157A-6C23です
C:
├────DOS
└────ART
      ├────WORK
      ├────HOME
      └────SCHOOL
```

ディスクには容量を超えない限り、いくらでもファイルとディレクトリーを追加することができます。ただし、ルート・ディレクトリーに作成できるファイルとディレクトリーの数には制限があります。たとえば、ハードディスクの場合512個、1.44MBディスケットの場合224個です。また、１つのディレクトリーにおよそ150個以上のファイルとサブディレクトリーがあると、実行速度が低下します。

ディレクトリーの名前

¥記号で表されるルート・ディレクトリーを除いて、ディレクトリーはそれぞれ名前があります。また、ディレクトリーにはエクステンションを付けることもできます。ディレクトリーの名前とエクステンションを付けるときは、以下の規則に従ってください。

ディレクトリー名の付け方の規則

- ピリオドの前は最大８バイトの長さです。(半角の英数字なら８文字、漢字やひらがななどの全角文字だけなら4文字が最大)
- ディレクトリーの名前の後ろにピリオド(.)をつけ、その後に半角３文字以内のエクステンションを付けることができます。

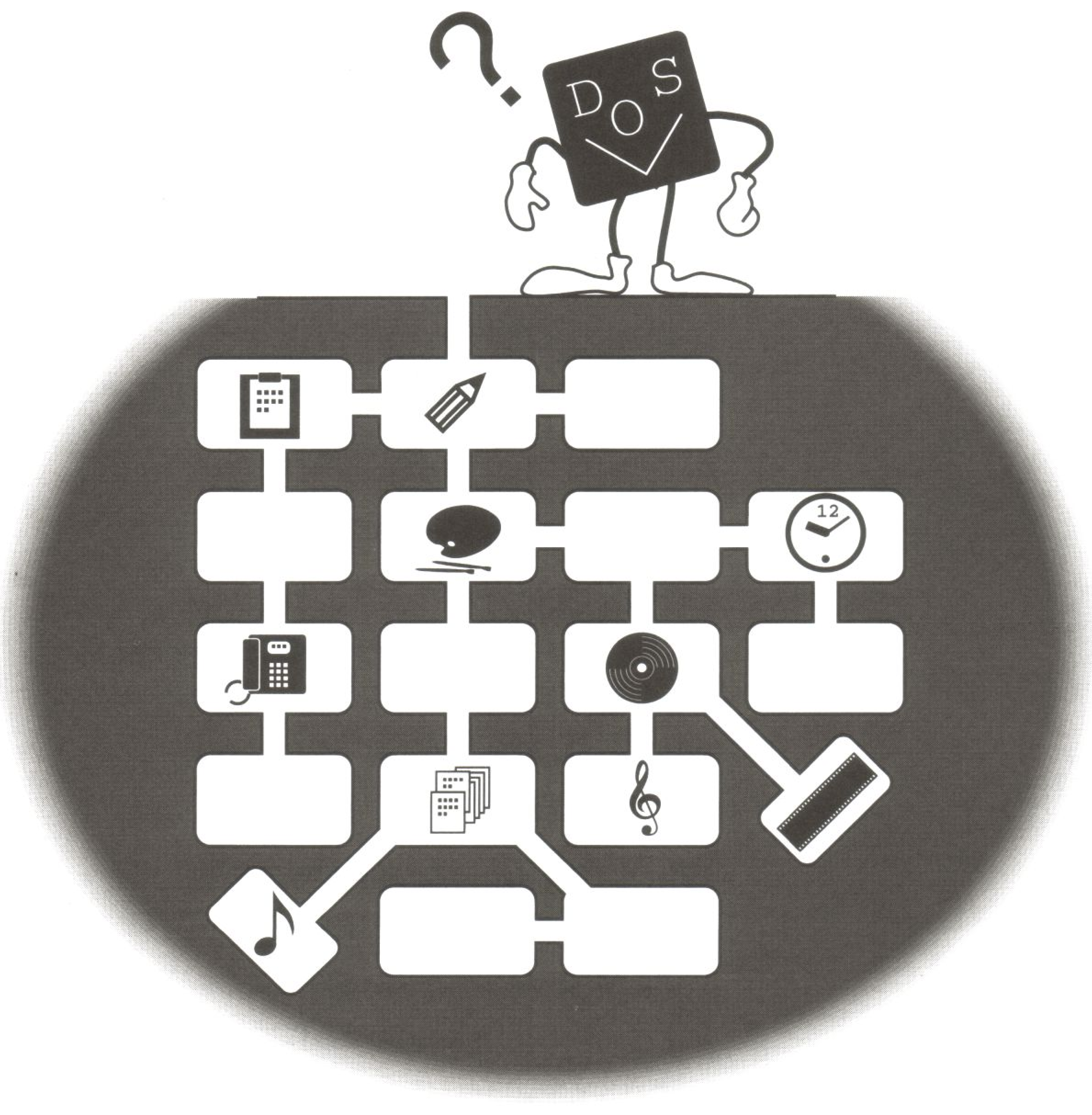
ディレクトリーの名前

・半角の記号のうち、以下のものは使えません。

”／¥［］：＊＜＞｜＋＝；、？

・半角スペースは使用できません。

・1つのディレクトリーの中では同じ名前の2つのサブディレクトリーを作ることはできません。たとえば、WORKディレクトリーは、FILESという名前の2つのサブディレクトリーを作ることはできません。しかし、異なるディレクトリーのサブディレクトリーでは、同じ名前を使用することができます。たとえば、HOMEディレクトリーとSCHOOLディレクトリーのどちらにも、FILESという名前のサブディレクトリーを作ることができます。



現行ディレクトリーは、その名前またはピリオド(.)によって参照することができます。現行ディレクトリーの親ディレクトリーは、その名前か2つのピリオド(..)によって参照することができます。ディレクトリー(ルート・ディレクトリー以外)にあるファイルとディレクトリーを確認するため、DIRコマンドを使用するとき、現行ディレクトリーと親ディレクトリーを表すこれらの記号(. と..)がファイル一覧に表示されます。

パス

システム内には、同じファイル名を持つファイルが、複数存在することがよくあります。このようなときに、システム内で、あるファイルを特定するために、「パス」を指定します。パスはディレクトリー・ツリー内部のファイルの位置を表します。

つまり、パスは、あるファイルに到達するため、ルート・ディレクトリーからたどらなければならない道筋といえるでしょう。たとえば、ドライブCには次のようなディレクトリー・ツリーがあるとします。

```
C:¥>tree
```

```
ボリュームDOS6のディレクトリー・パス・リスト
ボリューム・シリアル番号は157A-6C23です
C:
├──── DOS
└──── ART
        ├──── WORK
        ├──── HOME
        └──── SCHOOL
```

HOMEディレクトリーの中のファイルに到達するには、次のディレクトリーをたどらなければなりません。つまり、ルート(¥)、ART、およびHOMEです。このパスは次のように表します。

```
C:¥ART¥HOME
```

パス

これは、HOMEディレクトリーのパスです。2つの¥記号のうち最初の¥記号はルート・ディレクトリーを表わし、2番目のものはディレクトリーとディレクトリーの間を区切るためのものです。たとえば、HOMEディレクトリーにあるFIG1.MSPファイルのパスを指定するには、次のようにパスにもう1つ¥記号とファイル名を追加します。

```
C:¥ART¥HOME¥FIG1.MSP
```

このように指定することによって、他のドライブやディレクトリーにあるFIG1.MSPファイルと、はっきり区別することができます。

パス入力の制限

パスはドライブ文字とコロン(:)を含めて66文字まで認識されます。

現行(カレント)ドライブ

現行ドライブとは、現在操作対象となっているドライブのことです。現行ドライブの文字は、通常コマンド・プロンプトの一部として表示されます。

```
A:¥>
```

コマンドを入力する際に、対象のファイルまたはディレクトリーが現行ドライブにある場合は、現行ドライブの文字を入力する必要はありません。たとえば、Aが現行ドライブの場合、次のように入力することによって、A:¥ART¥FIG1.MSPというファイルを削除することができます。

```
A:¥>del ¥art¥fig1.msp
```

ドライブの変更方法

現行ドライブを変更するには、変更先のドライブ文字の後にコロン(:)を入力し、[↵ Enter](改行)を押してください。

```
A:¥>C:
```

すると現行ドライブが変更されます。

```
C:¥>
```

現行(カレント)ディレクトリー

現在作業中のディレクトリーが、そのドライブの現行ディレクトリーです。

ファイルについてなんらかの操作を行う場合、そのファイルが現行ディレクトリーに存在するときは、現行ディレクトリーのパスを入力する必要はありません。たとえば、Cが現行ドライブで、¥ART¥HOMEが現行ディレクトリーである場合、次のコマンドを入力することによって、C:¥ART¥HOME¥FIG1.MSPというファイルを削除することができます。

```
del fig1.msp
```

2台のドライブで作業を行う場合、それぞれのドライブごとに現行ディレクトリーがあります。たとえば、Cが現行ドライブで¥ART¥HOMEが現行ディレクトリーであるとしましょう。ドライブAのディスケットについては、¥FIGSが現行ディレクトリーであるとします。次のコマンドを入力して、FIG2.MSPファイルをA:¥FIGSからC:¥ART¥HOMEにコピーすることができます。

```
copy a:fig.msp c:
```

つまりコマンドで明示的にパスを指定しない限り、指定するファイルはそれぞれのドライブの現行ディレクトリーに存在

現行(カレント)ディレクトリー

するものと見なされます。システムを始動したとき、それぞれのドライブの現行ディレクトリーは、各ドライブのルート・ディレクトリーとなります。ディスケット・ドライブの現行ディレクトリーはディスケットを交換するとルート・ディレクトリーに変更されます。

現行ディレクトリーでないディレクトリーのファイルを操作するには、次のような2つの方法があります。

・コマンド入力の際に対象となるファイルが存在するディレクトリーのパスを入力する
・CDコマンドを使用して、現行ディレクトリーを変更してからコマンドを入力する。
(CDコマンドはについては、5章を参照してください。)

現行ディレクトリーにないプログラム・ファイルを使用する場合は、PATHコマンドで他のディレクトリーのパスを指定しておくと便利です。

ディレクトリーをパスで指定する場合、現行ディレクトリー以外の部分をパスに指定するだけで十分です。たとえば、現行ディレクトリーが¥ARTである場合、次のように入力することで、¥ART¥HOME¥FIG1.MSPファイルを削除することができます。

```
del home¥fig1.msp
```

フルパス指定と相対パス指定

上の例では、削除したいファイルが現行ディレクトリーのサブディレクトリーにあるので、完全なパスを入力する必要がないわけです。ファイルが現行ディレクトリーのサブディレクトリーにない場合、次のようにそのパスの全体を入力するか、または現行ディレクトリーに対する相対的なパスを指定しなければなりません。現行ディレクトリーが¥ARTである場合、¥TEXT¥REPORTS¥STOCK.TXTを削除するには、次のどち

らかのコマンドを入力します。

```
del ¥text¥reports¥stock.txt
```

または

```
del ..¥text¥reports¥stock.txt
```

この2番目の例では、2つのピリオド(..)は現行ディレクトリーの親ディレクトリーを表します。この場合、ARTの親ディレクトリーはルート・ディレクトリーであり、TEXTはルート・ディレクトリーのサブディレクトリーです。

コマンド・プロンプトの変更

PROMPTコマンドを使用して、コマンド・プロンプトの表示方法を変更することができます。特に指定しない限り、DOSは、現行ドライブ、ディレクトリーと不等号(>)をコマンド・プロンプトとして表示します。たとえば、次のプロンプトは、現行ドライブがCでディレクトリーがDOSであることを示します。

```
C:¥DOS>
```

PROMPTコマンドとそのパラメーターを使用することにより、コマンド・プロンプトの表示を変更することができます。たとえば、コマンド・プロンプトとして現行ドライブのみを表示させたい場合があります。次のコマンドは、現行ドライブのドライブ文字と不等号(>)を示すコマンド・プロンプトを作成します。

```
prompt $n$p
```

すると、現行ディレクトリーがC:¥PBRUSHであれば、次のプロンプトが表示されます。

コマンド・プロンプトの変更

```
C>
```

さらに上記のプロンプトを不等号(>)のみにするには、次のように入力します。

```
prompt $g
```

DOSの初期設定にもどすにはprompt pgを入力します。DOSは次のプロンプトを表示します。

```
C:¥PBRUSH>
```

AUTOEXEC.BATにPROMPTコマンドを追加することによって、システムが起動するたびに適当なシステム・プロンプトが表示されるようにすることができます。

ディレクトリーの作成

ディレクトリーを作るには、MD(MKDIR)コマンドを使います。たとえば、¥TEXT¥SMPディレクトリーが現行ディレクトリーであるとします。次のように入力すれば、現行ディレクトリーの下にDATAと呼ばれる新しいサブディレクトリーが作成されます。

```
md data
```

新しいディレクトリーが現行ディレクトリーのサブディレクトリーであれば、上記の例のようにパスの新しい部分だけを入力します。

互いに関連したファイル(あるプログラムで使用するいくつかの専用ファイル、あるいは特定のプロジェクトのファイルなど)を、それぞれの固有のディレクトリーに保管したい場合があります。ディレクトリーを作るには、MD(MKDIR)コマンドを使います。たとえば、現行ディレクトリーがルート(¥)で

あるとします。REPORTSと呼ばれるサブディレクトリーを作るには、次のように入力します。

```
md reports
```

この場合、MDまたは省略形でないMKDIRのどちらでも使用できます。

特に指定しない限り、MDコマンドは現行ディレクトリーにサブディレクトリーを作ります。たとえば、現行ディレクトリーが¥WORKであれば、¥WORK¥HOMEと呼ばれるディレクトリーを作るには、次のように入力します。

```
md home
```

これによって¥WORKディレクトリーの中にHOMEと呼ばれるサブディレクトリーができます。もし現行ディレクトリー以外のディレクトリーにサブディレクトリーを作る場合、下記のように新しいディレクトリーのパス全部を入力するか、または現行ディレクトリーに対して相対的なパスを指定しなければなりません。たとえば、現行ディレクトリーが¥TEXTであるとします。サブディレクトリー¥WORK¥HOMEを作成するには、次のいずれかを入力します。

```
md ¥work¥home
```

または

```
md ..¥work¥home
```

MDコマンドにドライブ文字を付ければ、現行ドライブでないディスクにディレクトリーを作ることができます。たとえば、現行ディレクトリーであるC:¥WORK¥HOMEにあるファイルをドライブAのディスケットのサブディレクトリー¥HOMEに複写したいとします。このために、現行ディレクトリーを変

えずに、ドライブAのディスケットにこのディレクトリーを作るには、次のように入力します。

```
md a:¥home
```

ディレクトリー間を移動する

システムの各ドライブにあるディスクには、それぞれ現行ディレクトリーがあります。つまり、2台のディスケット・ドライブと1台のハードディスク・ドライブがあれば、3つの現行ディレクトリーが存在します。

ディスクにサブディレクトリーがなければ、ルート・ディレクトリーが常にそのディスクの現行ディレクトリーとなります。ディスクにサブディレクトリーがある場合、あるディレクトリーから別のディレクトリーに移動する(現行ディレクトリーを変える)には、CD (Change Directory)コマンドを使います。

ディレクトリーの変更

現行ドライブの別のディレクトリーに移動するには、CD (CHDIR)コマンドを使います。たとえば、次のコマンドは、現行ディレクトリーを¥OFFICE¥REPORTS¥DATAに変更します。

```
cd ¥office¥reports¥data
```

現行ディレクトリーを親ディレクトリーに変更するには、CDコマンドの後ろに2つのピリオド(..)を付けます。

```
cd ..
```

現行ディレクトリーがルート(¥)であれば、次のように入力すれば、¥WORKディレクトリーに移動し、それを現行ディレクトリーにすることができます。

```
cd work
```

この場合、CDあるいはCHDIRのどちらも使うことができます。

CDコマンドを使うとき、特に指定しない限り、サブディレクトリーを現行ディレクトリーに変更することになります。たとえば、現行ディレクトリーが¥WORKであるとき、¥WORK¥HOMEに変更するには、次のように入力します。

```
cd home
```

もし現行ディレクトリーが¥OFFICEであるとき、¥WORK¥HOMEに変更するには、次のようにパス全体を入力します。

```
cd ¥work¥home
```

現行ディレクトリーをその親ディレクトリー(レベルが1つ上のディレクトリー)に変更するには、コマンドの後に2つのピリオド(..)を付けます。たとえば、現行ディレクトリーが¥WORK¥HOMEであれば、次のコマンドを使用して¥WORKに変更することができます。

```
cd ..
```

現行ディレクトリーがどのディレクトリーであっても、次のように入力すれば、現行ディレクトリーを現行ドライブのルート・ディレクトリーに変更することができます。

```
cd ¥
```

CDコマンドを使って、現行ドライブを変更せずに、現行ドライブでないドライブの現行ディレクトリーを変更することができます。たとえば、現行ドライブをAとします。現行ドライブを変更せずに、ドライブCの現行ディレクトリーを¥WORKに変更するには、次のように入力します。

ディレクトリーの変更

```
cd c:¥work
```

このように指定しておけば、C:と指定するだけで、暗黙のうちにディレクトリー¥WORKが使用されます。たとえば、現行ドライブがAで、ドライブCの現行ディレクトリーが¥WORKであるとします。ドライブAの現行ディレクトリーからC:¥WORKにすべてのファイルを複写するには、次のように入力します。

```
copy  *.* c:
```

ディレクトリーを変更しない限り、初めはどのドライブの現行ディレクトリーもルート·ディレクトリーです。

ディレクトリーの削除

ディレクトリーを削除するには、次の例のようにRD(RMDIR)コマンドを使います。

```
rd ¥office¥reports¥data
```

DOSは現行ドライブから¥OFFICE¥REPORTSのDATAサブディレクトリーを削除します。削除するディレクトリーは、ファイルやサブディレクトリーが1つもない空の状態でなければなりません。

不要になったディレクトリーは、RDコマンドを使って削除することができます。ディレクトリーを削除するには、そのディレクトリーは空でなければなりません。また、削除するディレクトリーが現行ディレクトリーであってはなりません。たとえば、サブディレクトリーを1つも含んでいない¥WORKというディレクトリーを削除するには、その前に内容をすべて削除しなければなりません。このため、次のように入力します。

```
del ¥work¥*.*
```

すると、次のメッセージが表示されます。

```
ディレクトリー内のすべてのファイルは削除されます!
大丈夫ですね(Y/N)?
```

ここで、ファイルをすべて削除する場合は、Yを入力してください。また、削除コマンドの実行を中止するにはNと入力してください。次にディレクトリーを削除するため、次のように入力します。

```
rd work
```

この場合、RDの代わりにRMDIRと入力しても同じ結果が得られます。特に指定しない限り、現行ディレクトリーのサブディレクトリーが削除されます。たとえば、現行ディレクトリーが¥WORKであり、HOMEが¥WORKのサブディレクトリーである場合、次のように入力することにより、HOMEを削除することができます。

```
rd home
```

現行ディレクトリーが¥OFFICEでるとき、HOMEを削除するには、次のようにパス全体か、または現行ディレクトリーに対して相対的なパスを入力しなければなりません。

```
rd ¥work¥home
```

または

```
rd ..¥work¥home
```

RDコマンドにドライブ文字を付けると、現行ドライブでないディスクからディレクトリーを削除することができます。たとえば、現行ドライブがCであるとき、A:¥HOMEディレクト

ディレクトリーの削除

リーを削除するには、次のように入力してください。

```
rd a:¥home
```

削除したいディレクトリーにファイルまたはサブディレクトリーがある場合は、まず最初に、それらを削除しなければなりません。

ディレクトリーごとの一括削除

PC DOS J6.1/Vには、ディレクトリーごとファイルをも削除できるDELTREEコマンドが追加されました。このコマンドを使うと、指定したディレクトリー以下にある、すべてのファイルとディレクトリーを一度に削除することができます。

```
deltree c:¥work
```

このようにすると以下のようにメッセージが表示されます。

```
ディレクトリー work 以下のすべてのファイルを削除しますか?(Y/N)
```

ここでYを押すとこのディレクトリー以下のディレクトリーとファイル(ディレクトリー・ツリー)すべてが削除されます。このコマンドを使うときは、必要なファイルがツリー内に残っていないかを、十分に注意して行ってください。

ディレクトリー名の変更

PC DOS J6.1/Vに新たに加わったMOVEコマンドを使うと、ディレクトリー名の変更ができます。たとえばサブディレクトリーWORKをTEMPに変更する場合には、以下のようなコマンドを入力します。

```
move work temp
```

このようにすると以下のようにメッセージが表示されます。

```
c:¥work => c:¥temp [OK]
```

これでディレクトリー名は変更されます。

検索パスの指定

プログラム・ファイルに対する検索パスを指定するには、PATHコマンドを使います。たとえば、次の例では、DOSは現行ディレクトリーに加えて、指定された2つのディレクトリー内でファイルを検索します。

```
path ¥;C:¥BIN;C:¥UTIL
```

PATHコマンドの中の各ディレクトリーは、セミコロン(;)で区切らなければなりません。最初の¥記号は、検索を現行ドライブのルート・ディレクトリーから始めることを指示します。

特に指定しない限り、DOSはプログラム・ファイルを現行ディレクトリーの中だけで検索します。検索パスを指定すると、DOSは指定されたディレクトリーの中でもプログラムを検索します。検索パスとは、DOSがファイルを検索するときにたどる、ディレクトリーからディレクトリーへの道筋です。

現行ディレクトリー以外のディレクトリーに保管されたプログラムを実行するためには、3通りの方法があります。第1は、プログラムを実行するたびにCDコマンドを使ってそのディレクトリーを現行ディレクトリーにする方法です。第2は、実行したいプログラムのパス全体を入力する方法です。最後の方法は、PATHコマンドを使って、頻繁に使用されるすべてのパスを指定しておくことです。こうしておくと、現行ディレクトリーに目的のファイルがない場合、検索パスに指定されている他のディレクトリーが検索されます。PATHコマンドの設定は、再び設定し直すか、システムを再始動するまで有効です。

たとえば、C:¥PBRUSH、C:¥WORK、C:¥DOCの3つのディレク

検索パスの指定

トリーに保管されたプログラムを頻繁に実行する場合、次のようにPATHコマンドで検索パスを指定しておくと便利です。

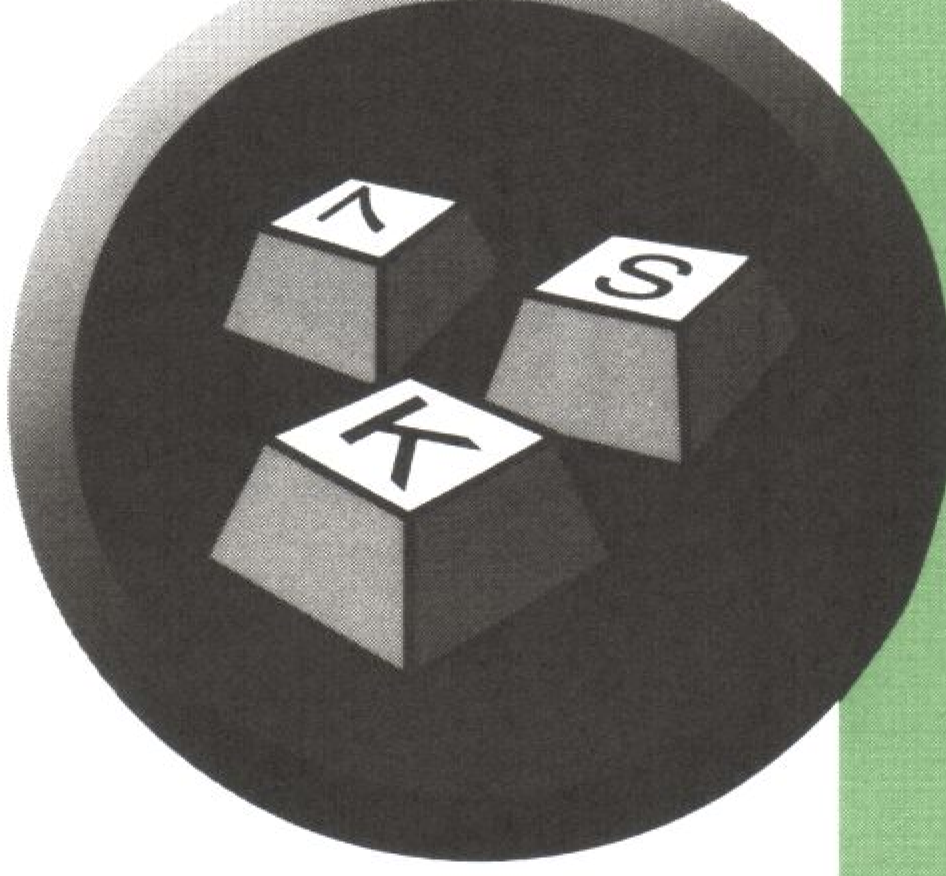
```
path c:¥pbrush;c:¥work;c:¥doc
```

各ディレクトリーはセミコロン(;)によって区切らなければなりません。指定したディレクトリーは、記述されている順序で検索されます(この場合、¥DOCより先に¥WORKを検索します)。現行ドライブのルート・ディレクトリーを最初に検索させたい場合は、次のようにディレクトリーのパスのリストの最初に追加してください。

```
path ¥;c:¥pbrush;c:¥work;c:¥doc
```

PATHコマンドは、PATHという語も含めて127文字まで使うことができます。

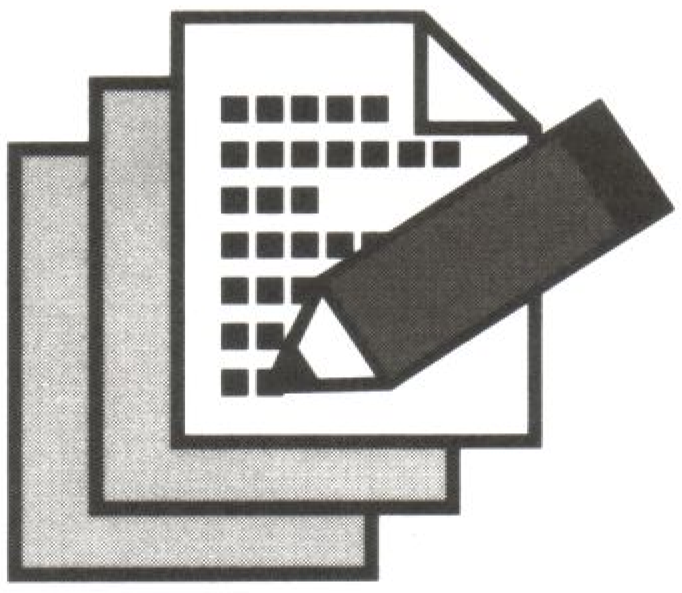
システムを起動するたびに検索パスを指定する手間を省くため、PATHコマンドをAUTOEXEC.BATに記述しておくとよいでしょう。



第4章

DOSの基本操作

Eエディターを使う



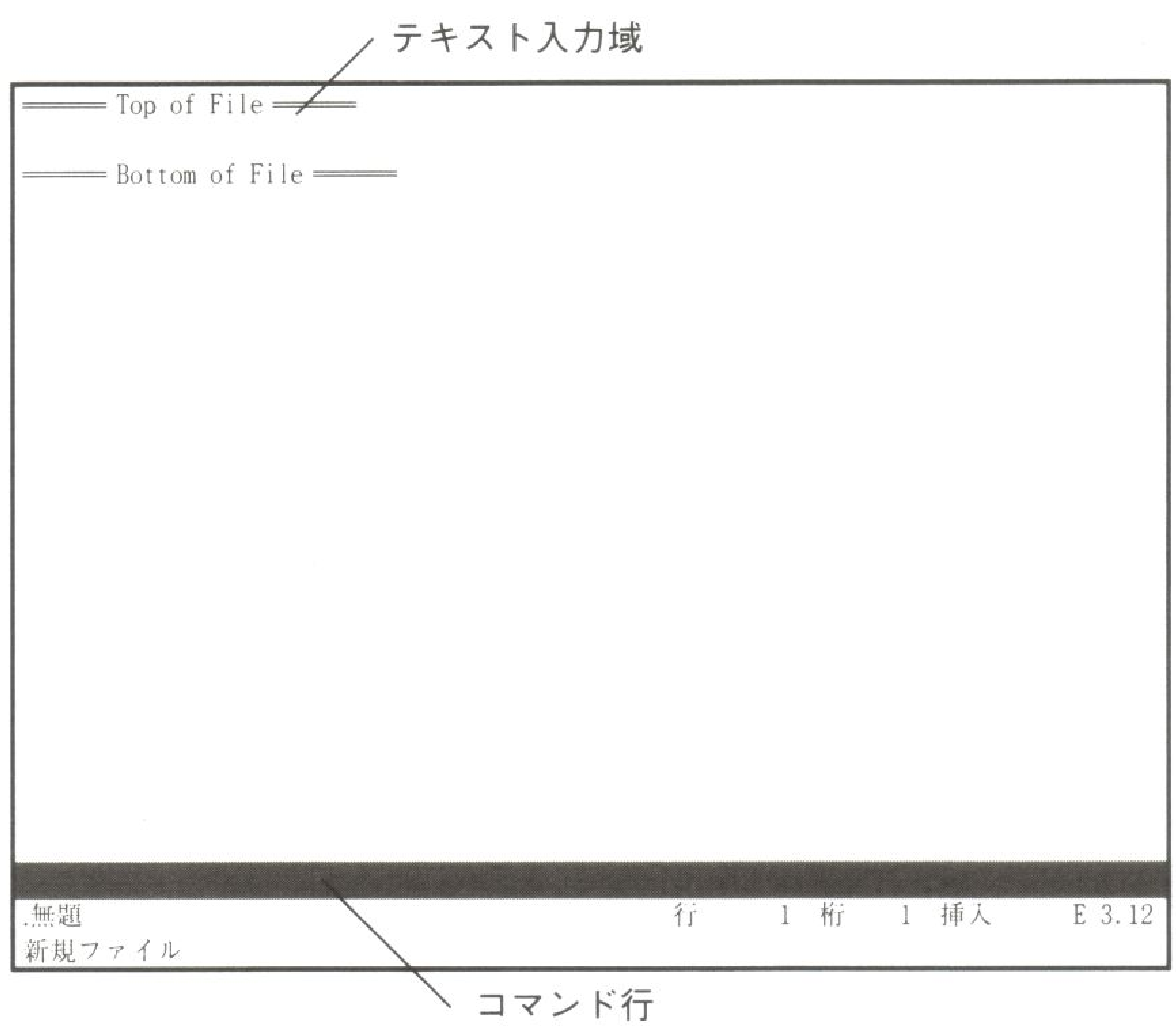
ここではDOSの基本操作を覚えるために、新しく追加されたEエディターを使ってみましょう。Eエディターは基本的なファイルの編集はもちろん、複数のファイルを同時に編集しながら、一方のファイルから他方のファイルへの文章のカットとペーストなどが簡単にできるエディターです。

Eエディターを始動する

では最初にEエディターを始動します。始動にはコマンド行から、たとえば次のように入力して、[↵ Enter](改行)を押してください。

```
C:¥>e
```

これは新しくファイルを作成する場合の例です。次のような画面が表示されます。



DOSシェルから始動する場合は、[⇥]キーを数回押して「メイン」グループの「PC DOS Eエディター」にカーソルを移動し、[↵ Enter](改行)を押します。ファイル名を入力するプロンプトが表示されますので、そこでディレクトリー名とファイル名を続けて入力します。

Eエディターを終了する

Eエディターを終了するには F4 を押します。

```
═══ Top of File ═══
日本語の文章を入力します。
═══ Bottom of File ═══

.無題                              行    1  桁   27  挿入      E 3.12
F1=ヘルプ 2=保管 3=終了 4=保管・終了 6=作図 7=名前 8=編集 9=やり直し 10=次ファイル
```

```
C:¥>_
```

注意

ファイルの名前が『.無題』のままでは『保管・終了』はできません。一度 F7 キーを押してファイル名を指定してから、F4 キーを押して終了してください。

F3 を押すと現在編集しているファイルを保管せずに終了します。この場合は、次のようなメッセージが画面に表示されます。

```
ファイルを保管せずに終了してよろしいですか？(Y/N)
```

ここで Y キーを押すとファイルは保管されません。

ファンクション・キーの基本操作

Eエディターの編集機能は、ほとんどがキーの組み合わせで割り当てられています。ですからほとんどの作業はキーボードのホーム・ポジションから行うことができます。ただし、ファイルに対する操作については、ファンクション・キーに割り当てられています。ここではそれらについて説明します。

参考

英語モードでは EHELP.HLPを表示します。

F1=ヘルプ

F1 を押すとヘルプが表示されます。PageUp と PageDown キーで情報がスクロールします。これは実際には EVHELP.HLPというファイルを、Eエディターの複数編集機能を使ってオープンしているだけです。ですから F10 キーを押すと、即座にもとの編集画面に戻ります。このようにしてヘルプと切り替えながら、編集を行うことができます。

F2=保管

F2 を押すとファイルをディスクに書き込み、編集は継続されます。ファイルを編集している場合には、不意の停電や故障などに備えて、一定時間ごとのファイルを保管するのが得策です。F2 キーは保管を手動で行うために割り当てられています。

Eエディターには保管を自動化する機能も用意されています。自動で行うためにはEエディターのコマンド行から、たとえば次のように入力して、↵ Enter (改行)を押します。

テキスト入力域からコマンド行へ切り替えるには Esc を押します。

```
autosave 10
```

こうすると ↵ Enter (改行)の入力をプログラムがカウントし、10回ごとにファイルを自動的に保管します。回数の指定は任意です。

F3=終了

F3 を押すとファイルを保管せずに終了します。ファイルに何らかの変更が加わっている場合には、確認のメッセージが表示されます。

F4=保管・終了

F4 を押すとファイルが保管され、Eエディターが終了します。

参考

英語モードでは1から6まで選択できます。

F6=作図

F6 を押し、その後に1または2の数字を入力し ↵Enter (改行)を押すと、矢印キーの移動で、図形や表の枠などを描けます。1または2は次のような対応になっています。

1　二重線

2　横線は-、縦線は|、クロスは+で描く

これ以外にもBでブランクの枠が、／の後に任意の半角文字を入力すると、その字で枠が描けます。

F7=名前

「.無題」と表示されている場合に F7 を押すと、Nameと表示されるので、その後にファイル名を入力すると、ファイル名が付きます。またすでにファイル名が付いているファイルの、ファイル名変更にも使います。この場合、元のファイルはそのまま残ります。

F8=編集

Eエディターには複数のファイルを同時に編集する機能があります。F8 を押すとEditと表示されるので、その後に編集するファイル名を入力し ↵Enter (改行)を押すと、最初に編集していたファイルをそのままにして、新しいファイルを開きます。開いている複数のファイルは F10 で瞬時に切り替えられます。

F9=やり直し

現在行を編集前の状態に戻します。ただし行を削除した場合や、複数行にわたる編集に対しては効果がありませんので、注意してください。

F10=次ファイル

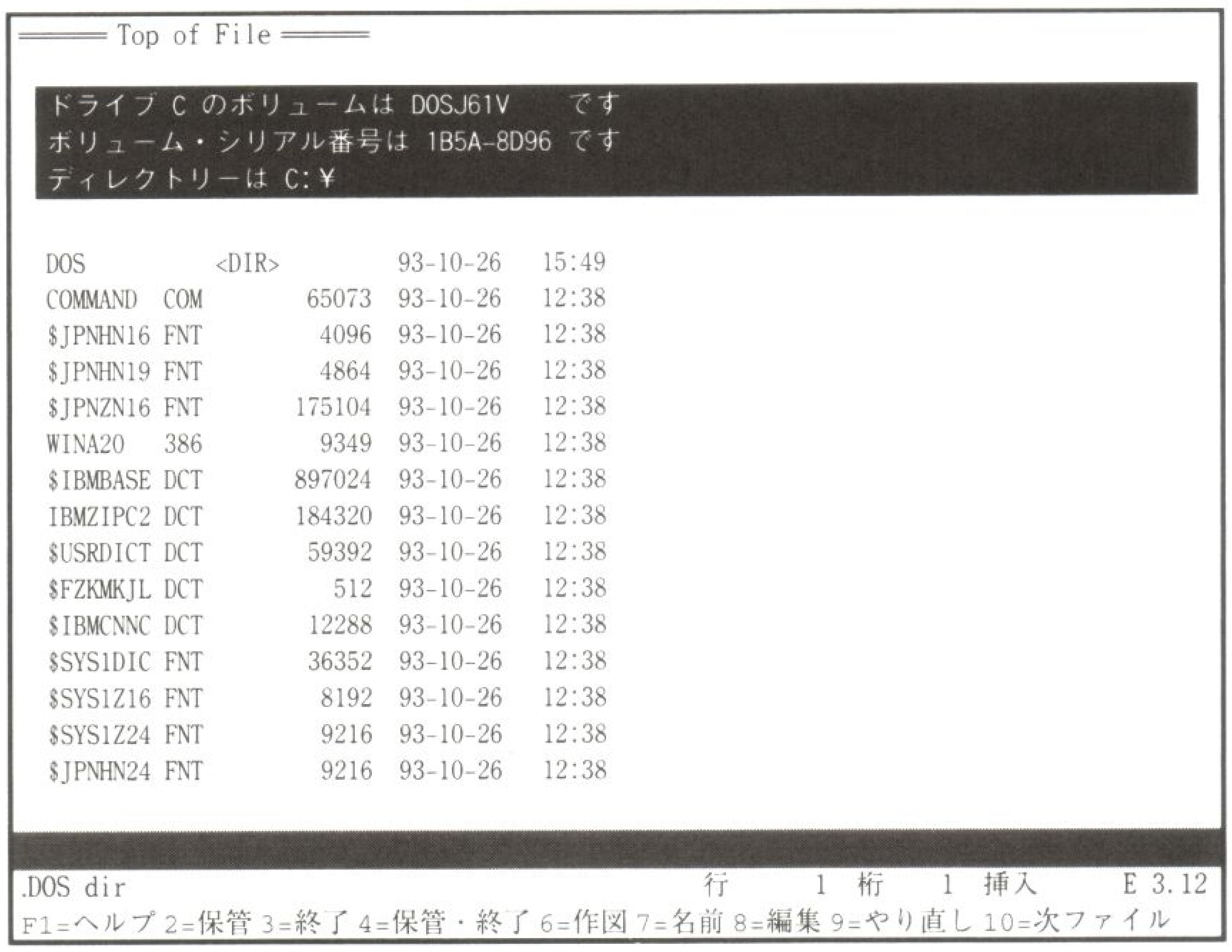
複数ファイルを編集している場合に F10 を押すと、次のファイルへ切り替わります。ヘルプとの切り替えにもこのキーを使います。

テキストを編集する

ここではEエディターを使うための、基本的な編集機能について説明します。最初に行単位で削除、移動、複写などを行う方法について説明します。

行のマークとマーク解除のキー操作

行(複数行も可)の移動や削除などを行う場合は、最初に対象とする行をマーク(反転表示)する必要があります。これには Alt を押しながら L キーを押します。LはLine(行)の意味です。複数行を選択する場合は、Alt + L キーの組み合わせを、選択したい一番上と一番下の行でそれぞれ1回づつ行うと、指定した行が反転します。



選択を解除するには Alt を押しながら U キーを押します。UはUnmark(マーク解除)の意味です。カーソルはどこにあっても解除できます。

行の追加と削除

ブランク行を追加する場合は ↵ Enter (改行)を押すと、押した回数だけ行が追加されます。追加された行を削除するには、Ctrl を押しながら BackSpace キーを押します。

参考

コマンド行へカーソルを移動するには、Esc キーを押します。コマンド行からはDOSのコマンドも入力できます。この例ではDIRコマンドを実行しています。このように画面出力がファイルに取り込めます。同様にコマンド行から『E ファイル名』で次のファイルを読み込み、複数のファイルを編集することもできます。

参考

空白行の挿入は Enter (改行)で次の行が空白行にできます。最上行に空白行を挿入するには、Top of Fileにカーソルを移動し、Enter (改行)を押します。

文字の挿入と置換

Insert キーを押すと、挿入モードと置換モードが切り替えできます。始動時は挿入モードになっています。

行のコピー、移動、削除

一度マークしたら、マークが解除されるまで、その行はコピー、移動、削除などの対象になります。移動したい場所へカーソルを動かし、Alt を押しながら C キーを押すとその行にコピーされます。CはCopy(コピー)の意味です。Alt を押しながら M キーを押すと、その行に移動します。MはMove(移動)の意味です。また Alt を押しながら D キーを押すと、その行は削除されます。DはDelete(削除)の意味です。

```
═══ Top of File ═══

  DOS          <DIR>          93-10-26   15:49
  COMMAND  COM         65073  93-10-26   12:38
  $JPNHN16 FNT          4096  93-10-26   12:38
  $JPNHN19 FNT          4864  93-10-26   12:38
  $JPNZN16 FNT        175104  93-10-26   12:38
  WINA20   386          9349  93-10-26   12:38
  $IBMBASE DCT        897024  93-10-26   12:38
  IBMZIPC2 DCT        184320  93-10-26   12:38
  $USRDICT DCT         59392  93-10-26   12:38
  $FZKMKJL DCT           512  93-10-26   12:38
  $IBMCNNC DCT         12288  93-10-26   12:38
  $SYS1DIC FNT         36352  93-10-26   12:38
  $SYS1Z16 FNT          8192  93-10-26   12:38
  $SYS1Z24 FNT          9216  93-10-26   12:38
  $JPNHN24 FNT          9216  93-10-26   12:38
  $JPNZN24 IBM         19968  93-10-26   12:38
  $JPNZN24 FNT        323072  93-10-26   12:38
  $JPNZN12 FNT        143396  93-10-26   12:38
  $JPNHN12 FNT          2304  93-10-26   12:38
  CONFIG   PS2           135  93-10-26   16:11

.DOS dir                                        行    0  桁    1  挿入     E 3.12
F1=ヘルプ 2=保管 3=終了 4=保管・終了 6=作図 7=名前 8=編集 9=やり直し 10=次ファイル
```

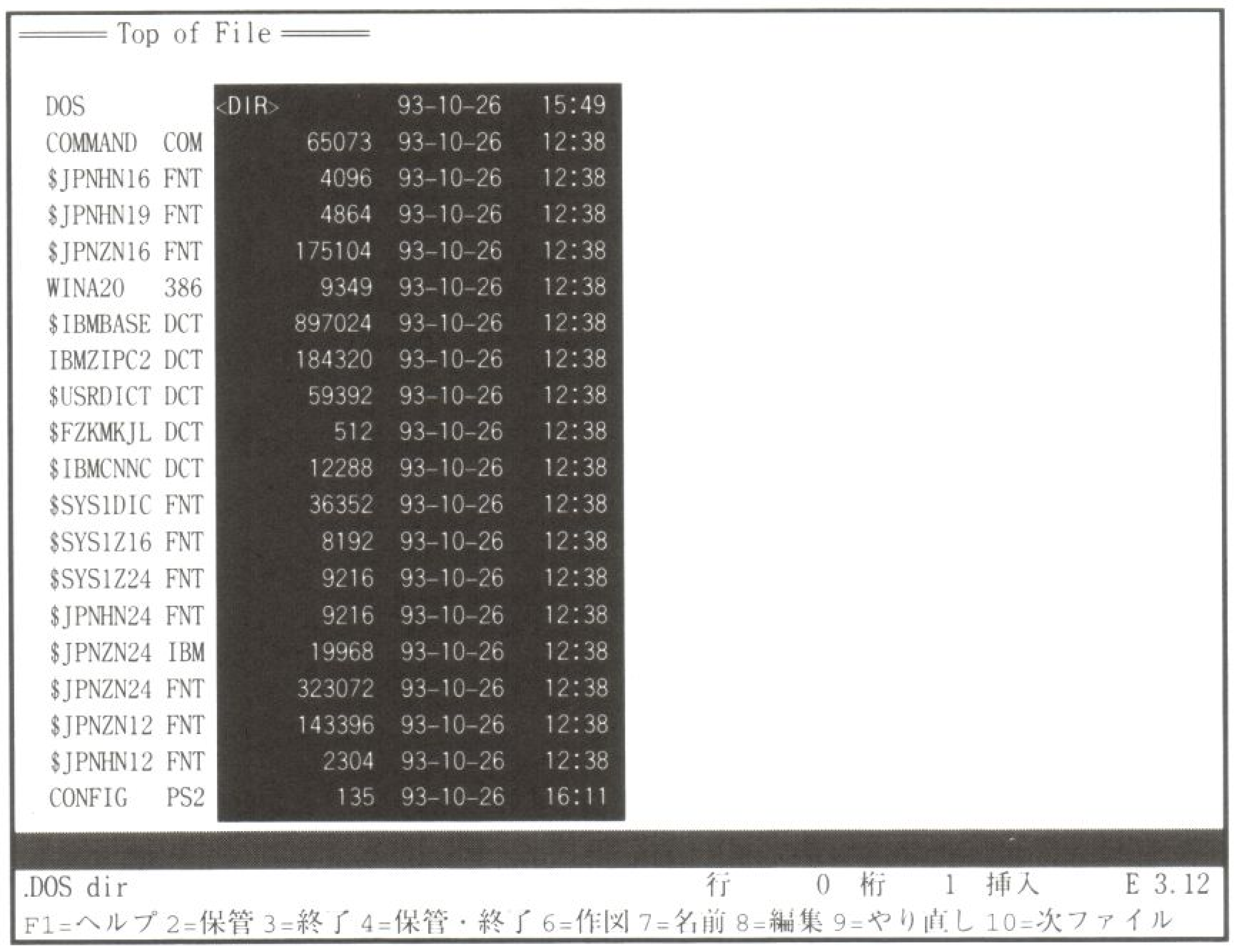
コピーや移動の操作を行っても、マークは解除されません。ですから繰り返しコピーや移動が行えます。マークを解除するには Alt を押しながら U キーを押します。

行の分割と結合

1行の文章を2行に分割する場合は、Alt を押しながら S キーを押します。これはSplit(分割)の意味です。また分割した行を結合するには Alt を押しながら J キーを押します。これはJoin(結合)の意味です。

ブロックのマークとマーク解除のキー操作

ブロック(四角いエリア)の移動や削除などを行う場合は、最初に対象とするブロックの一方の角をマーク(反転表示)する必要があります。これには Alt を押しながら B キーを押します。BはBlock(ブロック)の意味です。次に対角のもう一方の端で、Alt を押しながら B キーを押します。これで指定した四角いエリアが反転します。



選択を解除するには Alt を押しながら U キーを押します。UはUnmark(マーク解除)の意味です。カーソルはどこにあっても解除できます。

ヘルプを使う

Eエディターにはここで説明した以外にも、たくさんの機能があります。キー割り当てや操作については F1 キーを押してヘルプを参照してください。ヘルプは PageUp と PageDown のキーで各ページを参照できます。

```
═══ Top of File ═══

E エディターヘルプ          ヘルプの目次

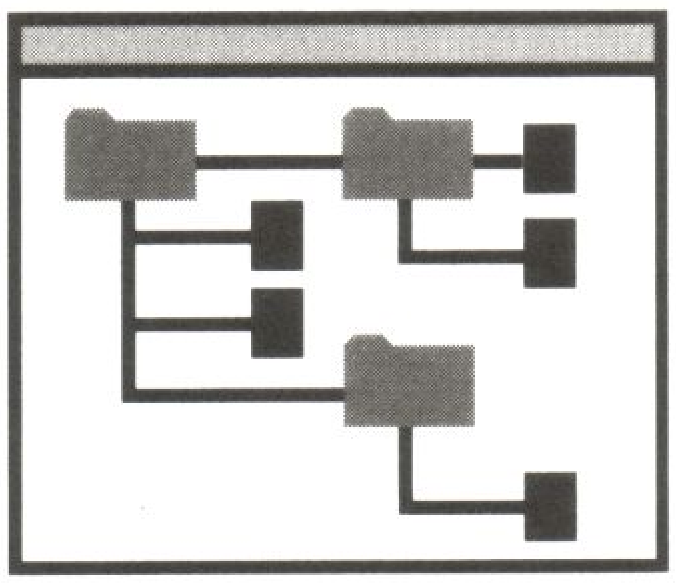
 1 頁： ファンクションキーの定義
 2 頁： Alt（前面）＋ キーの一覧              (A-Z)
 3 頁： Alt（前面）＋ キーの一覧              (A-Z以外)
         Ctrl ＋ キーの一覧                   (A-Z以外)
 4 頁： Ctrl ＋ キーの一覧                    (A-Z)
5,6 頁： コマンドの一覧
 7 頁： 編集、終了時のコマンド

 8 頁： カーソル移動キーについて
 9 頁： テキストのコピー、移動、削除について
10 頁： 補足説明

PgDn：（ファンクションキー）                   F3=終了

C:¥DOS¥EVHELP.HLP          行    1 桁    1 挿入    E 3.12
F1=ヘルプ 2=保管 3=終了 4=保管・終了 6=作図 7=名前 8=編集 9=やり直し 10=次ファイル
```

DOSシェルを使う



DOSシェルはDOSのコマンドを覚えなくても、DOSの基本操作が簡単に行えるように作られているプログラムです。ユーザーがよりDOSの操作をしやすくするために、DOSとユーザーの間を取り持つ役割をしています。

DOSシェルを始動する

DOSシェルは、DOSがハードディスクに導入されているときに始動することができます。ディスケットにDOSを導入した場合は始動することはできません。

システムの始動時にDOSシェルが始動するように設定されている場合に、DOSを始動すると、自動的にDOSシェルの画面が表示されます。DOSシェルの画面ではなく、コマンド・プロンプトが表示される場合は、ここから次のように入力して、DOSシェルを始動してください。

```
C:¥>dosshell
```



DOSシェルを終了する

DOSシェルを離れ、コマンド・プロンプトに戻るには2つの方法があります。1つはDOSシェルを一時的に中断する方法で、この場合、コマンド・プロンプトで作業をしている間も、DOSシェルはシステムのメモリーの中に残っています。また、もう1つはDOSシェルを終了する方法で、この場合はコマンド・プロンプトに移るまえに、DOSシェルはシステムのメモリーから削除されます。

DOSシェルを完全に終了するには、F3 キーを押します。

DOSシェルを一時的に中断するには、⇧ + F9 キーを押します。この場合、DOSシェルに戻るには、次のように入力して、↵ Enter (改行)を押します。

```
C:¥>exit
```

参考

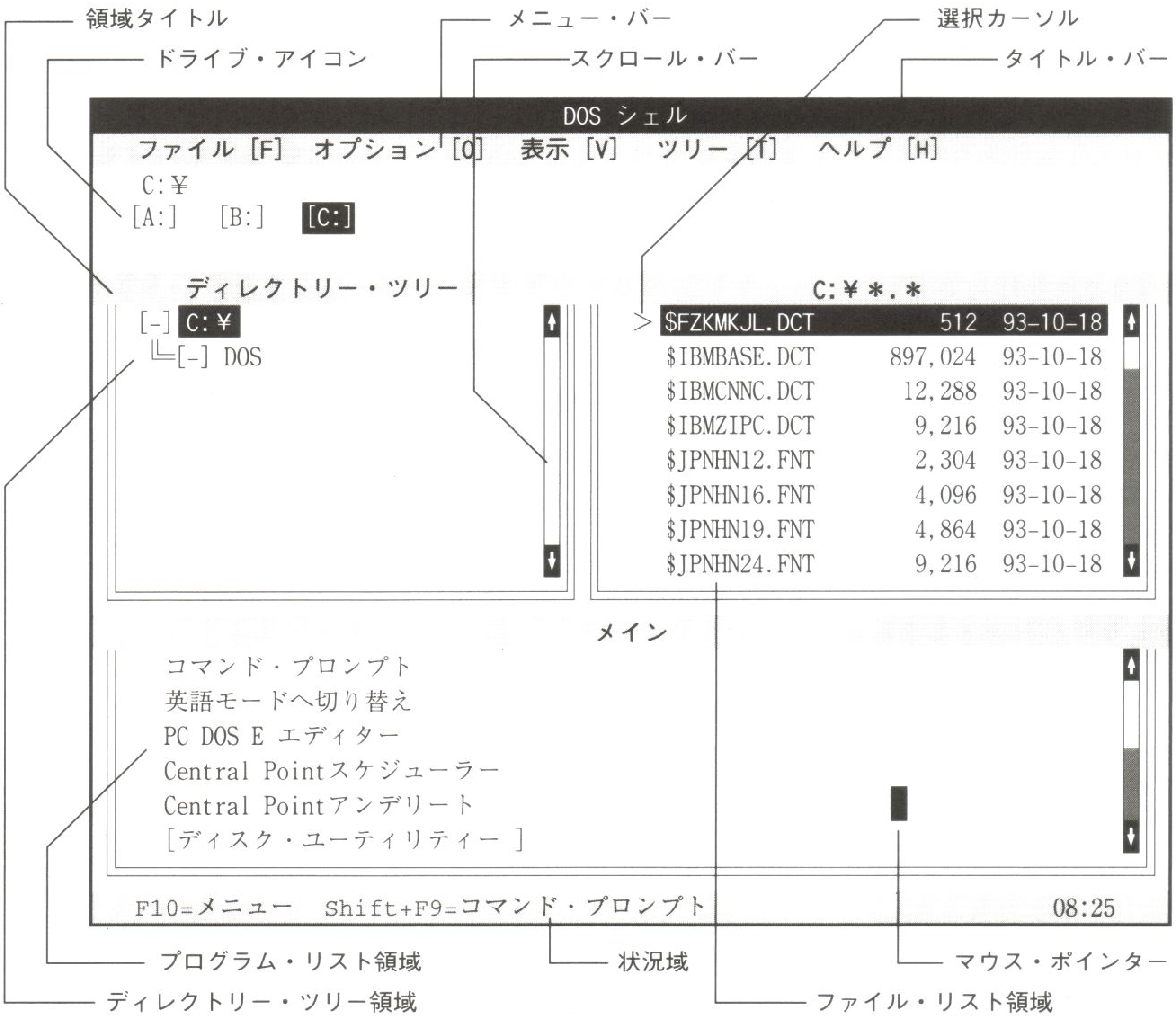
活動タスク・リストにプログラムが表示されている場合は、各プログラムを終了させてからDOSシェルを終了します。終了は『ファイル(F)』プルダウンから『終了(X)』を選択したり、あるいは、Alt + F4 キーを押しても終了できます。

参考

プログラム・リストの「メイン」グループから、「コマンド・プロンプト」を選択しても、一時的にコマンド・プロンプトを表示します。

DOSシェル・ウィンドウについて

最初にDOSシェルを始動すると、次のような画面が表示されます。



次にDOSシェル・ウィンドウの各部分の働きを説明します。

・ タイトル・バーには、DOSシェルという名前が表示されます。
・ メニュー・バーには、使用可能なメニュー名が一覧表示されます。メニューを選択すると、実行可能な項目の一覧が表示されます。
・ ドライブ・アイコン、ディレクトリー・ツリー、プログラム・リスト、ファイル・リスト、活動タスク・リストが、画面上の区切られた領域に表示されます(活動タスク・リストについては、

この後で詳しく説明します)。

・選択カーソルにより、現在どの項目があるいはどの領域が選択されているのかが一目でわかります。

・ファイル名などの一覧が一画面に入りきらない場合、スクロール・バーは、表示されている項目を移動させて、現在の画面の下または上にある項目を見えるようにします。

・状況域(ステータス・エリア)には、簡略キー、DOSシェルからのメッセージ、現在の時刻が表示されます。また、シフト状況とかな漢字変換状況が変更に応じて表示されます。

・マウスを導入している場合は、マウス・ポインターが表示されます。

DOSシェル・ウィンドウの各部の説明

DOSシェル・ウィンドウは複数の領域に分かれており、各領域には異った情報が表示されます。デフォルト(省略時値)では、ドライブ・アイコン、現行ドライブのディレクトリー・ツリー、現行ディレクトリーにあるファイル一覧、「メイン」グループに登録されているプログラム項目が画面に表示されます。また、活動タスク・リスト(実行中のプログラムの一覧)を表示させることもできます。

用語解説

デフォルト(省略時値)
最初から決められている標準的な値や状態。

『表示(V)』プルダウンを使うと、表示する領域を選択することができます。

ドライブ・アイコン

ドライブ・アイコンは、使用可能なディスク・ドライブを示します。いずれかのドライブ・アイコンを選択することにより、画面にはそのドライブの情報が表示されます。

ディレクトリー・ツリー

ディレクトリー・ツリーの領域には、現行ドライブ上にあるディレクトリーの構造が表示されます。ドライブ・アイコンを選択すると、そのドライブのディレクトリー構造を反映して、ディレクトリー・ツリーの表示内容が変化します。

DOSシェル・ウィンドウの各部の説明

用語解説

プルダウン
メニュー・バーの機能を拡張したもので、選択したメニュー・バーの選択項目に使用できる、1つまたは複数の選択項目をリスト表示するもの。

ディレクトリー・ツリー、ファイル一覧、またはドライブ・アイコンが選択されているとき、メニュー・バーに『ツリー(T)』プルダウンが表示されます。『ツリー(T)』プルダウンを使って、表示させたいディレクトリー構造のレベルを変更することができます。たとえば、ルート・ディレクトリーのすぐ下にあるディレクトリーだけを表示させたり、現行ドライブにあるすべてのディレクトリーを表示させることもできます。

ファイル・リスト

「ディレクトリー・ツリー」領域の右側には、現行ディレクトリーにあるファイルの一覧が表示されます。現行ディレクトリーとは、ディレクトリー・ツリーの中で選択されているディレクトリーのことです。ディレクトリー・ツリーで別のディレクトリーを選択すると、そのディレクトリーのパスを反映して、ファイル・リスト領域のタイトル・バーの表示が変わり、選択したディレクトリーにあるファイルの一覧がファイル・リストに表示されます。

『オプション(O)』プルダウンを使うと、ファイル・リストの中でファイルを表示する方法を指定することができます。たとえば、『ファイルの表示形式(F)...』を使って、表示するファイルの種類を選択したり、ファイルの一覧を名前やサイズ順に並べ替えることができます。

プログラム・リスト

『表示(V)』プルダウンの『プログラムとファイルのリスト(F)』が選択されている場合、ディレクトリー・ツリーとファイル・リストの下にプログラム・リストが表示されます。プログラム・リストにはDOSシェルから直接起動できるプログラム・アイテムやプログラム・アイテムをまとめたグループ・アイテムが登録されています。

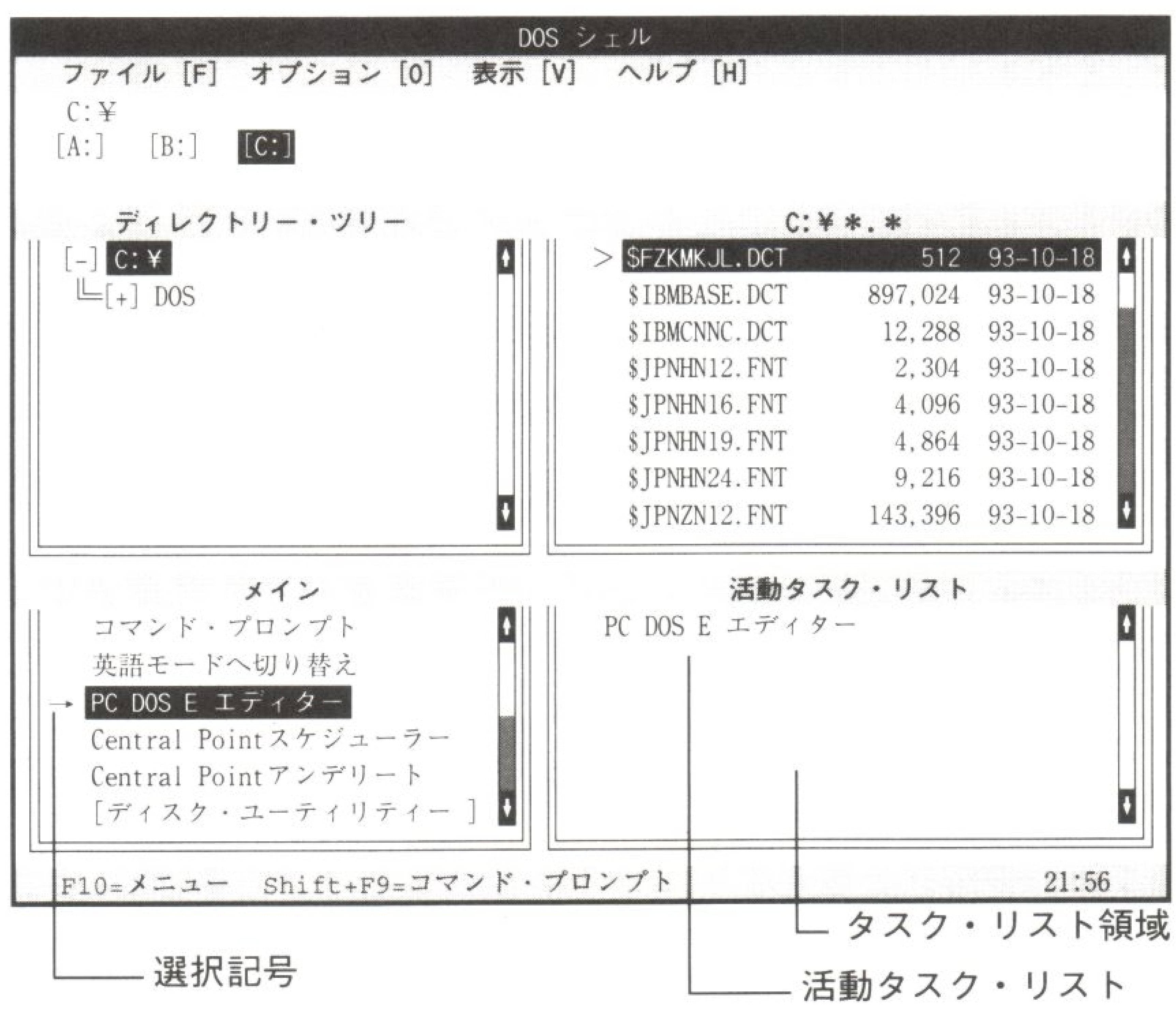
プログラム・グループの1つに「メイン」グループというものがあり、ここに「コマンド・プロンプト」という項目が登録されています。「コマンド・プロンプト」を選択すると、DOSシェルを一時的に終了して、DOSのコマンド行に戻ることができます。

また「英語モードへ切り替え」はDOSを英語モードへ切り替えるためのSWITCHコマンドを実行します。

「メイン」グループには、さらに「ディスク・ユーティリティー」というグループも登録されています。「ディスク・ユーティリティー」の中には複数のプログラム・アイテムが登録されていて、ディスクの保守に役立ちます。このようにプログラム・アイテムをまとめて登録してあるものをグループと呼びます。これらのプログラムを見るには、「ディスク・ユーティリティー」をオープンしてください。

活動タスク・リスト

『オプション(O)』プルダウンの『タスク切り替えの使用(E)』を実行すると、その前にアスタリスク(＊)が表示されます。DOSシェル・ウィンドウには活動タスク・リストが表示されます。



タスク切り替えを使用可にすると、このあと起動したプログラムは、このリストの中に表示されます。このリストから目的のプログラムを選択することにより、プログラムを即座に切り替えることができます。

各領域の選択

DOSシェルの各領域で作業を行うまえに、まず目的の領域を選択する必要があります。カラー・ディスプレイを使用している場合、選択した領域のタイトル・バーの色が変化します。また、モノクロ・ディスプレイの場合、選択した領域の左端に小さな矢印が表示されます。(ドライブ・アイコンを選択しているときには表示されません。)

領域を選択するには目的の領域を選択できるまで、何度か [⇥] を押します。また逆方向に戻すには、[⇧] + [⇥] を押します。

> **参考**
> マウスで選択する場合は、選択したい領域をクリックすれば選択できます。

領域の移動を行うと、選択カーソルまたは選択矢印により、現在選択されているのが、ドライブ・アイコン、ディレクトリー・ツリー、ファイル・リスト、プログラム・リストのうちのどれなのかがわかります。

メニューの操作

> **参考**
> マウスで選択する場合は、メニュー・バーのメニュー名にポインターを合わせて、クリックします。するとプルダウンが表示されます。マウスでメニューの選択を取り消すには、他のメニュー名をクリックするか、メニューの外側をクリックします。

メニューとはユーザーがDOSシェルで実行する機能を選択するところで、その名のとおり、レストランのメニューのようなものです。メニューを選択するには2段階あります。ユーザーはまず、メニュー・バー(ウィンドウの上方にある)からメニュー・バー項目を選択し、さらに開いたプルダウンから実行する機能の項目を選択します。

メニュー・バー項目の選択と解除

メニュー・バーには、『ファイル(F)』、『オプション(O)』、『表示(V)』、『ツリー(T)』、それに『ヘルプ(H)』の各メニューがあります。

1. メニューを選択するには [Alt] または [F10] を押して、選択カーソルをメニュー・バーに移動します。
2. [←] または [→] を押して、選択カーソルを目的のメニューに移動して [↵ Enter] (改行)を押します。

メニューの選択を取り消すには、[Esc] を押します。

ファイルとディレクトリーの操作

DOSシェルは、ファイルやディレクトリーの操作を効率良く行えるようにするためのツールです。DOSシェルの画面では、ディレクトリー、サブディレクトリー、ファイルの一覧が表示されます。

ここでは、DOSシェルを使ってファイルの基本的な操作を行う手順について説明します。

ディスク・ドライブの選択

DOSシェルを始動すると、現行ドライブにあるディレクトリーとファイルの一覧が表示されます。異なるドライブにあるディレクトリーやファイルを使った作業を行うには、現行ドライブを変更する必要があります。

1. 現行ドライブを変更するには [⇥] を何度か押して、ドライブ・アイコンの領域に選択カーソルを移動します。
2. [←] または [→] を使って、目的のドライブ・アイコンに選択カーソルを移動させます。または、[Ctrl] を押しながらドライブ文字のキー([A] キー、[C] キーなど)を押します。
3. [← Enter] (改行)または [Space] を押して、選択カーソルのあるドライブを選択します。

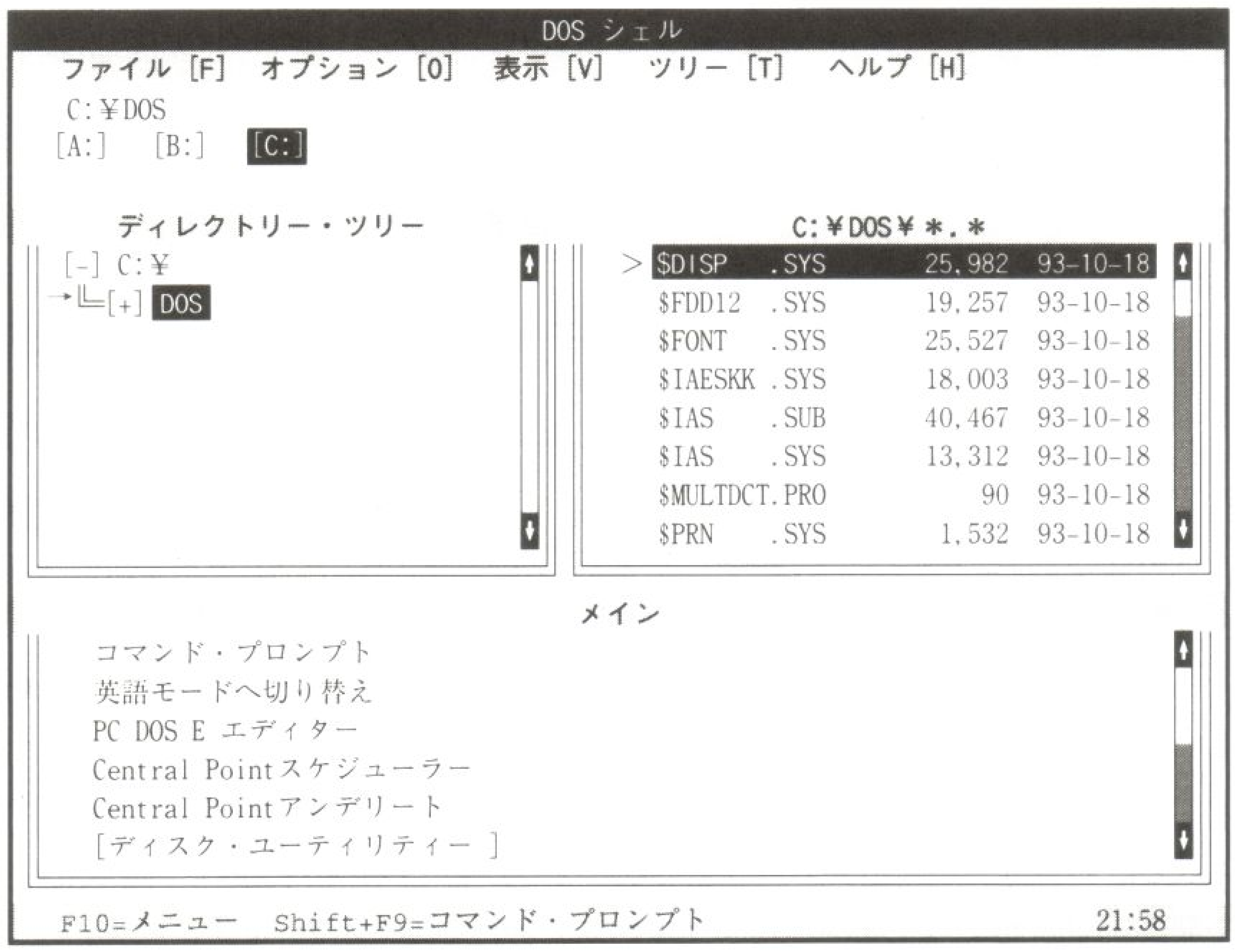
ディスクの内容を読み取っている間、画面には「ディスク情報の読み取り中...」というメッセージが表示されます。

参考

マウスで選択する場合は、目的のドライブ・アイコンをクリックします。

ディレクトリーの変更

現行ディレクトリーは、ディレクトリー・ツリーの中で反転表示されます。1つのドライブで、同時に複数のディレクトリーが現行ディレクトリーになることはありません。



現行ディレクトリーを変更するには、次のキー操作でディレクトリーを選択することができます。

PageDown または PageUp キー

一画面分上下にウィンドウをスクロールして、ディレクトリーを選択できます。

↑ または ↓ キー

1つ上、または1つ下にあるディレクトリーを選択できます。

Home キー

ルート・ディレクトリーを選択できます。

End キー

ディレクトリー・リストの最後にあるディレクトリーを選択できます。

ディレクトリー名の先頭文字のキー

その文字で始まるディレクトリーを選択できます。

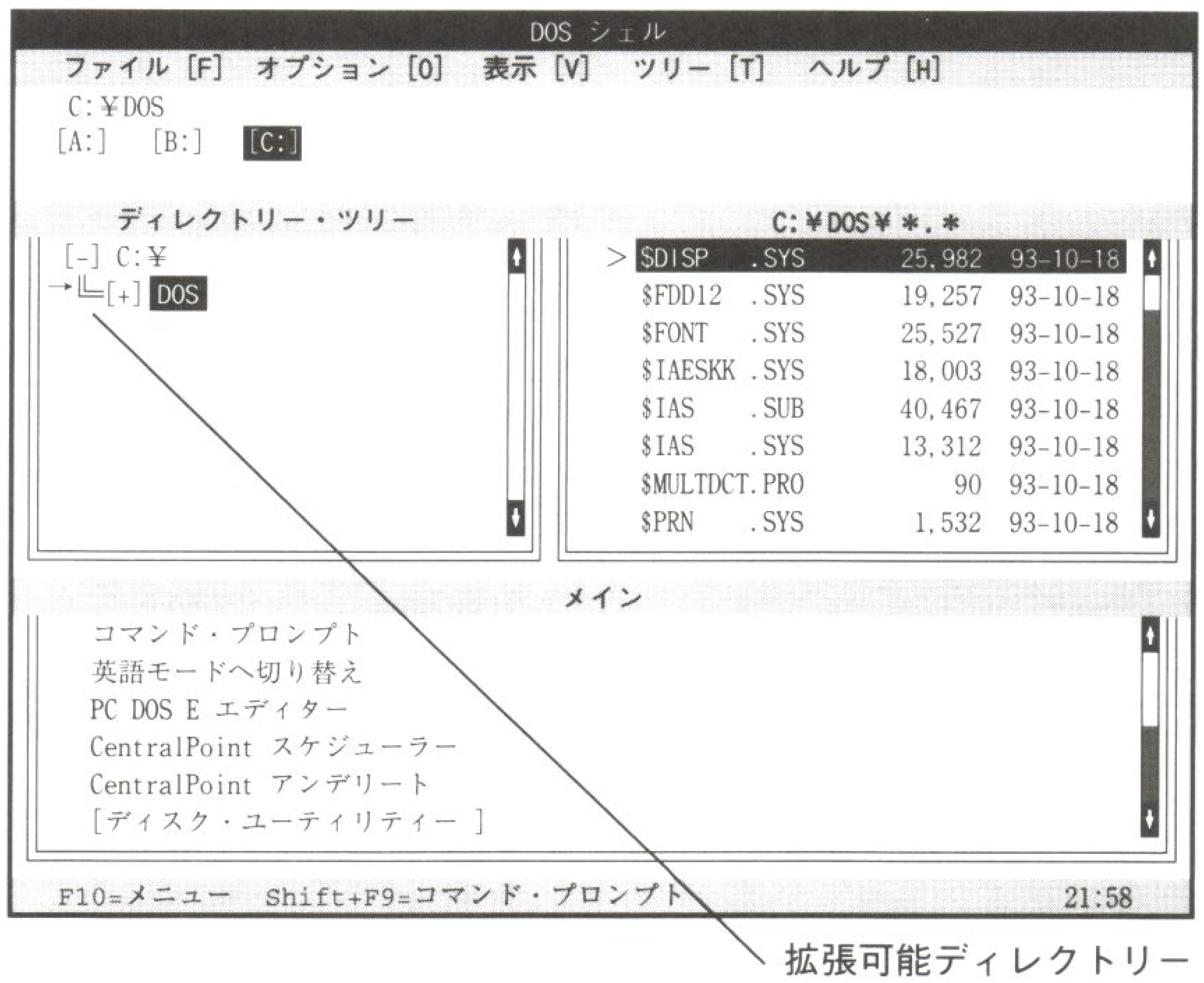
参考

マウスで選択する場合は、現行ディレクトリーにしたいディレクトリーの名前をクリックします。

ディレクトリーの拡張

DOSシェルを始動すると、現行ディスク上にある最初のレベルのディレクトリーが表示されます。『ツリー(T)』プルダウンの項目を利用すると、画面に表示されるディレクトリーのレベルを変更することができます。『ツリー(T)』プルダウンは、ディレクトリー・ツリー、ファイル・リスト、またはドライブ・アイコンを選択したときに表示されます。

次の図では、2つのディレクトリー名の先頭にプラス記号(+)が表示されています。このプラス記号は、そのディレクトリーの下にさらにサブディレクトリーがあることを示します。



このプラス記号をクリックすると、サブディレクトリーを表示させることができます。この操作をディレクトリーの拡張と呼びます。『ツリー(T)』プルダウンを利用して、特定のツリーに対して1レベルのみの拡張、または全レベルまで拡張、または全ツリーの拡張を行えます。ディレクトリーを拡張するとプラス記号がマイナス記号(−)に変わります。

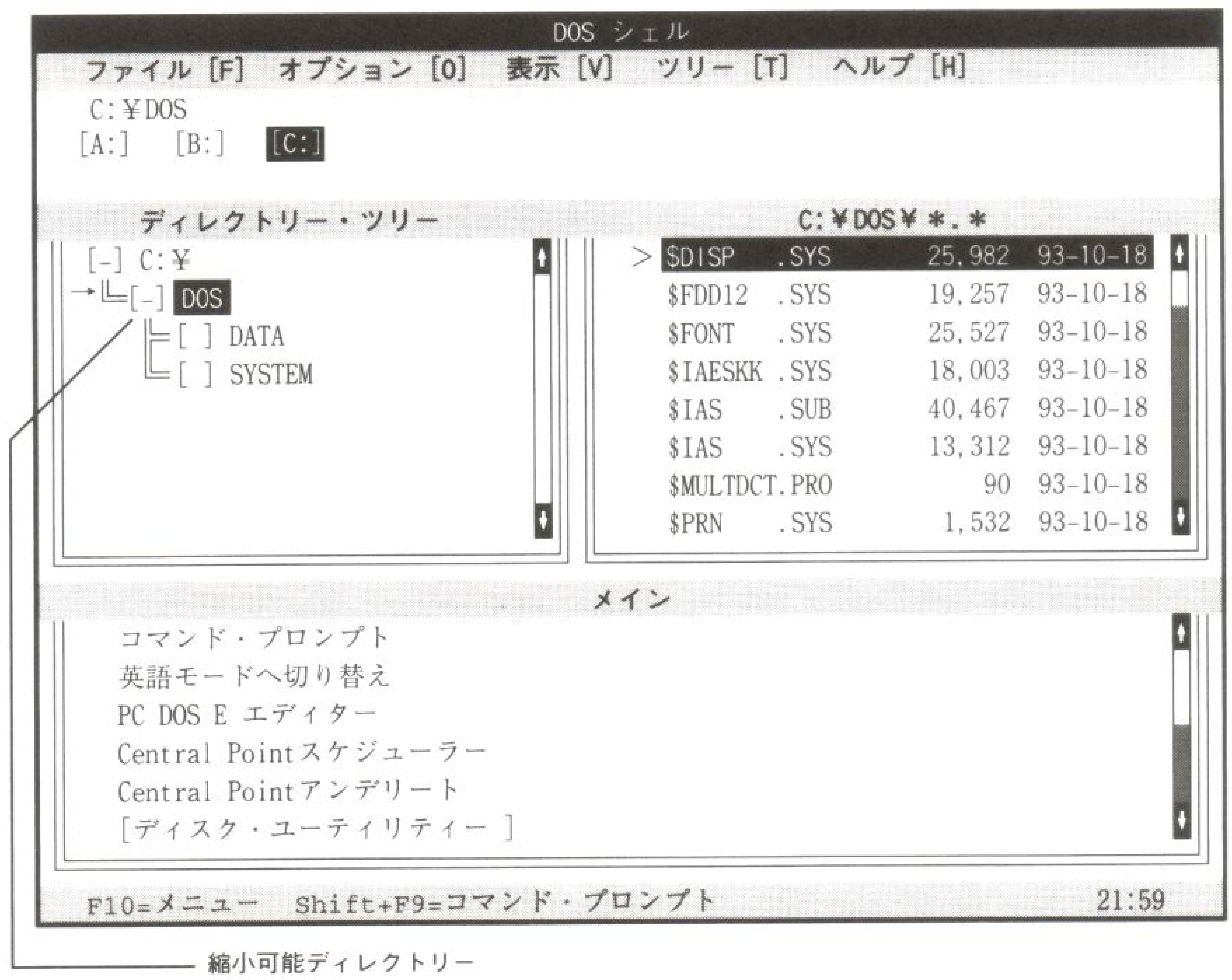
参考

マウスで選択する場合は、拡張したいディレクトリー名の先頭にあるプラス記号(+)をクリックします。

1. ディレクトリーを1レベルだけ拡張するには、[↑]または[↓]キーを使って、拡張したいディレクトリーを選択します。
2. 『ツリー(T)』プルダウンから『1レベルのみ拡張(X)』を選択します。または、[+](プラス)キーを押します。

ディレクトリーの縮小

サブディレクトリーの構造を見終わったら、最初のレベルのディレクトリー名だけが表示される状態に戻すことができます。これをディレクトリーの縮小と呼びます。ディレクトリー名の先頭にマイナス記号(－)が表示されていれば、そのディレクトリーは縮小できることを示しています。DOSシェルを始動した時点では、ルート・ディレクトリーを除くすべてのディレクトリーが縮小された状態になっています。



1. [↑] または [↓] キーを使って、縮小したいディレクトリーを選択します。

2. 『ツリー(T)』プルダウンから『ツリーの縮小(C)』を選択します。あるいは、[－] (マイナス)キーを押します。

ファイルの選択

ファイルの操作を行う前には、まず対象となるファイルを選択する必要があります。

ディレクトリー内のファイルを選択するには、次のキー操作でファイルを選択できます。

[↑] または [↓] キー

現在選択されているファイルの上または下に表示されている

参考

マウスで選択する場合は、縮小したいディレクトリー名の先頭にあるマイナス記号(－)をクリックします。

参考

マウスで選択する場合は、ファイル名をクリックします。

複数ファイルを選択するには、[⇧] + [F8] を押します。画面下の状況域にADDと表示されたら、[↑] または [↓] キーで選択したいファイル名までカーソルを移動し、[Space] キーを押して選択します。これを繰り返して複数のファイルを選択できます。選択と解除は [Space] キーで交互に選べます。

ファイルを選択できます。

Home キー、Ctrl + Home キー

ファイル一覧の先頭にあるファイルを選択できます。

End または Ctrl + End キー

ファイル一覧の末尾にあるファイルを選択できます。

ファイル名の先頭文字のキー

その文字で始まる最初のファイルを選択できます。

プログラムを操作する

DOSシェルの最大の特徴の1つに、個々のプログラムを終了せずに複数のプログラムを切り替えながら実行できる機能があります。複数のプログラムを実行するとき、それらはシステムの設定に合わせて、さまざまな方法でシステム資源を使用します。

DOSシェルはまた、複数のプログラムをいくつかのプログラム・グループ(以後、グループと略す)に分類するためのツールとしても利用できます。あるプログラムをグループに追加する場合、プログラムを始動するときに必要となる情報を指定(関連づけ)する必要があります。たとえば、プログラム・ファイルのCOMMAND.COMは、名前(コマンド・プロンプト)および始動コマンド(COMMAND)と関連づけられます。グループに登録された個々のプログラムをプログラム・アイテムと呼びます。

プログラム・グループの表示

「メイン」グループは、最初にDOSシェルを始動したとき、プログラム・リストに表示されるプログラム・グループです。

「メイン」グループには、「コマンド・プロンプト」などのプログラム・アイテムが含まれており、さらに「ディスク・ユーティリティー」というプログラム・グループも含まれています。

プログラム・グループの表示

グループ内の各アイテムを画面で見るには、そのグループがオープンされている必要があります。たとえば、「ディスク・ユーティリティー」グループの項目を見るには、まずこのグループをオープンしてください。

参考
マウスで選択する場合は、グループ名をダブルクリックします。

プログラム・グループをオープンするには、↑ または ↓ キーを使って、オープンしたいグループを選択して ↵ Enter (改行)を押します。オープンしたグループをクローズするには、別のグループをオープンしてください。

プログラムの始動

プログラムを始動するには、次の4通りの方法があります。

・プログラム・グループからプログラム・アイテムを選択する方法
・ファイル・リストからプログラム・ファイル、またはプログラムと関連づけられているファイルを選択する方法
・『ファイル(F)』プルダウンから『実行(R)...』を選択し、プログラム・ファイルの名前を入力する方法
・「メイン」グループから「コマンド・プロンプト」を選択し、コマンド行にプログラム・ファイルの名前を入力する方法

以下に、それぞれの始動方法について順に説明します。

プログラム・グループからの始動

目的のプログラムがプログラム・リストに表示されているグループの中にある場合、そのプログラムを始動するもっとも簡単な方法は、リストの中からそれを選択することです。

1. プログラム・グループからプログラムを始動するには、始動したいプログラムを含むグループをオープンします。
2. ↑ または ↓ キーを使って、目的のプログラムを選択します。
3. ↵ Enter キーを押します。

参考
マウスで選択する場合は、始動したいプログラムを含むグループをオープンし、プログラム名をダブルクリックします。

ファイル・リストからの始動

実行するプログラムがプログラム・グループに登録されていない場合は、ファイル・リストからプログラム・ファイルを選択して、目的のプログラムを始動することもできます。プログラム・ファイルには、COM, EXE, BATのいずれかのエクステンションが付いています。

参考

マウスで選択する場合は、始動したいプログラムのあるディレクトリーを選択し、ファイル・リストでプログラム・ファイルの名前をダブルクリックします。

1. [→|] を押して、ディレクトリー・ツリーに選択カーソルを移動します。
2. [↑] または [↓] キーを使って、始動したいプログラムのあるディレクトリーを選択します。
3. [→|] を押して、ファイル・リストに選択カーソルを移動します。
4. [↑] または [↓] キーを使って、プログラム・ファイルの名前を選択します。
5. [← Enter] (改行)を押します。

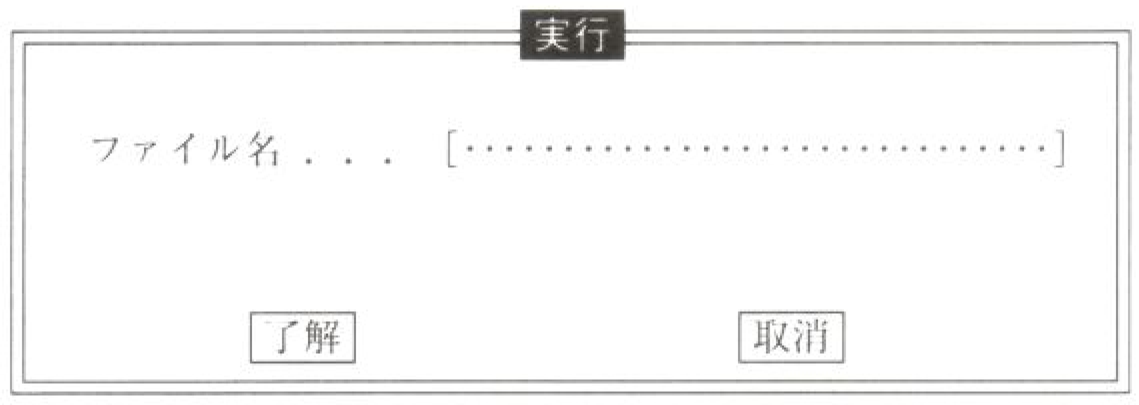
メニューからの始動

メニューの『実行(R)...』を使って、プログラムを始動することもできます。この方法を使う場合は、あらかじめ、そのプログラム・ファイルがどのディレクトリーにあるのか、また正しいファイル名を調べておく必要があります。たとえば、始動するプログラムがEDLINコマンドである場合このプログラムを始動するファイルは"EDLIN.COM"で、通常このファイルは、C:¥DOSディレクトリーにあります。この場合、「実行」ポップアップの入力フィールドには、C:¥DOS¥EDLIN.COMと入力してください。

『実行(R)...』を使って、プログラムを始動するには、『ファイル(F)』プルダウンから『実行(R)...』を選択します。

「実行」ポップアップが表示されます。

メニューからの始動



1. 入力フィールドにプログラム・ファイルのパスとファイル名を入力します。
2. [了解]を選択します。

プログラムの切り替え

タスク切り替えを使用可にすると、複数のプログラムを切り替えながら作業を進めることができます。

タスク切り替えを使用可にするには、『オプション(O)』プルダウンから『タスク切り替えの使用(E)』を選択します。プルダウンの項目名の先頭にアスタリスク(∗)が付き、活動タスク・リストが表示されます。

活動タスク・リストには、タスク切り替えを使用可にした後で始動したプログラムの名前が表示されます。プログラムの実行を終了すると、その名前は活動タスク・リストから消えます。

注意

ホストの端末エミュレーション・プログラムの種類によっては、タスク切り替え機能とともに実行できないものがあります。このようなプログラムをタスク切り替え機能とともに実行すると、使用中のシステムとホストとの接続が切断されたり、データを失う原因となりますので注意してください。

1. 複数のプログラムを実行するには、ファイル・リストまたはプログラム・リストでプログラム・ファイルの名前をダブルクリックして、最初のプログラムを始動します。もう一つの方法として、↑ または ↓ キーを使い、プログラム名を選択して ↵ Enter (改行)を押します。プログラムの画面が表示されます。
2. Ctrl + Esc を押して、DOSシェルに戻ります。
3. 別のプログラムを始動します。

   プログラムからDOSシェルに切り替えるには、Ctrl + Esc を押します。または、画面上端に"DOSシェル"という名前が表示されるまで、Alt を押しながら繰り返し ⇥ を押します。DOSシェルに戻るには、Alt を離します。

プログラムの終了

タスク切り替えが使用可になっている場合、同時に複数のプログラムを実行でき、始動したプログラムの名前は、活動タスク・リストに表示されます。活動タスク・リストからプログラムを削除するには、プログラムを終了させる必要があります。

参考

実行に失敗したプログラムがDOSの実行に悪影響を与えることがあります。このような場合は、DOSシェルを終了して、システムを再始動してください。

1. タスク・リストに表示されているプログラムを終了させるには、DOSシェルから終了させたいプログラムに切り替えます。
2. プログラム独自の終了コマンドを使って、プログラムを終了させます。

(コマンド・プロンプトを実行している場合は、EXITと入力して ↵ Enter (改行)を押すと、DOSシェルに戻ることができます)

1. 実行に失敗したプログラムを終了させるには、DOSシェルに切り替えます。
2. 活動タスク・リストから終了させたいプログラムを選択します。
3. 『ファイル(F)』プルダウンから『削除(D)...』を選択します。または、 Delete を押します。

プログラムとファイルの関連づけ

特定のアプリケーション・プログラムで処理する一連のファイルがある場合、プログラムとそれらのファイルとを関連づけることにより、プログラムの始動と、ファイルの読み込みの時間を節約することができます。これにより、関連づけられたファイルをオープンすると、プログラムが始動して自動的にそのファイルが読み込まれます。

プログラムとファイルとの関連づけは、ファイルのエクステンションごとに行います。

たとえば、Eエディターを使う場合を考えてみましょう。Eエディターのテキスト・ファイル用に.TXTというエクステンションを使用する場合、Eエディターのプログラム・ファイルとエクステンション.TXTを持つすべてのファイルを関連づけることができます。これにより、TXTファイルをオープンする

プログラムとファイルの関連づけ

たびに、Eエディターを自動的に始動して、その.TXTファイルをEエディターの作業領域に読み込みます。

1つのプログラムに関連づけることのできるエクステンションの数に制限はありません。ただし、スペースを含め、全体の文字数が79文字を超えることはできません。また、エクステンションの前のピリオドは入力しないでください。また、1つのエクステンションを同時に複数のプログラムに関連づけることはできません。たとえば、エクステンション.TXTを、Eエディターとその他のテキスト・エディターに同時に関連づけることはできません。

1. ファイルをプログラムと関連づけるには、関連づけたいプログラムのあるディレクトリーを選択します。
2. ファイル・リストからプログラムの名前を選択します。
3. 『ファイル(F)』プルダウンから『関連づけ(A)...』を選択します。

   「ファイルの関連づけ」ポップアップが表示されます。



4. 「エクステンション」フィールドに、選択したプログラムと関連づけたいエクステンションを入力します。エクステンションの前にピリオドを入力する必要はありません(半角のスペースで区切って、複数のエクステンションを指定することもできます)。
5. [了解]を選択します。

❶ ファイルとプログラム間の関連づけを削除するには、関連づけを削除したいファイルを選択します。

❷ 『ファイル(F)』プルダウンから『関連づけ(A)...』を選択します。

「ファイルの関連づけ」ポップアップが表示され、入力フィールドにプログラム名が表示されます。

❸ BackSpace を押して、プログラム名を削除します。

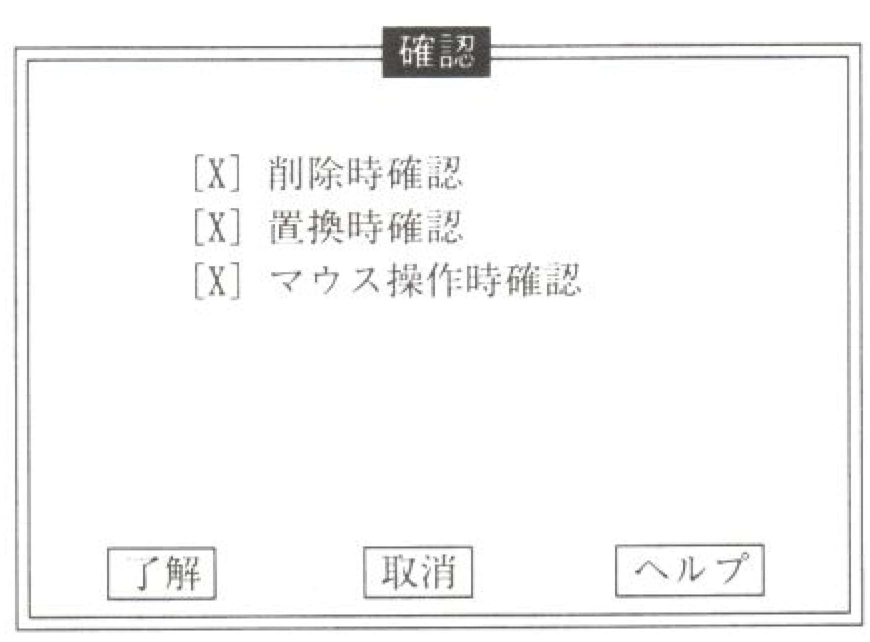
❹ [了解]を選択します。または、↵ Enter (改行)を押します。

確認メッセージを省略する

ファイルやディレクトリーを削除したり置き換えたりするたびに、いちいち確認のポップアップを表示させたくない場合は、確認メッセージの設定を変更することができます。また、マウスを使用しているときに表示される確認メッセージを省略することもできます。

❶ 確認メッセージを省略するには、『オプション(O)』プルダウンから『確認(C)...』を選択します。

「確認」ポップアップが表示されます。



❷ 省略したい確認メッセージに対応するオプションの選択を取り消します。該当するチェック・ボックスを、マウスでクリックするか、↑ または ↓ キーを使って選択した後、Space を押して、ボックス内の×印を消します。

❸ [了解]を選択します。
各オプションが選択されているとき、次のようなメッセージが表示されます。

確認メッセージを省略する

オプション	メッセージ
[削除時確認]	ファイルを削除するまえに削除しても良いかどうかを問い合わせるポップアップが表示されます。
[置換時確認]	既存のファイルを置き換えるまえに置き換えても良いかどうかを問い合わせるポップアップが表示されます。
[マウス操作時確認]	マウスを使って、複写、ドラッグ、移動のような操作を実行するまえに、確認のポップアップが表示されます。

ヘルプの使い方

オンライン・ヘルプは、メニューやプルダウン、ポップアップ、ポップアップのオプションの使い方や操作手順など、DOSシェルの基本操作に関する情報を調べるために利用できます。オンライン・ヘルプは、次の3つの方法のいずれかにより使うことができます。

・ F1 キーを押す方法
・ポップアップ内にある[ヘルプ]ボタンを選択する方法
・『ヘルプ(H)』プルダウンを利用する方法

1 メニュー項目に関するヘルプを見るには、Alt を押します。

2 ← または → キーを押して、ヘルプが必要なメニュー項目を選択します(たとえば『ファイル(F)』)。

3 F1 キーを押します。

選択した項目に関するヘルプ情報が表示されます。

1 プルダウン項目に関するヘルプを見るには、Alt キーを押して、メニュー・バーに選択カーソルを移動します。

2 ← または → キーを使って、目的のプルダウン項目を含むメニュー項目を選択し、↵ Enter (改行)を押します。

参考

マウスでヘルプを表示するには、目的のプルダウン項目が含まれるメニュー項目をクリックします。(たとえば『ファイル(F)』)次に、ヘルプが必要なプルダウン項目を、クリックします。(たとえば『複写(C)』)最後に『ヘルプ』をクリックします。

❸ [↑] または [↓] キーを使って、ヘルプが必要なプルダウン項目を選択します。

❹ [F1] キーを押します。

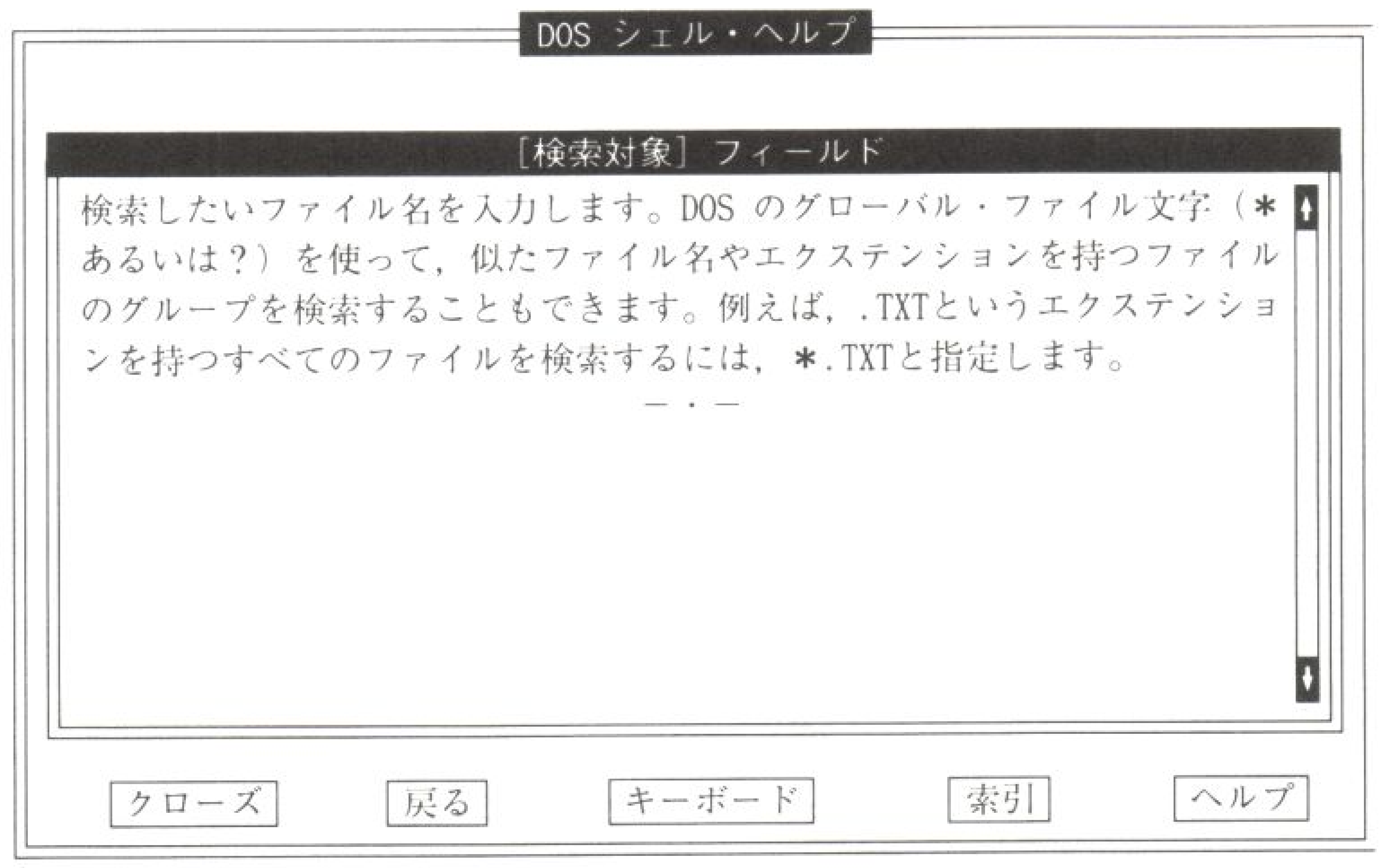
選択した項目に関するヘルプ情報が表示されます。

❶ ポップアップに関するヘルプを見るには、ヘルプが必要なポップアップをオープンします。

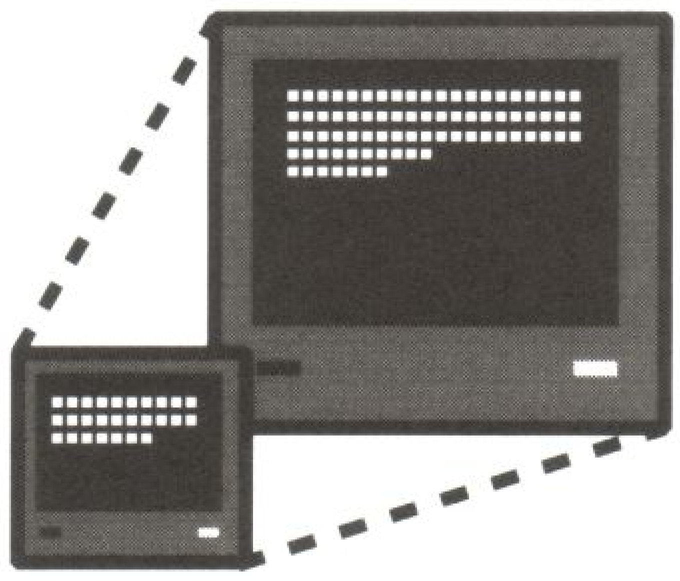
❷ ヘルプが必要なボタン、またはフィールドをクリックします。あるいは、[→|] または矢印キーを押して、そこに選択カーソルを移動します。

❸ [F1] キーを押します。

たとえば「ファイルの検索」ポップアップで、「検索対象」フィールドを選択して [F1] キーを押すと、DOSシェルは次のようなヘルプ・ポップアップを表示します。



VGA画面でのV-Textの使い方



PC DOS J6.3/Vに標準搭載されたVGA用のV-Textを使用すると、通常80桁×25行しか表示できなかった画面で、最大106桁×40行、最小40桁×15行の文字表示が行えます。ここではその設定方法と使い方を説明します。

VGA用のV-Textでは高密度テキスト·モードと拡大テキスト·モードをサポートします。高密度テキスト·モードでは1行の文字は標準と同じで、画面の行数のみ可変の縦長画面(80×多行)と、1画面の行数と桁数がともに可変のワイド画面(多桁×多行)があります。1画面に表示できる文字数が多いので、一度に見ることができる情報が多く、編集作業などの効率を高めることができます。エディターやスプレッドシートなどのアプリケーションで効果を発揮します。また、拡大テキスト·モードでは、桁数、行数を標準より小さくできるので(そのため、大きい文字を表示)、超小型LCDなどで、より高い視認性を提供することができます。

VGA用のV-Textドライバーを組み込むには、次のように入力して、[← Enter](改行)を押してください。

```
dspxvga
```

すると以下の画面が表示されます。

```
DSPXVGA Version 2.10 が導入されました。
```

さらにV-Text画面を設定するには次のように入力して、[← Enter](改行)を押してください。

```
dspx
```

すると次の画面が表示されます。

参考

テキスト·バッファー·サイズが足りない場合には、その旨のメッセージが出ます。この場合は次節の『DOS/Vカスタマイジング·ユーティリティーの使い方』を参照して設定を行ってください。

参考

縦長テキスト・モードでは、16ドットのフォントを縦方向にのみ圧縮して、12ドットのフォントを表示します。(桁数は80行のままです。)これに対してワイド・テキスト・モードでは12ドットのフォントを使用して106桁×34/40行を実現します。
拡大テキスト・モードでは24ドットのフォントを利用するか、16ドットのフォントを2倍して32ドットを表示します。
12ドットフォントおよび24ドットフォントは次節で説明する「DOS/Vカストマイジング ユーティリティー」でそれぞれ使用可能に設定されていなければ、これらのフォントを利用する画面モードは表示されません。それぞれのフォント・ファイル名は
$JPNHN12.FNT
(半角12ドット)
$JPNZN12.FNT
(全角12ドット)
$JPNHN24.FNT
(半角24ドット)
$JPNZN24.FNT
(全角24ドット)
です。

===== テキスト・モード設定 =====

↑・↓キーでカーソルを移動し、Enter（改行）キーを押してください。

標準テキスト・モード	**80桁×25行**
縦長テキスト・モード	80桁×34行
ワイド／拡大テキスト・モード	106桁×34行

F1:ヘルプ　F3:終了　F5:詳細表示　F10:設定変更

カーソルで好みのテキスト・モードを選択して ↵ Enter (改行)を押すと、テキスト・モードが切り換わります。F10 キーを押すと、それぞれの画面モードで桁数および行数の変更ができます。

===== テキスト・モード設定 =====

↑・↓キーでカーソルを移動し、Enter（改行）キーを押してください。

ワイド／拡大テキスト・モード　設定変更

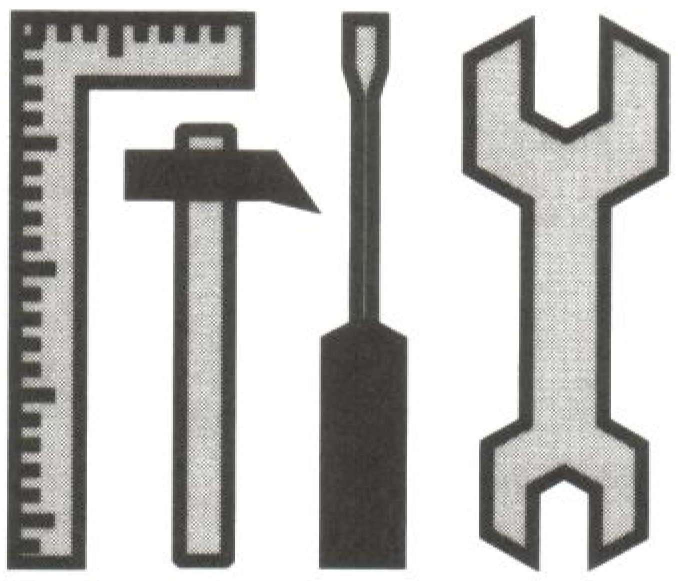
桁数×行数	フォント・サイズ	文字ボックス	画面解像度
80×34	8×12	8×14	640×480
80×40	8×12	8×12	640×480
106×34	6×12	6×14	640×480
106×40	6×12	6×12	640×480
52×20	12×24	12×24	640×480
40×15	16×32	16×32	640×480

このテキスト・モードを無効にする

ESC:前画面　F1:ヘルプ　F3:終了

↵ Enter (改行)を押すと、テキスト・モード設定画面に戻ります。もう一度確認して ↵ Enter を押してください。実際にV-Textを体験するためには、Eエディターを始動することで、より確実に確認ができます。

DOS/Vカスタマイジング・ユーティリティーの使い方

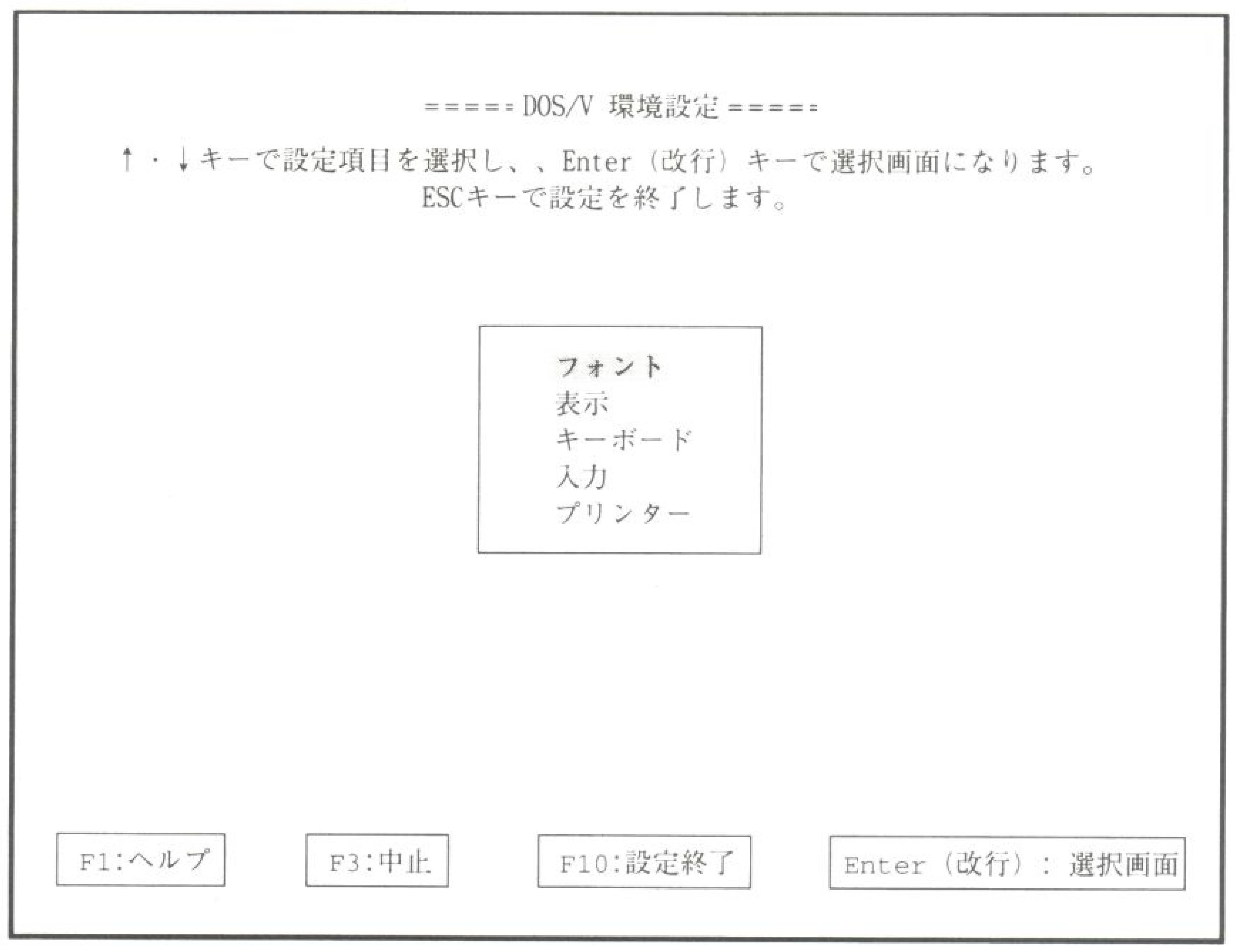


PC DOS J6.3/VではDOS/Vの環境設定は、カスタマイジング・ユーティリティーを使って簡単に変更ができるようになりました。ここではこのプログラムの使い方について説明します。

カスタマイジング・ユーティリティーを始動するには、以下のコマンドを入力して ↵Enter (改行)を押します。

```
setupv
```

初期画面は次のように表示されます。



ここに表示されているように、「フォント」、「表示」、「キーボード」、「入力」、「プリンター」と大きく5つに分けられた項目が設定できます。最初にフォントの設定に関連して、V-Textの設定を解説します。

参考

SETUPV.EXEで変更した項目はDOSV.INIというファイルに書き込まれ、以降はDOSの始動時に参照されます。

V-Textの設定方法

導入直後はデフォルトでは12ドット・フォントが使えないようになっています。通常V-Textを使わないユーザーの、メモリー消費を少なくするためです。そのため、V-Textで12ドットを使用し、画面に最大横106文字、縦40行で文字表示を実現したい場合は、このカスタマイジング・ユーティリティーで12ドット・フォントを使えるように、変更する必要があります。

12ドット・フォントを使用するには、初期画面から【↑】や【↓】キーを使って、「フォント」を選択し、【← Enter】(改行)を押します。次の画面が表示されます。

===== DOS/V 環境設定 =====

↑・↓キーで設定項目を選択し、、Enter（改行）キーで選択画面になります。
ESCキーでひとつ前の画面に戻ります。

フォント	現在の設定
フォント・パス	C:
12ドット半角フォント	**使用しない，...**
12ドット全角フォント	使用しない，...
16ドット半角フォント	使用する（ROM優先），...
19ドット半角フォント	使用する（ROM優先），...
16ドット全角フォント	使用する（ROM優先），...
24ドット半角フォント	使用しない，...
24ドット全角フォント	使用しない，...
16ドット・ユーザー定義フォント	使用する，...
24ドット・ユーザー定義フォント	使用する，...
ユーザー定義文字の範囲	F040，...
アクセス方式	自動判定

ESC:前画面　F1:ヘルプ　F3:中止　F10:設定終了　Enter（改行）：選択画面

ここで12ドット・フォントを使用するには、【↑】や【↓】キーを使って、「12ドット半角フォント」を選択し、【← Enter】(改行)を押して選択画面に移り、「使用します」を選択します。同様に「12ドット全角フォント」も「使用します」にします。

【Esc】キーで「フォント」の設定を抜け、さらに同様な選択方法で「表示」の「テキスト・バッファー・サイズ」を16,960に設定します。【F10】キーを押すと設定終了です。設定保存の確認メッセージが表示されたら【← Enter】(改行)を押します。そして、システムの再始動のメッセージが表示されたら【Y】キーを押してください。(他の設定変更を続けて行う場合は、ここ

参考

テキスト・バッファー・サイズは最大106桁で40行に設定するには、106桁×40行×4バイト=16,960バイトになります。初期設定値は13,056バイトになっています。

注意

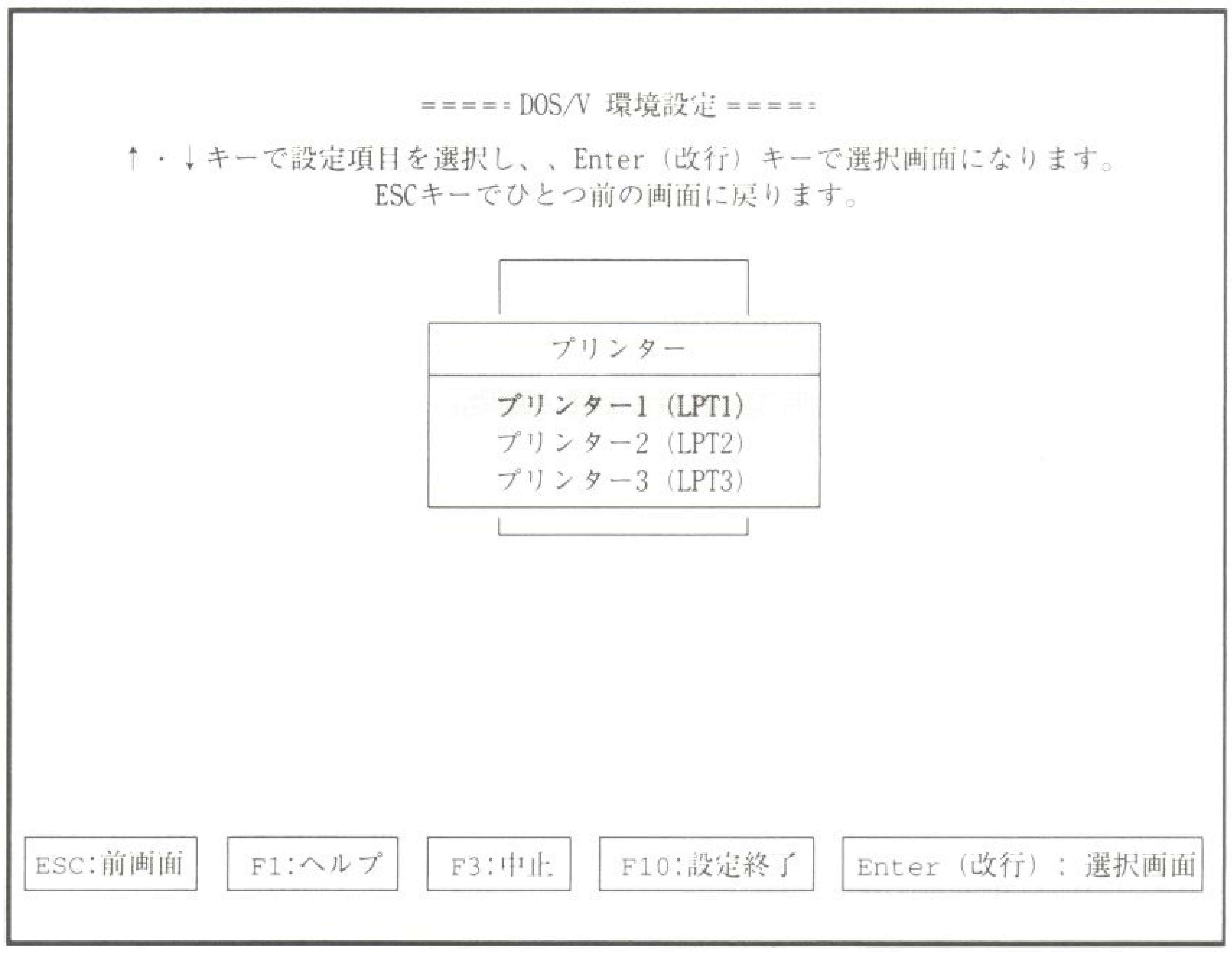
24ドットフォントを拡大テキスト・モードで使用する場合には全角のフォント・ファイルが$JPNZN24.FNTである必要があります。$JPNZN24.IBMは印刷時にしか使用されません。

V-Textの設定方法

で N キーを押してください。)これでDSPXコマンドで12ドット・フォントが使えるようになります。24ドット・フォントを利用する場合にも同様の操作を行ってください。

プリンターの切り替え方

次に「プリンター」での選択例として、ESC/PプリンターをIBMプリンターに切り替える場合を例に説明します。初期画面から「プリンター」を選択すると、次の画面が表示されます。



「プリンター1(LPT1)」、「プリンター2(LPT2)」、「プリンター3(LPT3)」の3つが選択できるようになっています。これらはパラレル・ポートの論理番号を示しています。通常ローカルなプリンターは「プリンター1(LPT1)」に接続されている場合が多いので、ここではLPT1に接続されているプリンターを切り替えます。

↑ や ↓ キーで「プリンター1(LPT1)」にカーソルを移動し、← Enter (改行)を押します。さらに次のようなパネルが表示されます。(現在、日本語ESC/Pに設定されている場合の例です。)

プリンター1（LPT1）	現在の設定
プリンター・ドライバー	日本語ESC/Pプリンター
ドライバー状況	活動状態
予約ユーザー定義文字コード	777E
コードの並び替え	オフ

ここで「プリンター・ドライバー」の「日本語 ESC/P**プリンター」にカーソルを移動し [Enter] (改行)を押すと、次のようなプルダウンが表示されます。

```
プリンター・ドライバー
  なし
  IBM PS/55プリンター
  日本語FSC/Pプリンター
  英語プリンター (IBM PS/55プリンター・エミュレーション)
  英語プリンター (日本語ESC/Pプリンター・エミュレーション)
  HP LaserJet (IBM PS/55プリンター・エミュレーション)
  HP LaserJet (日本語ESC/Pプリンター・エミュレーション)
```

ここでカーソルを「IBM PS/55プリンター」に移動し [Enter] (改行)を押すと「プリンター・ドライバー」が「IBM PS/55プリンター」に変わります。IBM 5575/5577系24ドット・プリンター以外をお使いの方は、プリンター・タイプを同様にしてご使用のプリンターに合わせて選択してください。

最後に[F10]キーを押して設定を終了します。以降、LPT1に接続された日本語のIBM製プリンターが使用できます。

注意

ご使用のプリンターの機種によっては、初期画面で「フォント」を選択して、必要となるフォントを使用可能な状態にする必要があります。以下に必要なフォントをしめします。

IBM PS/55プリンターおよび日本語ESC/Pプリンター:
$JPNZN24.IBMまたは
$JPNZN24.FNT

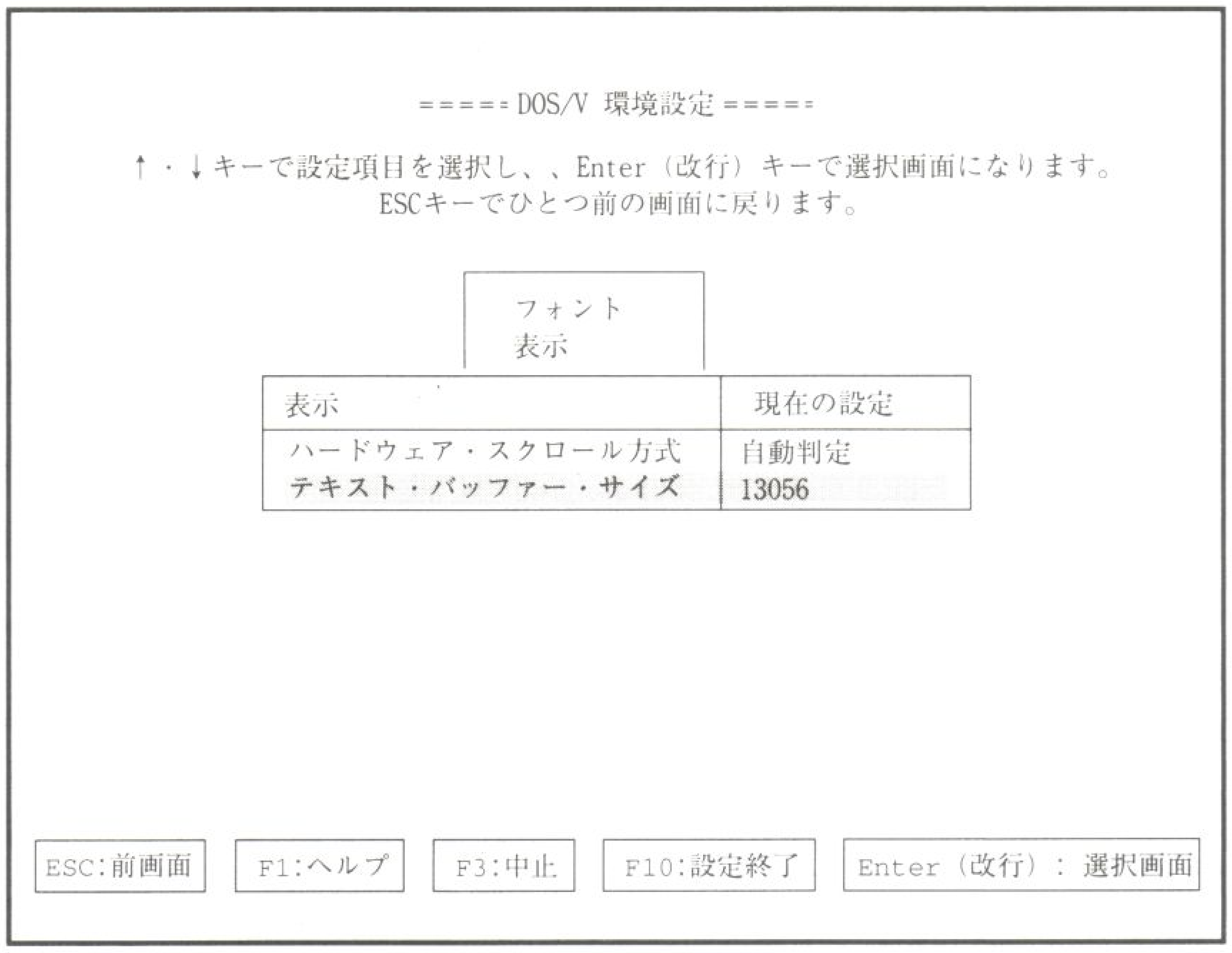
英語プリンターすべて: $JPNHN24.FNT,$JPNZN24.FNT

その他のオプションについて

ここではその他に設定できるオプションについて説明します。

表示

「表示」を選択すると、次のような画面が表示されます。



「画面スクロール」は通常、自動に設定しておいてください。画面スクロールが乱れる場合に、この設定を変更すると直る場合があります。また「テキスト・バッファー・サイズ」は、DOS/V Extensionなどのプログラムが自動的に設定する場合もあります。

キーボード

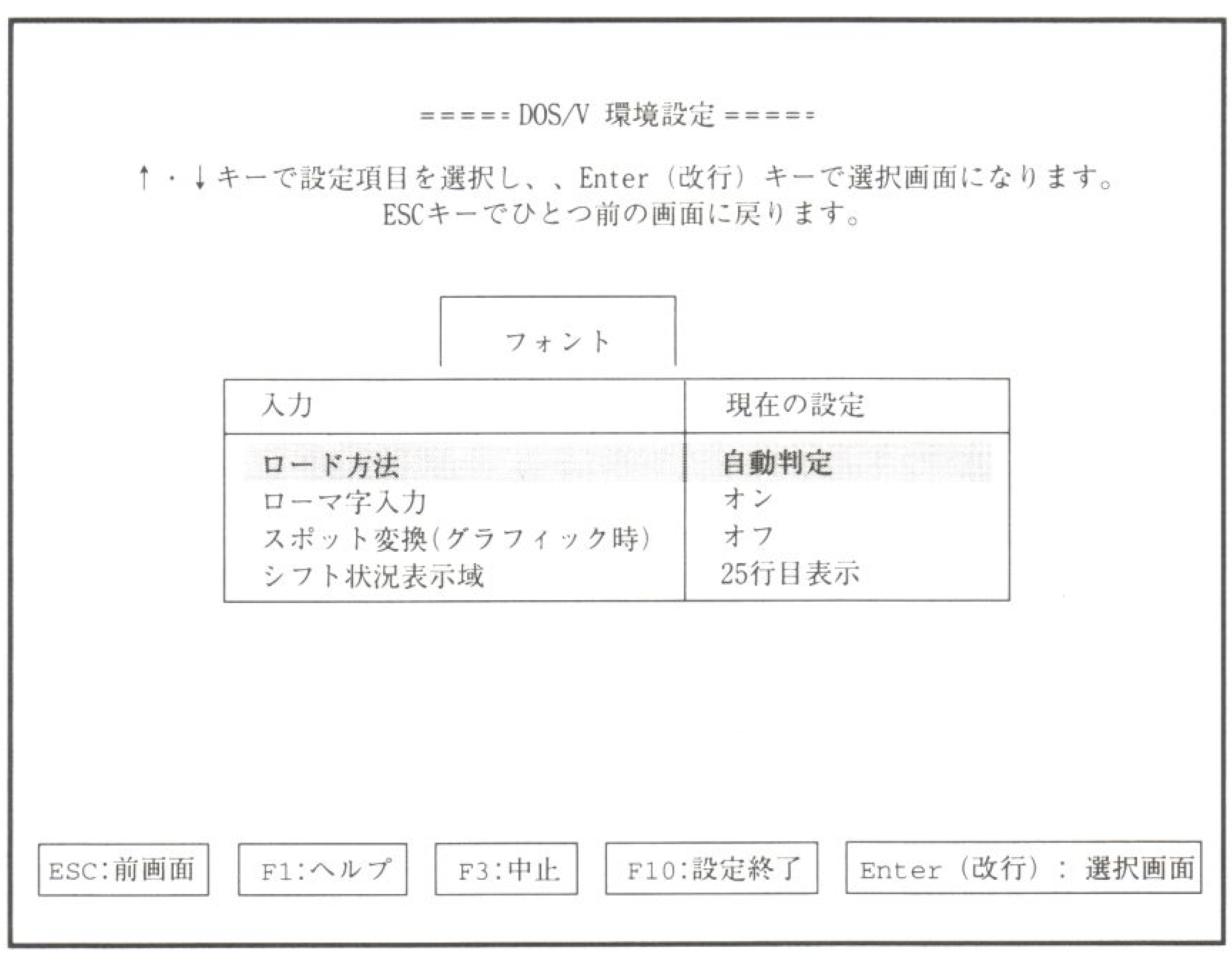
「キーボード」を選択すると、次のような画面が表示されます。



ここではキーボードの「キーボードの種類」が変更できます。たとえば日本語キーボードから米国英語キーボードに切り替えた場合に設定します。

入力

「入力」を選択すると、次のような画面が表示されます。



4章 DOSの基本操作入門

入力

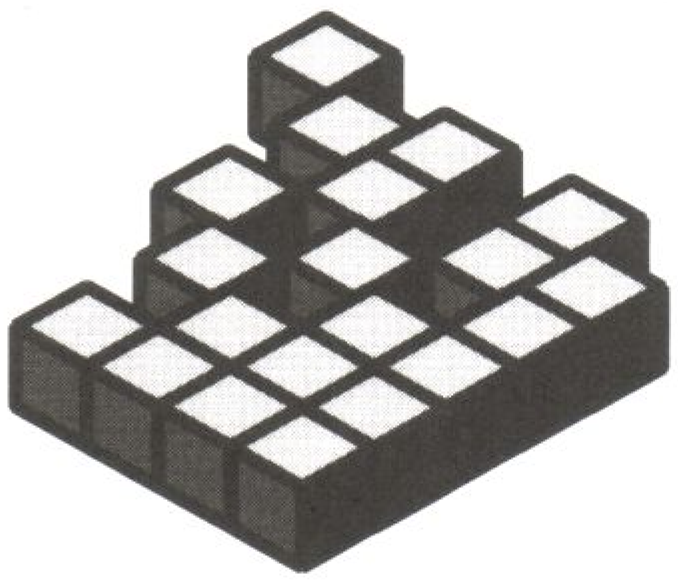
「ロード方法」とはDOSの始動時に$IAS.SYSをEMSメモリーに読み込むかどうかの設定です。「自動」に設定しておけば、EMSメモリーが確保できる場合のみEMSメモリーに読み込みます。「基本メモリー」を選択すると、EMSメモリーが確保できる場合でも基本メモリーに読み込みます。

「ローマ字入力」はデフォルトでは「オン」になっていますが、ひらがな入力でお使いになりたい場合には「オフ」にすると、次回始動時からはローマ字入力が無効になります。

「スポット変換(グラフィック時)」は、たとえばDOSシェルでグラフィック表示を選択しているような場合に、スポット変換をするかどうかの設定です。「オフ」にすると定位置変換になります。

「シフト状況表示域」は画面最下段の漢字入力状況などの表示するエリアのことです。これは「26行目表示」を選択すると26行モードとなって、最下段が26行目になり、そこにシフト状況域が表示されます。また「トグル表示」を選択すると、漢字入力をしない間は何も表示せず、漢字入力時のみシフト状況域が表示されるようになります。海外のアプリケーションを使用した場合に、最下段の行がシフト状況表示によって壊されるような場合を除いて、「25行目表示」を指定してください。

メモリーの最適化プログラムの使い方

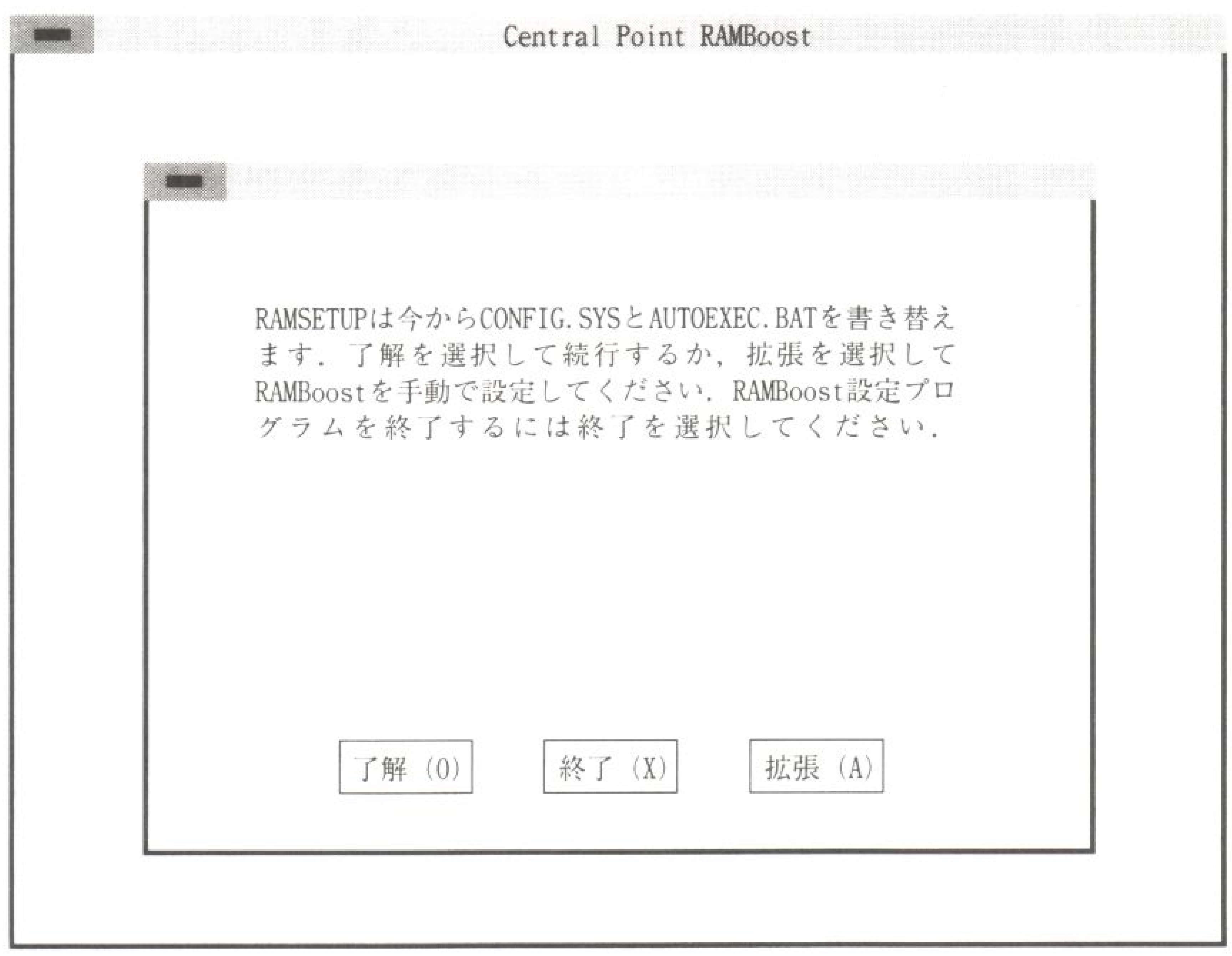


PC DOS J6.3/Vで新しく加わったRAMBoostプログラムは、2章で解説したようにお使いのシステムの構成をチェックし、メモリーを自動的に最適化する機能を提供します。ここではその使い方を説明します。

初めてRAMBoostを使う場合は、最初に以下のコマンドを実行し Enter (改行)を押します。

```
ramsetup
```

すると以下の画面が表示されます。



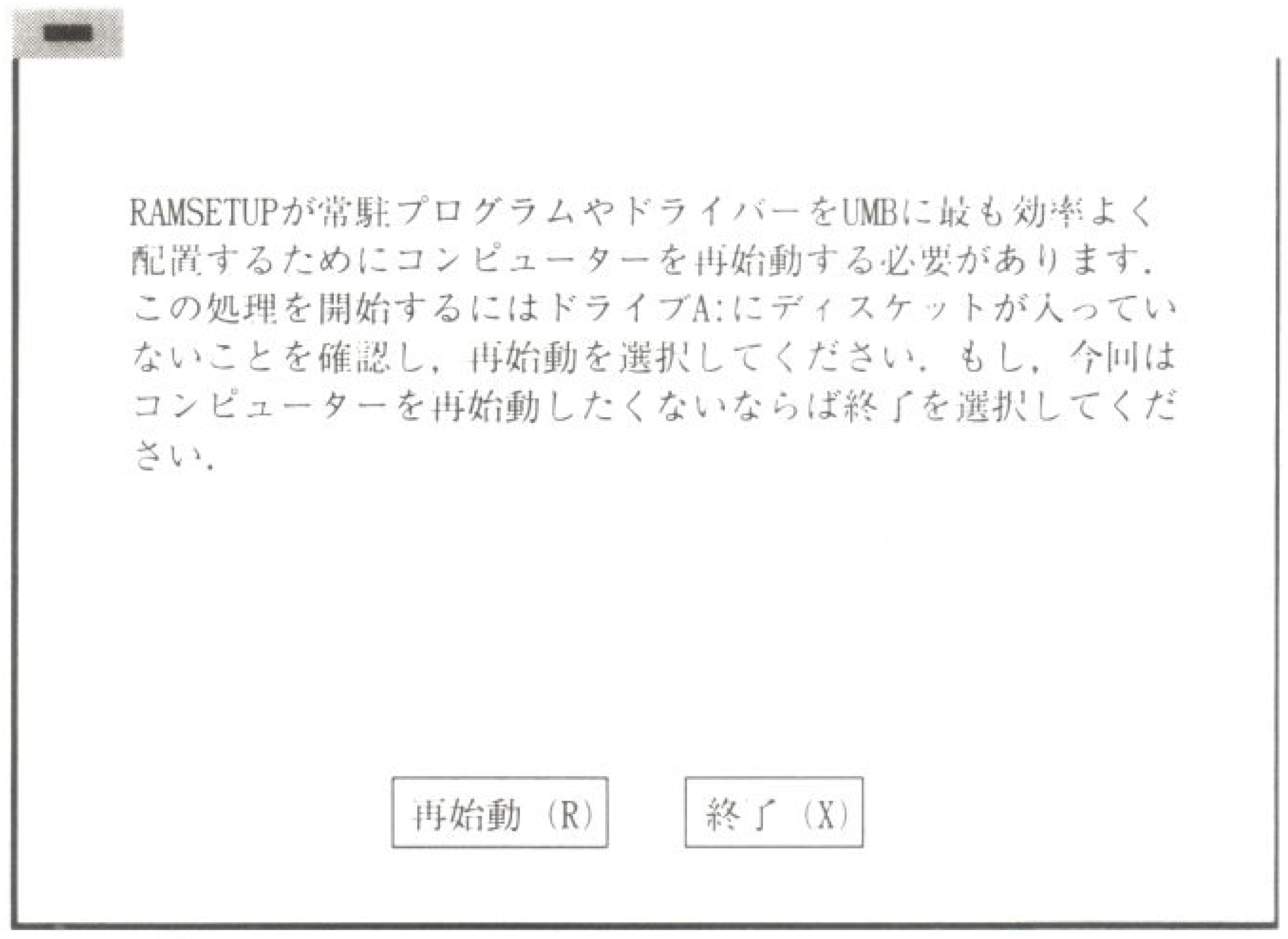
ここで「了解」にカーソルがあることを確認して、Enter (改行)を押します。さらに次のようなパネルが表示されます。

参考

RAMBoostを使用すると、使用可能メモリーが減少することがありますが、その場合には、古いCONFIG.SYSとAUTOEXEC.BAT(それぞれCPSという拡張子で保存されています)を復元してください。

注意

拡張(A)機能は、DOSのメモリー管理に習熟している人以外は、選択しないでください。



ここで「再始動」にカーソルがあることを確認し、[↵ Enter](改行)を押します。

コンピューターは再始動し、RAMBoostが学習モードで始動し、システム構成をチェックしてから、さらにもう一度自動的に再始動が行われます。

今度はRAMBoostはアクティブ・モードで始動し、メモリーに常駐します。これで設定は完了です。これによりシステムのメモリーは最適化され、プログラムを実行するための最大限のメモリーが確保されます。MEMコマンドでサイズを確認してみます。次のように入力し、[↵ Enter](改行)を押します。

```
mem
```

```
メモリーのタイプ   合計   = 使用済 + 使用可
────────────────  ──────  ──────  ──────
基本                640K     97K    543K
UMB                  56K     30K     26K
アダプタ RAM/ROM    196K    196K      0K
XMS* メモリー      1156K    732K    424K
────────────────  ──────  ──────  ──────
システム全メモリ   2048K   1054K    994K

1MB 以下全メモリ    696K    126K    570K

全 EMS メモリー                    1520K (1,556,480  バイト)
使用可能 EMS* メモリー              592K ,(606,208  バイト)

* EMM386はEMSメモリーを提供するため必要に応じてXMSメモリーを
使用します。
 EMSメモリーとXMSメモリーの使用可能サイズは対応して変わること
があります。

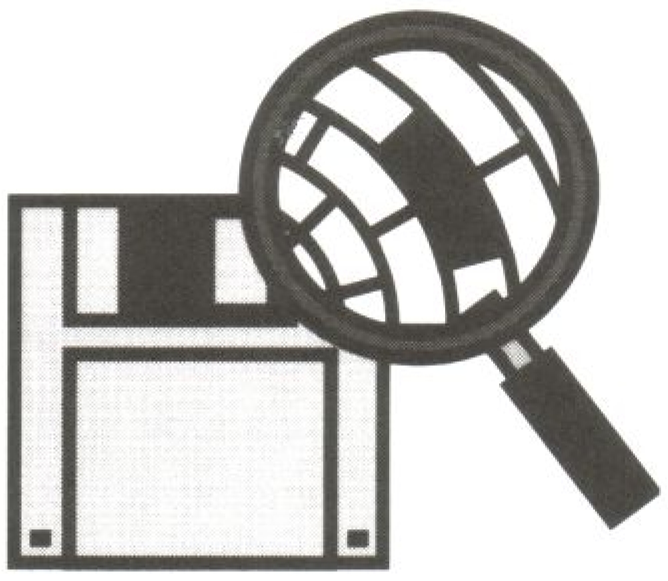
実行可能プログラム最大サイズ       543K  (556,224 バイト)
使用可能最大 UMB メモリー           25K  (25,440 バイト)
DOS は HMA 領域に常駐しています
```

ここで下から3行目に表示されている「実行可能プログラム最大サイズ」がプログラムを実行できる最大メモリー・サイズです。この例では543KBになっています。

RAMboostがアクティブ・モードのときは、メモリーに常駐したプログラムが常にシステムの構成を監視しています。たとえば、新たなプログラムの導入によって、CONFIG.SYSファイルが書き変わった場合には、RAMBoostは自動的に学習モードになり、メモリーを最適化して設定を仕直す機能があります。

またRAMSETUPの初期画面から F1 キーを押すと、それ以外の機能についても詳しく知ることができます。

ウィルス・チェックのプログラムの使い方



PC DOS J6.3/Vに搭載されたIBMアンチウィルス・プログラムは現在発見されている、最新のコンピューター・ウィルスに対処できる強力なウィルス侵入阻止、および駆除プログラムです。

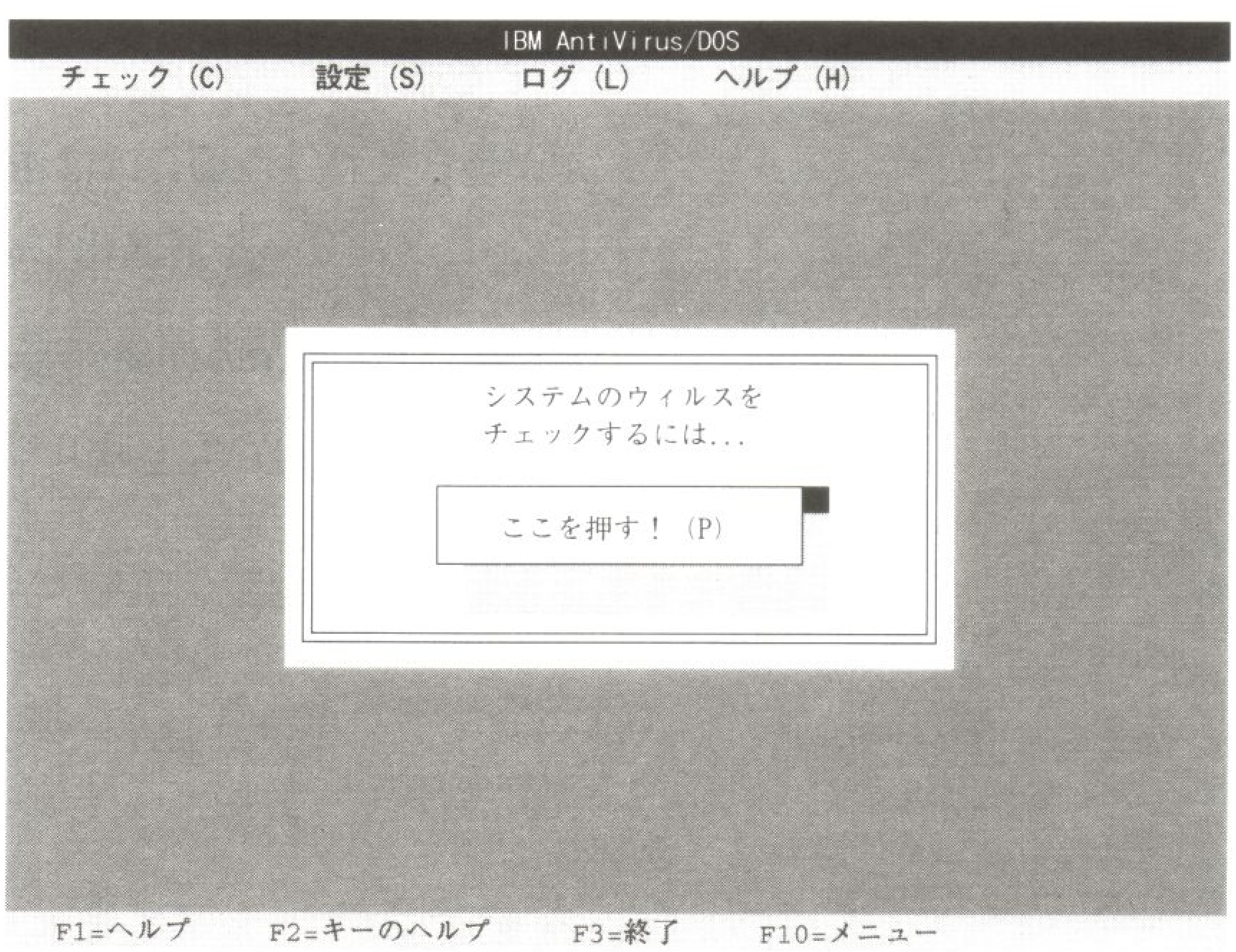
DOSの導入で、IBMアンチウィルス/DOSプログラムを選択した場合、DOSの再始動と同時に自動的にIBMアンチウィルス/DOSプログラムが始動し、ハードディスク内のウィルスをスキャン(走査)します。そしてチェックしたファイルのリストと、日時をデータベースへ書き込みます。

またIBMアンチウィルス・シールド(ウィルス侵入阻止プログラム)がメモリーに常駐します。このプログラムは、DOSの動作中に、ディスケットやネットワークからのウィルスの侵入を監視し、阻止します。

IBMアンチウィルス/DOSプログラムを始動するには、次のように入力して、↵ Enter (改行)を押してください。

```
ibmavd
```

すると以下の画面が表示されます。



ここで P もしくは ↩Enter (改行)を押すと、メモリーとハードディスク内のウィルスの走査が開始します。操作が問題なく終了すると以下のように表示されます。



↩Enter (改行)を押し、F3 を押すと終了します。

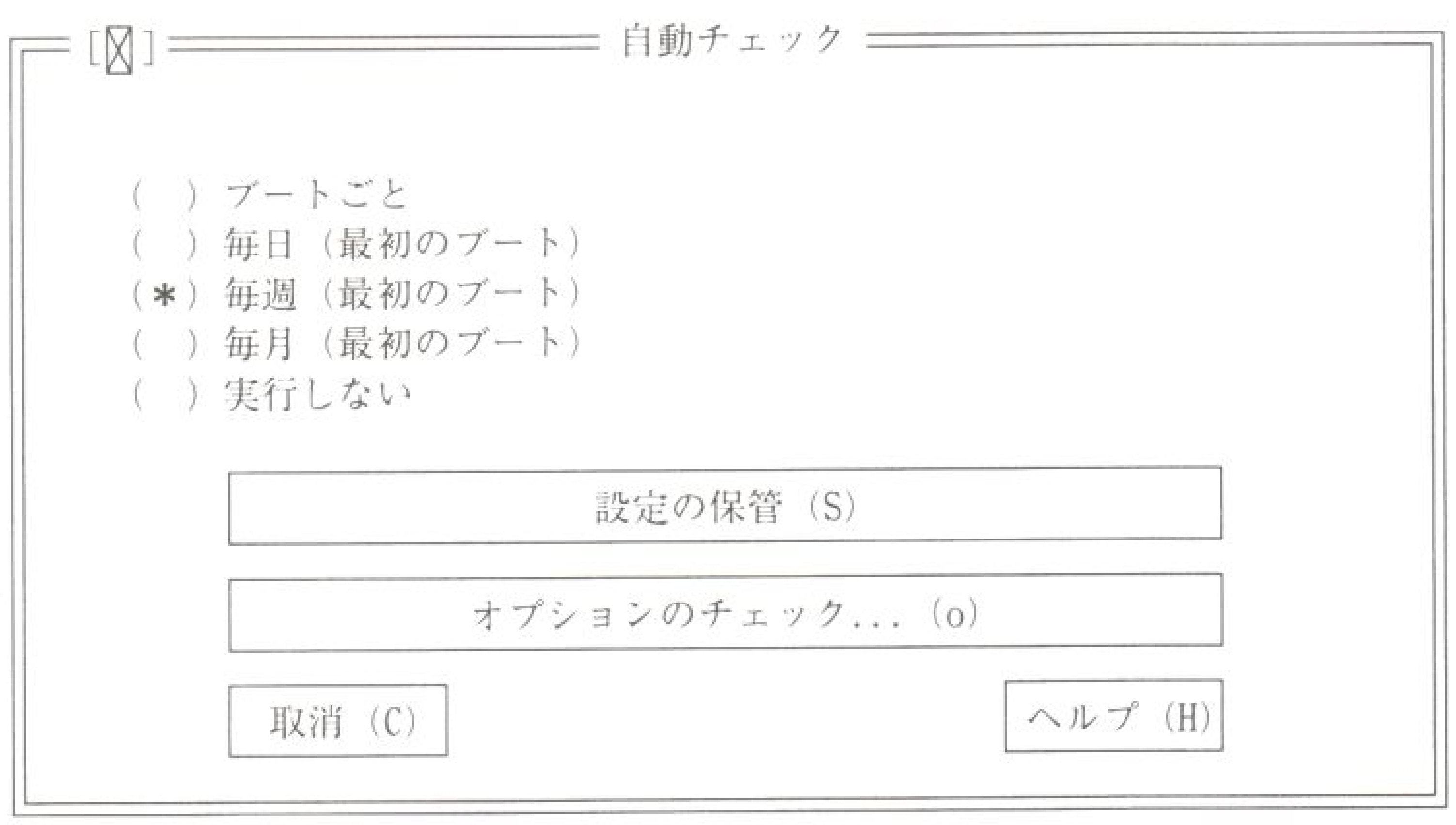
参考

ウィルスが発見された場合にはそれを駆除するパネルが表示されますので、画面にしたがって操作してください。

ウィルスの定期検査の自動化

ここでは定期的にIBMアンチウィルス・プログラムが作動するように設定する方法を説明します。

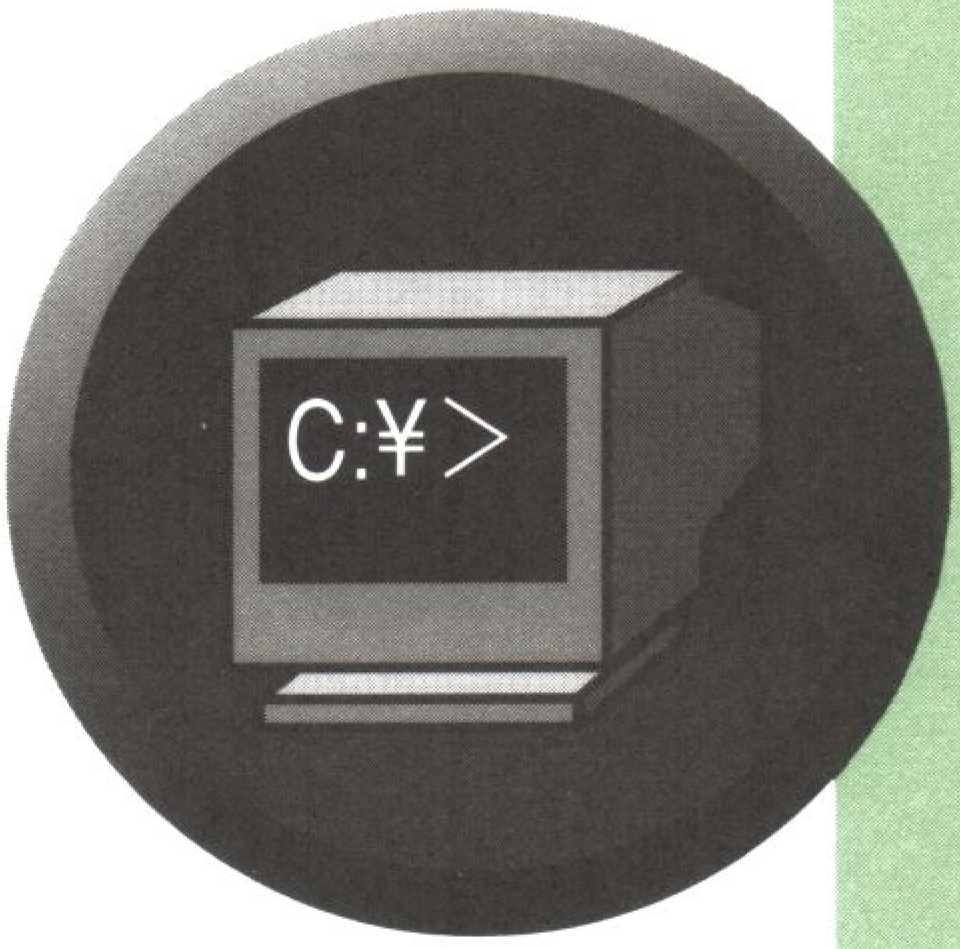
もう一度IBMアンチウィルス/DOSを始動し、初期画面を表示します。ここで F10 を押し、メニュー・バーへカーソルを移動し、「設定」から「自動チェック」を選択し、↩Enter (改行)を押してください。画面に以下のようなパネルが現れます。



デフォルトでは「毎週」に設定されているので、これを「毎日」に指定します。カーソルを ↑ や ↓ で「毎日」へ移動し、スペース キーを押すと「毎日」が選択されます。さらに S を押して設定を保存し、F3 を押して終了します。

ウィルスの定期検査の自動化

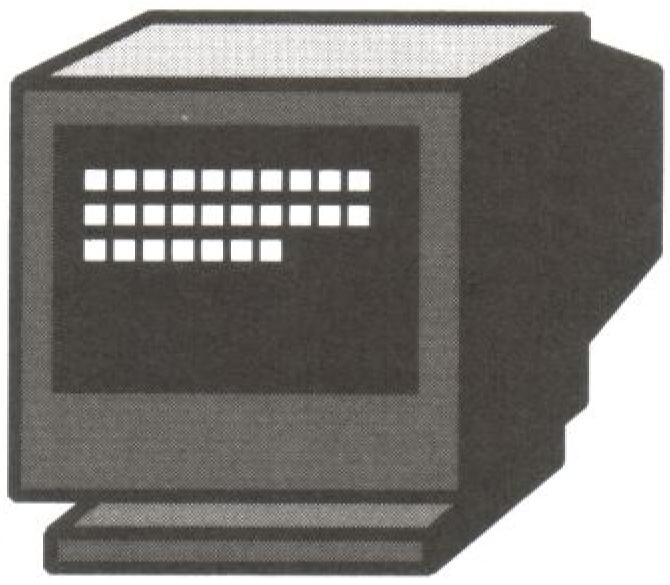
これで毎日始動時に一度だけ、ウィルス検査を自動的に行うように設定できました。同様に操作すれば「毎月」や「ブートごと」のような指定もできます。 F1 キーを押すと、それ以外の機能についても詳しく知ることができます。



第5章

DOSをコマンドで使う

コマンド行を使う



DOSではDOSシェルなどによって、ファイルのコピーや削除などのファイル管理が簡単に操作できるようになっています。しかしある程度DOSに慣れてくると、DOSをコマンド行から使った方が便利な場合もたくさんあります。ここではコマンド行からDOSを使う方法をご紹介します。

DOSは次のようなプロンプトを表示して、ユーザーがコマンドを入力する行を示します。これをコマンド行と呼びます。

```
C:¥>
```

DOSにコマンドを実行させるには、プロンプトに続けてコマンドを入力します。たとえば、DOSのバージョン番号を表示させたい場合には次のように入力し、[↵ Enter](改行)を押します。

```
C:¥>VER
```

```
PC DOS Version J6.30/V
Revision 0
```

参考

Revisionとは DOSが内部で使用している変更レベルのことです。

すると上図のように、画面にこのDOSのバージョン番号が現れます。

各コマンドには一連の命令が含まれています。たとえばVERコマンドは、DOSにバージョン番号を表示することを命令します。コマンドは、TIMEコマンドのように、通常の単語をそのまま使うこともありますし、DIRコマンド(DIRectory)のように略語になっているものもあります。コマンドを実行するには、コマンドを入力し、それから[↵ Enter](改行)を押します。

コマンド各部の名称

DOSのコマンドは、コマンド名、パラメーター、スイッチの3種類の要素から構成されています。すべてのコマンドにはコマンド名があります。コマンドの中には、そのコマンドが何を対象にしているかを示すため、1つまたは複数のパラメーターを必要とするものもあります。またコマンドの中には、1つまたは複数のオプション(これをスイッチと呼ぶ)をつけて実行させるものもあります。スイッチはコマンドの作業方法を変更する働きをもっています。

```
C:¥>DIR
```

DIR：コマンド

```
C:¥>COPY C:¥UTIL¥T.EXE A:TT.EXE
```

COPY：コマンド　C:¥UTIL¥T.EXE A:TT.EXE：パラメーター

```
C:¥>FORMAT A: /S
```

FORMAT：コマンド　A:：パラメーター　/S：スイッチ

コマンド名

コマンド名はDOSに実行してほしい処理を示します。コマンドには、CLSコマンド(画面上の文字を消去するコマンド)のようにコマンド名だけで構成されているものもありますが、ほとんどのコマンドでは、コマンド名とともにパラメーターやスイッチを必要とします。

パラメーター

パラメーターは、コマンドの操作対象を示します。たとえば、DEL(削除)コマンドを使ってNOTES.TXTというファイルを削除したい場合には、パラメーターとして削除したいファイル名(つまりNOTES.TXT)を指定します。

パラメーター

```
C:¥>DEL NOTES.TXT
```

コマンドの中には、複数のファイル名を必要とするものがあります。たとえば、RENコマンドを使ってファイル名を変更するには、新しいファイル名と、元のファイル名が必要です。次の例は、LETTER.TXTというファイル名を持つファイルを、MEMO.TXTというファイル名に変更するものです。

```
C:¥>REN LETTER.TXT MEMO.TXT
```

コマンドのなかには、パラメーターを省略できるものもあります。たとえば、現行ディレクトリーのファイル一覧を表示させる場合、パラメーターを指定しないで、DIRコマンドを使うことができます(C:¥>DIR)。

スイッチ

スイッチは、スラッシュ(/)の後に1つ以上の文字あるいは数値をつけたもので、コマンドの作業方法を変更するために使います。たとえば、DIRコマンドを使って、大量のファイルが保管されているディレクトリーのファイル一覧を表示させる場合がよくあります。この場合、単にDIRコマンドだけを入力すると、速いスピードで画面がスクロールしてしまいます。そこでこのような場合には、/Pというスイッチを付け加えると、1画面ごとに区切ってファイルの一覧を表示させることができます。

```
C:¥>DIR /P
```

DOSコマンドのなかにはスイッチをまったく必要としないものや、複数のスイッチを必要とするものがあります。コマンドに複数のスイッチが必要な場合、それらを順に並べて入力します。スイッチとスイッチの間は、スペースで区切ってもかまいませんが、このスペースは必ずしも必要ではありません。

コマンドを入力する

コマンド行にある下線をカーソルといい、コマンドを入力するところを示しています。1文字入力すると、カーソルは1文字分右へ移動します。誤って入力した場合には、BackSpaceキーを押して、カーソルの左側にある文字を削除します。

コマンドは大文字、小文字のどちらで入力してもかまいません。特に指定がない限り、コマンドとそのパラメーターの間は、スペースを入れます。コマンド入力をし直したい場合は、Escを押してください。カーソルは次の行の先頭に移動し、改めて入力をし直すことができます。この操作によって、Escを押す前に入力されたものは、すべて無視されます。

簡略キーによるコマンド入力

DOSはすでに入力されたコマンドを変更したり、繰り返し入力するための編集キーを持っています。最もよく使用されるキーはF1とF3キーです。

F1キー　1つ前のコマンドを1文字ごとに表示します。

F3キー　1つ前のコマンドを表示します。

直前のコマンドを再表示する

たとえば、次のように入力して、↵Enter(改行)を押したとします。

```
DIR A: #
```

このコマンドの最後に#という余分な文字があるので、エラー・メッセージが表示されます。ここでF3を押すとこのコマンドが再び画面に現れます。ここでBackSpaceを押して#を消去し、↵Enter(改行)を押します。これでコマンドが訂正され、ディレクトリーのファイル一覧が表示されます。

直前のコマンドを1文字ずつ表示する

前述の例で、ドライブA:をドライブB:に置き換えて同じコマンドを再び入力するとします。F1 を4回押すと、最初の部分のDIRが表示されます。そしてbを入力し、F1 を1回押します。するとコロン(:)が現れます。システムにBドライブがある場合、↵ Enter (改行)を押して、ディレクトリーのファイル一覧を表示させます。

DOSKEYを使う

すでに実行したコマンドを再利用するためにDOSKEYプログラムがあります。DOSKEYの機能を使うには、まずコマンド行にDOSKEYと入力してください。すると、DOSKEYがまだ導入されていない場合は、次のメッセージが表示されます。

```
DOSKEY が導入されました。
```

これでDOSKEY機能を使って、すでに実行したコマンドの再利用が可能になります。たとえば、次のような3つのコマンドを順に実行したとします。

```
TYPE TUESDAY
DATE
TIME
```

最初のコマンドはTUESDAYという名前のファイルの内容を表示し、2番目のコマンドは現在の日付を表示し、3番目のコマンドは現在の時刻を表示します。これらのコマンドの履歴はすべてシステムのメモリーに一時的に保管されます。

DOSKEYが導入されていれば、いくつかの方法でコマンドを検索することができます。最も簡単な方法は、[↑]を押すことです。[↑]を1回押すと直前のコマンドであるTIMEがコマンド・プロンプトに現れます。さらに2回[↑]を押すと、次のように最初のコマンドに戻ります。このようにして、前のコマンドを順に再び表示できます。

コマンドの再入力方法

```
TYPE TUESDAY
```

このコマンドをそのまま実行したい場合は、[↵ Enter](改行)を押します。

DOSのコマンドに対する応答

DOSはユーザーが入力したコマンドに対してさまざまな応答をします。

DOSからの応答には、コマンドの実行結果やエラー・メッセージ、またはユーザーの追加入力を促すプロンプトがあります。

用語解説

プロンプト
プロンプトとは、もともと英語で「促す」という意味です。
プロンプトは、DOSがユーザーにデータや文字の入力を促すために表示されます。

追加入力の要求

コマンドによっては、ユーザーがコマンドを入力したあと、追加入力を要求するプロンプトが表示される場合があります。たとえば、TIMEコマンドを入力すると、次のプロンプトが表示されます。

```
現在の時刻は　16:53:47.62
新しい時刻を入力してください。:_
```

これは、ユーザーに新しい時刻を入力するように促すプロンプトです。ユーザーはこのプロンプトに応えて、新しい(現在の)時刻を入力します。

コマンドの実行の確認

コマンドの実行の確認を求めるプロンプトが表示されることがあります。たとえば、C:¥TMPというディレクトリーの中のすべてのファイルを削除するため、ワイルドカード(グローバル・ファイル文字ともいう)を使って、次のようにDELコマンドを使用するとします。

```
DEL C:¥TMP¥*.*
```

すると、次のようなメッセージが表示されます。

```
ディレクトリー内のすべてのファイルは削除されます!
大丈夫ですね(Y/N)?_
```

ここで、ファイルをすべて削除したくない場合は、Nを入力します。すべてのファイルを削除してもよい場合には、Yを入力します。

> **参考**
>
> **コマンドがきかない**
>
> あるコマンドを正しく入力しても実行されない場合は、現行ディレクトリーを、そのコマンドが置かれているディレクトリーに変更(たとえばCD ¥DOS)して実行します。またはそのコマンドが置かれているディレクトリーのパス名を、PATHコマンドで指定すれば実行できます。

コマンドの実行結果

コマンドの実行結果が表示されることがあります。たとえば、COPYコマンドを使って、特定のファイルを複写するよう命令すると、次のようなメッセージが表示されます。

```
1 個のファイルを複写しました。
```

エラーメッセージ

入力されたコマンドが認識できない場合は、エラー・メッセージが表示されることがあります。

```
コマンドまたはファイル名が正しくありません。
```

コマンドのつづりを間違えた場合、そのコマンドをもう1度正しく入力し、[↵ Enter](改行)を押します。

コマンドの中止または一時停止の方法

> **注意**
> Break が押されるまえに実行されたものは取り消すことはできません。

DOSコマンドを中止する

コマンドの実行を途中で取り消したい場合は、Ctrl + Break または Ctrl + C キーを押します。Ctrl + Break を押すと、コマンドの実行は取り消され、コマンド・プロンプトが表示されます。

> **参考**
> Ctrl + Break キーがきかない
> Ctrl + Break キーが効かない場合にはBREAK ONというコマンドを、コマンド行から実行してください。

出力を一時停止する

コマンドを実行した途端に、大量の出力が画面に出てくることがあります。こんなときはあわてずに、Ctrl + S キーまたは Pause を押してください。こうするとコマンドによる出力を一時的に中断させることができます。

出力を再開するためには、Pause 以外の任意のキーを押します。このようにして、コマンドからの出力を何回でも中断したり、再開しながら画面の情報をじっくり見ることができます。

ディスク・ドライブの指定

現行ドライブとは、現在操作対象となっているドライブのことです。現行ドライブはコマンド・プロンプトの最初の文字として表示されます。その文字がAかBであれば、ディスケットドライブが現行ドライブです。その文字がCであれば、ハード・ディスク・ドライブが現行ドライブです。システムによっては、増設ドライブが付いているものもあります。

操作したいファイルやディレクトリーが現行ドライブのディスク上にあれば、ドライブを指定する必要はありません。操作したいファイルやディレクトリーが現行ドライブに存在しない場合、現行ドライブを変更するか、コマンドの前にドライブ名を指定します。

現行ドライブを変更する

現行ドライブを変更するには、ドライブの文字に続けてコロン(:)を入力してください。たとえば、現行ドライブをCからAに変更するには、A：と入力して ↵ Enter (改行)を押します。

```
C:¥> A:
A:¥>
```

他のドライブを指定する

他のドライブを指定するには、コマンドにドライブ文字を入れてください。たとえば、現行ドライブがCであるとします。ドライブAのディスクのファイル一覧を表示させるには、DIRコマンドのパラメーターとしてコマンドの後に次のようにA：を入力します。

```
C:¥> DIR A:
```

内部コマンドと外部コマンド

DOSコマンドには、「内部コマンド」と「外部コマンド」の2種類があります。

内部コマンド

DOSはシステムが始動したとき、メモリーにいくつかのコマンドを読み込みます。これらのコマンドは「内部コマンド」と呼ばれ、COMMAND.COMと呼ばれるプログラム·ファイルに内蔵されています。内部コマンドには、DIR、DEL、DATE、TIMEコマンドなどがあります。

外部コマンド

これに対して「外部コマンド」は、ディスク上にファイルとして保管されていて、ユーザーがそのコマンドを使用するときディスクから読み込まれます。外部コマンドの一例として、CHKDSKとFORMATコマンドがあります。

ハードディスクが装備されたシステムで、DOSをセットアップし、かつ省略時のディレクトリーを使用する場合、外部コマンドの各ファイルは¥DOSディレクトリーの中に置かれています。

コマンドのヘルプ情報

すべてのDOSのコマンドに対しオンライン・ヘルプを利用することができます。ヘルプによってそのコマンドの機能、パラメーター、スイッチについての情報を簡単に知ることができます。ヘルプを利用するには、コマンド名に続けて／？を入力するか、HELPに続けてコマンド名を入力します。

たとえばDELコマンドのヘルプを参照するには、次のように入力します。

```
DEL /?
```

または、次のように入力しても同じ結果が得られます。

```
HELP DEL
```

これによって、次のようなDELコマンドに関するヘルプ情報が表示されます。

```
ファイル(複数可)を削除します
DEL   [ドライブ:][パス]ファイル名 [/P]
ERASE [ドライブ:][パス]ファイル名 [/P]
[ドライブ:] [パス]ファイル名
      削除するファイルを指定します。グローバル・ファイル文字
      (＊／？)による複数ファイルの指定も可能です。
/P    各ファイルの削除前にプロンプトを表示して削除の確認をします。
```

コマンド名を指定しないでHELPとだけ入力すると、すべてのコマンドとその機能が表示されます。

30 DOSコマンドベスト30

この節では、使用頻度の多いまたは重要度の高いDOSコマンドのベスト30を選んで解説します。ここに紹介しているDOSコマンドだけ知っていれば、通常の使い方をする場合は十分です。ただDOSにはこれ以外にも多数のコマンドがありますので、それらは一覧にして次節にまとめてあります。

CD ❶

CDコマンドは、コマンド操作の対象としているディレクトリー(現行ディレクトリー)を表示したり、変更したりするのに使うコマンドです。Change Directory(ディレクトリーを変更する)の意味から名付けられていて、CHDIRと入力しても使えます。

現行ディレクトリーを表示するには、以下のコマンドをコマンド行から入力し、[↵ Enter](改行)を押してください。

```
C:¥>cd
```

```
C:¥    <---- C:はハードディスク、¥はルート・ディレクトリーを表す
```

たとえば、現行ディレクトリーを¥DOSに変更するには、以下のコマンドをコマンド行から入力し、[↵ Enter](改行)を押してください。

```
C:¥>cd ¥dos
```

```
C:¥DOS>_    <---- ¥DOSというサブ・ディレクトリーに移動したことを表す
```

CHEV

CHEVコマンドはDOS/V特有のコマンドで、日本語環境と英語環境とを切り替えるコマンドです。CHEVコマンドはChange Environment(環境を変える)の意味から名付けられています。

日本語環境から英語環境に切り替えるには、以下のコマンドをコマンド行から入力し、[↵ Enter](改行)を押してください。

```
C:¥>chev us
```

```
C:\>_   <----  英語環境では¥(円記号)がバックスラッシュ(\)になります
```

英語環境から日本語環境に切り替えるには、以下のコマンドをコマンド行から入力し、[↵ Enter](改行)を押してください。

```
C:\>chev jp
```

```
C:¥>_   <----  日本語環境では\(バックスラッシュ)が円記号(¥)になります
```

参考

CHEVコマンドは、SWITCHコマンドに比べて高速に切り替えできます。ただし、システムを再始動しないので、メモリーに常駐するプログラム(たとえば、かな漢字変換プログラム)などは、そのままメモリーに残るため、大きなプログラムを英語環境で動作させたい場合には、SWITCHコマンドを使って環境を完全に切り替えてください。

③
CHKDSK

CHKDSKコマンドは、現在どれくらいのハードディスクが使用されていて、あとどれくらい残っているかを調べるコマンドです。Check Disk(ディスクを調べる)の意味から名付けられています。

たとえば、ドライブC(ハードディスク)の容量を調べるには、以下のコマンドをコマンド行から入力し、↵ Enter (改行)を押してください。

```
C:¥>chkdsk c:
```

```
ボリューム PCDOS_J6V   は 1993-10-31 10:21 に作られました
ボリューム・シリアル番号は 1A36-6B74 です

 60,663,808 バイト  :全ディスク空間
    120,832 バイト  :2 個の隠しファイル
     47,104 バイト  :16 個のディレクトリー
 53,987,328 バイト  :870 個のユーザー・ファイル
  6,500,352 バイト  :使用可能ディスク空間    <---- これがハードディスクの残り

      2,048:クラスター当りのバイト数
     29,621:ディスク当りのクラスター数
      3,174:ディスク中の使用可能クラスター数

    655,360 バイト  :全メモリー
    376,800 バイト  :使用可能メモリー     <---- これが基本メモリーの残り
```

「全ディスク空間」は全ディスク容量のことで、この例では60MBです。残りは「使用可能ディスク空間」で、この例では6.5MBあります。このコマンドでメモリーの使用状況も表示されますが、より詳細に表示するMEMコマンドがありますので、メモリーを調べる場合はそちらのコマンドを参照してください。

COMMAND

COMMANDコマンドは、DOSのコマンドを処理するプログラム(コマンド・インタープリター)COMMAND.COMを始動するコマンドです。ユーザーが入力したDOSのコマンドは、すべてこのCOMMAND.COMを経由してDOSに渡されます。DOSが始動すると、COMMAND.COMは自動的に始動され、基本メモリーに常駐してコマンド待ち状態になります。これをコマンド・プロンプト(C:¥>)と呼びます。

前節で説明したように、内部コマンドがすべてこのCOMMAND.COMに含まれています。コマンド・インタープリターを新規に始動するには、以下のコマンドをコマンド行から入力し、↵ Enter (改行)を押してください。(通常はDOSの始動時に自動的にロードされるので別のCOMMAND.COMを始動する必要はありません。

```
C:¥>command
```

```
PC DOS Version J6.30/V
            (C)Copyright International Business Machines Corp 1981-1994.
            (C)Copyright Microsoft Corp 1981-1993.
```

このコマンドは、あるアプリケーション・プログラムを実行中に、一度DOSのコマンド・プロンプトを呼び出すような場合に使います。始動したコマンド・インタープリターを終了させるには、以下のコマンドをコマンド行から入力し、↵ Enter (改行)を押してください。

```
C:¥>exit
```

これで元の状態に戻ります。アプリケーションから始動した場合には、元のアプリケーションに戻ります。

J 6.3/VではCOMMANDコマンドを/Cまたは/Kスイッチと/Yスイッチを指定することにより、バッチ・プログラムが一行ずつ実行できます。

例: COMMAND /Y /C MYBAT.BAT

COPY

COPYコマンドは、ファイルを別の場所(ドライブまたはディレクトリー)にコピーするコマンドです。コピーなので元のファイルはそのまま残ります。一度に複数のファイルの指定ができます。ファイル指定にはワイルドカードが使えます。

たとえば、ドライブCのサブディレクトリー¥DOSにあるREADME.TXTをドライブAのディスケットにコピーするには、以下のコマンドをコマンド行から入力し、[← Enter](改行)を押してください。

```
C:¥>copy c:¥dos¥readme.txt a:
```

<---- ¥でディレクトリーとファイル名を区切る
a:はドライブの指定

```
1 個のファイルを複写しました
```

コピーは「~を~に」という順番で、コピー元とコピー先を指定します。複数のファイルを指定するには、次のように入力します。たとえば、サブディレクトリー¥DOCのすべての.TXTの付くファイルをドライブAのディスケットにコピーするには、以下のコマンドをコマンド行から入力し、[← Enter](改行)を押してください。

```
C:¥>copy c:¥doc¥＊.txt a:
```

<---- ＊は「任意の8文字以下のファイル名」の意味
この＊をワイルドカードという

コピーされたファイルがすべて表示されます。

参考

コピー先にまったく同名のファイルがある場合、COPY コマンドは上書きしてよいか確認のメッセージを表示します。置き換える場合には「Y」、置き換えない場合には「N」をタイプして[← Enter]を押します。ファイル指定にワイルドカードを指定した場合で、同名のファイルが複数存在する場合には、「A」を指定すると、以降確認のメッセージは表示せずに無条件に置き換えます。

❻

DATE

DATEコマンドは日付の表示と変更をするコマンドです。入力した日付はシステムに登録され、以降の日付の更新はシステムが自動的に行います。この日付はTIMEコマンドで設定した時刻とともにファイル作成日時などの情報に使われます。日付を表示するには、以下のコマンドをコマンド行から入力し、[↵ Enter](改行)を押してください。

```
C:¥>date
```

```
現在の日付は 1993-10-31（日）です
新しい日付を入力してください（yy-mm-dd）:
```

ここで[↵ Enter](改行)を押せば、コマンド・プロンプトに戻ります。変更する場合には、たとえば93-11-1というように-(ハイフン)で数字を区切って入力し、[↵ Enter](改行)を押してください。同じコマンドを繰り返すと変更した日付を確認できます。

❼

DEL

DELコマンドはファイルを削除するコマンドです。Delete(削除する)の意味から名付けられています。同じ意味のERASEと入力しても、ファイルを削除できます。一度に複数のファイルの指定ができます。ファイル指定にはワイルドカードが使えます。

たとえば、ドライブAのディスケットにあるREADME.BAKを削除するには、以下のコマンドをコマンド行から入力し、[↵ Enter](改行)を押してください。

```
C:¥>del a:readme.bak
```

<----a:はドライブの指定

複数のファイルを削除するには、次のように入力します。たとえば、ルート・ディレクトリーのすべての.BAKの付くファイルを削除するには、以下のコマンドをコマンド行から入力し、[↵ Enter](改行)を押してください。

```
C:¥>del＊.bak
```

<---- ＊は「任意の8文字以下のファイル名」の意味
この＊をワイルドカードという

あるディレクトリーのすべてのファイルを削除するには次のように入力します。たとえば、サブ・ディレクトリー¥TMPのすべてのファイルを削除するには、以下のコマンドをコマンド行から入力し、[↵ Enter] (改行)を押してください。

```
C:¥>del c:¥tmp¥＊.＊
```

<----¥でディレクトリーとファイル名を区切る

```
ディレクトリー内のファイルはすべて削除されます!
大丈夫ですね (Y/N)?
```

ここで [Y] キーを押すと、サブ・ディレクトリー¥BAK内のすべてのファイルが削除されます。ここで [N] を押すと削除は中止されます。

誤って削除されたファイルは、削除されてからすぐであればあるほど、復元できる可能性が高くなります。復元にはUNDELETEコマンドを使いますので、そちらを参照してください。

8

DIR

DIRコマンドはディスク内のファイルの一覧を表示するコマンドです。Directory(名簿)の意味から名付けられています。ファイルを確認するために最も頻繁に使われるコマンドです。

たとえば、作成された日付順にファイルを一覧にしたい場合には、以下のコマンドをコマンド行から入力し、[↵ Enter] (改行)を押してください。

```
C:¥>dir /od
```

```
ドライブ C のボリュームは PCDOS_J6V   です
ボリューム・シリアル番号は 1A36-6B74 です
ディレクトリーは  C:¥PS2

               .
               .
               .
SYSTEM       <DIR>       93-07-23   10:21
CONFIG   PS2         155 93-01-22   13:33
AUTOEXEC PS2         164 93-01-22   13:33
GRAPHICS COM      21,656 93-10-01    6:10
KEYBOARD SYS      37,662 93-10-01    6:10
COMMAND  COM      61,601 93-10-24    6:10
KEYB     COM      18,621 93-10-24    6:10
MODE     COM      28,337 93-10-24    6:10
DOSSHELL COM       6,511 93-10-24    6:10
       52 個        1,777,869 バイトのファイルがあります
                    6,500,352 バイトが使用可能です
```

左の最初の8桁がファイル名、次の3桁がファイルの種類を表すエクステンション(拡張子)、次がファイルの容量、作成された日、作成された時間の順です。<DIR>と書かれたものは、さらにサブ・ディレクトリーがあることを示しています。

また、次のようにファイルの検索に使うこともできます。

```
C:¥>dir＊.txt /s
```

この例ではエクステンションがTXTのファイルを、ディスク全体から検索しています。ディスク全体から検索する場合には、このようにルート・ディレクトリーからこのコマンドを実行してください。

DISKCOPY
9

DISKCOPYコマンドはディスケットのコピーをするコマンドです。オリジナルのディスケットのバックアップ・コピーを作成する場合などに使用します。

ディスケット・ドライブが2台付いた機種でコピーする場合は1台目がドライブA、2台目がドライブBになるので、以下のコマンドをコマンド行から入力し、[Enter](改行)を押してください。

```
C:¥>diskcopy a: b:
```

コピーは「〜を〜に」という順番で、コピー元とコピー先を指定します。コピー先のディスケットがフォーマット済みでない場合には、

```
フォーマットしながら複写中です
```

と表示し、自動的にコピー元のフォーマットと同じフォーマットにして、コピーを行います。フォーマットについてはFORMATコマンドを参照してください。

DOSKEY
10

DOSKEYコマンドは、一度入力したコマンドを呼び出したり、修正して実行したりするために、コマンド入力を省力化するコマンドです。一度実行するとメイン・メモリーに常駐して、以降のコマンド入力が楽になります。

DOSKEYを使うには、以下のコマンドをコマンド行から入力し、[Enter](改行)を押してください。

```
C:¥>doskey
```

DOSKEYの使い方は前節で詳しく説明していますので、そちらを参照してください。

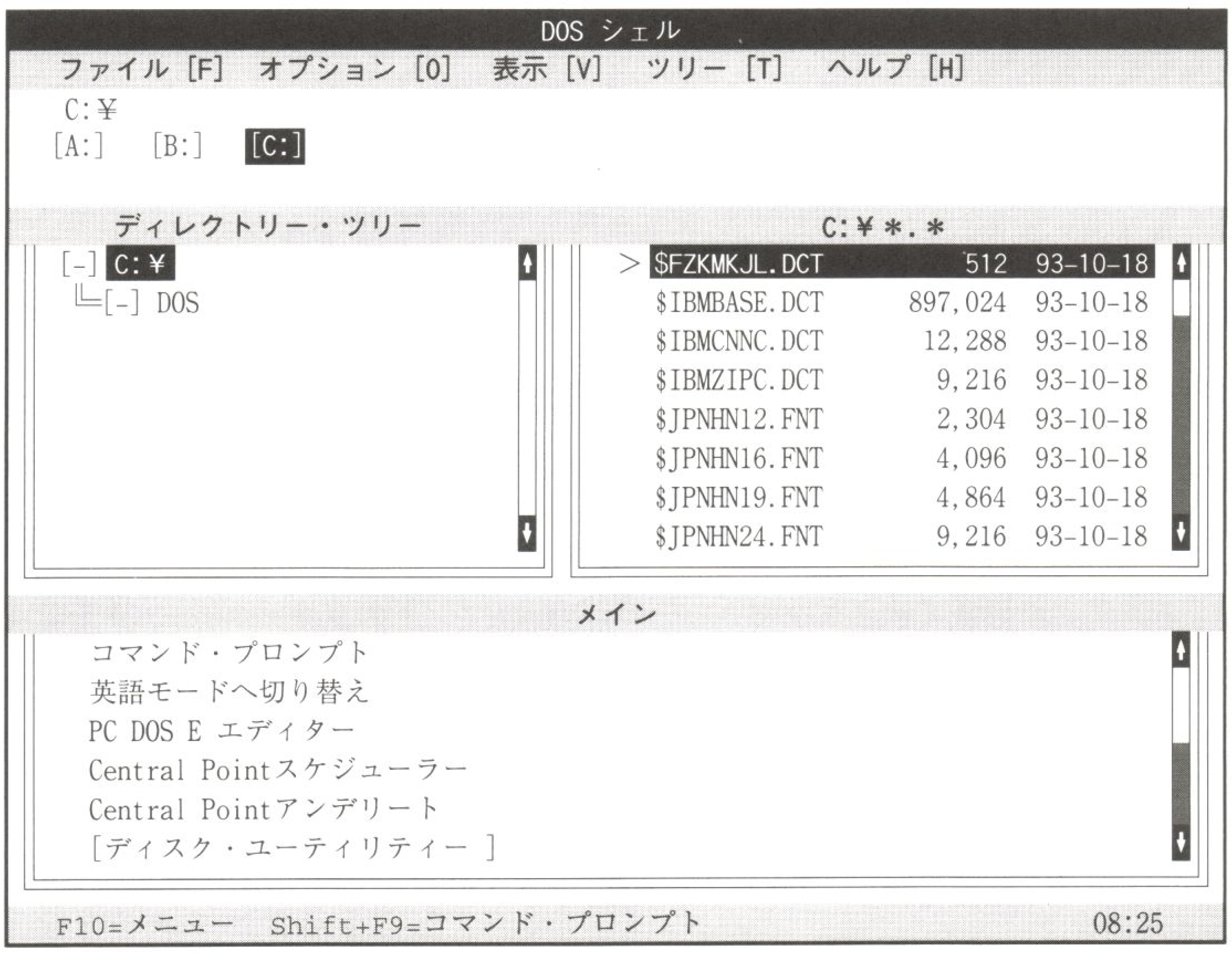
⑪

DOSSHELL

DOSSHELLコマンドはDOSシェルを始動するコマンドです。DOSシェルはこのコマンドベスト30で紹介するコマンドのほとんどの操作を、フルスクーンで実行できるプログラムです。コマンド操作を覚えるまでは、このDOSシェルを使うことでファイル操作全般ができるようになります。

DOSシェルを使うには、以下のコマンドをコマンド行から入力し、[↵ Enter](改行)を押してください。

```
C:¥>dosshell
```



画面にはディレクトリーとファイル一覧、登録されたプログラム一覧が表示されます。DOSシェルの使い方は前章で詳しく説明していますので、そちらを参照してください。

E

12

DOSのエディターを始動します。エディターとは、テキスト・ファイルの編集をするプログラムのことです。DOSの環境を設定するCONFIG.SYSファイルや、プログラムの自動始動を設定するAUTOEXEC.BATなどのファイルの編集などにも使います。

DOSエディターを使うには、以下のようにコマンドとファイル名をコマンド行から入力し、[← Enter] (改行)を押してください。

```
C:¥>e config.sys
```

ファイルが見つからなければ、新しいファイルとしてファイルが作られます。エディターの使い方については前章で詳しく説明していますので、そちらを参照してください。

EXPAND

13

圧縮されているファイルを元に戻すコマンドです。誤って消してしまったDOSのファイルを、オリジナル・ディスケットからコピーしたい場合などに使います。

DOSのディスケットには、多くのコマンドを入れるため、ファイルが圧縮された形式で入っています。そのため、コマンドのファイルをそのままコピーしても使えません。導入時には、導入プログラムが自動的に圧縮されたファイルを元に戻しています。しかし使用時に誤って消してしまったファイルは、このコマンドで圧縮を戻しながらコピーする必要があります。

たとえば、ドライブAにDOSのオリジナル・ディスケットを入れてあるとします。そこからDOSKEY.COMを圧縮を戻しながらコピーするには、以下のコマンドをコマンド行から入力し、[← Enter] (改行)を押してください。

```
C:¥>expand a:doskey.co_  c:¥dos¥doskey.com
```

圧縮されたファイル名の最後は_(アンダースコアー)になっているので、間違わないように入力してください。

FDISK

14

ハードディスクをいくつかに分けて使ったり、それを元に戻したりするのに使うコマンドです。

注意

FDISKで区画の設定などを変更するとデータはすべて失なわれますので、事前に重要なファイルはバックアップを取ってからFDISKを使用してください。

ハードディスクを分割して使用する場合、その分ける単位を区画といいます。たとえば60MBのディスクをFDISKコマンドで20MBと40MBに分け、20MBをDOSに使い、40MBを他のアプリケーションやデータ用に論理ディスクとして使うことができます。

FDISKを使うには、以下のようにコマンドとファイル名をコマンド行から入力し、Enter(改行)を押してください。

```
C:¥>fdisk
```

```
PC DOS Version J6.3/V
ハード・ディスク区間管理プログラム
(C) Copyright IBM Corp. 1983 - 1993

初期画面

現在設定中のハード・ディスク：1

次の中から番号を選択してください

1. DOS 区画／論理ディスクの作成
2. 活動区画の設定
3. DOS 区画／論理ディスクの削除
4. 区画情報の表示

番号を入力してください：[1]

番号を入力してください：[1]
```

画面にはフルスクリーンのメニュー画面が表示されます。最初に区画を作成し、次に論理ディスクを作成します。操作は画面に表示されるメッセージに従ってください。

FORMAT

15

FORMATコマンドはディスケットをフォーマットするコマンドです。フォーマットとは「書式」の意味で、ディスケットをDOSで扱えるようにするため、DOS特有の書式を書き込む作業をいいます。フォーマットはディスクを初期化しますので、中に入っているデータはすべて削除されます。

ドライブAでディスケットをフォーマットするには、以下のようにコマンドとドライブ名をコマンド行から入力し、[↵ Enter](改行)を押してください。

```
C:¥>format a:
```

```
新しいディスケットをドライブ A: に入れてください
準備ができたら ENTERキーを押してください ...
```

ここで[↵ Enter](改行)を押すとフォーマットが開始されます。フォーマットが終了すると、以下のメッセージが表示されます。

```
フォーマットが終了しました

ボリューム・ラベルを指定してください
(半角11字まで,ラベルなしはENTERキー)
```

ここで[↵ Enter](改行)を押すと、さらに次のようなメッセージが現れます。

```
  1,457,664 バイト  :全ディスク空間
  1,457,664 バイト  :使用可能ディスク空間

        512:  クラスター当りのバイト数
      2,847:  ディスク中の使用可能クラスター数

ボリューム・シリアル番号は 1D71-1AD9 です

別のディスクをフォーマットしますか (Y/N)?
```

ここで Y キーを押すと、続けて次のディスケットのフォーマットができます。N キーを押すと、コマンド・プロンプトに戻ります。FORMATコマンドは各種のフォーマットに対応しています。詳しくは次節のコマンド一覧を参照してください。(3.5インチ1.2MBのディスケットのフォーマットについては次節のコマンド一覧のFORMAT12を参照してください。)

参考

フォーマット済みのディスケットを購入した場合には、すでに初期化済みなので、このFORMATコマンドを使わなくても、そのままDOSで使うことができます。

16

HELP

各コマンドに対するヘルプ情報を画面に表示します。コマンドのパラメーターやスイッチなどを忘れた場合や、コマンド解説書が手元にない場合に簡単に概要が参照できます。

HELPを使うには、以下のようにHELPコマンドをコマンド行から入力し、Enter (改行)を押してください。

```
C:¥>help
```

これでコマンドの一覧が表示されます。この一覧から必要なコマンドを選び、さらに詳しい解説を、同じHELPコマンドで見るには、次のように入力します。たとえば、MOREコマンドを見る場合には、

```
C:¥>help more
```

```
1 度に 1 画面ずつ出力を表示します。
MORE < [ドライブ:][パス]ファイル名
コマンド名 | MORE

  [ドライブ:][[パス]ファイル名
                 1 度に 1 画面ずつ表示するファイルを指定します。
  コマンド名     結果の出力を表示するコマンドを指定します。
```

17

MD

MDコマンドは、新しくディレクトリーを作成するのに使うコマンドです。Make Directory(ディレクトリーを作成する)の意味から名付けられていて、MKDIRと入力しても使えます。

たとえば¥WORKディレクトリーを作成するには、以下のコマンドをコマンド行から入力し、[↵ Enter](改行)を押してください。

```
C:¥>md work
```

作成したディレクトリーに移動するには、CDコマンドを使います。また、ディレクトリーを削除するコマンドはRDコマンドまたはDELTREEコマンドを参照してください。

18

MEM

MEMコマンドは、システムのメモリーの使用状況を見るのに使うコマンドです。Memory(メモリー:記憶域)の意味から名付けられています。

MEMコマンドでメモリーを調べるには、以下のようにコマンドをコマンド行から入力し、[↵ Enter](改行)を押してください。

```
C:¥>mem
```

```
メモリーのタイプ      合計 = 使用済 + 使用可
----------------  ------  ------  ------
基本                640K    264K    376K
UMB                   0K      0K      0K
アダプタ RAM/ROM    339K    339K      0K
XMS               1,069K    226K    843K
----------------  ------  ------  ------
システム全メモリ  2,048K    829K  1,219K

1MB 以下全メモリ    640K    264K    376K

実行可能プログラム最大サイズ    376K  (384608 バイト)
使用可能最大 UMB メモリー        0K   (0 バイト)
DOS は HMA 領域に常駐しています
```

この例では376KBの基本メモリーが使用可能です。

19

MORE

ファイルを1画面ずつ止めながら表示するコマンドです。

たとえば、MOREコマンドでサブ・ディレクトリー¥DOSの中のREADME.TXTの内容を1画面ずつ表示するには、以下のようにコマンドとファイル名をコマンド行から入力し、↵ Enter (改行)を押してください。

```
C:¥>more < c:¥dos¥readme.txt
```

画面の下には「-- つづく --」が表示されます。任意のキーを押すと次に進みます。途中で終了したい場合には、Ctrl + C キーを押します。

20

MOVE

MOVEコマンドは、ファイルを別の場所(ドライブまたはディレクトリー)に移動するコマンドです。一度に複数のファイルの指定ができます。ファイル指定にはワイルドカードが使えます。

たとえば、ドライブCのサブ・ディレクトリー¥DOSにあるREADME.TXTをドライブAのディスケットに移動するには、以下のコマンドをコマンド行から入力し、↵ Enter (改行)を押してください。

```
C:¥>move c:¥dos¥readme.txt a:
```

<-- ¥でディレクトリーと
ファイル名を区切る
a:はドライブの指定

```
c:¥dos¥readme.txt=> a:¥readme.txt[OK]
```

移動は「～を～に」という順番で、移動元と移動先を指定します。複数のファイルを指定するには次のように入力します。たとえば、サブ・ディレクトリー¥DOCのすべての.TXTの付くファイルをドライブAのディスケットに移動するには、以下のコマンドをコマンド行から入力し、↵ Enter (改行)を押してください。

```
C:¥>move c:¥doc¥＊.txt a:
```

<----　＊は「任意の8文字以下のファイル名」の意味
この＊をワイルドカードという

移動されたファイルがすべて表示されます。

参考

移動先にまったく同名のファイルがある場合、MOVEコマンドは上書きしてよいか確認のメッセージを表示します。置き換える場合には「Y」、置き換えない場合には「N」をタイプして [← Enter] を押します。ファイル指定にワイルドカードを指定した場合で同名のファイルが複数存在する場合には、「A」を指定すると、以降確認のメッセージは表示せずに無条件に置き換えます。

21

PATH

実行可能なファイルのある場所（ドライブおよびディレクトリー）までの検索パスを表示したり、設定をするコマンドです。パス（path）とは道の意味で、コマンド・インタープリター(COMMAND.COM)は、この設定を頼りにコマンドを探します。

PATHコマンドで現在設定されているパスを見るには、以下のコマンドをコマンド行から入力し、[← Enter] (改行)を押してください。

```
C:¥>path
```

```
PATH=C:¥DOS
```

この例ではサブディレクトリー¥DOSに対するパスが設定されています。パスを追加したい場合には、次のように入力します。現在の設定に¥WORKも追加してパスを設定する場合は

```
C:¥>path c:¥dos;c:¥work
```

<----　おのおののパスは;（セミコロン）で区切る

このように、現在設定されている¥DOSにセミコロンで区切って、次のパスを入れると追加になります。path c:¥workとだけ入力すると、¥DOSへのパスの設定は解除されてしまいますので、注意してください。

参考

正しいコマンドを入力しても、「コマンドまたはファイル名が正しくありません。」とエラーメッセージが表示される場合には、このPATHの設定を調べてください。

22

PRINT

PRINTコマンドは、DOSのテキスト・ファイルを印刷するコマンドです。印刷はDOSの操作と並行してバックグラウンドで実行できます。

たとえば、ドライブCの¥DOSディレクトリー内にあるREADME.TXTファイルを印刷するには、以下のコマンドをコマンド行から入力し、[↵ Enter] (改行)を押してください。

```
C:¥>print c:¥dos¥readme.txt
```

印刷途中で、印刷中のファイルを取り消すには/Cというスイッチを使います。

```
C:¥>print /c
```

このスイッチにはCancel(取り消す)の意味があります。

23

PROMPT

PROMPTコマンドは、DOSのコマンド・プロンプトを変更するコマンドです。

コマンド・プロンプト(C:¥>)はユーザーの好みにあわせて、変更できるようになっています。もっとも標準的なプロンプトを設定するには、以下のコマンドをコマンド行から入力し、[↵ Enter] (改行)を押してください。

```
C:¥>prompt $p$g
```

<---- $pは現行ドライブとパス名、$gは'>'記号を表す

次のように入力すると、OS/2と同じプロンプトになります。

```
C:¥>prompt [$p]
```

```
[C:¥]_
```

使用可能なパラメーターについては、次節のコマンド一覧を参照してください。

24

RD

RDコマンドは、ディレクトリーを削除するのに使うコマンドです。Remove Directory(ディレクトリーを削除する)の意味から名付けられていて、RMDIRと入力しても使えます。

たとえば、¥WORKディレクトリーを削除するには、以下のコマンドをコマンド行から入力し、[↵ Enter](改行)を押してください。

```
C:¥>rd work
```

ただし、ディレクトリーはディレクトリー内が空でないと削除できません。ディレクトリーに移動するにはCDコマンドを使います。またディレクトリーを作成するコマンドはMDコマンドを参照してください。

25

REN

RENコマンドは、ファイル名を変更するのに使うコマンドです。Rename(名前を変更する)の意味から名付けられていて、RENAMEと入力しても使えます。一度に複数のファイルの指定ができます。ファイル指定にはワイルドカードが使えます。

たとえば、README.TXTというファイル名をREADME.DOCに変更するには、以下のコマンドをコマンド行から入力し、[↵ Enter](改行)を押してください。

```
C:¥>ren readme.txt readme.doc
```

たとえば、複数のファイルを指定する場合には、以下のように入力します。

```
C:¥>ren *.txt *.doc
```

これでルートディレクトリーにあるTXTが付くファイルのすべてが、先頭8文字はそのままで、エクステンションだけDOCに変更されます。

SWITCH

㉖

SWITCHコマンドはDOS/V特有のコマンドで、日本語モードと英語モードとを切り替えるコマンドです。

日本語モードから英語モードへ切り替えるには、以下のコマンドをコマンド行から入力し、[← Enter](改行)を押してください。

```
C:¥>switch
```

```
[注意]
モード切り換え中は(PS/2ﾓｰﾄﾞに切り換わるまで) 電源を切らないでください。

システムを、ＰＳ／２モード(英語モード)に切り換えます。

システムを切り換えますか (Y/N) ?
```

ここで[Y]キーを押すとDOSが再始動して英語モードに切り替わります。

英語モードから日本語モードへの切り替えも同じコマンドです。ただし、メッセージは次のように英語で表示されます。

```
[Warning]: Do not turn off system during switching.

Switching the system into PS/55 mode (Japanese mode).

Are you sure you want to switch the system (Y/N) ?
```

参考

SWITCHコマンドはシステムを再始動するので、完全に英語のPC DOSの環境に切り替わります。一次的に英語環境に切り替えたい場合には、CHEVコマンドが高速で便利です。ただしシステムを再始動しないので、メモリーに常駐するプログラム(たとえば、かな漢字変換プログラム)などは、そのままメモリーに残ります。

27

TIME

TIMEコマンドは、時刻の表示と変更をするコマンドです。入力した時刻はシステムに登録され、以降の時刻の更新はシステムが自動的に行います。この時刻はDATEコマンドで設定した日付とともにファイル作成日時などの情報に使われます。

時刻を表示するには、以下のコマンドをコマンド行から入力し、[↵ Enter](改行)を押してください。

```
C:¥>time
```

```
現在の時刻は　12:47:06.84
新しい時刻を入力してください:
```

ここで[↵ Enter](改行)を押せば、コマンド・プロンプトに戻ります。時刻を変更する場合には、たとえば12:00:00というように:(コロン)で数字を区切って入力し、[↵ Enter](改行)を押してください。同じコマンドを繰り返すと変更した時刻を確認できます。

28

UNDELETE

UNDELETEコマンドはその名前の意味するように、削除したファイルを復元するコマンドです。誤って削除してしまったファイルなどを、場合によっては完全に元に戻せるので便利です。削除後にファイルの読み書きなど行うと、完全に復元できる度合いが少なくなります。

削除したファイルを復元するには、以下のコマンドをコマンド行から入力し、[↵ Enter](改行)を押してください。

```
C:¥>undelete
```

画面にはフルスクリーンのプログラムが現れます。あとは画面のメッセージに従ってください。ヘルプも用意されています。

UNFORMAT

UNFORMATコマンドはその名前の意味するように、フォーマットしたディスクやディスケットを復元するコマンドです。誤ってフォーマットしてしまったディスケットなどを、場合によっては完全に元に戻せるので便利です。削除後にそのディスクに対して、ファイルの読み書きなど行うと、完全に復元できる度合いが少なくなります。

たとえば、フォーマットしてしまったドライブAのディスケットを復元するには、以下のコマンドをコマンド行から入力し、↵ Enter (改行)を押してください。

```
C:¥>unformat a:
```

```
アンフォーマットするディスクをドライブ A: に
入れ, 準備ができたら改行キーを押してください
```

ここで復元したいディスケットをドライブAに挿入し、↵ Enter (改行)を押し、あとは画面のメッセージに従えば復元できます。

XCOPY

XCOPYコマンドは、ファイルをサブディレクトリーを含めてコピーする場合などに使うコマンドです。Extended Copy（拡張コピー）の意味から名付けられていて、ハードディスクのバックアップなどにも使います。一度に複数のファイルの指定ができます。ファイル指定にはワイルドカードが使えます。

たとえば、ドライブCのサブディレクトリー¥WORK内のファイルを、ドライブAにディレクトリーを含めてコピーするには、以下のコマンドをコマンド行から入力し、↵ Enter (改行)を押してください。

```
C:¥>xcopy c:¥work a: /s /e
```

DISKCOPYコマンドはディスケットのメディア・タイプが違うと実行できませんが、このXCOPYコマンドを使えば、異なったメディアどうしのコピーが可能です。

```
C:¥>xcopy a: c: /s /e
```

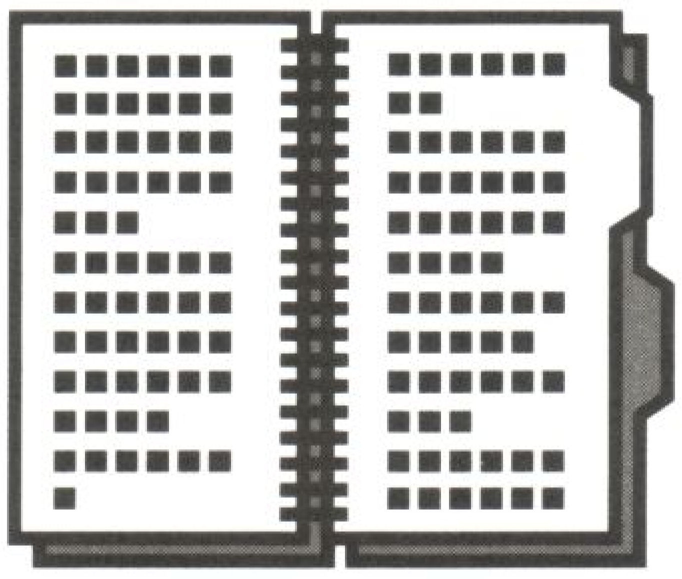
参考

DISKCOPY

DISKCOPYコマンドはディスケットをそのままコピーするので、オリジナルに不良セクターなどがあっても、そのままコピーしてしまいます。XCOPYコマンドを使うと、ファイルだけをコピーするので、そのようなことはありません。

コピー先にまったく同名のファイルがある場合、XCOPY コマンドは上書きしてよいか確認のメッセージを表示します。置き換える場合には「Y」、置き換えない場合には「N」をタイプして ↵ Enter を押します。ファイル指定にワイルドカードを指定した場合で同名のファイルが複数存在する場合には、「A」を指定すると、以降確認のメッセージは表示せずに無条件に置き換えます。

コマンド一覧



ここではDOSの主要コマンドを一覧にしています。それぞれのコマンドで使えるスイッチやパラメーターについても解説しています。

APPEND.EXE

指定したディレクトリーにあるデータ・ファイルを、現行ディレクトリーにあるかのようにオープンできるようにします。

APPEND [[ドライブ:]パス[;...]] [/X[:ON¦:OFF]] [/PATH:ON¦OFF] [/E]

[ドライブ:][パス]
APPENDするドライブやディレクトリーを指定します。

/X:ON
APPENDされたディレクトリーを、ファイル検索やアプリケーションから使用可能にします。

/X:OFF
APPENDされたディレクトリーをファイル・オープン要求にのみ適合させます。/X:OFF が省略値です。

/PATH:ON
APPENDされたディレクトリーを、ディレクトリー・パスを指定するファイル要求に適合させます。/PATH:ON が省略値です。

/PATH:OFF
/PATH:ONの機能を中止します。

/E
APPENDされたディレクトリー・リストのコピーをAPPEND環境変数に保持します。/E はシステム起動後、APPENDの初回使用時のみ使うことになります。

APPEND ;

パラメーターとしてセミコロンのみ"APPEND ;"が指定されると、APPENDされたディレクトリーをキャンセルします。パラメーターが指定されなければ、APPENDされたディレクトリ一覧が表示されます。

ASSIGN

ドライブへのディスク操作要求を別ドライブへ割り振ります。

ASSIGN [x[:]=y[:][...]]

ASSIGN /STATUS

x
ASSIGNするドライブ名を指定します。

y
x:がASSIGNされるドライブ名を指定します。

/STATUS
現在のドライブ割り当て状況を表示します。

パラメーターが指定されなければ、アサイン状況はリセットされます。

ATTRIB

ファイル属性を表示/変更します。

ATTRIB [+R¦-R] [+A¦-A] [+S¦-S] [+H¦-H] [[ドライブ:][パス]ファイル名] [/S]

+
属性の設定を指定します。

-
属性の解除を指定します。

R
読み出し専用ファイルの属性です。

A
バックアップされていないファイルの属性です。

S
システム・ファイルの属性です。

H
隠しファイルの属性です。

/S
指定したパス以下の全ディレクトリー中のファイルを対象にします。

BREAK

拡張CTRL+Cチェックの設定や解除をします。

BREAK [ON¦OFF]

パラメーターが指定されなければ、現在のBREAK設定状態が表示されます。

CALL

バッチ・ファイルの中から、別のバッチ・ファイルを呼び出します。

CALL [ドライブ:][パス]ファイル名 [バッチ・ファイルの引数]

バッチ・ファイルの引数
バッチ・ファイルに渡すパラメーターを指定します。

CHDIR(CD)

現在のディレクトリーを表示/変更します。

CHDIR [ドライブ:][パス]

CHDIR[..]

CD [ドライブ:][パス]

CD[..]

..

親ディレクトリーに変更したい時に指定します。

"CDドライブ:"と入力すると、指定したドライブの現行ディレクトリーが表示されます。パラメーターが指定されなければ、現行ドライブと現行ディレクトリーが表示されます。

CHEV

日本語環境と英語環境の切り換えを行います。

CHEV [JP/US [/F]]

JP
日本語環境に切り換えます。

US
英語環境に切り換えます。

/F
切り換えに不都合が生じても処理を続行します。

CHKDSK

ディスクのチェック、および状態の表示をします。

CHKDSK [ドライブ:][[パス]ファイル名] [/F] [/V]

[ドライブ:][パス]
チェックするドライブやディレクトリーを指定します。

ファイル名
チェックするファイルを指定します。

/F
ディスクのエラーを修復します。

/V
ディスクの各ファイルのフルパス名を表示します。

パラメーターが指定されなければ、カレントディスクをチェックします。

CHOICE

バッチ・ファイルの中からY/Nなどの実行の選択を行います。

CHOICE [/C[:]選択肢] [/N] [/S] [/T[:]c,nn] [文字列]

/C[:]選択肢
選択可能な文字スイッチ(半角文字)を列挙します。省略値はYN

/N
実行の選択時に[選択肢]?を表示しません。

/S

大文字と小文字の文字スイッチを区別します。

/T[:]c,nn

nn秒後にタイムアウトして、cが選択されたものとします。

文字列

実行の選択時に表示するプロンプト文字列を指定します。

ERRORLEVELは選択された文字スイッチの位置(0、1、2、3、..)にセットされます。

CLS

画面を消去します。

```
CLS
```

COMMAND

DOSコマンド・インタープリターを新しく起動します。

```
COMMAND [[ドライブ:]パス] [デバイス] [/E:nnnnn] [/P] [/Y] [/[C¦K] 文字列] [/MSG]
```

[ドライブ:]パス

COMMAND.COMファイルのあるディレクトリーを指定します。

デバイス

コマンド入出力のために使用するデバイスを指定します。

/E:nnnnn

環境変数のサイズの初期値としてnnnnn バイトを設定します。

/P

新たなコマンド・インタープリターを常駐させます。(復帰しません)

/C 文字列

文字列で指定したコマンドの実行後、復帰します。

/K 文字列

文字列で指定したコマンドを実行します。(EXIT コマンドで復帰します)

/MSG /P

全エラー・メッセージをメモリー内に保持します。

/Y

バッチファイルをステップ実行します。

COMP

2個のファイル(複数可)の内容を比較します。

```
COMP [データ1] [データ2] [/D] [/A] [/L] [/N=数字] [/C]
```

データ1

比較する1番目のファイルのパスと名前を指定します。

データ2

比較する2番目のファイルのパスと名前を指定します。

/D

10進数形式で違いを表示します。省略時は16進表示です。

/A

ASCII文字で違いを表示します。

/L

違いのある行の行番号を表示します。

/N=数字

各ファイルの先頭から、数字で指定した行数分だけ比較します。

/C

ASCII文字の大文字/小文字を無視して比較します。

複数のファイルを比較するには、データ1とデータ2にワイルド・カード(*/?)を指定します。

COPY

ファイル(複数可)を別のところへコピーします。

```
COPY [/A¦/B] 複写元 [/A¦/B] [+複写元 [/A¦/B] [+ ...]] [複写先 [/A¦/B]] [/V][/Y¦/-Y]
```

複写元

コピーするファイルを指定します。

/A

ファイルをASCIIテキスト・ファイルとして扱います。

/B

ファイルをバイナリー・ファイルとして扱います。

複写先

新しいファイルのディレクトリーやファイル名を指定します。

/V

新しいファイルが正しいかどうかベリファイします。

ファイルを連結するためには、複写先として1個のファイルのみ指定し、複写元には複数のファイルを指定します。(グローバル・ファイル文字(*/?)を使用したり、ファイル1+ファイル2+ファイル3+...と指定します)

/Y
上書き確認のプロンプトを表示しません。/-Y(デフォルト)は表示します。

注意
指定した複写先に同じ名前のファイルがあった場合、COPYコマンドは上書きしてよいか確認のメッセージを表示します。

CPBACKUP

1つ以上のファイルをあるディスクから別のディスクやテープにバックアップします。復元も同じコマンドでできます。

CPBACKUP [d:] [設定名] [ファイル名...] [パラメーター...]

d:
バックアップするドライブを指定します。

設定名
エクステンションなしのセットアップ・ファイル名を指定します。

ファイル名
バックアップするファイルを指定します(*ワイルドカード使用可能)。

パラメーター

/R
自動的に復元モードが開始されます。

/SAVE
履歴をハードディスクに保管します。

/NOSAVE
履歴をハードディスクに保管しません。

/ECC
エラー修正を使用します。

/NOECC
エラー修正を使用しません。

/SF
標準フォーマットを使用します。

/NONSF
非標準フォーマットを使用します。

/MTASK
マルチタスク・モードからのファイルの変更を保護します。

/FULL
全バックアップ(保存ビット変更あり)

/INC
追加バックアップ(全バックアップへの追加)

/SEP
分割追加バックアップ

/COPY
全コピー・バックアップ(保存ビット変更なし)

/FULLERASE
全バックアップ(バックアップ前にテープを消去)

/DIF
差分バックアップ

/DATE=yymmdd-yymmdd
バックアップするファイルの日付を指定します。

/EXATTR=HSR
隠し、システム、読み取り専用ファイルを除きます。

/DRIVE=TAPE または /DRIVE=d:n
ドライブとメディアを指定します(たとえばB:1440)

/ADDR=base-i-d
テープ・ドライブの入出力アドレスを指定します。base=16進アドレス、i=IRQ、d=DMAチャネルです。

/RATE=rate
データ・レートを設定します。(rate=1MB、500KBまたは250KB)

/NO
オーバーラップした入出力を使用しません。

/LCD
LCD用色を使います。

/BF
BIOSフォントを使います(グラフィックが正しく表示されない場合)

/NF
グラフィック文字を使いません。

/NGM
省略時の設定のマウス・キャラクターを使います。

/LE
マウスの右と左のボタンの機能を交換します。

/IM
マウス・ドライバーを使いません。

/PS2
マウス・ハードウェアをリセットします(マウスが消えたり、固定してしまった場合に使います。)

CPBDIR

バックアップ・ディレクトリーの報告をします。

CPBDIR [x:] [/X] [/V]

x:
ドライブを指定します。

/X
拡張情報を報告します。

/V
ディスクを検査します。

CPSCHED

指定した時点でのプログラムの自実行をスケジュールします。

CPSCHED [/U] [/LOW]

/U
現在常駐しているCPSCHEDをメモリーから削除します。

/LOW
CPSCHEDを自動的にUMBにロードしません.

CTTY

システム制御のための端末デバイスを変更します。

CTTY デバイス

デバイス
COM1のような、使用する端末デバイスを指定します。

DATAMON

コンピューターのデータ喪失をガードします。

DATAMON [パラメーター...]

パラメーター

/LOAD
.INIファイルのオプションを使ってメモリーに常駐します。

/LOW
UMBメモリーが使用可能でも使いません。

/UNLOAD または /U
メモリーからDATAMONを取り除きます。

/STATUS または /S
DATAMONの現在のステータスを表示します。

/?
コマンド行ヘルプを表示します。

/SENTRY+
デリート・セントリーを使用可能にします。

/SENTRY-
デリート・セントリーを使用不可にします。

/TRACKER+
デリート・トラッカーを使用可能にします。

/TRACKER-
デリート・トラッカーを使用不可にします。

DATE

日付を表示/変更します。

DATE [日付]

パラメーターが指定されなければ、現在の日付が表示され、新しい日付の入力を促すプロンプトになります。変更する必要がなければ、[Enter](改行)のみ押してください。

DEBUG

プログラムのテスト/編集ツールであるデバッガーを起動します。

DEBUG [[ドライブ:][パス]ファイル名 [テストファイル-パラメーター]]

[ドライブ:][パス]ファイル名
テストするファイルを指定します。

テストファイル-パラメーター
テストするファイルが必要とするコマンド・ライン情報を指定します。

デバッグ起動後に、?を入力するとデバッグ・コマンド一覧が表示されます。

DEFRAG

ディスク・アクセス最適化のためファイルの再編成を行います。

DEFRAG [ドライブ:] [/F] [/Sorder] [/B] [/SKIPHIGH] [/LCD¦/BW¦/G0]

DEFRAG [ドライブ:] [/U] [/B] [/SKIPHIGH] [/LCD¦/BW¦/G0]

[ドライブ:]
最適化するドライブ名

/F
完全最適化を行います。

/U
不連続ファイルの調整のみでパックはしません。

/S
orderに従い並び替えを行います。

order

N
名前順 (アルファベット順)

E
拡張子順 (アルファベット順)

D
日付、時間順 (古い順)

S
サイズ順 (小さい順)

-
を付けると逆順になる

/B
最適化後リブートします。

/SKIPHIGH
主記憶上にロードします。

/LCD
モノクロ階調液晶パネル用

/BW
モノクロ用

/G0
グラフィックマウスとグラフィック文字セットを無効にします。

/H
隠しファイルも移動します。

DEL

ファイル(複数可)を削除します。

DEL [ドライブ:][パス]ファイル名 [/P]

ERASE [ドライブ:][パス]ファイル名 [/P]

[ドライブ:][パス]ファイル名
削除するファイルを指定します。ワイルドカード(*/?)による複数ファイルの指定も可能です。

/P
各ファイルの削除前にプロンプトを表示して削除の確認をします。

DELTREE

ディレクトリーとそれ以下のファイル/ディレクトリーをすべて削除します。

DELTREE [/Y] [ドライブ:]パス [[ドライブ:]パス[...]]

/Y
ディレクトリー削除の確認を行いません。

[ドライブ:]パス
削除したいディレクトリーの名前を指定します。

ご注意

DELTREEコマンドは非常に危険なコマンドなので注意して使用してください。ディレクトリーとそれ以下のファイル／ディレクトリーが全部削除されてしまいます。

DIR

ディレクトリー中のサブディレクトリーやファイルの一覧表示をします。

DIR [ドライブ:][パス][ファイル名] [/P] [/W] [/A[[:]属性]] [/O[[:]ソート順]] [/S] [/B] [/L] [/C[H]]

[ドライブ:][パス][ファイル名]
一覧表示をするドライブ、ディレクトリー、ファイル名を指定します。

/P
画面単位で一時停止します。

/W
画面いっぱいに一覧形式を表示します。

/A
指定した属性を持つファイルを表示します。

属性:

D
ディレクトリー

R
読み出し専用ファイル

H
隠しファイル

A
保存属性ファイル

S
システム･ファイル

-
指定の属性以外

/O
ソート順で表示します。

ソート順:

N
名前(ABC順)

S
サイズ(昇順)

E
拡張子(ABC順)

D
日付/時刻(昇順)

G
サブディレクトリー順

-
逆順

C
ファイル圧縮率(昇順)

/S
指定ディレクトリー下の全サブディレクトリー中のファイルを表示します。

/B
ファイル名のみを表示します。

/L
小文字で表示します。

/C[H]
ファイル圧縮率を表示します。/CHはホストのクラスター単位で換算します。

あらかじめDIRCMD環境変数にスイッチを設定しておくこともできます。/-Wの様に-(ハイフン)をつければ、あらかじめ設定されたスイッチを反転します。

DISKCOMP

2つのディスケットの内容を比較します。

DISKCOMP [ドライブ1: [ドライブ2:]] [/1] [/8]

/1
ディスクの最初の面だけを比較します。

/8
各トラックの最初の8セクタだけを比較します。

5章
DOSをコマンドで使う

DISKCOPY

ディスケットの内容を別のディスケットにコピーします。

DISKCOPY [ドライブ1: [ドライブ2:]] [/1] [/V] [/M]

/1
ディスクの最初の面だけをコピーします。

/V
情報が正しくコピーされたかベリファイします。

2つのディスケットは同一タイプでなければいけません。ドライブ1とドライブ2は同一ドライブを指定することができます。

/M
コピー時に基本メモリーのみを使用します。

DOSKEY

コマンド・ラインの編集、DOSコマンドの再呼び出し、マクロの生成をします。

DOSKEY [/REINSTALL] [/BUFSIZE=サイズ] [/MACROS] [/HISTORY] [/INSERT¦/OVERSTRIKE] [マクロ名=[テキスト]]

/REINSTALL
新しいDOSKEYのコピーを導入します。

/BUFSIZE=サイズ
コマンド履歴バッファのサイズを設定します。

/MACROS
DOSKEYの全マクロを表示します。

/HISTORY
メモリーに退避した全コマンドを表示します。

/INSERT
新たな入力が旧テキスト中に挿入されるように指定します。

/OVERSTRIKE
新たな入力が旧テキストに上書きされるように指定します。

マクロ名
作成するマクロ名を指定します。

テキスト
登録するコマンドを指定します。

上下矢印キーはコマンドの再呼び出しをします。F7はコマンド履歴を表示します。ALT+F7はコマンド履歴をクリアします。F8はコマンド履歴を検索します。F9は数字によるコマンドの選択をします。ALT+F10はマクロ定義をクリアします。

以下は、DOSKEYのマクロ定義で使用する特殊コードです。

$T
コマンド・セパレーターです。マクロ中で複数のコマンドが使用できます。

$1-$9
バッチ・パラメーターです。バッチ・プログラム中の%1-%9と同義です。

$*
コマンド・ライン上のマクロ名に続くテキストで置き換えられるシンボルです。

DOSSHELL

DOSシェルを起動します。

DOSSHELL [/T] [/B]

DOSSHELL [/G] [/B]

/T
DOSシェルをテキスト・モードで起動します。

/G
DOSシェルをグラフィック・モードで起動します。

/B
DOSシェルをモノクロ画面で起動します。

DRVLOCK

メディアやICカードが抜かれないようにドライブやソケットをロックしたり、ロック解除したりします。

DRVLOCK [ドライブ:¦ソケット:] [/ON¦/OFF]

/ON
ドライブやソケットのロックを設定します。

/OFF
ドライブやソケットのロックを解除します。

注意
ロック機能のあるドライブ(またはソケット)でのみ動作します。

DSPX

画面に表示される文字数を決めるテキスト・モードを設定します。

DSPX [S¦L¦W¦D [/EXT]]

S

標準テキスト・モード(80桁×25行)に設定します。

L

縦長テキスト・モード(80桁×多行)に設定します。

W

ワイド・テキスト・モード(多桁×多行)に設定します。

D

省略時のDOS/Vテキスト・モード(80桁×25行、16ドット・フォント、VGA)に設定します。

/EXT

S、L、Wのスイッチと共有し、罫線/下線付きのテキスト・モードに設定します。通常は指定する必要はありません。

DSPXVGA(日本語モードのみ)

VGA用のビデオ拡張ドライバーを導入します。

DSPXVGA [/HS=LC¦OFF¦ON]

DSPXVGA [/R]

/HS=LC

ハードウェア機能を使ってスクロールします。高速ですが、多少画面がちらつきます。

/HS=OFF

ソフトウェアにより画面をスクロールします。画面はちらつきませんが、/HS=LCに比べてスクロールが遅くなります。

/HS=ON

ハードウェア機能を使ってスクロールします。3つの指定のうち一番高速ですが、多少画面がちらつきます。

/R

DSPXVGA.EXEをメモリーから除去します。

注意

ビデオ拡張ドライバーは通常ハードウェアのスクロールの機能を自動判定するので/HS=のパラメータは特に必要ありません。自動判定できずに画面スクロールが正常に行われない場合にのみ/HS=LCまたは/HS=OFFを指定してください。

ECHO

メッセージの表示、コマンド・エコーのON/OFFの指定を行ないます。

ECHO [ON¦OFF]

ECHO メッセージ

パラメーターが指定されなければ、現在のエコーの設定が表示されます。

EDLIN

行単位のテキスト・エディターである、EDLINを起動します。

EDLIN [ドライブ:][パス]ファイル名 [/B]

/B

ファイル終了文字(CTRL+Z)を無視します。

EJECT

ドライブからメディアをイジェクト(排出)します。

EJECT [ドライブ:]

注意

自動イジェクト(排出)機能のあるドライブでのみ動作します。

EMM386

EMSメモリー・サポートをON/OFFします。

EMM386 [ON¦OFF¦AUTO] [W=ON¦W=OFF]

ON¦OFF¦AUTO

EMM386をON/OFF、または自動モードにします。

W=ON¦OFF

Weitekの数値演算プロセッサーのサポートをON/OFFします。

EPCLESCP

英語PCLプリンターでESC/P(J84)対応プリンターをエミュレートし、文字印刷をサポートするプリンター・ドライバーです。

EPRNESCP [S=A4¦LTR] [/LPTx] [/R] [/INI=[ドライブ:][パス]]

S=A4¦LTR

用紙サイズを指定します。A4またはレター・サイズ(LTR)を指定できます。省略時の設定はレターです。

/LPTx

出力先のプリンターを指定します。xには1、2、3の数字が指定できます。省略時の設定は1です。

/R

すでに常駐しているEPCLESCP.COMをメモリーから除去します。

/INI=[ドライブ:][パス]

指定したドライブとパスにあるDOSV.INIファイル(DOS/V初期設定情報ファイル)を参照します。パスは必ず¥記号で終わるように指定してください。

注意

設定値を変更する場合にはSETUPVコマンドを使用してください。

EPCLIBM

英語PCLプリンターでIBM 5575/5577系プリンターをエミュレートし、文字印刷をサポートするプリンター・ドライバーです。

EPCLIBM [S=LTR¦] [/LPTx] [/R] [/INI=[ドライブ:][パス]]

S=A4¦LTR

用紙サイズを指定します。A4またはレター・サイズ(LTR)を指定できます。省略時の設定はレターです。

/LPTx

出力先のプリンターを指定します。xには1、2、3の数字が指定できます。省略時の設定は1です。

/R

すでに常駐しているEPCLIBM.COMをメモリーから除去します。

/INI=[ドライブ:][パス]

指定したドライブとパスにあるDOSV.INIファイル(DOS/V初期設定情報ファイル)を参照します。パスは必ず¥記号で終わるように指定してください。

注意

設定値を変更する場合にはSETUPVコマンドを使用してください。

EPRNESCP

英語プリンターでESC/P(J84)対応プリンターをエミュレートし、文字印刷をサポートするプリンター・ドライバーです。

EPRNESCP[P=PRO¦LQ] [S=LTR¦MAX] [/LPTx] [/R] [/INI=[ドライブ:][パス]]

P=PRO¦LQ

P=PROを指定すると、IBM Personal Printer Series II(24ドット)またはProprinterX24E/XL24E上でのエミュレーションになります。P=LQを指定すると、Epson社製LQ 1050(ESC/P 24ドット英語プリンター)上でのエミュレーションになります。

S=LTR¦MAX

S=LTRを指定すると、最大印字幅が8.0インチになります。S=MAXを指定すると、最大印字幅が13.5インチになります。省略時の設定はLTRです。

/LPTx

出力先のプリンターを指定します。xには1、2、3の数字が指定できます。省略時の設定は1です。

/R

すでに常駐しているEPRNESCP.COMをメモリーから除去します。

/INI=[ドライブ:][パス]

指定したドライブとパスにあるDOSV.INIファイル(DOS/V初期設定情報ファイル)を参照します。パスは必ず¥記号で終わるように指定してください。

注意

設定値を変更する場合にはSETUPVコマンドを使用してください。

EPRNIBM

英語プリンターでIBM 5575/5577系プリンターをエミュレートし、文字印刷をサポートするプリンター・ドライバーです。

EPRNIBM [P=PRO¦LQ] [S=LTR¦MAX] [/LPTx] [/R] [/INI=[ドライブ:][パス]]

P=PRO¦LQ

P=PROを指定すると、IBM Personal Printer Series II(24ドット)またはProprinterX24E/XL24E上でのエミュレーションになります。P=LQを指定すると、Epson社製LQ 1050(ESC/P 24ドット英語プリンター)上でのエミュレーションになります。

S=LTR¦MAX

S=LTRを指定すると、最大印字幅が8.0インチになります。S=MAXを指定すると、最大印字幅が13.5インチになります。省略時の設定はLTRです。

/LPTx

出力先のプリンターを指定します。xには1、2、3の数字が指定できます。省略時の設定は1です。

/R

すでに常駐しているEPRNIBM.COMをメモリーから除去します。

/INI=[ドライブ:][パス]

指定したドライブとパスにあるDOSV.INIファイル(DOS/V初期設定情報ファイル)を参照します。パスは必ず¥記号で終わるように指定してください。

注意

設定値を変更する場合にはSETUPVコマンドを使用してください。

ERASE

ファイル(複数可)を削除します。

DEL [ドライブ:][パス]ファイル名 [/P]

ERASE [ドライブ:][パス]ファイル名 [/P]

[ドライブ:][パス]ファイル名

削除するファイルを指定します。ワイルドカード(*/?)による複数ファイルの指定も可能です。

/P

各ファイルの削除前にプロンプトを表示して削除の確認をします。

EXE2BIN

.EXE(実行可能)ファイルをバイナリー・ファイルへ変換します。

EXE2BIN [ドライブ1:][パス1]入力ファイル [[ドライブ2:][パス2]出力ファイル]

入力ファイル

変換される.EXE(実行可能)ファイルを指定します。

出力ファイル

作成されるバイナリー・ファイルを指定します。

EXIT

COMMAND.COM プログラム(コマンド・インタプリター)から復帰します。

EXIT

EXPAND

圧縮されたファイル(複数可)を元に戻します。

EXPAND [ドライブ:][パス]ファイル名 [[ドライブ1:][パス1]ファイル名[...]] 転送先

[ドライブ:][パス]ファイル名

元に戻したいファイルのあるパス名、ファイル名を指定します。ワイルド・カード(*/?)を使用することはできません。

転送先

新しいファイルが転送されるパス名を指定します。転送先には、ドライブ名にコロン、ディレクトリー名、ファイル名、もしくはこれらの組み合せを指定することができます。

転送元ファイル名を1つだけ指定した場合には、転送先としてファイル名のみが指定できます。複数の転送元ファイル名を指定した場合には、転送先としてディレクトリー名のみが指定できます。この場合、ファイル名はそのままで復元されます。

FASTOPEN

ファイルやディレクトリーをオープンする時間を短縮します。

FASTOPEN ドライブ:[[=]n] [ドライブ:[[=]n][...]] [/X]

ドライブ:

FASTOPENを稼働させたいドライブを指定します。

n

FASTOPENがファイル名キャッシュの中に保持する最大ファイル数を指定します。

/X
ファイル名キャッシュをEMSメモリー中に展開します。

FC

2個のファイル(複数可)の内容を比較してそれらの違いを表示します。

FC [/A] [/C] [/L] [/LBn] [/N] [/T] [/W] [/nnnn] [ドライブ1:][パス1]ファイル名1 [ドライブ2:][パス2]ファイル名2

FC /B [ドライブ1:][パス1]ファイル名1 [ドライブ2:][パス2]ファイル名2

/A
各相違箇所の最初の行と最後の行だけを表示します。

/B
バイナリー・レベルで比較します。

/C
大文字/小文字の区別をしないで比較します。

/L
ASCIIテキスト・ファイルとして比較します。

/LBn
連続した不一致行の最大行数を指定します。

/N
ASCIIテキスト・ファイル比較のとき、行番号を付けて不一致行を表示します。

/T
タブをスペースに展開しないで比較します。

/W
空白(タブとスペース)を区別しないで比較します。

/nnnn
不一致後に、一致するべき連続行数を指定します。

FDISK

DOSで使用するためにハード・ディスクを設定します。

FDISK [/STATUS]

/STATUS
ハード・ディスクの状態を表示します。

FIND

ファイル(複数可)の中からテキスト文字列を検索します。

FIND [/V] [/C] [/N] [/I] "文字列" [[ドライブ:][[パス]ファイル名[...]]

/V
指定した文字列が含まれない全ての行を表示します。

/C
指定した文字列を含む行数だけを表示します。

/N
行番号を付けて表示します。

/I
大文字/小文字の違いを無視して検索します。

"文字列"
検索するテキスト文字列を指定します。

[ドライブ:][パス]ファイル名
検索するファイル(複数可)を指定します。

パス名が指定されなければ、プロンプトから入力されるテキスト、あるいは他のコマンドからパイプで受け渡されるテキストを検索します。

FOR

ある指定されたコマンドを幾つかのファイルの各々に対して実行します。

FOR %変数 IN (セット) DO コマンド [コマンド・パラメーター]

%変数
置き換えられるパラメーターを指定する。

(セット)
1つ以上のファイルを指定する。ワイルドカードも使用できます。

コマンド
各々のファイルに対して実行するコマンドを指定する

コマンド・パラメーター
指定したコマンドのパラメーターやスイッチを指定する。

FORコマンドをバッチ・プログラム内で使うには、%変数の代わりに%%変数を指定してください。

FORMAT

DOSで使用するためのディスクをフォーマットします。

FORMAT ドライブ: [/V[:ラベル]] [/Q] [/U] [/F:サイズ] [/B¦/S]

FORMAT ドライブ: [/V[:ラベル]] [/Q] [/U] [/T:トラック数 /N:セクター数] [/B¦/S]

FORMAT ドライブ: [/V[:ラベル]] [/Q] [/U] [/1] [/4] [/B¦/S]

FORMAT ドライブ: [/Q] [/U] [/1] [/4] [/8] [/B¦/S]

/V[:ラベル]
ボリューム・ラベルを指定します。

/Q
クイック・フォーマットを実行します。

/U
強制的にフォーマットを実行します。

/F:サイズ
指定されたサイズでディスケットをフォーマットします。(160、180、320、360、720、1.2、1.44、2.88のように指定します)

/B
システム・ファイルのための空間を、フォーマットするディスク上に割り当てます。

/S
DOSシステム・ファイルを、フォーマットするディスクにコピーします。

/T:トラック数
ディスク面当りのトラック数を指定します。

/N:セクター数
トラック当りのセクター数を指定します。

/1
ディスケットの片面だけフォーマットします。

/4
5.25インチ高密度ドライブで360Kディスケットをフォーマットします。

/8
トラック当り8セクターとしてフォーマットします。

FORMAT12

3.5インチ2HD(両面、4倍密度)のディスケットを1.2MBにフォーマットすます。

FORMAT12

デバイス・ドライバーとして$FDD12.SYSがCONFIG.SYSに導入されていて、ディスケット・ドライブが1.2MBに対応しているハードウェアで使用できます。このコマンドでフォーマットしたディスケットでは、SYS、UNDELETE、UNFORMAT、DRIVEPARM、DRIVER.SYS、DISKCOMP、DISKCOPY、CPBACKUPの各々のコマンドは使用できません。

GOTO

バッチ・ファイル中で、ラベルで定義されている行へDOSの実行を移します。

GOTO ラベル

ラベル
ラベルとしてバッチ・ファイルで使用されるテキスト文字列を指定します。ラベルは、行の先頭をコロン(:)で始めてください。

GRAPHICS

グラフィック画面を印刷するプログラムを読み込みます。

GRAPHICS [/R]

/R
画面と同じ白黒配色で印刷します。

HELP

DOSコマンドのヘルプ情報を表示します。

HELP [コマンド]

コマンド
ヘルプ情報を表示するコマンドを指定します。

IBMAVSP

IBMアンチ・ウィルス・プログラムを始動します。オプションを指定しなければ、インタラクティブな操作がフルスクリーンで行えます。

IBMAVSP [オプション]

?
ヘルプ画面を表示します。

*
すべてのローカルなハードディスクのウィルスを検索します。このオプションを使用すると、プログラムはどのドライブを検索するかの問い合わせを行いません。

*N
すべてのネットワーク・ドライブのウィルスを検索します。このオプションを使用すると、プログラムはどのドライブを検索するかの問い合わせを行いません。

C:
ドライブCを検索します。他のドライブを指定することも、複数のドライブ文字をコマンド行から指定することもできます。一つ以上のドライブ文字を指定した場合には、プログラムはどのドライブを検索するかの問い合わせを行いません。

-LOG ログファイル名
ログファイルをどこに書き込むかを指定します。このオプションを指定すると、プログラムはどこにログファイルを書き込むかの問い合わせを行いません。"ログファイル名"はオプションで、フル・パス名で指定できます。何も指定しなければIBMAVSP.LOGが現行ディレクトリーに書き込まれます。

-ALLFILES
指定されたすべてのドライブのすべてのファイルのウィルスを検索します。このオプションを使用すると、プログラムはファイル指定の問い合わせを行いません。

-PROGRAMS
指定したドライブのプログラムだけのウィルスを検索します。このオプションを使用すると、プログラムはファイル指定の問い合わせを行いません。

-VLOG
感染したものも、していないものも含めてすべての検索した名前をログファイルに書き込みます。

-NB
ウィルスを発見してもビープ音をスピーカーから鳴らしません。

-NLOG
ログファイルを作成しません。

-COPENERR
ファイルがチェックのためにオープンできなくても、ユーザーに問い合わせをせずに、継続してウィルスを検索します。

-CERR
重大でないエラーが起こっても、ユーザーに問い合わせをせずに、継続してウィルスを検索します。

-MEM
メモリーのウィルスを検索します。プログラムはチェックするドライブやファイル・タイプの問い合わせを行いません。このスイッチはメモリーだけをチェックする場合に使います。

-ONEFLOP
指定した以外のディスケットのウィルス検索を行いません。

以下の6つのオプション(-NREP, -NWIPE, -NFSCAN, -YREP, -YWIPE, -YFSCAN)は、プログラムが感染したオブジェクトを発見した場合に対処するものです。

-NREP
感染したファイルやブートレコードを修正しません。

-NWIPE
感染したファイルやブートレコードを削除しません。

-NFSCAN
検索中にウィルスを発見した場合、最終的な徹底走査の実行を試みません。

-YREP
感染したファイルやブートレコードを修正します。

-YWIPE
感染したファイルやブートレコードを削除します。ファイルとブートレコードはそれらがまだ修正されていない場合にのみ削除または置き換えが行われます。

-YFSCAN
検索中にウィルスを発見した場合、ユーザーに問い合わせを行わず、最終的な徹底走査の実行をします。

注意

長いオプションは最初の3文字で代用できます。

IF

バッチ・プログラム内で条件処理を行います。

IF [NOT] ERRORLEVEL 番号 コマンド

IF [NOT] 文字列1==文字列2 コマンド

IF [NOT] EXIST ファイル名 コマンド

NOT
条件が偽(False)の場合にのみコマンドを実行することを指定します。

ERRORLEVEL 番号
番号
最後のプログラムの実行で返された終了コードが、指定した番号と同じかそれ以上の場合に真(True)になります。

コマンド
条件が合った場合に実行するコマンドを指定します。

文字列1==文字列2
指定した文字列が合致した場合に真(True)になります。

EXIST ファイル名
指定したファイルが存在すれば真(True)になります。

INTERLNK

INTERLNK-INTERSVR間でリダイレクトするドライブを指定します。あるいはステータスを表示します。

INTERLNK [client=[server]]

client
サーバーにリダイレクトするクライアントのドライブ名を指定します。

server
クライアントにリダイレクトするサーバーのドライブ名を指定します。指定しない場合、client=で指定したリダイレクトは取り消されます。

ステータスを表示するには、パラメーターなしでINTERLNKと入力してください。

INTERSVR

リダイレクトされたドライブ経由で、シリアルまたはパラレル・ポートによるファイル転送またはファイル印刷の機能を提供します。

INTERSVR [ドライブ:[...]] [/X=ドライブ:[...]] [/LPT[:][n¦アドレス]] [/COM[:][n¦アドレス]] [/BAUD:レート] [/v] [/b]

ドライブ:
リダイレクトするドライブを指定します。(省略時値はすべてのドライブです)

/X=ドライブ:
リダイレクトしないドライブを指定します。

/LPT[n]
スキャンするLPTポートを指定します。(/LPT はすべてのLPT ポートをスキャンします)

/LPT[アドレス]
スキャンするポート・アドレスを指定します。

/COM[n]
スキャンするCOMポートを指定します。(/COMはすべてのCOMポートをスキャンします)

/COM[アドレス]
スキャンするポート・アドレスを指定します。

/BAUD:レート
最大シリアル・ボー・レートを設定します。

/B
モノクロ画面で表示します。

/V
タイマーとの衝突を防ぎます。接続にシリアル・ポートをお使いで、INTERLNK使用時にコンピューターの機能が停止してしまうような場合に指定してください。

INTERSVR /RCOPY

INTERLNK関連ファイルを転送します。コンピューターのシリアル・ポートは、7線のヌルモデム・ケーブルで接続されている必要があります。

JOIN

ディスク・ドライブを別のドライブのディレクトリーとして接続します。

JOIN [ドライブ1: [ドライブ2:]パス]

JOIN ドライブ1: /D

ドライブ1:
ドライブ2のディレクトリーとして接続されるディスク・ドライブを指定します。

ドライブ2:
ドライブ1を接続したいドライブを指定します。

パス
ドライブ1を接続したいディレクトーを指定します。このディレクトリーは空でないといけません。また、ルート・ディレクトリーは指定できません。

/D
指定されたドライブの接続を解除します。

パラメーターが指定されなければ、接続されているドライブの一覧が表示されます。

KEYB

指定された言語用にキーボードを設定します。

KEYB [xx[,[yyy][,[ドライブ:][パス]ファイル名]]] [/E] [/ID:nnn]

xx
キーボード・コード(2文字)を指定します。

yyy
キャラクター・セットのコードページを指定します。

[ドライブ:][パス]ファイル名
キーボード定義ファイルを指定します。

/E
拡張キーボードの使用を指定します。

/ID:nnn
使用中のキーボードを指定します。日本語モードで日本語キーボードを使用する場合は、通常xx=81、yyy=932を指定します。

LABEL

ディスクのボリューム・ラベルを作成、変更、または削除します。

LABEL [ドライブ:][ラベル]

LOADFIX

プログラムをメモリーの最初の64Kより上に読み込んで実行します。

LOADFIX [ドライブ:][パス]ファイル名

LOADFIX は、下位メモリにプログラムを読み込もうとしたときに、"パックされたファイルが正しくありません"というメッセージが表示された場合に使用してください。

LOADHIGH(LH)

プログラムをUMBメモリーにロードします。

LOADHIGH [ドライブ:][パス]ファイル名 [パラメーター]

LOADHIGH [/L:領域1[,最小サイズ1][;領域2[,最小サイズ2]...]]

[ドライブ:][パス]ファイル名 [パラメーター]

/L:領域1[,最小サイズ1][;領域2[,最小サイズ2]]...
プログラムをロードするメモリーの領域を指定します。領域1は最初のメモリー領域の番号を指定し、最小サイズ1はメモリー領域1があれば、その最小サイズを指定します。領域2は次のメモリー領域の番号を指定し、最小サイズ2はメモリー領域2があれば、その最小サイズを指定します。必要なだけ領域は指定できます。

[ドライブ:][パス]ファイル名
プログラムの名前と場所を指定します。

パラメーター
プログラムで必要なコマンド行情報を指定します。

MEM

システム内の使用/空きメモリー量を表示します。

MEM [/CLASSIFY¦/DEBUG¦/FREE¦/MODULE プログラム名] [/PAGE]

/CLASSIFY (/C)
メモリー使用方法によってプログラムを分類します。プログラム・サイズ、使用中のメモリーの概略、使用可能最大メモリー・ブロックのリストを一覧表示します。

/DEBUG (/D)
プログラム、内部ドライバーや、その他の情報を表示します。

/FREE または /F
基本メモリーとUMBメモリーについて使用可能なメモリーのサイズに関する情報を表示します。

/MODULE (/M)
指定したプログラムが使用するメモリーの詳細を表示します。このオプションの直後に表示したいプログラム名を指定します。

/PAGE (/P)
画面単位で一時停止します。

MKDIR(MD)

ディレクトリーを作成します。

MKDIR [ドライブ:]パス

MD [ドライブ:]パス

MODE

システム・デバイスを設定します。

プリンターポート: MODE LPTn[:] [COLS=c] [LINES=l] [RETRY=r]

COLS(カラム数)の値として有効なのは

日本語モード		
	IBMPS/55プリンター	132*,158,176,198
	ESC/Pプリンター	80*,132
英語モード		80*,132

LINES(行数)の値として有効なのは

日本語モード		
	IBMPS/55プリンター	4*,5,6,7.5
	ESC/Pプリンター	6*,8
英語モード		6*,8

注意
アスタリスクのついている値が省略時値です。

シリアルポート: MODE COMm[:] [BAUD=b] [PARITY=p][DATA=d] [STOP=s] [RETRY=r]

デバイス状態: MODE [デバイス] [/STATUS]

リダイレクト印刷: MODE LPTn[:]=COMm[:]

表示モード: MODE [表示モード]

キーボード速度: MODE CON[:] [RATE=r DELAY=d]

MORE

1度に1画面ずつ出力を表示します。

MORE < [ドライブ:][パス]ファイル名

コマンド名 ¦ MORE

[ドライブ:][[パス]ファイル名
1度に1画面ずつ表示するファイルを指定します。

コマンド名
結果の出力を表示するコマンドを指定します。

MOUNT

SuperStor/DS圧縮ディスクにDOSドライブ文字を割り当てます。

MOUNT [/V] ドライブ:[パス] [マウント・ドライブID]

/V
マウント可能なドライブを表示します。

ドライブ:[パス]
マウントするSuperStor/DSディスクのドライブとパス名を指定します。SuperStor/DSディスクはSSTORユーティリティーで作成します。

5章 DOSをコマンドで使う

[マウント・ドライブID]
SuperStor/DSディスクにマウントするドライブIDです。これはマウント可能なSuperStor/DSディスクのドライブIDです。

MOUSE

マウスドライバーをインストールします。

MOUSE [マウス タイプ] [割り込みレート] [マウス感度] [加速度] [カーソル] [ハードウェア カーソル] OFF

マウス・タイプ
/Cn(シリアル・マウス)、/Z(PS/2マウス)、/In(インポート・マウス)、/B(バス・マウス)(nはポート番号で1または2を指定します)

割り込みレート
/Rn(nは割り込みレートで0～4の値を指定します)

マウス感度
/Hn(水平方向)、/Vn(垂直方向)、/Sn(水平・垂直方向)(nには0～100の値を指定します)

加速度
/Pn(nには加速度プロファイルの番号を指定します)

カーソル
/Nn(カーソル動作の緩慢さ)、/M(デフォルト・カーソル)(nは緩慢動作の遅延値で0～255を指定します)

ハードウェア カーソル
/Y(ハードウェア・カーソルを使用します)

OFF
マウスドライバーをメモリーから削除します

MOVE

ディレクトリー間でファイルを移動します。またはディレクトリー名を変更します。

ファイルを移動するには:

MOVE [/Y¦/-Y] [ドライブ1:][パス1]ファイル名1[,...] [ドライブ2:][パス2]

/Y
ディレクトリー作成の確認、上書き確認のプロンプトを表示しません。/-Y(デフォルト)は表示します。

[ドライブ1:][パス1]ファイル名1
移動したいファイルの場所と名前を指定します。

[ドライブ2:][パス2]
移動する先のディレクトリーを指定します。一個のファイルを移動する場合、ファイル名を指定すると移動時にファイル名が変更されます。

ディレクトリー名を変更するには:

MOVE [ドライブ:][パス]ディレクトリー名1 ディレクトリー名2

[ドライブ:][パス]ディレクトリー名1
変更したいディレクトリーの名前を指定します。

ディレクトリー名2
新しいディレクトリーの名前を指定します。

注意
指定した移動先にすでに同じ名前のファイルがあった場合、MOVEコマンドは上書きしてよいか確認のメッセージを表示します。

MSCDEX

CD-ROMドライブのアクセス機能を提供します。AUTOEXEC.BATファイル、またはコマンド行から読み込みます。ただし、CD-ROMドライブに添付されているデバイス・ドライバーをCONFIG.SYSファイルで読み込んでおく必要があります。

MSCDEX /d:ドライバー[/d:ドライバー][/E] [/K][/S] [/V][/L:ドライブ文字][/M:数]

/d:ドライバー
CD-ROMのデバイス・ドライバーのシグネチャーを指定します。

/E
CD-ROMドライバーがセクターバッファを、拡張メモリーに読み込むことを指定します。

/K
漢字のCD-ROMボリュームを認識します。

/S
サーバーで有効になっているCD-ROMドライブを共有します。

/V
MSCDEXがメモリーの統計を始動時に表示します。

/L:ドライブ文字
CD-ROMの割り当てるドライブ文字を指定します。

/M:数
セクターバッファ数を指定します。

PATH

実行可能ファイルのための検索パスを表示/設定します。

PATH [[ドライブ:]パス[;...]]

PATH ;

パラメーターとしてセミコロンだけ("PATH ;")が指定されると、検索パスはすべてクリアされて、DOSは現行ディレクトリーだけ検索します。パラメーターが指定されなければ、現在のパスを表示します。

PAUSE

バッチ・ファイルの実行を一時停止し、"準備ができたらどれかキーを押してください..."というメッセージを表示します。

PAUSE

PENDOS

PENDOSを起動します。

PENDOS

注意

CONFIG.SYS中にPENDEV.SYSが記述されている必要があります。

POWER

このコンピューターで消費される電力を節約します。

POWER[ADV[:MAX¦REG¦MIN]¦STD¦OFF]

ADV[:MAX¦REG¦MIN]

ソフトウェアとハードウェア(入出力装置)の両方をモニターすることにより節電を行います。MAXは最大限の節電をします。REGは標準的な節電をします。MINは最小限の節電をします。

STD

入出力装置のみをモニターすることにより節電を行います。

OFF

節電機能を停止します。

PRINT

他のDOSコマンド使用中に、テキスト・ファイルを印刷します。

PRINT [/D:デバイス] [/B:サイズ] [/U:数値1] [/M:数値2] [/S:数値3] [/Q:サイズ] [/T] [[ドライブ:][パス]ファイル名[...]] [/C] [/P]

/D:デバイス

印刷装置名を指定します。

/B:サイズ

内部バッファー・サイズをバイト単位で設定します。

/U:数値1

プリンターを使用可能にするために待つ時間の最大数を指定します。

/M:数値2

文字を印刷するための時間の最大数を指定します。

/S:数値3

バック・グラウンドでの印刷に数値3で指定した時間分だけ、スケジューラーを割り当てます。

/Q:サイズ

印刷待ち行列に許可するファイルの最大数を指定します。

/T

印刷待ち行列中の全てのファイルを削除します。

/C

直前のファイル名とこれに続くファイル名の印刷を取り消します。

/P

印刷待ち行列に直前のファイル名とこれに続くファイル名を追加します。

パラメーターが指定されなければ、印刷待ち行列の内容が表示されます。

PRNESCP(日本語モードのみ)

*メモリーに常駐するプリンター・ドライバーです。ESC/P**対応プリンターでの文字印刷をサポートします。*

PRNESCP [/U=外字定義コード] [/X=0¦1] [/LPTx] [/R] [/INI=ドライブ:][パス]]

/U=外字定義コード

プリンターの外字定義エリアを16進数コードで指定します。省略時の設定は777Eです。

5章 DOSをコマンドで使う

/X=0¦1
0を指定するとJIS83並びのシフトJISコードをJIS 16進コードに変換します。1を指定するとJIS78並びのシフトJISコードをJIS 16進コードに変換します。

/LPTx
出力先のプリンターを指定します。xには1、2、3の数字が指定できます。省略時の設定は1です。

/R
すでに常駐しているPRNESCP.COMをメモリーから除去します。

/INI=[ドライブ:][パス]
指定したドライブとパスにあるDOSV.INIファイル(DOS/V初期設定情報ファイル)を参照します。パスは必ず¥記号で終わるように指定してください。

注意
設定値を変更する場合にはSETUPVコマンドを使用してください。

PRNIBM(日本語モードのみ)

IBM 5575/5577系プリンターで文字印刷をサポートするプリンター・ドライバーです。

PRNIBM [/RRNxx] [/LPTx] [/R] [/INI=ドライブ:][パス]]

/PRNxx
プリンターのタイプを指定します。xxに24を指定するとIBM 5575/5577系24ドット・プリンター、32を指定するとIBM 5587系32ドット・プリンター、48を指定するとIBM 5584系48ドット・プリンターに指定できます。

/LPTx
出力先のプリンターを指定します。xには1、2、3の数字が指定できます。省略時の設定は1です。

/R
すでに常駐しているPRNIBM.COMをメモリーから除去します。

/INI=[ドライブ:][パス]
指定したドライブとパスにあるDOSV.INIファイル(DOS/V初期設定情報ファイル)を参照します。パスは必ず¥記号で終わるように指定してください。

注意
設定値を変更する場合にはSETUPVコマンドを使用してください。

PROMPT

DOSコマンド・プロンプトを変更します。

PROMPT [文字列]

文字列
新たなコマンド・プロンプトを指定します。

PROMPTは通常文字や以下に示す特殊コードから構成されます。

$Q = (イコール記号)
$$ $ (ドル記号)
$T 現在の時刻
$D 現在の日付
$P 現行ドライブ、パス
$V DOS バージョン番号
$N 現行ドライブ
$G > (不等号記号)
$L < (不等号記号)
$B ¦ (パイプ記号)
$H バックスペース (直前の文字を削除します)
$E エスケープ・コード (ASCII コードの 27)
$_ 改行
パラメーターが指定されなければ、プロンプトを省略値に戻します。

QCONFIG

システムの詳細な技術情報を表示します。

QCONFIG [/?] [/A] [/D] [/O[ファイル]] [/P] [/Q]

/?
ヘルプ情報を表示します。

/A
QCONFIGでサポートするマイクロ・チャネル・アダプターをすべてリストします。

/D
ハードウェアの詳細リストを生成します。

/O
QCONFIG.OUTに出力をリダイレクトします。

/Oファイル名
指定したファイル名のファイルに出力をリダイレクトします。

/P
画面ごとに一時停止します。

/Q
リダイレクト・メッセージを表示しません。

RAMSETUP

メモリーの使用状況を最適化するためにRAMBOOSTを導入します。

RAMSETUP [パラメーター]

/?
ヘルプ情報を表示します。

/VIDEO
ビデオとマウスに関するヘルプを表示します。

RMDIR(RD)

ディレクトリーを削除します。

RMDIR [ドライブ:]パス

RD [ドライブ:]パス

RECOVER

読み出し可能な情報を不良/欠陥ディスクから復元します。

RECOVER [ドライブ:][パス]ファイル名

RECOVER ドライブ:

RECOVERコマンドを使う前に、マニュアルを参照してください。

REM

バッチ・ファイルやCONFIG.SYSの中で、コメントの記録(注釈)を行ないます。

REM [コメント]

RENAME(REN)

ファイルの名前を変更します。

RENAME [ドライブ:][パス]ファイル名1 ファイル名2

REN [ドライブ:][パス]ファイル名1 ファイル名2

ファイル名2には新しいドライブ、パスを指定することはできませんので注意してください。ファイルの移動やディレクトリー名の変更にはMOVE コマンドを使います。

REPLACE

ファイルを置き換えます。

REPLACE [ドライブ1:][パス1]ファイル名 [ドライブ2:][パス2] [/A] [/P] [/R] [/W]

REPLACE [ドライブ1:][パス1]ファイル名 [ドライブ2:][パス2] [/P] [/R] [/S] [/W] [/U]

[ドライブ1:][パス1]ファイル名
置き換える複写元のファイルを指定します。

[ドライブ2:][パス2]
置き換えられるファイルのある複写元ディレクトリーを指定します。

/A
新規ファイルを複写先のディレクトリーに追加します。/Sや/Uとは一緒に使用できません。

/P
複写元からファイルを追加/置換する前にプロンプトを出して確認します。

/R
読み出し専用ファイルを置き換えます。

/S
複写先の全サブディレクトリー中のファイルを置き換えます。/Aと同時には使用できません。

/W
始める前にディスクの挿入を待ちます。

/U
複写元よりも古いファイルのみを置き換え(更新)ます。/Aと同時には使用できません。

RESTORE

BACKUPコマンドによってバックアップされたファイルを復元します。

RESTORE ドライブ1: ドライブ2:[パス[ファイル名]] [/S] [/P] [/B:日付] [/A:日付] [/E:時刻] [/L:時刻] [/M] [/N] [/D]

ドライブ1:
バックアップ・ファイルが保存されているドライブを指定します。

ドライブ2:[パス[ファイル名]]
復元するファイルを指定します。

/S
パス名以下の全サブディレクトリー中のファイルを復元します。

/P
読み出し専用ファイル、もしくはバックアップ後に変更のあったファイルの復元前に、プロンプトを出します。(正しく属性が設定されている場合)

/B
指定された日付以前に変更されたファイルだけを復元します。

/A
指定された日付以降に変更されたファイルだけを復元します。

/E
指定された時刻以前に変更されたファイルだけを復元します。

/L
指定された時刻以降に変更されたファイルだけを復元します。

/M
前回のバックアップ以降に変更されたファイルだけを復元します。

/N
復元先ディスクに存在しないファイルだけを復元します。

/D
指定と一致するバックアップ・ファイルを表示します。

SCHEDULE

SCHEDULE指定した時刻に自動的にプログラムを起動させます。

SCHEDULE [CPBACKUP] [パラメーター...]

CPBACKUP
CPBACKUPをスケジュールします。

/?
ヘルプ情報を表示します。

/VIDEO
ビデオとマウスに関するヘルプを表示します。

SET

DOS環境変数を表示、設定、または削除します。

SET [変数名=[文字列]]

変数名
環境変数の名前を指定します。

文字列
変数に割り当てる一連の文字を指定します。

引数なしでSETコマンドを実行すると、現在設定されている全ての環境変数を表示します。

SETUPMKK

日本語連文節変換プログラム(MKK)の設定変更を行います。

SETUPMKK

画面に表示されるフルスクリーンのパネルに従って設定を行ってください。

SETUPV

日本語関連ドライバーの設定変更を行います。

SETUPV [INI=ドライブ:パス¥ファイル名]

INI=ドライブ:パス¥ファイル名
設定情報を書き込むファイルを指定します。省略時の設定では、SETUPVコマンドが存在するディレクトリーにあるDOSV.INIファイルに設定情報を書き込みます。

SETVER

DOSが特定のプログラムへ返すバージョン番号を設定します。

現バージョン・テーブル表示:

SETVER [ドライブ:パス]

項目の追加: SETVER [ドライブ:パス] ファイル名 n.nn

項目の削除: SETVER [ドライブ:パス] ファイル名 /DELETE [/QUIET]

[ドライブ:パス]
SETVER.EXEファイルのあるパスを指定します。

ファイル名
プログラムのファイル名を指定します。

n.nn
指定したプログラムが期待しているDOSバージョンを指定します。

/DELETE (/D)
指定したプログラムのバージョン・テーブル項目を削除します。

/QUIET
バージョン・テーブル項目を削除したとき、通常表示する警告メッセージを表示しません。

SHARE

ハード・ディスク上のファイルの共有/ロックを行ないます。

SHARE [/F:ファイル・スペース] [/L:ロック数]

/F:ファイル・スペース
ファイル共有情報のためのファイル空間(バイト単位)を割り当てます。

/L:ロック数
一度にロックできるファイル数を設定します。

SHIFT

バッチ・ファイル中で、パラメーターの位置をシフトします。

SHIFT

SMARTDRV

SMARTDriveディスクキャッシュ・ユーティリティの組み込みと設定を行います。

SMARTDRV [[drive[+¦-]]...][/E:エントリーサイズ] [InitCacheSize][WinCacheSize]] [/B:バッファーサイズ] [/C] [/R] [/L] [/Q] [/S]

ドライブ文字
キャッシュを行うドライブを指定します。ドライブ文字のみの場合は読み出しのみキャッシュを行います。

\+
指定ドライブに対して書き込みにもキャッシュを行います。

\-
指定ドライブに対してキャッシュを行いません。

InitCacheSize
キャッシュが使用するXMSメモリ容量(KB)を指定します。

WinCacheSize
ウィンドウズ実行時に使用するXMSメモリ容量(KB)を指定します。

/E:エントリーサイズ
キャッシュ・エントリーのサイズをバイト単位で指定します。

/B:バッファーサイズ
読み出しバッファのサイズを指定します。

/C
キャッシュ内に書きためた全データをハードディスクに書き込みます。

/R
キャッシュ内の全データをクリアしてSMARTDriveを再スタートします。

/L
基本メモリーにSMARTDriveをロードします

/Q
画面にSMARTDriveの情報を表示しないようにします。

/S
SMARTDriveの状態を示す追加情報を表示します。

/N
システムがアイドル中にキャッシュされたデータを書き込みます。

/U
CD-ROMのキャッシング・モジュールを読み込みません。

/X
すべてのドライブの後書き(遅延)書き込みを無効にします。

注意
CD-ROMのキャッシングを使用可能にするためには、SMARTDRVコマンドはMSCDEXコマンドより後になければなりません。

SORT

入力を並べ換えてその結果を画面、ファイルや別のデバイスに出力します。

SORT [/R] [/+n] < [ドライブ1:][パス1]ファイル名1 [> [ドライブ2:][パス2]ファイル名2 [コマンド¦] SORT [/R] [/+n] [> [ドライブ2:][パス2]ファイル名2]

/R
並べ換え順の逆順;ZからA、9から0の順にします。

/+n
n桁の文字によるファイルの並べ換えを指定します。

[ドライブ1:][パス1]ファイル名1
並べ換えるファイルを指定します。

[ドライブ2:][パス2]ファイル名2
並べ換えられた入力が書き込まれるファイルを指定します。

コマンド
出力結果が並び換えられるコマンドを指定します。

SSTOR

圧縮ドライブを作成、マウント、削除するフル・スクリーン・ユーティリティー

SSTOR [ドライブ:] [/S] [/B]

[ドライブ:]
宛先のドライブ文字

/S
圧縮ドライブの統計を表示します。

/B
モノクロ・モード

SSUNCOMP

SuperStor/DS圧縮ドライブの圧縮を解除します。

SSUNCOMP [/B]

/B
モノクロ・モード

SSUTIL

圧縮ドライブを保守するフルスクリーン・ユーティリティーです。

SSUTL [ドライブ:] /I /B

[ドライブ:]
保守するドライブを指定します。

/I
圧縮ディスクの情報を表示します。

/B
モノクロ・モードにします。

SUBST

パスをドライブ名で置き換えます。

ディスク・ドライブを別のドライブのディレクトリーとして接続します。

SUBST [ドライブ1: [ドライブ2:]パス]

SUBST ドライブ1: /D

ドライブ1:
パスの置き換えをする仮想ドライブを指定します。

ドライブ2:パス
仮想ドライブに置き換える物理ドライブとパスを指定します。

/D
SUBSTされた(仮想)ドライブを解除します。

パラメーターが指定されなければ、SUBSTされている仮想ドライブの一覧が表示されます。

SYS

DOSシステム・ファイルとCOMMAND.COMを指定したディスクに複写します。

SYS [ドライブ1:][パス] ドライブ2:

[ドライブ1:][パス]
システム・ファイルがあるパスを指定します。

ドライブ2
システム・ファイルを転送するドライブを指定します。

TIME

システム時刻を表示/変更します。

TIME [時刻]

パラメーターを指定しなければ、現在設定している時刻が表示され、新しい時刻の

入力を促すプロンプトになります。変更する必要がなければ、[Enter](改行)を押してください。

TREE

ドライブ、またはパスのディレクトリー構造を表示します。

TREE [ドライブ:][パス] [/F] [/A]

/F
各ディレクトリー中のファイル名を表示します。

/A
罫線文字の代わりにASCII文字を使います。

TYPE

テキスト・ファイルの内容を表示します。

TYPE [ドライブ:][パス]ファイル名

UDEOFF

UDEONコマンドをメモリーから取り除きます。

UDEON

SuperStor/DSドライバーの導入されていないシステムでも、圧縮ディスクが読み書きできるようにします。

UNDELETE

削除されたファイルを復元します。

UNDELETE [ドライブ:] [パス] [ファイル名] [パラメーター...]

ドライブ:
復元するドライブ

パス
復元するパス

ファイル名
ファイル名。ワイルド・カード(*や?)も使用できます。

/SENTRY、/S
削除センントリーによって保護されているファイルのみを復元します。

/TRACKER、/DT
削除トラッカー(DOS5)によって保護されているファイルのみを復元します。

/NW
NetWare 386によって保護されているファイルのみを復元します。

/DW
DelWatch(DR DOS)によって保護されているファイルのみを復元します。

/DOS
DOSによって保護されているファイルのみを復元します。

/ALL
保護されているファイルすべてを復元(省略時の値)します。

/NC
それぞれのファイルを確認せずに復元します。

/NM
DOSによって保護されているファイルをMirrorを使用せずに復元します。

/LIST
指定したディレクトリーに含まれる削除されたファイルを表示します。

/PURGE
指定したディレクトリーに含まれる削除されたファイルを消去します。

/PURGEALL
指定したディスク上の削除されたファイル全てを消去します。

/? または /HELP
ヘルプ情報を表示します。

/VIDEO
ビデオとマウスに関するヘルプを表示します。

UNFORMAT

FORMATコマンドで消去されたディスクを復元します。

UNFORMAT ドライブ: [/J]

UNFORMAT ドライブ: [/U] [/L] [/TEST] [/P]

UNFORMAT /PARTN [/L]

ドライブ:
アンフォーマットするドライブを指定します。

/L
存在する全てのファイル/ディレクトリー名を一覧表示します。

/TEST
情報を表示しますが、変更結果をディスクに書き込ません。

/P
メッセージをLPT1に接続されているプリンターに出力します。

USRFNT

ユーザー定義の文字や辞書の編集ツールであるUSRFNTを起動します。

USRFNT

UNMOUNT

SuperStor/DSディスクのマウントを、割り当てたドライブ文字から解除します。

UNMOUNT [/V] [マウント・ドライブID]

/V
マウント解除可能なドライブを表示します。

[マウント・ドライブID]
SuperStor/DSディスクのマウントを解除するドライブIDを指定します。

VER

DOSのバージョンを表示します。

VER

VERIFY

ディスクのベリファイをするかどうかDOSへ指定します。

VERIFY [ON¦OFF]

パラメーターが指定されなければ、現在のベリファイの状態が表示されます。

VOL

ディスクのボリューム・ラベル/シリアル番号が指定されていれば、それを表示します。

VOL [ドライブ:]

XCOPY

ファイル(隠し属性やシステム属性のファイルを除く)やディレクトリー構造を複写します。

XCOPY 複写元 [複写先] [/A¦/M] [/D:日付] [/P] [/S [/E]] [/V] [/W][/Y¦/-Y]

複写元
複写するファイルを指定します。

複写先
新ファイルの位置を指定します。

/A
保存属性のセットされたファイルのみを複写します。保存属性は変更されません。

/M
保存属性のセットされたファイルのみを複写します。保存属性はリセットされます。

/D:日付
指定した日付以降に変更されたファイルを複写します。

/P
複写先の各ファイルを作成する前にプロンプトを出します。

/S
空の場合を除いて、サブディレクトリーを複写します。

/E
サブ・ディレクトリーが空であっても複写します。

/V
書き込んだ各ファイルをベリファイします。

/W
複写を始める前にキー入力があるまで待ちます。

/Y
上書き確認のプロンプトを表示しません。/-Y(デフォルト)は表示します。

注意
指定した複写先にすでに同じ名前のファイルがあった場合、XCOPYコマンドは上書きしてよいか、確認のメッセージを表示します。

デバイス・ドライバー一覧

ANSI.SYS

グラフィック属性やカーソルの動きを制御したり、キーの再割り当てを行う機能を定義します。ANSI.SYSドライバーは、画面とキーボードの制御を行うANSIエスケープ・シーケンスの使用をサポートします。

DEVICE=[ドライブ:][パス] ANSI.SYS [/X] [/K] [/R]

[ドライブ:][パス]
ANSI.SYSドライバーのファイルが存在するドライブとパスを指定します。

/X
拡張キー(低位バイトがE0Hであるキー)が異なったキーとして再定義されることを許可します。拡張キーの再割り当ては、キーの再割り当てコマンドによって行われます。

/K
拡張キーボード(101/102/106/124キー・キーボード)機能の使用を抑止します。これにより、拡張キーボードが取りつけられているときでも、一般のキーボード機能を使用できます。このパラメーターにより、拡張キーボード機能を認識しないプログラムも互換性を保って実行できます。

/R
画面読みとりプログラムでANSI.SYSを使用する場合に、行のスクロールを改善します。

CMOSCLK.SYS

省略時に使用されるDOSクロックの代わりに使用します。

DEVICE=[ドライブ:] [パス] CMOSCLK.SYS

[ドライブ:] [パス]
CMOSCLK.SYSドライバーのファイルが保管されているドライブとパスを指定します。

DBLSPACE.SYS

DBLSPACE.BINファイルをUMBメモリーに移動するためのデバイス・ドライバーです。

DEVICEHIGH=[ドライブ:] [パス] DBLSPACE.SYS

DISPLAY.SYS(英語モードのみ)

ディスプレイでのコードページの切り替えをサポートします。

DEVICE=[ドライブ:] [パス] DISPLAY.SYS CON[:]=(タイプ[,[ハードウェア・コード・ページ] [,n]])

DEVICE=[ドライブ:] [パス] DISPLAY.SYS CON[:]=(タイプ[,[ハードウェア・コード・ページ] [,(n,m)]])

[ドライブ:] [パス]
DISPLAY.SYSドライバーのファイルが保管されているドライブとパスを指定します。

タイプ
システムに接続されているディスプレイ・アダプターのタイプを指定します。有効な値は、EGAとLCDです。

ハードウェア・コード・ページ
ハードウェアがサポートしているコードページの番号を表す3桁の数字を指定します。(例:437でIBM PC、850で多国語など)

n
「ハードウェア・コード・ページ」パラメーターで指定した基本コードページの他に、ハードウェアがサポートできるコードページの数(0~6)を指定します。

m
各コードページに対してハードウェアがサポートするサブフォントの数を指定します。タイプがEGAの場合の省略時値は2で、タイプがLCDの場合の省略時値は1です。

DRIVER.SYS

外部ディスケット・ドライブを組み込んで設定したり、既存のディスケット・ドライブに論理ドライブを割り当てます。

DEVICE=[ドライブ:] [パス] DRIVER.SYS /D:物理ドライブ番号 [/C] [/F:ファクター] [/H:ヘッド数] [/S:セクター数] [/T:トラック数]

[ドライブ:][パス]
DRIVER.SYSファイルが存在するドライブとパスを指定します。

/D:物理ドライブ番号
ディスケットの物理ドライブ番号(0~127)を指定します。最初の物理ディスケット・ドライブ(ドライブA)はドライブ0、2台目のディスケット・ドライブはドライブ1、3台目の物理ディスケット(外部ドライブ)はドライブ2です。

/C
物理ディスケット・ドライブに、ドライブのレバー(またはボタン)が閉まっているかどうかを検出する機能(ディスケット入れ換え検出機能)を持たせることを指定します。

/F:ファクター
ディスケット・ドライブのタイプを指定します。ファクターに指定できる値は次のとおりです。省略時の値は2です。

0　160/180KBまたは320/360KB(5.25インチ)
1　1.2MB(5.25インチ)
2　720KB(3.5インチ)またはその他のもの
7　1.44MB(3.5インチ)
9　2.88MB(3.5インチ)

/H:ヘッド数
ディスケット・ドライブのヘッド数(1~99)を指定します。省略時値は2です。

/S:セクター数
1トラック当たりのセクター数(1~99)を指定します。省略時値は、次のように/Fスイッチの値に依存します。

/f:0　/s:9
/f:1　/s:15
/f:2　/s:9
/f:7　/s:18
/f:9　/s:36

/T:トラック数
ブロック・デバイスの各面のトラック数(1~999)を指定します。/Fスイッチの値が0でない場合、省略時値は80です。/Fスイッチの値が0の場合、省略時値は40です。

EGA.SYS(英語モードのみ)

EGAディスプレイでタスク切り替えが使用されるとき、画面の保存と復元を行います。EGAディスプレイがある場合、タスク切り替えを使用する前にEGA.SYSドライバーを導入しなければなりません。

DEVICE=[ドライブ:] [パス] EGA.SYS

[ドライブ:] [パス]
EGA.SYSドライバーのファイルが保管されているドライブとパスを指定します。

EMM386.EXE

80386またはそれ以上のプロセッサーをもつシステムで、拡張メモリーを使用してEMSメモリーをエミュレートし、また、UMBメモリーへのアクセス機能を提供します。

DEVICE=[ドライブ:] [パス] EMM386.EXE [ON¦OFF¦AUTO] [メモリー] [MIN=サイズ] [W=ON¦OFF] [Mx¦FRAME=アドレス¦/Pmmmm] [Pn=アドレス][X=mmmm-nnnn] [I=mmmm-nnnn] [B=アドレス] [L=nn] [A=aaa] [H=hhh] [D=ddd] [RAM] [NOEMS] [NOVCPI] [HIGHSCAN] [VERBOSE] [WIN=mmmm-nnnn][NOHIS] [ROM=mmmm-nnnn] [NOMOVEXBDA] [ALTBOOT]

[ドライブ:][パス]
EMM386.EXEファイルが存在するドライブとパスを指定します。

[ON¦OFF¦AUTO]
EMM386.EXEドライバーの動作を許可(ON)、禁止(OFF)、または自動モードに設定(AUTO)します。自動モードは、プログラムがEMSメモリーを使用する機能を呼び出したときに限り、EMSメモリーの使用を可能にします。省略時値はONです。

メモリー
EMM386.EXEに割り当てたいメモリーの量(16~32768: KB単位)を指定します。省略時値は256です。

MIN=サイズ
十分なメモリーが存在する場合は、サイズ(KB単位)で

指定された最小量のEMS/VCPIメモリーを確保します。省略時の値は256です。

W=ON¦OFF

Weitek**数値演算プロセッサーに対するサポートの許可または禁止を行います。省略時の設定はOFFです。(このスイッチの指定に関して、PS/55*上での動作確認は行われていません。)

Mx

ページ・フレームのアドレス(x:1～14)を指定します。次の表は、それぞれの値とその値に関するベース・アドレスを16進数の形式で示します。

1	C000h	8	DC00h
2	C400h	9	E000h
3	C800h	10	8000h
4	CC00h	11	8400h
5	D000h	12	8800h
6	D400h	13	8C00h
7	D800h	14	9000h

FRAME=アドレス

ページ・フレームのセグメント・ベースを直接指定します。ページ・フレームに対して特定のセグメント・ベース・アドレスを指定するには、FRAMEスイッチを使用し、希望するアドレスを指定してください。アドレスに対する有効な値は、400h置きに8000h～9000hとC000h～E000hの範囲です。

/Pmmmm

ページ・フレームのアドレスを指定します。mmmmに対する有効な値は、400h置きに8000h～9000hとC000h～E000hの範囲です。

Pn=アドレス

特定のページのセグメント・アドレスを指定します。ここで、nは指定するページ番号で、アドレスは希望するセグメント・アドレスです。nに対する有効な値は0～255の範囲です。アドレスに対する有効な範囲は、400h置きに8000h～9000hとC000h～E000hの範囲です。

X=mmmm-nnnn

EMM386.EXEがEMSのページに特定の範囲のセグメント・アドレスを使用することを禁止します。mmmmとnnnnに対する有効な値は、A000h～FFFFhの範囲で、最も近い4KB境界に切り捨てられます。

I=mmmm-nnnn

EMSページあるいはランダム・アクセス・メモリー(RAM)に使用されるセグメント・アドレスの範囲を指定します。mmmmとnnnnに対する有効な値は、A000h～FFFFhの範囲で、最も近い4KB境界に切り捨てられます。

B=アドレス

EMSのバンク(16KBのページ交換を行う)に利用可能な最低位のセグメント・アドレスを指定します。有効な値は、1000h～4000hの範囲です。省略時値は4000hです。

L=nn

EMM386.EXEがロードされた後、さらに利用可能な拡張メモリーの量(KB単位)を確保します。省略時値は0です。

A=aaa

高速代替レジスター・セット(マルチタスクで使用される)をEMM386.EXEに割り当てたい個数(0～254)を指定します。省略時値は7です。EMM386.EXEのメモリー容量は、一つの代替レジスター・セット当たり約200バイト増加します。

H=hhh

EMM386.EXEが使用できるハンドルの数(2～255)を指定します。省略時値は64です。

D=ddd

バッファーを使用したダイレクト・メモリー・アクセス(DMA)のために、予約するメモリーのKB数(16～256)を指定します。省略時値は16です。

RAM

EMSメモリーとUMBメモリーへのアクセス機能を提供します。

NOEMS

UMBメモリーへのアクセス機能を提供しますが、EMSメモリーへのアクセスは禁止します。

NOVCPI

VCPIメモリーへのアクセスは禁止します。

HIGHSCAN

より強力に640KB～1MBのシステム予約領域をチェックし、UMBの領域やEMSのウィンドウを探す指定です。

VERBOSE

EMM386のロード時に、状況とエラー・メッセージを表示します。

WIN=mmmm-nnnn

Windows用に指定したアドレスの範囲を予約します。mmmmとnnnnに対する有効な値はA000h～FFFFhです。

NOHI

EMM386をUMBメモリーにロードいないようにします。

ROM=mmmm-nnnn

EMM386がシャドウRAMに使用するセグメント・アドレスの範囲を指定します。mmmmとnnnnに対する有効な値はA000h～FFFFhです。

NOMOVEXBDA

EMM386が拡張BIOSデータゐ基本メモリーからUMBメモリーへ移動しないようにします。

ALTBOOT

[Ctrl]+[Alt]+[Del]キーを押してシステムを再始動するときに、EMM386が代わりのハンドラーを使用することを指定します。

HIMEM.SYS

HIMEM.SYSは拡張メモリーの使用を管理します。HIMEM.SYSドライバーは、XMSメモリーとHMAメモリーのプログラムの使用を管理することによって、メモリーの同一領域を同時に使用することを防止します。

DEVICE=[ドライブ:][パス]HIMEM.SYS [/HMAMIN=m] [/NUMHANDLES=n] [/INT15=xxxx] [/MACHINE:xxxx] [/A20CONTROL:ON¦OFF] [/SHADOWRAM:ON¦OFF] [/CPUCLOCK:ON¦OFF][/EISA] [/VERBOSE]

[ドライブ:][パス]

HIMEM.SYSドライバーのファイルが存在するドライブとパスを指定します。

/HMAMIN=m

HIMEM.SYSドライバーがプログラムにHMAメモリーの使用を許可する前に、そのプログラムが必要とするメモリーの量(KB単位)を指定します。mに対する有効な値は0～63の範囲です。省略時値は0です。

/NUMHANDLES=n

同時に使用されるXMSメモリー・ブロック(EMB)のハンドルの最大数(1～128)を指定します。省略時値は32です。

/INT15=xxxx

割り込み(INT 15H)のインターフェース用に指定される拡張メモリーの量(KB単位)を割り当てます。xxxxに対する有効な値は、64～65535の範囲です。省略時値は0です。

/MACHINE:xxxx

使用されるA20ハンドラーを指定します。A20ハンドラーとは、HMA領域へのアクセスを可能にするコンピューターの一部分です。xxxxの値は、次のいずれかのコードかそれに対応する番号です。省略時値はATまたは1です。

注意

PS/55*またはPS/2*をお使いの方は、このパラメーターを特に指定する必要はありません。指定する場合は、コード「PS2」または番号「2」を指定してください。

/A20CONTROL:ON¦OFF

HIMEM.SYSドライバーがロードされたときA20が有効であっても、HIMEM.SYSドライバーがA20信号線を制御下に置かなければならないかどうかを指定します。省略時の設定はONです。

/SHADOWRAM:ON¦OFF

HIMEM.SYSドライバーがシャドウRAM(読み取り専用メモリー用に使用されるRAM)を切り離して、そのRAMをHIMEM.SYSドライバーのメモリー・プールに追加するかどうかを指定します。コンピューターに搭載されているRAMが2MB以下の場合は、省略時の設定はOFFです。

/CPUCLOCK:ON¦OFF

HIMEM.SYSドライバーがコンピューターのクロック速度に影響を及ぼすかどうかを指定します。HIMEM.SYSドライバーを導入後にコンピューターの速度が変化した場合、/CPUCLOCK:ONと指定することによりこの問題を解決できる可能性があります。このスイッチを有効にするとHIMEM.SYSドライバーの速度が低下します。

/EISA

HIMEMが利用可能なすべての拡張メモリーを割り当てることを指定します。16MB以上のメモリーを搭載しているEISAコンピューターでのみ必要です。

VERBOSE

HIMIMのロード時に、状況とエラー・メッセージを表示します。

INTERLNK.EXE

これはファイル転送ユーティリティー・プログラムで、クライアント・サーバー・セットアップを介してシリアル・ポートまたはパラレル・ポートを使って2つのコンピューターを接続するために使用することができます。

DEVICE=[ドライブ:][パス]INTERLNK.EXE [/DRIVES n] [/NOPRINTER] [/COM[:][n¦アドレス]] [/

LPT[:][n¦アドレス]] [/AUTO] [/NOSCAN] [/LOW] [/BAUD速度] [/v]

[ドライブ:][パス]
INTERLNK.EXEファイルが入っている場所を指定します。

/DRIVES n
リダイレクトするドライブの最大数。省略時値は3です。

/NOPRINTER
プリンターをリダイレクトしないことを指定します。

/COM[:][n¦アドレス]
シリアル・ポートをデータ転送に使うことを指定します。nパラメーターは、シリアル・ポートの数を指定します。アドレス・パラメーターは、シリアル・ポートのアドレスを指定します。省略時の設定は、INTERLNKはすべてのシリアル・ポートおよびパラレル・ポートを検索します。

/LPT[:][nアドレス]
データ転送に使うパラレル・ポートを指定します。nパラメーターは、パラレル・ポートの数を指定します。アドレス・パラメーターは、パラレル・ポートのアドレスを指定します。

/AUTO
起動時に確立された接続がなければ、デバイス・ドライバーをロードしません。

/NOSCAN
システムの再始動時に、接続を見つけるための走査を行いません。

/LOW
UMBメモリーが使用可能な場合でも、ドライバーを基本メモリーにロードします。

/BAUD速度
シリアル通信用の最大ボー・レートを指定します。速度の有効な値は、9600、19200、38400、57600、115200ボーです。省略時のボー・レートは115200ボーです。

/V
コンピューターのタイマーとの競合を防止します。複数のコンピューターをシリアル接続していて、Interlnkを使ってドライブ・ポートまたはプリンター・ポートにアクセスしたときにその中の1台が実行を停止する場合には、このスイッチを指定してください。

IBMMKKV.EXE

IBM連文節変換プログラムを導入します。詳しくは別冊の連文節変換プログラム・ユーザーズ・ガイドを参照してください。

KKCFUNC.SYS

Microsoft社のDOS/V 対応のかな漢字変換プログラムを使用する場合に、必要なデバイス・ドライバーです。弊社では、弊社DOS/V に付属している$IAS.SYSおよびIAS対応のかな漢字変換プログラムを使用されることをお勧めします。

PCMATA.SYS

PCMCIA仮想ドライバーは、FAT構造化フォーマットでフォーマットされたPCMCIA-ATA互換のハード・ディスクとSRAMカードをサポートします。

DEVICE=[ドライブ:][パス]PCMATA.SYS /1¦/2¦/3¦/4 [/ADDR=nn]

[ドライブ:][パス]
デバイス・ドライバー・ファイルが入っている場所を指定します。

/0¦/1
ドライブ・エミュレーションを割り当てるソケット(1～4)を指定します。

/ADDR=nn
メモリー・カード・エミュレーションに使用するための、8Kのシステム・ウィンドウの基本アドレスを指定します。この基本アドレスは、16K境界から始まっていなければなりません。nnの範囲はC0からEEまでです(C0はC000Hに、EEはEE00Hに該当します)。

PCMCS.EXE

PCMCS.EXEは、Intel Exchangeable Card Architecture (ExCA)に準拠するソケット・サービス2.0との間を直接結ぶインターフェースとなるカード・サービス2.0のドライバーです。

DEVICE=[ドライブ:][パス]PCMSC.EXE [/WAIT=n] [/ADDR=xx] [/IRQ=n] [/CLIENTS=n] [/PMOFF] [/REGIONS] [NOPM] [POLL] [NOAUTOLK] [/VER] [/XIRT=xxxx] [/?]

注意

ソケット・サービスはハードウェアに添付されているものをお使いください。システムカード・サービスをロードしようとしてエラーが起こった場合は、DOSディレクトリーのREADME.TXTファイルに入っているソケット・サービスについての説明を参照してください。

[ドライブ:][パス]

デバイス・ドライバー・ファイルが入っている場所を指定します。

/WAIT=n

PCMCIAカード挿入確定時間を指定します。この時間は、カードをソケットに挿入してからカード・サービスがそれにアクセスできるようになるまでに必要な遅延時間です。値nは、待ち時間を表すシステム・タイマー・ティック(毎秒18.2回)の数です。省略時の設定は12です。

/ADDR=xx

PCMCIAカード構成用のカード・サービスの開始セグメント・アドレスを指定します。値xxは、開始アドレスです。ADDRを指定しなければ、PCMCSは省略時値として、16進数C0から始まる最初に使用可能な4Kブロックを使用します。xxの範囲は、16進数C0からF0までです(ここで、C0は16進数C000に、16進数F0は16進数F000に該当します)。

/IRQ=n

カード・サービスがPCMCIAカード事象に使用するIRQ資源を指定します。値nは8から15までの範囲内に入っていなければなりません。このスイッチを指定しなかった場合、省略時値は10になります。

/CLIENTS=n

カード・サービスに登録できるクライアント・ドライブの最大数を制御します。このスイッチを指定しなかった場合、省略時値は10になります。

/PMOFF

このオプションは、カード・サービスが提供する電力管理機能を制御します。

/REGIONS=n

カード・サービスが管理する並行領域の最大数を定義します。REGIONS:ehp1.は、MTDに対応し、カード・サービスに必要なメモリー量を減らすために追加されます。

/POLL

カード・イベントの代わりに、ポーリングを使用します。

/NOPM

小電力機能のイベントを無視します。

/NOAUTOLK

ソケット中のカードの自動ロックを使用不可にします。

/VER=n

ソケットの番号付け規則を指定します。nは200にするとソケットの番号付けは0から始まり、201にすると1からになります。

/XIRQ=xxxx

IRQを使用から除外することを指定します。

/?

このオプションを指定すると、コマンド行パラメーターとその書式に関するヘルプ・メッセージが表示されます。

PCMFDD.EXE

PCMFDDは、PCMCIAソケット上でドライブAおよびBとしてのディスケット・ドライブ・エミュレーションを提供します。PCMFDDは、ドライブAおよびB用のINT13Hエミュレーションを提供します。

DEVICE=[ドライブ:][パス]PCMFDD.EXE /ADDR=nn /Xm

[ドライブ:][パス]

デバイス・ドライバー・ファイルが入っている場所を指定します。

/ADDR=nn

メモリー・カード・エミュレーション用の16Kのシステム・ウィンドウ基本アドレスを指定します。この基本アドレスは16Kの境界から始まっていなければなりません。nnの範囲はC0からEEまでです(C0はC000Hに、EEはEE00Hに該当します)。省略時の設定はD0です。

x

エミュレートするドライブのドライブ文字(ドライブAまたはドライブB)。

m

ソケット番号(1または2)。

PCMMTD.EXE

メモリー・テクノロジー・ドライバー・シェルを始動します。

DEVICE=[ドライブ:][パス]PCMMTD.EXE

[ドライブ:][パス]
デバイス・ドライバー・ファイルが入っている場所を指定します。

PCMSCD.EXE

PCMSCD.EXEは、数種類のPCカードの構成をサポートするスーパー・クライアント・ドライバーです。構成終了後は、該当のPCカードはシステムの不可欠の構成要素として作動します。

DEVICE=[ドライブ:][パス]PCMSCD.EXE [/BEEP][/RS=速度][/COM=ポート][/CARDS][/LANIRQ=d][/MIRQ=d][/LEVEL][/NOBD][/MODEMSAVE][/FIFO=d][/RAMBASE][/ROMBASE][/?]

[ドライブ:][パス]
デバイス・ドライバー・ファイルが入っている場所を指定します。

/BEEP
サウンドによる構成確認信号。省略時の設定では、ビープ音はオフになります。

/COM=ポート
通信ポートの番号。ポートには、1、2、3、または4を指定することができます。省略時の設定は4です。

/RS=速度
IBMトークンリング・ネットワークの回線速度。速度は4または16です。省略時の設定は4です。

/CARDS
サポートされるカードのリストを表示します。

/LANIRQ=d
ネットワーク・カードに必要なIRQ設定を指定します。dの範囲は0から15です。

/MIRQ=d
最初に見つかったCOMカードのIRQの開始を指定します。

/LEVEL
そのドライバーがレベルで起こった割り込みで使うことを指定します。

/NOBD
内部カード情報データベースの使用を不可にします。

/MODEMSAVE
モデムの状況を保管します。

/FIFO
モデムのFIFO(First In/First Out)レベルを設定します。

/RAMBASE
トークン・リング・カードが使用する共用RAM(16KB)のアドレスを設定します。

/ROMBASE
トークン・リングROM BIOS(8KB)のアドレスを設定します。

/?
ヘルプ情報を表示します。

PENDEV.SYS

PENDOSアプリケーション用のPENDOSアプリケーション・プログラミング・インターフェースを提供します。

DEVICE=[ドライブ:][パス]PENDEV.SYS

[ドライブ:][パス]
デバイス・ドライバー・ファイルが入っている場所を指定します。

POWER.EXE

POWER.EXEデバイス・ドライバーは、アプリケーションとデバイスがアイドル状態になっているときには電力の消費を抑える機能を提供します。このデバイス・ドライバーは、電力管理機能が導入されていることを導入プログラムが検出した時点で、コンピューターに自動的に導入されます。このデバイス・ドライバーは拡張電力管理(APM)仕様に準拠しています。

DEVICE=[ドライブ:][パス]POWER.EXE[ADV[:MAX¦REG¦MIN]¦STD¦OFF][/LOW]

[ドライブ:][パス]

.POWER.EXEファイルが入っている場所を指定します。

[ADV[:MAX¦REG¦MIN]

アプリケーションとハードウェア・デバイスがアイドル状態になっているときは節電します。アプリケーションがアイドル状態でなく活動状態になっていると、パフォーマンスに影響する場合があります。MAXは、節電を最大にしたい場合に使用します。REG(省略時の設定)は、節電とアプリケーションおよびデバイスのパフォーマンスとのバランスを取りたい場合に使用します。MINは、MAXまたはREGを指定するとアプリケーションまたはデバイスのパフォーマンスが不十分になる場合に使用してください。

STD

コンピューターの電力管理ハードウェア機能だけを使って節電します。

OFF

電力管理機能をオフにします。

/LOW

UMBメモリー領域が使用可能な場合でも、POWER.EXEデバイス・ドライバーを基本メモリーにロードします。POWER.EXEは、省略時の設定ではUMBメモリー領域にロードされます。十分な量のUMBメモリーが使用できない場合は、POWER.EXEはロー・メモリーにロードされます。

PRINTER.SYS(英語モードのみ)

パラレル・ポートPRN, LPT1, LPT2, およびLPT3に対してコードページの切り替えをサポートします。

DEVICE=[ドライブ:][パス]PRINTER.SYS LPTx=(タイプ[,[ハードウェア・コード・ページ][,n]])

[ドライブ:][パス]

PRINTER.SYSファイルが存在するドライブとパスを指定します。

LPTx

コードページの切り替えをサポートしたいパラレル・ポートの番号を指定します。

タイプ

使用しているプリンターを指定します。次のリストは、タイプに指定する値とそれに対応するプリンターの機種を示します。

4201　IBM 4201 Proprinterファミリーおよび4202 Proprinter XL

4208　IBM 4207または4208およびProprinter X24またはXL24

PPDS　PPDS (IBM 5202、4019)

EPS　EPSON(英語仕様)

ハードウェア・コード・ページ

ハードウェアがサポートするコードページを指定します。たとえば437はIBM PC、850は多国語です。

n

「ハードウェア・コード・ページ」パラメーターで指定されたコードページに加えて、ハードウェアがサポートできるコードページの数を指定します。

RAMBOOST.EXE

RAMBOOSTは、コンピューターの使用可能な基本メモリーを増やして、DOSメモリー・マネージャーEMM386.EXEの使用時の複雑さを軽減します。RAMBOOSTは、構成を分析し、常駐プログラムやデバイス・ドライバーを自動的に構成してUMBメモリー・ブロックにロードするようにします。

DEVICE=[ドライブ:][パス]RAMBOOST.EXE[ACTIVE][COMPLETE][DISABLE][LEARN][LOAD][MODE][PIF][SYNC][TRACK[ファイル名[/D]]]

[ドライブ:][パス]

デバイス・ドライバー・ファイルが入っている場所を指定します。

ACTIVE

RAMBOOSTを強制的に完全にアクティブ状態のままにしておき、次回のコンピューターの再始動時に追跡対象ファイルに変更を検出したときは、いつでもメモリーを最適化しなおせるようにします。省略時の設定はアクティブ・モードです。

COMPLETE

初期プログラム・ロードが完了したことをRAMBOOSTに知らせます。このコマンドの後は、RAMBOOSTは、AUTOEXEC.BATに変更があってもすべて無視します。

DISABLE
RAMBOOSTのロードを禁止し、RAMBOOSTを非活動化します。

LEARN
追跡対象ファイルに変更がない場合でも、次回のコンピューターの再始動時にRAMBOOSTを強制的に学習モードにします。

LOAD
RAMBOOSTをメモリーに常駐させます。

MODE
RAMBOOSTの現在の状態を示す値を戻します。値は、非常駐(0)、活動(ACTIVE)モード(1)、非活動モード(2)または学習(LEARN)モード(3)のいずれかです。

PIF
ネットワーク・ドライバー、TSR、DOSテーブル、およびRAMBOOSTがUMBメモリー・ブロックにロードしたその他のファイルをすべて表示します。

SYNC
RAMBOOST.INIファイル内のすべての追跡対象ファイルのシグナチャーを更新します。これは、追跡対象ファイルを変更したが、RAMBOOSTに再学習とシステムの最適化を行わせたくない場合に使用してください。

TRACK [ファイル名[/D]]
RAMBOOSTが現在追跡中のファイルの名前とシグナチャーを表示します。ファイル名変数は、追跡対象ファイルのリストに追加する(または、/Dを指定した場合はリストから削除する)デバイス・ドライバーまたはTSRを指定します。リスト内のファイルは、メモリーの使用状況に影響する変更の有無を調べるために追跡されます。AUTOEXEC.BAT、CONFIG.SYS、およびRAMBOOST.INIは、常に追跡されます。

RAMDRIVE.SYS

RAMDRIVE.SYSドライバーは、システムのランダム・アクセス・メモリー(RAM)の中にRAMディスクを作成し、ハード・ディスク・ドライブをシミュレートします。

DEVICE=[ドライブ:][パス]RAMDRIVE.SYS [[ディスク容量 セクター容量] [項目数]] [/E|/A]

[ドライブ:][パス]
RAMDRIVE.SYSファイルが存在するドライブとパスを指定します。

ディスク容量
RAMディスクの容量(KB単位)を指定します。有効な値は4～31744の範囲です。省略時の設定は64です。

セクター容量
ディスクのセクター容量(バイト単位)を指定します。有効な値は128, 256, および512です。省略時の設定は512です。

注意
セクター容量の値は、省略時値(512)を使用することを強くお薦めします。

項目数
RAMディスクのルート・ディレクトリーに作成できるファイルとディレクトリーの数(2～1024)を指定します。省略時の設定は64です。このパラメーターを指定する場合、ディスク容量とセクター容量パラメーターも指定しなければなりません。

/E
RAMディスクをXMSメモリーの中に作成します。

/A
RAMディスクをEMSメモリーの中に作成します。

SETVER.EXE

DOSバージョン・テーブルをメモリーにロードします。

DEVICE=[ドライブ:][パス]SETVER.EXE

[ドライブ:][パス]
SETVER.EXEファイルの場所を指定します。

注意
DOS=HIGHが使用されている場合、CONFIG.SYSファイルの中でDOS=HIGHの後にSETVER.EXEを置くとSETVERの下位のメモリーの使用をゼロに削減します。

SMARTDRV.EXE

SMARTDRV.EXEをロードすることでSCSIのハードディスクなどでダブル・バッファーリングを行います。

DEVICE=[ドライブ:][パス]SMARTDRV.EXE /DOUBLE_BUFFER

[ドライブ:][パス:]
SMARTDRV.EXEファイルの場所を指定します。

/DOUBLE_BUFFER
SMARTDRVがダブル・バッファリングを行います。

UMBCGA.SYS

CGA、EGA、またはVGAのいずれかのアダプターがモノクローム・アダプターと組み合わせて導入されている場合に、カラー・アダプターのビデオ・メモリーを、LOADHIGHコマンドでプログラムをロードするために使うUMBメモリー・ブロックとしてマップします。これによって、約16Kの余分なメモリーが使用可能になります。

DEVICE=[ドライブ:][パス]UMBCGA.SYS

[ドライブ:][パス]
デバイス・ドライバー・ファイルが入っている場所を指定します。

UMBEMS.SYS

EMSメモリーをUMBメモリーとして利用します。少なくとも64KのEMSを備えたEMSカードがマシンに導入されている場合に、EMSメモリーの64Kのブロックを、LOADHIGHコマンドでプログラムをロードするために使うUMBメモリー・ブロックとしてマップします。これによって、約64Kの余分なメモリーが使用可能になります。

DEVICE=[ドライブ:][パス]UMBEMS.SYS

[ドライブ:][パス]
デバイス・ドライバー・ファイルが入っている場所を指定します。

UMBHERC.SYS

*Hercules**グラフィック・アダプターまたはHercules Graphics Adapter Plusも導入されている場合に、Herculesアダプターのビデオ・メモリーを、LOADHIGHコマンドでプログラムをロードするために使うUMBメモリー・ブロックとしてマップします。これによって、約60Kの余分なメモリーが使用可能になります。*

DEVICE=[ドライブ:][パス]UMBHERC.SYS [/X]

[ドライブ:][パス]
デバイス・ドライバー・ファイルが入っている場所を指定します。

/X
起動時のビデオ・メモリーDMAのテストを省略します。

注意
このスイッチを使用するのは、アダプターのテストが正常に完了した後だけにしてください。このテストに合格しなかったアダプターには、UMBHERC.SYSとの互換性がありません。

UMBMONO.SYS

CGA、EGA、またはVGAのいずれかのアダプターも導入されている場合に、モノクローム・アダプターのビデオ・メモリーを、LOADHIGHコマンドでプログラムをロードするために使うUMBメモリー・ブロックとしてマップします。これによって、約4Kの余分なメモリーが使用可能になります。

DEVICE=[ドライブ:][パス]UMBMONO.SYS

[ドライブ:][パス]
デバイス・ドライバー・ファイルが入っている場所を指定します。

$DISP.SYS

DBCS文字をサポートする目的で、ROM BIOSシステム・ビデオの機能を拡張するDBCSビデオ・サブシステムです。

DEVICE=[ドライブ:][パス] $DISP.SYS [/TS=テキスト・バッファー・サイズ][/HS=AUTO¦ON¦LC¦OFF] [/INI=[ドライブ:][パス]]

[ドライブ:][パス]
$DISP.SYSファイルが存在するドライブとパスを指定します。

/TS=テキスト・バッファー・サイズ
高密度テキスト・モードを使用するために必要なテキ

スト・バファーの大きさをバイト単位で指定します。省略時の値は13056バイトです。

/HS=AUTO¦ON¦LC¦OFF

AUTOはスクロール方法を$DISP.SYSが自動判定します。省略時の値はAUTOです。通常はAUTOにしておいてください。

/INI=[ドライブ:][パス]

DOS/Vの設定情報を保管しているDOSV.INIファイルが存在するドライブとパスを指定します。パスは必ず¥記号で終わるようにします。

注意

設定値を変更する場合にはSETUPVコマンドを使用してください。

$FDD12.SYS

1.2MBのディスケットを読み書きするためのドライバーです。

DEVICE=[ドライブ:][パス]$FDD12.SYS

ハードウェアのディスク・ドライブが1.2MBに対応している必要があります。

$FONT.SYS

SBCS文字およびDBCS文字のフォント・イメージをDBCSビデオ/プリンター・サブシステムおよびアプリケーション・プログラムに提供するDBCSフォント・サブシステムです。

DEVICE=[ドライブ:][パス]$FONT.SYS [/U=nn] [/24=ON¦OFF] [/INI=[ドライブ:][パス]]

[ドライブ:][パス]

$FONT.SYSファイルが存在するドライブとパスを指定します。

/U=nn

ユーザー・フォントの文字数(nn)を指定します。

/24=ON¦OFF

全角24×24ドット・フォントを使用するかどうかを選択します。/24=ONを指定すると、全角24×24ドット・フォントを使用します(全角24×24ドット・フォントのファイルが必要です)。省略時の設定はOFFです。

/INI=[ドライブ:][パス]

DOS/Vの設定情報を保管しているDOSV.INIファイルが存在するドライブとパスを指定します。パスは必ず¥記号で終わるようにします。

注意

設定値を変更する場合にはSETUPVコマンドを使用してください。

$IAESKK.SYS

単漢字変換プログラムを導入します。

DEVICE=[ドライブ:][パス]$IAESKK.SYS [/X=0¦1] [/H=ハンドル最大数]

[ドライブ:][パス]

$IAESKK.SYSファイルが存在するドライブ、パスを指定します。

/X=0¦1

導入フラグを指定します。/X=0を指定すると、単漢字変換プログラム(SKK)はすべて基本メモリーに導入されます。/X=1を指定すると、SKKは大部分EMSメモリーに導入されます。省略時の設定は1です。

/H=ハンドル最大数

KKC(かな漢字変換プログラム)ハンドルの最大数を指定し、KKC(SKK)と呼び出し側(アプリケーション・プログラム)との間のコミュニケーション用に割り当てます。省略時の設定は8です。

$IAS.SYS

DBCS(ローマ字による入力を含む)の入力を援助するサブシステムで、DBCSシフト状態を管理し、DBCSおよびSBCS文字を生成します。かな漢字変換は現在登録されているKKC(かな漢字変換プログラム)によって行われます。

DEVICE =[ドライブ:][パス] $IAS.SYS [/X=0¦1] [/G=0¦1] [/R=0¦1] [/K=JP¦US¦AX¦J3] [/INI=[ドライブ:][パス]]

[ドライブ:][パス]

$IAS.SYSファイルが存在するドライブとパスを指定します。

/X=0¦1
導入フラグを指定します。/X=0を指定すると、$IAS.SYSは通常のメモリーに導入されます。/X=1を指定すると、EMSメモリーに導入されます。

省略時の設定は/X=1です。

/G=0¦1
スポット変換フラグを指定します。/G=0を指定すると、グラフィック・モードにおけるかな漢字変換は、強制的に定位置(最終行)で行われます。/G=1を指定すると、グラフィック・モードにおけるスポット変換を可能にします。

省略時の設定は/G=0です。このオプションは$IASがEMSメモリーに導入されている場合だけ有効です。

/R=0¦1
ローマ字モード・フラグを指定します。/R=0を指定するとローマ字モード・オフで起動します。/R=1を指定するとローマ字モード・オンで起動します。省略時はローマ字モード・オフ(/R=0)です。

/K=JP¦US¦AX¦J3
キーボード・タイプの指定です。

/INI=[ドライブ:][パス]
DOS/Vの設定情報を保管しているDOSV.INIファイルが存在するドライブとパスを指定します。パスは必ず¥記号で終わるようにします。

注意
設定値を変更する場合にはSETUPVコマンドを使用してください。

$PRN.SYS

ユーザー定義文字をサポートするDBCSプリンター・サブシステムです。

DEVICE=[ドライブ:] [パス] $PRN.SYS
[/INI=[ドライブ:][パス]]

[ドライブ:][パス]
$PRN.SYSファイルが存在するドライブとパスを指定します。

/INI=[ドライブ:][パス]
DOS/Vの設定情報を保管しているDOSV.INIファイルが存在するドライブとパスを指定します。パスは必ず¥記号で終わるようにします。



第6章

DOSのトラブル対処法

DOSのトラブル対処法



この章では、DOSを導入した後に起こりやすいトラブルの対処法を説明します。またDOS/Vユーザーの方々からの質問で多いものについては、Q&Aの節で解説します。

導入後に起こりやすいトラブルの対処法

ここでは、DOS J6.3/Vを導入した後に起こり得る問題を、どのようにして解決したらよいかを説明します。

DOSをHMAメモリーで実行することができない場合の対処

導入プログラムは、DOSをHMAメモリーで実行できるようにするために、システムを設定します。HMAメモリーとは、拡張メモリーの最初の64キロバイトを指します。これによって他のプログラムは基本メモリーをより多く確保できます。

DOS J6.3/Vの標準外部コマンドであるMEMコマンドを使えば、DOSがHMAメモリーで実行されているかどうかを、確認することができます。MEMコマンドを実行すると、HMAメモリーでDOSが実行されている場合、次のメッセージが最後に表示されます。

```
DOS は HMA領域に常駐しています
```

システムに拡張メモリーが装備されているにもかかわらず、DOSがHMAメモリーで実行されない場合は、CONFIG.SYSファイルの設定が間違っているか、もしくは、HIMEM.SYS(あるいはXMS仕様に準拠したメモリー・マネージャー)が正しく導入されていないかのどちらかが考えられます(HIMEM.SYSとは、DOS用の拡張メモリー・マネージャーのことです。DOSをHMAメモリーで実行できるようにするためには、HIMEM.SYSや、その他の拡張メモリー・マネージャーが必要です)。

DOSをHMAメモリーで実行できるようにするには、CONFIG.SYSファイルに、DOS=HIGHというコマンドが、記述されていなければなりません。

```
DOS=HIGH
device=c:¥dos¥himem.sys
```

CONFIG.SYSファイル中のDEVICEコマンドによって、HIMEM.SYSを指定する場合、$FONT.SYSを除く他のメモリー・マネージャーよりも先に指定する必要があります。また、CONFIG.SYSファイル中で、DEVICEコマンドによってHIMEM.SYSを指定する場合には、HIMEM.SYSが置かれているディスク・ドライブや、ディレクトリーの位置をはっきりと指定してください。

通常、導入プログラムはHIMEM.SYSを設定し、HMAメモリーを利用するために必要とされる調整を行います。ただし、導入プログラムでは調節することのできないハードウェアの構成があります。特殊なハードウェア構成でのHIMEM.SYSの設定は、「コマンド解説書およびメッセージ集」のHIMEM.SYSコマンドを参照してください。

参考

$FONT.SYSはHIMEM.SYSより前に設定しても、後に設定しても問題ありません。EMM386.EXEを導入して、かつUMBメモリーを利用可能にしている設定ではEMM386.EXEの記述の後に$FONT.SYSを記述することにより$FONT.SYSをUMBメモリーにロードハイすることもできます。

特定のバージョンのDOSでのみ実行可能なプログラムの取り扱い方法

プログラムの中には、特定のバージョンのDOS上でのみ実行することのできるものがあります。プログラムを実行したときに、DOS J6.3/Vでは実行することができないというメッセージが表示された場合は、発売元に連絡して、アップデートされたバージョンのプログラムを入手するか、もしくは現在のバージョンのプログラムが、DOS J6.3/V上で正しく動作するものであるかどうかを確認してください。

プログラムがDOS J6.3/V上で正しく動作するものであれば、SETVERコマンドを使って、DOSがプログラムに返すバージョン番号を変更します。SETVERコマンドを使用すると、プログラムはDOS J6.3/Vを、そのプログラムを実行することのできる特定のバージョンであると解釈します。たとえば、MYAPP.EXEというプログラムがDOS J5.0/V、もしくはそれ以前のバージョンでのみ実行することができるという場合には、次の例のように入力してください。

```
C:¥>setver myapp.exe 5.0
```

システムを再起動すると、現在のDOSのバージョン番号をプログラムを実行することのできる特定のバージョン番号に変更したことが表示されます。プログラムがDOS J6.3/V上で正しく動作するものであれば、SETVERコマンドを使えば、返されるバージョン番号によって実行できないソフトウェアの、非互換性が解消されます。

CONFIG.SYSファイル中で、DEVICEコマンドを使ってSETVER.EXEが指定されていない場合は、SETVERコマンドは、バージョン6.1とは異なったバージョン番号(プログラムを実行することのできる特定のバージョン)をプログラムに返しません。また、ハードディスク内の異なるディレクトリーに複数のSETVER.EXEファイルがある場合には、それぞれが個

別のバージョン・テーブルを持ってしまうため、ハードディスクにはSETVER.EXEファイルは1つだけであることを確認してください。

注意

お使いになるソフトウェアが、DOS J6.3/Vで実行できるかどうかについては、ソフトウェアの発売元にお問い合わせください。SETVERコマンドを使って、バージョン番号やバージョン・テーブルを変更してプログラムを実行し、正常な動作をするかどうかについては、弊社では確認できません。DOS J6.3/Vでバージョン・テーブルを変更してプログラムを実行すると、データの消失もしくは破壊、またはシステムが不安定な状態になる可能性があります。お使いになるソフトウェアがDOS J6.3/Vで正常に動作するかどうかについて、ソフトウェアの発売元にお問い合わせにならなかった場合、IBMには、いかなるデータの消失もしくは破壊についての責任はありません。

“Packed File Corrupt”というメッセージが表示された場合

プログラムが基本メモリーの最初の64KBにロードされた場合に、「Packed File Corrupt」というメッセージが表示されることがあります。このエラーは、デバイス・ドライバーやTSRをUMBメモリーにロードし、その結果として基本メモリーの大部分がアプリケーション・プログラムに解放された時に起こる可能性があります。

DOS J6.3/Vには、プログラムを確実に基本メモリの最初の64KB以降にロードするための、LOADFIXコマンドがあり、LOADFIXコマンドを使うためには、プログラムの実行を開始する時に、次のように指定します。

```
loadfix [d:][パス名]ファイル名 [プログラムパラメータ]
```

たとえば次のように入力すると、ドライブC:のAPPSというディレクトリーにあるプログラムファイルMYAPP.EXEを、基本メモリーの最初の64KB以降に読み込みます。

```
loadfix c:¥apps¥myapp.exe
```

プログラムが拡張メモリーを使用することができない場合

多くの拡張メモリーを使用するプログラムは、Lotus/Intel/Microsoft/ASTのeXtended Memory Specification (XMS)に準拠した拡張メモリーを使用します。DOSでこのようなプログラムを実行するためには、HIMEM.SYSのような拡張メモリー・マネージャーが必要です。

しかしながら、プログラムの中にはXMSに準拠していないものがあります。このようなプログラムは、XMSに準拠し、それによって管理されている拡張メモリーを利用することができません。

HIMEM.SYSでオプションを使用すると、XMSに準拠せずに拡張メモリーを使用するプログラムに、拡張メモリーの一部分を割り当てることができます。それには、HIMEM.SYSをDEVICEコマンドで指定する際に、/INT15オプションを付け加えます。/INT15オプションには、確保したいメモリー容量に64KBを加算した数値を記述します。

たとえば、XMSに準拠していない拡張メモリーを512KB予約するには、CONFIG.SYSファイルに次のコマンドを記述します。

```
device=c:¥dos¥himem.sys /int15=576
```

うっかりファイルを削除してしまった場合の対処

不注意からもしくは偶然に必要なファイルを削除してしまった場合、そのファイルを復活させる方法が3種類用意されています。

UNDELETEコマンドを使ってファイルを復元させる方法

UNDELETEコマンドを使うと、削除されたファイルを復元させることができます。しかし、このコマンドが効果的なのは、

> **注意**
> ファイルを削除してしまった後に、絶対にDEFRAG(ディスク最適化)コマンドを実行しないでください。ディスク最適化プログラムを実行した後では、UNDELETEコマンドを実行しても、削除されたファイルを復元させることはできません。

ファイルを削除してしまった後に、ハードディスク上の情報に変更が加えられていない場合です。ハードディスク内のファイルやディレクトリーを変更した場合には、削除してしまったファイルを復元させることは難しくなります。ただしデリート・セントリー(Delete Sentry)機能を使っている場合には完全な復元が可能です。

導入ディスケットからファイルをコピーし、圧縮ファイルをもとに戻す

導入ディスケットからファイルをコピーし、削除されたファイルを回復することができます。導入ディスケットに収められている大部分のファイルは、圧縮された形式になっています。たとえば、DOSKEY.CO_のように、エクステンションにアンダースコア(_)の付いたファイルは、圧縮された形式のファイルであるということを示しています。圧縮された形式のファイルを元の状態に戻すには、COPYコマンドではなくEXPANDコマンドを使います。以下に導入ディスケットから、どのようにして圧縮ファイルを解凍するかを説明します。

導入ディスケットから圧縮ファイルを解凍するには、次のように操作します。

1. どの導入ディスケットに目的のファイルがあるのかを確認する。
2. 目的のファイルが収められている導入ディスケットを、ドライブA:に挿入する。EXPANDコマンドを使って、導入ディスケットから圧縮ファイルを解凍する。

たとええば、ドライブA:の導入ディスケットから、ドライブC:(ハードディスク)のDOSディレクトリーにDOSKEY.CO_ファイルを解凍するには、次のように入力します。

導入ディスケットからファイルをコピーし、圧縮ファイルをもとに戻す

```
expand a:¥doskey.co_ c:dos¥doskey.com
```

注意

誤ってEXPAND.EXEファイルを削除してしまった場合には、COPYコマンドを使って導入ディスケットからハードディスクにコピーし、そのまま使用することができます(導入ディスケットに収められているEXPAND.EXEファイルは、圧縮されていません)。

RESTOREコマンドがうまく動作しない場合の対処

旧バージョンのBACKUPコマンドを使ってバックアップしたファイルが、復元できない場合にはいくつかの原因が考えられます。

バックアップした時のディレクトリーとは異なったディレクトリーに復元しようとしている場合

RESTOREコマンドはバックアップされたファイルを、バックアップした時のディレクトリだけに復元します。たとえば、バックアップした時のディレクトリC:¥WORDをC:¥OLDWORDと変更した場合には、ファイルを復元することができません(しかし、バックアップした時のディレクトリーC:¥WORDをD:¥WORDのように、ドライブだけを変更する場合には、復元することができます)。

バックアップした時とは異なるファイル名で復元しようとしている場合

RESTOREコマンドは、ファイル名を変更しません。たとえば、バックアップした時のファイル名がREPORT.TXTというファイルを、MYREPORT.TXTというファイル名に変更して復元することはできません。

RESTOREコマンドは、DOS J6.3/Vに付属しているCPBACKUPコマンドとは互換性がないため、このプログラムでバックアップしたファイルに対しては使用しないでください。CPBACKUPコマンドはRESTOREと同じ機能をすべて内蔵し

ています。

DOS J6.3/VのRESTOREコマンドは、バージョン2.0以降のBACKUPコマンドでバックアップされたファイルを復元することができます。

表示画面のハードコピーが取れない場合の対処

[Print Screen](ページ印刷)キーを押した時に、画面に表示されている情報がプリンターに出力されない場合は、GRAPHICSプログラムが実行されているかどうかを確認してください(GRAPHICSプログラムは、グラフィック情報を含んだ画面に表示されている情報を印刷するときに必要な、メモリ常駐型プログラムです)。

GRAPHICSプログラムが実行されているかどうかを確認するには、MEMコマンドに/Cオプションを付けて実行します。そして、実行後に表示される一覧に、GRAPHICSが含まれているかどうかを確認します。一覧の中に表示されている場合は、GRAPHICSプログラムはすでに実行されていることを示しています。

注意

[Print Screen]キーは、ネットワーク・ソフトウェアが実行されている場合には、無効になることがあります。

Q&A集



ここではDOSに関連してご質問の多いものを選んで回答しています。使いこなしのノウハウ集としてもご活用ください。

Q ディスケットに、DOS J6.3/Vを導入することができますか?

A DOS J6.3/Vはディスケット上に導入し、実行することができます。DOS J6.3/Vに付属の「セットアップ・ガイド」を参照してください。

Q 同じ名前のデバイス・ドライバーはどちらを使用したらよいでしょうか?

A DOSに付属しているいくつかのデバイス・ドライバーにいくつかは、たとえばWindowsなどにも添付されています。たとえば、以下に示すデバイス・ドライバーなどです。

```
HIMEM.SYS
```

```
RAMDRIVE.SYS
```

```
SMARTDRV.EXE
```

```
EMM386.EXE
```

これらは汎用のデバイス・ドライバーで、特定の製品のための特別なバージョンもなく、定期的に更新されます。これらのデバイス・ドライバーを使用する場合には、最新のバージョンのものを使用してください。

Q 環境変数PATHに設定することのできる文字数は、最大何文字までですか？

A 環境変数PATHには、127文字までという制限があります。複数のディレクトリー名をPATH変数に設定するには、PATHコマンドを使います。コマンドを入力すると、PATH変数に設定された経路をたどって、入力されたプログラムを検索し実行しようとします。次に示すのは、PATHコマンドの例です。

```
path c:¥;c:¥dos;c:¥windows;d:¥batfiles;d:¥util
```

PATH変数の変数名と空白で、設定可能な127文字の内5文字を消費します。これはPATH変数に指定することのできる文字数が、実際には122文字であることを示しています。

最も効果的に122文字を使うには、

- PATHコマンドに指定されている変数の中のスペースを削除します。
- めったに使用しないディレクトリーをPATHコマンドの指定から削除します。
- PATHコマンドにディレクトリーを指定する場合には、短いディレクトリー名を使用します。
- バッチファイルを利用して、必要に応じたPATH変数を設定したり、解除したりします。
- AUTOEXEC.BATファイル中で、SUBSTコマンドを使うことによって、長いディレクトリーのPATH名の代わりに、ドライブ文字を利用することができます。その場合、AUTOEXEC.BATファイルにあるPATHコマンドの記述よりも前に、SUBSTコマンド指定しなければなりません。たとえば、「C:¥USER¥BETTY¥FORMS」というパス名を、ドライブ文字のQと置き換えるには、以下のコマンドをAUTOEXEC.BATファイルのPATHコマンドの記述よりも前に指定します。

```
subst q: c:¥user¥betty¥forms
```

Q システムの環境変数のサイズを増やすには、どうしたらよいでしょうか？

A SHELLコマンドの/Eオプションに目的の環境変数領域のサイズを指定することによって、環境変数領域のサイズを増やすことができます。この設定を省略した場合のデフォルトの環境変数のサイズは256バイトとなります。たとえば、環境変数領域に1024バイトを割り当てたい場合には、CONFIG.SYSファイルに以下のコマンドを追加します。

```
shell=c:¥dos¥command.com /p /e:1024
```

Q デバイス・ドライバーやプログラムを、UMBメモリーで実行させるにはどうしたらよいでしょうか？

A システムに、80386もしくはそれ以上のCPUと拡張メモリーが搭載されている場合には、基本メモリーで実行していたデバイス・ドライバーやプログラムを、UMBメモリーで実行することができますコマンド・プロンプトの状態で、RAMSETUPコマンドを始動し、あとは画面に従って設定してください。。

Q ハードディスク・モデルなので、ディスケット・ドライブが１台しかない機種ですが、ディスケットの複写はできますか？

A DOSシェルから「ディスケットの複写」を選択し、複写元と複写先の指定を「a: b:」にしてください。あとは画面に従って、交互に複写元と複写先のディスケットを入れ換えてください。コマンドではDISKCOPYコマンドを使って、次のように実行します。

```
diskcopy a: b:
```

あとは画面に従ってドライブAのディスケットを差し換えてください。

Q CGA、MCGA、EGA、VGA、SVGA、XGA、XGA-2、ET4000、S3**とは何ですか。またこれらに対応するプログラムは動きますか？

A CGA、MCGA、EGA、VGAなどはそれぞれ、画面の解像度と色数の違いを示しています。ここでは目安となる解像度で比較します。

CGA ... 320 X 200ドット4色モード
MCGA ... 320 X 200ドット256色（16万7千色より任意）モード
EGA ... 640 X 350ドット16色モード
VGA ... 640 X 480ドット16色（16万7千色より任意）モード
SVGA ... スーパーVGAの意味でVGA以上の解像度と色数のものの総称
XGA ... 1024 X 768ドット256色モード(インターレース)
XGA-2 ... 1024 X 768ドット256色モード(ノンインターレース、高速表示)
ET4000 ... 1024 X 768ドット256色モード(ノンインターレース)
S3 ... 1024 X 768ドット256色モード(ノンインターレース、高速表示)

英語のゲームなどは、これらのモードを直接指定している場合があります。その場合には英語モードに切り換えてから、これらのプログラムを始動してください。

Q 文字の表示色を変えられますか？

A 変えられます。CONFIG.SYSの中にDEVICE=C:¥DOS¥ANSI.SYSの行がない場合は追加して、再始動してください。システムが再始動したら、

```
prompt $e[36m$p$g
```

を入力してください。これで水色になります。その他の色は次のような番号に対応しています。36をそれぞれの色に対応する番号に置き換えて入力してください。

30・・・黒	35・・・青
31・・・赤	36・・・水色
32・・・緑	37・・・白
34・・・黄	

Q 2DDのディスケットをフォーマットするには、どうしたら良いのでしょうか？

A ドライブA：に2DDのディスケットを入れ、コマンド行から次のように入力してください。

```
format a: /f:720
```

Q 2種類のCONFIG.SYSを切り換えて使う方法はありますか？

A あります。DOS J6.3/Vには複数のCONFIG.SYSを記述する機能が追加されました。これにより始動時にCONFIG.SYSを選択できます。以下にCONFIG.SYSの例を示します。

```
[MENU]
Menuitem=US_MODE, English Mode
Menuitem=JP_MODE, Japanese Mode
Menudefault=JP_MODE,10

[COMMON]
BUFFERS=20
FILES=30
DOS=HIGH,UMB
SHELL=C:¥DOS¥COMMAND.COM /P /E:512
DEVICE=C:¥DOS¥HIMEM.SYS
DEVICE=C:¥DOS¥EMM386.EXE RAM

[US_MODE]
COUNTRY=001,437,C:¥DOS¥COUNTRY.SYS

[JP_MODE]
COUNTRY=081,932,C:¥DOS¥COUNTRY.SYS
DEVICEHIGH=C:¥DOS¥$FONT.SYS
DEVICEHIGH=C:¥DOS¥$DISP.SYS
DEVICEHIGH=C:¥DOS¥$IAS.SYS
INSTALL=C:¥DOS¥IBMMKKV.EXE /M=S /Z=4 /C /J=90 /L /S=C:¥DOS¥MULTDICT.PRO /
U=C:¥$USRDICT.DCT

[COMMON]
DEVICEHIGH=C:¥DOS¥SETVER.EXE
DEVICEHIGH=C:¥DOS¥ANSI.SYS
```

次にAUTOEXEC.BATの例を示します。

```
@ECHO OFF
SET COMSPEC=C:¥DOS¥COMMAND.COM
PROMPT $P$G
SET TEMP=C:¥DOS
PATH C:¥DOS
IF "%CONFIG%" == "JP_MODE" GOTO JP_MODE

:US_MODE
LH KEYB.COM JP,437,C:¥DOS¥KEYBOARD.SYS
GOTO COMMON

:JP_MODE
LH KEYB.COM JP,932,C:¥DOS¥KEYBOARD.SYS

:COMMON
VER
LH MOUSE
DOSSHELL
```

Q メモリーや、導入されているデバイス・ドライバーの使用状況を見る方法はありますか？

A MEMコマンドに/Cオプションを付けて実行してください。たとえば次のように入力します。

```
mem /c
```

Q SWITCHコマンドとCHEVコマンドの違いは何ですか？

A SWITCHコマンドはバッチ・プログラムなので仕組みを見ることができます。中ではCONFIG.SYSとAUTOEXEC.BATを英語モード用のものと切り換えて、再始動しています。一方CHEVコマンドは再始動はしないで、すぐに切り換わります。ただし終了後常駐型（TSR）プログラムなどはそのままメモリーに残るので、基本メモリーをなるべく大きく確保したい場合や、PC DOSと100%互換で動作させたい場合は、SWITCHコマンドを使う必要があります。

Q CONFIG.SYSを書き換えたらハードディスクから始動しなくなってしまいました。どうしたらよいでしょうか？

A 一度電源をオフにして、再度電源をオンにしてください。DOSが「Starting PC DOS...」を表示したら、表示中に F5 を押してください。DOSがCONFIG.SYSとAUTOEXEC.BATをバイパスして英語モードで始動します。その後Eエディターを使ってCONFIG.SYSを修正してください。「Starting PC DOS...」表示中に[F8]を押すとCONFIG.SYSの行単位の実行ができるので、これで問題個所を発見することもできます。

Q 何かのファイルを消してしまい、SWITCHコマンドが動作しなくなってしまいました。どうしたらよいでしょう？

A SWITCHコマンドは動作するために、AUTOEXECやCONFIGファイルがあるかどうかを確認しています。これらのファイルを消してしまった場合には、念のため重要なファイルをバックアップを取ってしてから、DOSを再導入してください。

Q ファイルの属性とはなんですか？

A ディスク内のファイルの状態を示す「しるし」のようなものです。保存属性はファイルが保存されたかどうかのしるしです。また読み取り専用属性は上書きできないというしるし、システム属性はシステムが使うというしるし、隠し属性はファイルがDIRコマンドで表示できないというしるしです。これらのしるしは相互に付け替えることができます。

Q 他機種とのフォーマットの互換性はどのようになっていますか？

A 3.5インチ・ディスケットのフォーマットで多機種と互換性があるのは2DDの720KBフォーマットです。これはたとえばドライブAにディスケットを挿入し、次のコマンドでフォーマットできます。

```
format a: /f:720
```

日本独自の3.5インチ2HDの1.2MBフォーマットのディスケットは、3モードまたは4モード・ディスケットを搭載した機種でのみ読み書きが可能です。このディスケットを使用するには、DOSのCONFIG.SYSにdevice=c:¥dos¥$fdd12.sysの行を組み込むことで、1.2MBのディスケットが読み書きできるようになります。3.5インチ2HDのディスケットを1.2MBでフォーマットするには、必ずFORMAT12コマンドを使用してください。

Q DOS J5.0/VとDOS J6.3/Vは同時に同じハードディスクで使えますか？

A DOSに付属のFDISKでは始動できるOSは1つに決められています。2つのバージョンのDOS/Vを使いたい場合には、どちらか使用頻度の低い方をディスケットに導入し、必要なときにディスケットで始動する方法があります。ディスケットに入りきらないコマンド類はハードディスク内にサブディレクトリーを作成して、そこに残りすべてを入れておきます。その際、ディスケット内のAUTOEXEC.BATで、PATHをこのサブディレクトリーへ設定しておきます。

Q 句点コードを入力するにはどうしたらよいのですか？

A 「漢字コード一覧表」N:GC18-2040を別途購入ください。

Q IBMプリンターからESC/Pプリンターへ、またはその逆の変更はどのようにしたらよいのですか？

A 「DOS/Vカスタマイジング・ユーティリティーの使い方」の節を参照してください。

Q V-Textを使ってVGAでたくさん文字を表示させたいのですが、どうしたら設定できますか？

A 「DOS/Vカスタマイジング・ユーティリティーの使い方」の節を参照してください。

Q AT互換機でDOS/Vを使っていて表示が乱れます。対処方法はありますか？

A カスタマイジング・ユーティリティーを始動し、「表示」の中でHS（ハードウェア・スクロース方式）をLC（ライン・コンペアー）またはOFF（オフ）にしてください。多くの場合はこれで表示は遅くなりますが、画面の乱れはなくなります。

Q PS/2にDOS J6.3/Vは導入できますか？

A できます。DOS J6.3/Vの導入時に、「キーボード」で「米国英語」を選択してください。¥(円記号)はキーボードから＼（バックスラシュ）で入力できます。

Q IBM PC ATやPS/2用のソフトウェアは動きますか？

A 英語版のPC DOSで動作するプログラムは、DOS J6.3/Vの英語モードで動作します。英語モードに切り換えるには、SWITCHとCHEVコマンドがあります。英語版のPC DOSと完全に同じ環境にするには、SWITCHコマンドで切り換えてください。DOSシェルからの切り換えはこのSWITCHコマンドを使用しています。

Q InterLnkコマンドを使うためには、どんなケーブルを使えばよいのですか？

A InterLnkプログラムは、シリアル・ポートを使用して、ヌル・モデム・ケーブルで接続したシリアル・リンクをサポートします。両方のシステムのパラレル・ポートが双方向の場合、パラレル・ポートを使うこともできます。次に示す結線表を参照して、自分自身のシリアル・ケーブルまたはパラレル・ケーブルを作成できます。

データ転送にシリアル・ポートを使いたい場合は、ヌル・モデム・ケーブルを使用しなければなりません。ヌル・モデム・ケーブルを、システムのシリアル・ポートに接続してください。

DOSで使用するRS-232ポートには、9ピン(DB9)タイプのものと25ピン(DB25)タイプのものがあります。シリアル・ケーブル用にピン接続を配線するには次の表を参照してください。

9 ピン	25 ピン		25 ピン	9 ピン	
ピン 5	ピン 7	<-------->	ピン 7	ピン 5	Ground-Ground
ピン 3	ピン 2	<-------->	ピン 3	ピン 2	Transmit-Receive
ピン 7	ピン 4	<-------->	ピン 5	ピン 8	RTS-CTS
ピン 6	ピン 6	<-------->	ピン 20	ピン 4	DSR-DTR
ピン 2	ピン 3	<-------->	ピン 2	ピン 3	Receive-Transmit
ピン 8	ピン 5	<-------->	ピン 4	ピン 7	CTS-RTS
ピン 4	ピン 20	<-------->	ピン 6	ピン 6	DTR-DSR

アース（Ground）ワイヤーは両端で同じピンに接続します。最後の3つのワイヤーは前の3つの逆です。

パラレル・ケーブル用にピン接続を配線するには次の表を参照してください。

25 ピン		25 ピン
ピン 2	<-------->	ピン 15
ピン 3	<-------->	ピン 13

ピン 4　<-------->　ピン 12

ピン 5　<-------->　ピン 10

ピン 6　<-------->　ピン 11

ピン 15　<-------->　ピン 2

ピン 13　<-------->　ピン 3

ピン 12　<-------->　ピン 4

ピン 10　<-------->　ピン 5

ピン 11　<-------->　ピン 6

ピン 25　<-------->　ピン 25

ピン25－ピン25は、この表ではアース間の接続です。

Q RAMBoostを使用したら、利用可能メモリーが減ってしまいました。どうしたらよいでしょうか？

A ハードウェアの構成や、読み込むデバイス・ドライバー、TSR(終了後常駐型)プログラムの種類によって、RAMBoostを使用した場合に、利用可能メモリーが減少することがあります。RAMBoostを実行すると、実行前のCONFIG.SYSとAUTOEXEC.BATが、それぞれAUTOEXEC.CPSとAUTOEXEC.CPSという名前で保管されていますので、これらを次のコマンドで戻してください。

```
copy autoexec.cps autoexec.bat
```

```
copy config.cps config.sys
```

Q 機密情報が入っているディスケットなので、完全に中身を消したいのですが、どうしたらよいでしょうか？

A FORMATコマンドを使用し、/Uスイッチを指定してください。

Q Windows**を圧縮ドライブで使用する場合の注意点は何かありますか？

A 常設スワップ・ファイルを使用する場合、SSTORの設定の過程で、このスワップ・ファイルを格納するための、十分な非圧縮領域を残しておく必要があります。一時スワップ・ファイルを使用する場合、またはスワップ・ファイルをまったく使用しない場合は、非圧縮領域を残しておく必要はありません。Windowsのスワップ・ファイルの指定方法は、Windowsのマニュアルを参照してください(常設スワップ・ファイルを使用する場合は、必ず非圧縮ドライブに常設スワップ・ファイルを確保する必要があります。)

Q VGA以外の高解像度モード(24ドット・フォント)でDOS/Vを利用したいのですが、どうしたらよいでしょうか？

A 別売のIBM DOS/V Extensionをお買い求めください。

Q 1.2MBのディスケット・ドライバー($FDD12.SYS)を導入したのですが、1.2MBのディスケットが読めません。どうしたらよいでしょうか？

A $FDD12.SYSが未対応のPC(ハードウェア)だと思われます。ハードウェアに添付のディスケット・ドライバーをご使用ください。3.5インチ、1.2MBのディスケットは、弊社製の3モードまたは4モードのディスケット・ドライブをサポートしているシステムで使用できます。

! 注意

互換機をお使いの方は、そのシステムのROM BIOSで3.5インチ、1.2MBのディスケットをサポートしているかどうかを確認してから導入してください。

SuperStor/DS(圧縮プログラム)は、どんなメディアをサポートしていますか？

A ハードディスク、PCMCIAを含む取り外し可能ディスク、および標準ディスケットです。

SuperStor/DSで圧縮率を指定すると、その圧縮率でディスクが圧縮されるのですか？

A 実際の圧縮率は、データのタイプによってほとんど決まっています。実際の圧縮率に近いほど、ディスクを有効に使用したことになります。通常は2：1にしてください。

SuperStor/DSの圧縮ドライブを元に戻すには、どうしたらよいでしょうか？

A 圧縮を戻す前にバックアップを取ってから、SSUNCOMPコマンドを実行し、圧縮解除(U)を選択してください。

SuperStor/DSで圧縮ドライブが、見えなくなってしまいました。どうしたらよいでしょうか？

A マウントが解除されています。SSTORコマンドを実行し、マウント(M)を選択してください。さらにマウントするCVFファイルを選択してください。

SuperStor/DSで圧縮できる最大ディスク容量はどれくらいですか？

A 256MBです。

索引

記号

A

B

C

D

E

F

G

H

I

J

カ

キ

ク

ケ

コ

サ

シ

ス

セ

ソ

タ

チ

ツ

テ

カ・ン・タ・ンDOS　バージョンJ6.3/V

平成6年5月11日初版発行

発行
日本アイ・ビー・エム株式会社
〒106 東京都港区六本木3-2-12

本書中、星印(*)の付いている以下の用語はIBM Corp.（米国）社の商標です。

OS/2
Personal System/2
PS/2
パーソナルシステム/55
PS/55
PS/V
パーソナルシステム/V
XGA

本書中、二重星印（**)のついている以下の用語は他社の商標です。

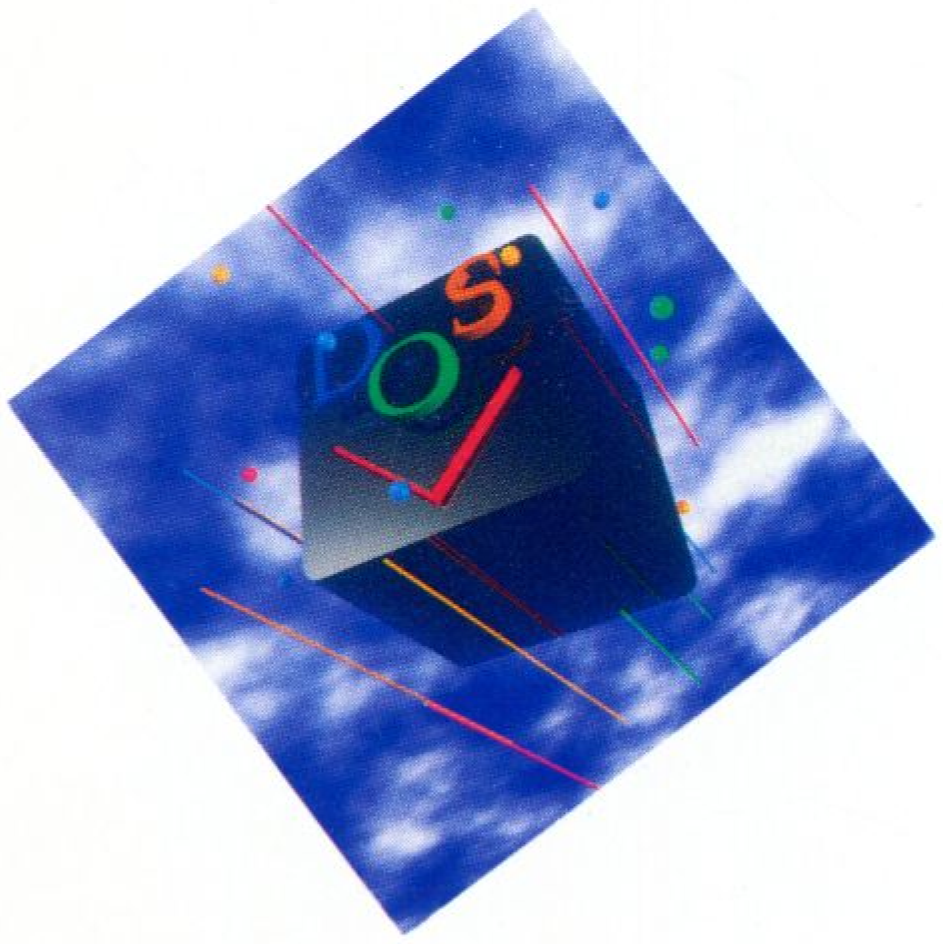
AX	AX協議会
Central Point	Central Point Software, Inc.
Central Point Backup	Central Point Software, Inc.
Delete Sentry	Central Point Software, Inc.
ESC/P	セイコーエプソン株式会社
Hercules	Hercules Computer Technology
HP	Hewlett-Packard Company
LaserJet	Hewlett-Packard Company
Microsoft	Microsoft Corporation
MSCDEX	Microsoft Corporation
PCMCIA	Personal Computer Memory Card International Association
PenDOS	Communication Intelligence Corporation
Phoenix	Phoenix Technologies, Ltd.
SuperStor/DS	Addstor, Inc.
S3	S3 Inc.
WEITEK	WEITEK Corp.
Windows	Microsoft Corporation

第1版 1994年5月
このマニュアルは、製品の改良その他により適宜改訂されます。

IBM

ISBN4-89080-003-4 C0000 P1380E

カ・ン・タ・ンDOS



PC DOS J6.3/V

Printed in Japan

日本アイ・ビー・エム株式会社

SC88-3074-00

定価 1380円　（本体価格1340円）

IBM

PC DOS J6.3/V

カ・ン・タ・ンDOS